

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第3集

山門前田遺跡

福岡県山門郡瀬高町所在遺跡の調査

2006

福岡県教育委員会

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第3集

山門前田遺跡

福岡県山門郡瀬高町所在遺跡の調査

2006

福岡県教育委員会



1. 山門前田遺跡遠景（東から）



2. 0区7号土坑 箕出土状況（東から）



1. 0区25号土坑（北から）



2. 1区6号溝出土土器

序

福岡県教育委員会では、平成13年度から独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（旧日本鉄道建設公団）九州新幹線建設局の委託を受けて、九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。本報告書は平成14・15年度に発掘調査を実施した、山門郡瀬高町大字山門に所在する山門前田遺跡第1・2次調査の記録です。

本遺跡は矢部川・大根川が育んだ緑豊かな田園地帯に位置しています。調査では弥生時代早・前期の土器群、弥生時代中期の甕棺墓、古墳時代後期の土坑群、中世後期の井戸・土坑群などを確認し、この地域の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。

本書が文化財愛護思想の普及及び学術研究・生涯学習への一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査及び報告書の作成にあたりましては、関係諸機関や地元を始めとする多くの方々に御協力・御助言をいただきました。ここに深甚の謝意を表します。

平成18年3月31日

福岡県教育委員会
教育長 森山 良一

例言

1. 本書は平成14・15(2002・2003)年度に九州新幹線鹿児島ルート建設に伴い発掘調査を実施した、福岡県山門郡瀬高町大字山門字前田等に所在する山門前田遺跡(第1・2次調査)の記録で、九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告の第3集となる。
2. 当遺跡の発掘調査・整理報告は日本鉄道建設公団九州新幹線建設局(現 独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局)の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。
3. 当遺跡は九州新幹線船小屋一大牟田間の埋蔵文化財調査第4-B地点にあたる。
4. 本書に掲載した遺構写真は、大庭孝夫・坂元雄紀が、遺物写真は巻頭図版を九州歴史資料館参事補佐石丸洋、その他を文化財保護課整理指導員北岡伸一が撮影した。なお、空中写真は鶴東亜航空技研(第1次調査)に委託した。
5. 本書に掲載した遺構図は大庭、坂元その他、中間研志・秦憲二・今井涼子が作成し、津上潔・石井正興・今村孝男・堤弘光・楠麻里が補助した。なお、掲載した遺構図の方は全て座標北(G. N.)である。
6. 出土遺物の整理作業は九州歴史資料館及び文化財保護課太宰府事務所において、大庭・坂元の指導の元を実施した。出土遺物の実測は調査担当者の他に、一瀬智・平田春美・棚町陽子・久富美智子・栗林明美・荒川妙・中川陽子・高田知恵(文化財保護課調査補助員)が行った。製図は調査担当者の他に、豊福弥生・原カヨ子・江上佳子・高田が行い、土山真弓美・安永啓子・山田智子・辻清子が補助した。
7. 出土遺物・写真・図面はすべて九州歴史資料館及び文化財保護課太宰府事務所に保管している。
8. 本書の執筆はⅡ-3を高田、Ⅲ-3(第1次調査分)を坂元、Ⅳを(株)パレオ・ラボ、その他を大庭が行い、編集は橋之口雅子の協力を得て、大庭・坂元が行った。

目次

巻頭図版	
序	
例言	
目次	
図版目次	
挿図目次	
表目次	

I. はじめに	1
1. 調査の経緯 (大庭)	1
2. 調査の組織 (大庭)	7
II. 位置と環境	9
1. 地理的環境 (大庭)	9
2. 歴史的環境 (旧石器・縄文・中近世) (大庭)	9
3. 瀬高町内出土資料の紹介 (高田)	15
III. 発掘調査の記録	20
1. 遺跡の概要と基本層序 (大庭)	20
(1) 遺跡の概要	20
(2) 基本層序	20
2. 0区の検出遺構と遺物 (大庭)	23
(1) 概要	23
(2) 土坑	25
(3) 井戸	39
(4) 溝	42
(5) 不明遺構	56
(6) ビット	58
(7) 遺構面等出土土器	60
(8) 木製品・土製品・石器・石製品	62
(9) 小結	66
3. 1区の検出遺構と遺物 (坂元)	68
(1) 概要	68
(2) 土坑	68
(3) 井戸	72
(4) 溝	79
(5) 甕棺墓	91
(6) 落ち込み	92

(7) 谷	99
(8) 流路跡	104
(9) その他の出土土器	104
(10) 石製品・土製品・瓦・金属製品・木製品	108
(11) 小結	112
4. 2区の遺構と遺物(大庭)	116
(1) 概要	116
(2) 土坑	116
(3) 溝	116
(4) 遺構面等出土土器	117
(5) 小結	117
IV. 自然化学分析(髙バレオ・ラボ)	119
1. 山門前田遺跡0区出土木製品の樹種同定(植田)	119
2. 山門前田遺跡1区出土木製品の樹種(三村)	123
3. 山門前田遺跡出土黒曜石の産地推定(竹原)	125
4. 山門前田遺跡1区2号土坑出土動物骨について(黒澤)	129
V. まとめ	131
1. 山門前田遺跡における集落の変遷について(大庭)	131
2. 松延城跡について(大庭)	134

図版目次

巻頭図版1	1. 山門前田遺跡遠景(東から)	2. 0区7号土坑箕出土状況(東から)
巻頭図版2	1. 0区25号土坑(北から)	2. 1区6号溝出土土器
図版1	1. 山門前田遺跡遠景(東から)	2. 山門前田遺跡遠景(南東から)
図版2	米軍撮影(1948年頃)瀬高町東部空中写真	
図版3	米軍撮影(1948年頃)松延城跡付近空中写真(図版2を拡大)	
図版4	1. 0区南全景(南から)	2. 0区北全景(北から)
	3. 0区北全景(南から)	
図版5	1. 0区北 東壁土層(西から)	2. 0区5号土坑(南から)
	3. 0区6号土坑(南から)	
図版6	1. 0区7号土坑完掘(北から)	2. 0区7号土坑箕出土状況(東から)
	3. 0区9号土坑(東から)	
図版7	1. 0区10号土坑(南東から)	2. 0区13号土坑(西から)
	3. 0区14号土坑土層(南から)	
図版8	1. 0区14号土坑完掘(南から)	2. 0区15号土坑(南から)
	3. 0区16号土坑(右)・17号土坑(左)(南から)	

- 図版9 1. 0区16号土坑・17号土坑(南東から) 2. 0区18号土坑(南南西から)
3. 0区20号土坑(南から)
- 図版10 1. 0区21(奥)・25号土坑(手前)(南から) 2. 0区22号土坑(南東から)
3. 0区23号土坑(北東から)
- 図版11 1. 0区24号土坑(北東から) 2. 0区25号土坑出土状況(北から)
3. 0区26号土坑(南から)
- 図版12 1. 0区11号井戸(南から) 2. 0区12号井戸(東から)
3. 0区13号井戸出土状況(東から)
- 図版13 1. 0区13号井戸完掘(西から) 2. 0区70号ピット(西から)
3. 0区7号溝東壁土層(西から)
- 図版14 1区全景(上空から)
- 図版15 1. 空中撮影風景 2. 1区南壁西側土層(北から)
3. 1区西壁北側土層(東から)
- 図版16 1. 1区1号土坑(西から) 2. 1区1号土坑上層土層(東から)
3. 1区2号土坑(西から)
- 図版17 1. 1区2号土坑土層(西から) 2. 1区3号土坑(南西から)
3. 1区4号土坑(西から)
- 図版18 1. 1区1号井戸(東から) 2. 1区2号井戸(東から)
3. 1区3号井戸(南から)
- 図版19 1. 1区4号井戸(北から) 2. 1区5号井戸検出状況(南から)
3. 1区5号井戸完掘(北から)
- 図版20 1. 1区4号井戸(右)・6号井戸(左)(北西から) 2. 1区7号井戸(北から)
3. 1区8号井戸(東から)
- 図版21 1. 1区9号井戸(東から) 2. 1区10号井戸(東から)
3. 1区1～3号溝トレンチ土層(東から)
- 図版22 1. 1区1号溝(北から) 2. 1区2号溝(北から)
3. 1区3号溝(北から)
- 図版23 1. 1区4号溝(北から) 2. 1区4号溝西壁土層(東から)
3. 1区5号溝(北西から)
- 図版24 1. 1区5号溝南側(西から) 2. 1区5号溝北側(西から)
3. 1区5号溝北壁土層(南から)
- 図版25 1. 1区6号溝(南から) 2. 1区6号溝西壁土層(東から)
3. 1区6号溝ベルト土層(西から)
- 図版26 1. 1区1号甕棺墓(南西から) 2. 1区2号甕棺墓(北東から)
3. 1区3号甕棺墓(北東から)
- 図版27 1. 1区落ち込み(北から) 2. 1区谷(北西から)
3. 1区谷(南東から)

図版28	1. 1区谷北側ベルト土層 (南から)	2. 1区谷南側ベルト土層 (南から)
	3. 1区谷掘削風景	
図版29	1. 2区全景 (北から)	2. 2区西壁土層 (東から)
	3. 2区8号土坑 (南西から)	
図版30	0区土坑、井戸出土土器	
図版31	0区7号溝出土土器および瓦①	
図版32	0区7号溝出土瓦②	
図版33	0区7号溝出土瓦③	
図版34	0区溝、SX、ピットおよび遺構面等出土土器	
図版35	0区出土木製品、土製品、石器および石製品	
図版36	0区出土石製品	
図版37	1区土坑、井戸出土土器	
図版38	1区溝出土土器①	
図版39	1区溝出土土器②	
図版40	1区出土甕棺	
図版41	1区落ち込み、谷、その他出土土器	
図版42	1. 1区出土石製品①	2. 1区出土石製品②
	3. 1区出土石製品③	
図版43	1. 1区出土土製品および瓦	2. 1区出土金属製品
図版44	1. 1区出土木製品①	2. 1区出土木製品②
図版45	1区出土木製品③	
図版46	2区出土石製品	
図版47	1. 瀬高町内出土遺物①	2. 瀬高町内出土遺物②
	3. 瀬高町内出土遺物③	4. 瀬高町内出土遺物④
図版48	1. 瀬高町内出土遺物⑤	2. 瀬高町内出土遺物⑥
	3. 瀬高町内出土遺物⑦	4. 瀬高町内出土遺物⑧

挿図目次

第1図	山門前田遺跡の位置	1
第2図	九州新幹線船小屋・大牟田問理蔵文化財調査地点 (1/100,000)	3
第3図	瀬高町内九州新幹線沿線字図 (1/10,000)	5・6
第4図	旧石器・縄文時代周辺遺跡分布図 (地形分類図) (1/50,000)	11
第5図	中近世周辺遺跡分布図 (1/50,000)	13
第6図	瀬高町内出土遺物実測図① (2/3)	18
第7図	瀬高町内出土遺物実測図② (2/3)	19
第8図	調査区配置図 (1/2,000)・遺構配置図 (1/200)	21・22
第9図	0～2区土層実測図 (1/40)	24

第10図	0区5・7・9号土坑、9号土坑出土実測図(1/30、1/10)	27
第11図	0区7・12・16・18~22号土坑出土土器実測図(1/4、1/3)	29
第12図	0区10・12~14号土坑実測図(1/30)	31
第13図	0区15~17号土坑実測図(1/30)	33
第14図	0区18~20・22号土坑実測図(1/30)	35
第15図	0区21・23~26号土坑実測図(1/40、1/30)	36
第16図	0区23・25・26号土坑出土土器実測図(1/4、1/3)	37
第17図	0区11~13号井戸・70号ピット実測図(1/30)	40
第18図	0区11~13号井戸出土土器実測図(1/3)	41
第19図	0区7号溝土層略図(1/40)、9号溝・14号溝土層実測図(1/30)	43
第20図	0区7号溝出土土器実測図(1/4、1/3)	45
第21図	0区7号溝出土瓦実測図①(軒丸瓦)(1/4)	47
第22図	0区7号溝出土瓦実測図②(軒平瓦)(1/4)	48
第23図	0区7号溝出土瓦実測図③(丸瓦)(1/4)	49
第24図	0区7号溝出土瓦実測図④(平瓦)(1/4)	51
第25図	0区7号溝出土瓦実測図⑤(海鼠瓦・鬼瓦・鯉瓦・輪違い瓦)(1/4)	53
第26図	0区9・14号溝出土土器実測図(1/3)	55
第27図	0区S X 01・02実測図(1/40)	57
第28図	0区S X 01・02、P 70・73・80・81・84出土土器実測図(1/4、1/3)	59
第29図	0区遺構面等出土土器実測図(1/4、1/3)	60
第30図	0区出土木製品実測図(1/3)	61
第31図	0区出土土製品・石器・石製品実測図①(2/3、1/2)	63
第32図	0区出土石製品実測図②(石臼)(1/4)	64
第33図	0区出土石製品実測図③(1/3)	65
第34図	1区土坑実測図(1/40)	69
第35図	1区土坑出土土器実測図(1/4、1/3)	71
第36図	1区1~3・5号井戸実測図(1/30)	73
第37図	1区1~5号井戸出土土器実測図(1/3)	75
第38図	1区4・6~8号井戸実測図(1/30)	76
第39図	1区7・8・10号井戸出土土器実測図(1/4、1/3)	77
第40図	1区9・10号井戸実測図(1/30)	78
第41図	1区1~3号溝実測図および土層実測図(1/60)	79
第42図	1区1~3号溝出土土器実測図(1/3)	81
第43図	1区3号溝出土土器実測図(1/4、1/3)	83
第44図	1区4~6号溝土層実測図および6号溝実測図(1/60)	84
第45図	1区4・5号溝出土土器実測図(1/3、1/4)	85
第46図	1区6号溝上層出土土器実測図(1/3、1/4)	87
第47図	1区6号溝下層出土土器実測図(1/4)	89
第48図	1区6号溝最下層およびその他出土土器実測図(1/4)	90

第49図	1区薨棺墓実測図(1/20)	93
第50図	1区薨棺および薨棺内出土土器実測図(1/4、1/10)	94
第51図	1区落ち込み実測図(1/120)	95
第52図	1区落ち込み出土土器実測図①(1/3、1/4)	97
第53図	1区落ち込み出土土器実測図②(1/3、1/4)	98
第54図	1区谷土層実測図(1/40)	99
第55図	1区谷出土土器実測図①(1/4)	101
第56図	1区谷出土土器実測図②(1/4)	102
第57図	1区谷出土土器実測図③(1/3、1/4)	103
第58図	1区流路跡出土土器実測図(1/4、1/3)	105
第59図	1区ピット出土土器実測図(1/4、1/3)	106
第60図	1区攪乱・検出時および排土中出土土器実測図(1/3、1/4)	107
第61図	1区出土石製品実測図(1/2)	109
第62図	1区出土石製品・土製品および瓦・金属製品実測図(1/3、1/2)	111
第63図	1区出土木製品実測図(1/2)	113
第64図	2区8号土坑・8号溝土層実測図(1/30)	116
第65図	2区8号土坑出土石製品実測図(1/2)	117
第66図	2区8号溝・遺構面等出土土器実測図(1/3、1/4)	117
第67図	0区出土木製品材組織の光学顕微鏡写真①	121
第68図	0区出土木製品材組織の光学顕微鏡写真②	122
第69図	1区出土木製品・組織片光学顕微鏡写真	124
第70図	黒曜石の産地産別図Ⅰ・Ⅱ	127
第71図	黒曜石のマイクロスコープ像	128
第72図	1区2号土坑出土動物遺体(イヌ)	130
第73図	山門前田遺跡時期別変遷図(1/300)	133
第74図	松延城跡復元図(1/3,000)	135・136
第75図	松延城跡周辺園場整備前図面(1/3,000)	137

表目次

第1表	九州新幹線鹿児島ルート船小屋・新八代間福岡県埋蔵文化財調査地点一覧	2
第2表	瀬高町内出土資料一覧表	16
第3表	福岡県内出土アメリカ式石鏃一覧表	17
第4表	山門前田遺跡出土土器・石製品・土製器・金属器・木製品一覧表	118
第5表	0区出土木製品の樹種同定結果一覧	120
第6表	1区樹種同定結果	123
第7表	原石産地と試料点数	125
第8表	出土動物骨観察表	129

I. はじめに

1. 調査の経緯

九州新幹線（鹿児島ルート）は、「国民経済の発展及び国民生活領域の拡大並びに地域の振興を図るため」に「全国新幹線鉄道整備法」に基づき建設される新幹線鉄道で、福岡市（JR博多駅）から熊本市・川内市を經由して鹿児島市（JR鹿児島中央駅）に至る工事延長249kmの路線である。このうち、JR新八代駅～JR鹿児島中央駅間（127.6km）は平成16年3月13日に部分開業しており、新たな産業の立地や観光産業の振興等に寄与している。



第1図 山門前田遺跡の位置

鹿児島ルートは昭和48年11月13日付で整備計画が決定した路線で、昭和61年8月29日に運輸大臣（現国土交通大臣）あてに博多～西鹿児島間の工事実施計画申請がなされ、平成3年8月22日に八代～西鹿児島間の工事実施計画が認可され、さらに平成10年3月12日には船小屋～新八代間の工事実施計画が認可され、同年3月21日に同区間の建設工事が起工されている。

新幹線建設に先立つ文化財の対応は、昭和50年3月10日付の日本国有鉄道下関工務局長から福岡県教育長あての「埋蔵文化財に関する事前分布調査の依頼について」（下工第2150号）という照会文書から始まる。その際の回答文書の事績は現在残っていないが、添付地図が残っており、28箇所文化財が少なくとも存在すると回答しているようである。

その後、環境実態調査を行うにあたり、国鉄（JR）から依頼を受けた福岡県企画開発部交通対策課（現企画振興部交通対策課）が、福岡県教育庁管理部文化課長（現総務部文化財保護課）あてに（昭和53年9月20日付53交対第367号、昭和54年8月20日付54交対第317号）「整備新幹線に関する環境評価指針」に基づいた分布調査を依頼しており（54交対第317号では調査対象が路線予定地幅6kmに広がったため、32地点を対象）、文化課は昭和54年11月22日付54教文第1884号で工事に係る該当箇所の文化財の保存措置について回答している。以上の調査結果は路線決定に際してかなり配慮されており、当時の関係各位のご尽力に敬意を表したい。

その後、実際に動き出したのは先述した工事実施計画認可後であり、まず福岡県は平成10年4月8日に福岡県企画振興部交通対策課のもと、関係部局で九州新幹線鹿児島ルート情報会議を設置し、九州新幹線鹿児島ルートに関する情報等についての連絡調整を行うこととした。この会議は同年4月22日に行われた後、同年8月27日、平成11年4月26日、平成12年5月16日、平成13年1月23日、平成13年6月13日に開催され、事業初期の埋蔵文化財調査計画等を立案する上で、大いに役立っている。



工事実施計画認可後の直接的な埋蔵文化財

遺跡周辺新幹線高架工事状況

の対応は、平成10年6月18日付で日本鉄道建設公団九州新幹線建設局（現 独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局）から福岡県教育委員会教育長あてに「九州新幹線建設に伴う埋蔵文化財の有無及び取扱について（船小屋～大牟田市間）」（平成10年6月18日付九建用一第19号）との照会に始まる。そこで、当該は関係市町村保有の文化財情報の整理及び現地踏査を行い、平成10年7月13日付10教文調第57号で、計21ヶ所、122,800㎡の埋蔵文化財調査予定地（第1表）とともに、その他の予定地外も用地買収完了後順次、現地の踏査及び試掘調査が必要であるとの回答を行っている。

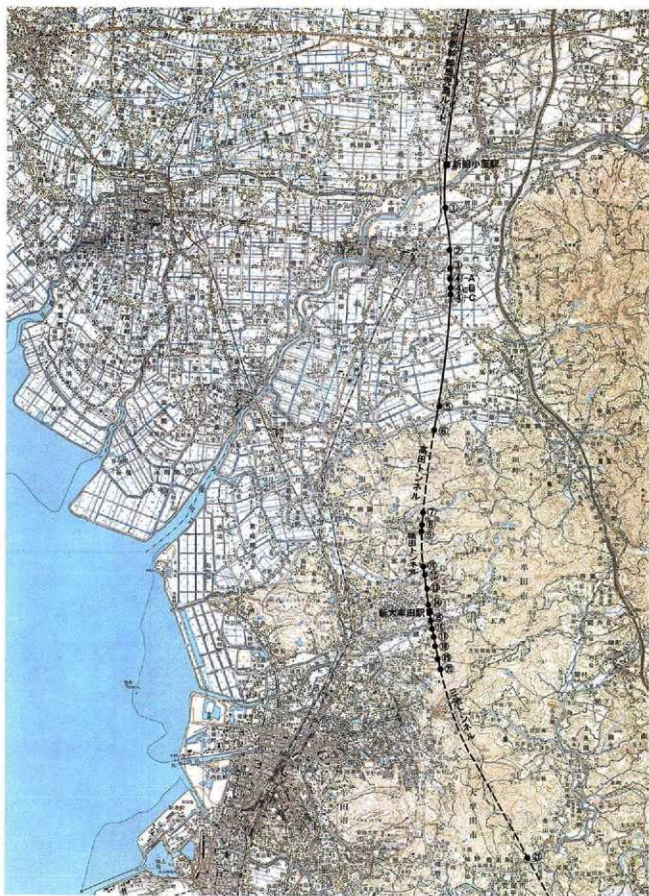
現在、この回答に基づき、福岡県教育庁総務部文化財保護課及び高田町・大牟田市教育委員会を調査主体として、試掘・確認調査及び本調査が行われている。

当該では平成13年11月より三池郡高田町海津横馬場遺跡の本調査を行っていたが、瀬高町大字山門の用地の大部分が解決したため、平成14年11月5～7日に重機による試掘・確認調査を行った。結果は、瀬高南工区の藤ノ尾集落から松田集落までの約540m間ではクリークを含む流路を数条検出し、遺構密度は全体的に高く、一部遺構面が複数面存在することを確認した。試掘調査対象地点南端にあたる山門前田遺跡部分では、0区では近世瓦が多く出土すること、1区の遺構群の遺構密度が高いこと、2区では遺跡北端を検出し、北側の山門北池遺跡（平成18年度報告予定）との間には大きな流路（後に松延城跡の堀跡と判明）が存在することを確認している。

平成14年12月より本報告で取り扱う山門前田遺跡の調査区0～2区の調査が可能となり坂元が調査を担当することとなった。調査地点の田表土で調査範囲と周囲の田畑との境界に畦を築く作業が、J V側により行われており、その作業の終了を待つ必要があった。そのため、まず平成14年12月中旬に、0～2区より南側で大根川までの区間の試掘可能な地点の試掘調査を行

地点	工事件名	遺跡名	所在地	対象面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	調査年度	報告年度	備 考
1	瀬高北	藤領ノ遺跡	瀬高町大字坂田	4480	1107	H16	H17	調査終了
2	瀬高中	小川柳ノ内遺跡	瀬高町大字小川・下坂田	5600	5300	H16・17	H18・19	調査終了
3	瀬高南	藤の尾浜添込跡	瀬高町大字山門	3360	5500	H15・16	H19・20	調査終了
4-A	瀬高南	山門北池遺跡	瀬高町大字山門	6340	1700	H15	H18	調査終了
4-B	瀬高南	山門前田遺跡	瀬高町大字山門		1175	H14・15	本書	調査終了
4-C	瀬高南	松田横畑遺跡	瀬高町大字松田		360	H17		調査終了
5	高田田尻	海津横馬場遺跡	高田町大字海津	4200	2050	H13～15	H16・17	調査終了
6	高田田尻	飯川遺跡	高田町大字田尻		0			遺跡なし
7	高田T		高田町大字上橋田		3300			一部試掘済
8	橋田T	上橋田松浦遺跡	高田町大字上橋田	3520	560	H16	H17	高田町調査
9	橋田T	上橋田畑間遺跡	高田町大字上橋田	6000	870	H16	H17	高田町調査
10	橋田T		高田町大字上橋田		3300			遺跡なし
11	橋田T		大牟田市大字宮崎		5200			一部試掘済
12	橋田T	筑瀬堂古墳群	大牟田市大字岩本		4000			一部試掘済
13	橋田T	筑瀬堂古墳群	大牟田市大字岩本		8400			一部試掘済
14	橋田T	コノシロ塚遺跡	大牟田市大字岩本		2576			
15	大牟田ST	白銀川桑屋	大牟田市大字岩本		3360			
16	岩本		大牟田市大字岩本		1344			一部試掘済
17	岩本	岩本土堂遺跡・貝船塚古墳	大牟田市大字岩本		2240			遺跡なし
18	岩本		大牟田市大字岩本		896			遺跡なし
19	岩本	出口古墳群	大牟田市大字宮部		5000			遺跡なし
20	岩本		大牟田市大字宮部		5400			
21	三池T		大牟田市大字教来木		896			

第1表 九州新幹線鹿児島ルート船小屋・新八代間福岡県内埋蔵文化財調査地点一覧



第2図 九州新幹線船小屋・大牟田間埋蔵文化財調査地点 (1/100,000)



遺跡調査状況（1区）

る表土剥ぎを行いつつ作業員を投入し、南側から検出作業を開始した。2月上旬までは遺構密度の高い調査区南半部分の調査が主体で、徐々に著しく攪乱を受けている北半部分へと調査を広げていった。調査区北半の攪乱を受けている範囲は広いが、さほど大きくはない攪乱の単位が複雑に切り合う状況であった。攪乱ではあるが、各単位で分けて掘削し、混入する遺物を回収した。ほとんどの掘削作業が終了し、2月19日に翌日の全体写真の撮影のために調査区内の水汲み・清掃を行ったが、20日朝までの激しい降雨により、再び20日の水汲み・清掃の作業を余儀なくされた。翌2月21日に全体写真の撮影を終了し、基盤層とはやや質の異なる部分があったため、いくつかのトレンチを設けて掘削した結果、新たに6号溝と調査区北側の谷の部分の掘削が必要であることが判明した。広範囲での掘削が必要であることから、1区調査終了後すぐに着手しようと考えていた0・2区の調査について、平成14年度内での着手はこの時点で断念することとなった。6号溝を2月28日に掘削を終え撮影し、谷の掘削は著しい湧水に悩まされる困難なものであったが、3月11日に掘削を終え、3月12日に1区の実測等の作業も終了させ、重機による埋め戻しを行った。

なお、1区の作業を行いながら、次年度の調査のために2月25日に重機を搬入し、2区の表土掘削を行った。続けて3・4区（上記山門北池遺跡）の田表土による畦の形成および表土の掘削を行った。建機等の撤収は3月19日に行い、重機は3月25日まで稼働し平成14年度の作業を終了した。

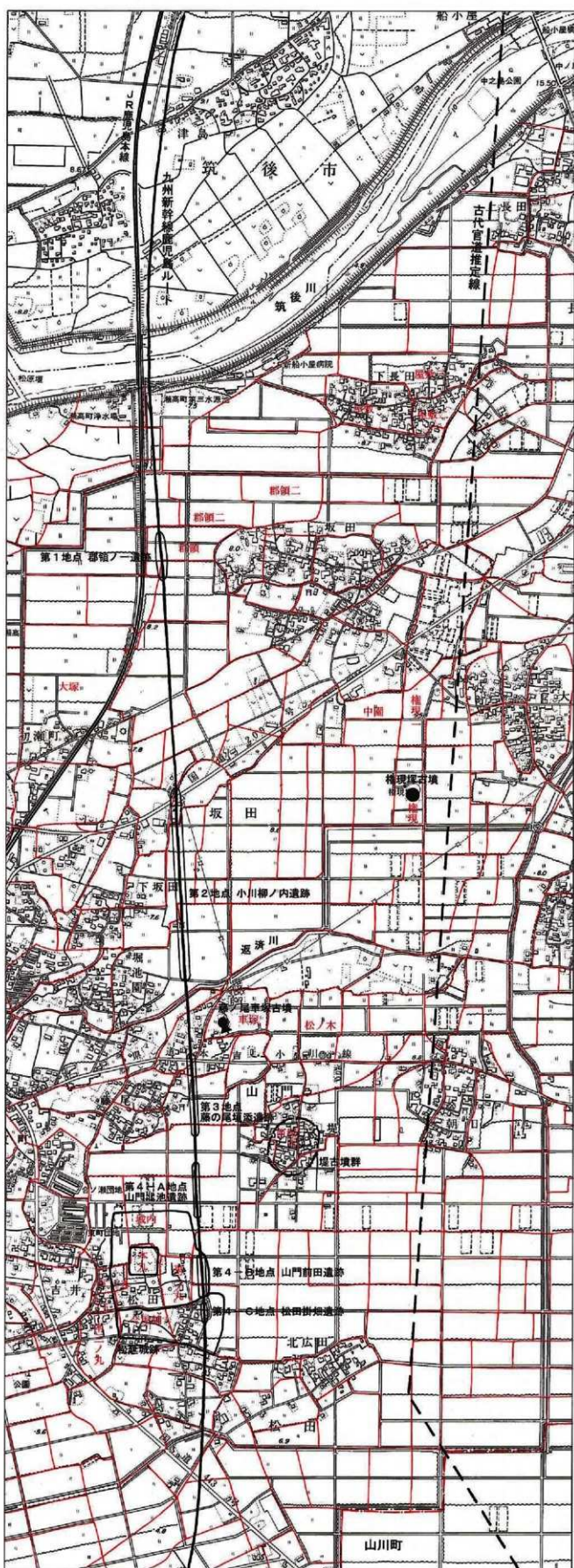
平成15年度は4月1日付で人事異動により調査担当が坂元から大庭に変わった。



0区7号土坑出土箕切り取り状況

い、そのまま畦を形成する作業の終了後の12月19日より1区の重機による表土剥ぎを開始した。0区に現場事務所等を設置することとし、1区の南端より掘削を開始、排土を北側の2区に盛ることとした。平成14年は12月26日まで作業を行い、年末年始のために一時中断した。年が明けて平成15年は1月7日より作業を開始し、1km以上離れた地点のベンチマークからレベル移動を行った。翌1月8日より建機等の搬入を行うとともに、重機による表土剥ぎを行いつつ作業員を投入し、南側から検出作業を開始した。2月上旬までは遺構密度の高い調査区南半部分の調査が主体で、徐々に著しく攪乱を受けている北半部分へと調査を広げていった。調査区北半の攪乱を受けている範囲は広いが、さほど大きくはない攪乱の単位が複雑に切り合う状況であった。攪乱ではあるが、各単位で分けて掘削し、混入する遺物を回収した。ほとんどの掘削作業が終了し、2月19日に翌日の全体写真の撮影のために調査区内の水汲み・清掃を行ったが、20日朝までの激しい降雨により、再び20日の水汲み・清掃の作業を余儀なくされた。翌2月21日に全体写真の撮影を終了し、基盤層とはやや質の異なる部分があったため、いくつかのトレンチを設けて掘削した結果、新たに6号溝と調査区北側の谷の部分の掘削が必要であることが判明した。広範囲での掘削が必要であることから、1区調査終了後すぐに着手しようと考えていた0・2区の調査について、平成14年度内での着手はこの時点で断念することとなった。6号溝を2月28日に掘削を終え撮影し、谷の掘削は著しい湧水に悩まされる困難なものであったが、3月11日に掘削を終え、3月12日に1区の実測等の作業も終了させ、重機による埋め戻しを行った。

4月10日に平成15年度の調査計画と工事工程の摺り合わせを、鉄道運輸機構大牟田鉄道建設所とJVと県教委の3者で行い、12月末までに山門北池遺跡までの約450m間の調査を行うことで合意した。4月15日から重機を投入し、0区南側から表土剥ぎを行った。0区は確認調査と当初の表土剥ぎでは黄褐色粘質土を地山と想定していたが、その面で遺構検出すると、はっきり遺構が見えなかったため、20cm下の灰白色粘質土まで下げて調査を



第3図 瀬高町内九州新幹線沿線字図 (1/10,000)

行ったが、結果的には下げすぎてしまうこととなった。また0区南端の7号溝は遺構面から約1.1mと深く、大部分を重機により掘り下げたことにより、同時に大量の排土も出たため、南側のみ表土剥ぎを行い、北側はその排土置き場とする、反転調査を行うこととなった。

0区南側は4月18日から作業員を投入したが、4月後半～5月前半までは雨が多く、5月8日には7号溝東西壁が湧水により崩壊したため、7号溝の土層図は略図となってしまった。2区は前年度に表土剥ぎも終了し、面積も少ないことから0区南側と同時に調査を進め、2区は5月9日に全体写真、0区南側も5月13日に全体写真の撮影を行った。0区南側は実測終了後、5月16日より反転作業に入った。5月20日には2区の実測が終了し、5月21日に2区埋め戻しを行った。その間、5月7日に森山良一教育長、5月21日に三瓶享夫教育次長・清水圭輔総務部長の現場視察を受けた。5月19日から0区北側の遺構検出を行い、井戸などからの湧水に悩まされながら、調査を続けた。0区北側は南に比べ遺構密度が高く、また深さのある土坑や木製品の出土があったため、調査第二係長以下係員の実測の協力を得ながら調査を進めた。7号土坑からは竹製の箕が出土したため、5月28日に九州歴史資料館の加藤和歳氏の現地指導よりウレタンによる箕の切り取りを行った。遺構掘削が一段落した6月前半には、大量に出土した7号溝出土近世瓦の水洗いと選別を行い、選別後の瓦片は現地に埋め戻した。6月4日には0区北側の実測が終了し、0区の基本土層図を6月6日に作成し、6月10日に0区北側の埋め戻しを完了し、当遺跡の調査が終了した。

2. 調査の組織

発掘調査及び整理・報告書作成にいたる間の関係者は以下のとおりである。

独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構 鉄道建設本部 九州新幹線建設局

(平成15年9月30日まで日本鉄道建設公団 九州新幹線建設局)

	[平成14年度]	[平成15年度]	[平成16年度]	[平成17年度]
局長	高山 博文	高山 博文	高山 博文 北川 隆	北川 隆
次長	伊神 英二	伊神 英二	伊神 英二	関根 茂
用地第一課長	川原 久紘	関根 茂	田中 等	田中 等
用地第一課補佐	有原田幸郎	有原田幸郎	木佐一正和	木佐一正和
用地第一課担当係長	柳内 恭介	入江 万久	入江 万久	入江 万久
工事第三(八)課長	奈良 明浩	石原 博行	石原 博行	北原 太一
(瀬高南工区担当課は平成15年度当初に工事第八課(H14)から 工事第三課(H15～)に組織替えが行われる)				
工事第三(八)課課長補佐	上野 登	上野 登	上野 登	上野 登
工事第三(八)課担当係長	橋本 順一	橋本 順一	馬淵 善男	馬淵 善男 林 孝治
大牟田鉄道建設所長	松室 哲彦	渡邊 修	渡邊 修	長谷川正明
担当副所長	馬淵 善男	那須 芳人	福田 聡	福田 聡

福岡県教育委員会（教育庁総務部文化財保護課）

	[平成14年度]	[平成15年度]	[平成16年度]	[平成17年度]
総括				
教育長	森山 良一	森山 良一	森山 良一	森山 良一
教育次長	三瓶 寧夫	三瓶 寧夫	清水 圭輔	清水 圭輔
総務部長	松本 通憲	清水 圭輔	中原 一憲	中原 一憲
文化財保護課長	井上 裕弘	井上 裕弘	井上 裕弘	久芳 昭文
副課長				川述 昭人
参事兼課長技術補佐	橋口 達也	川述 昭人	川述 昭人	木下 修
	川述 昭人	木下 修	木下 修	池辺 元明
参事			新原 正典	佐々木隆彦
				新原 正典
参事兼課長補佐	久芳 昭文	久芳 昭文		安川 正郷
課長補佐			安川 正郷	
参事補佐兼調査第一係長	佐々木隆彦	小池 史哲	小池 史哲	小池 史哲
庶務				
参事補佐兼管理係長	占賀 敏生	古賀 敏生		稲尾 茂
管理係長			稲尾 茂	
事務主査	宮崎 志行	宮崎 志行	宮崎 志行	石橋 伸二
主任主事	鎮守 俊明	末竹 元	石橋 伸二	末竹 元
	秦 俊二	秦 俊二	末竹 元	湖上 大輔
調査・報告				
参事補佐兼調査第二係長	児玉 真一	中間 研志	中間 研志	飛野 博文
主任技師	秦 憲二	秦 憲二	秦 憲二	大庭 孝夫
		今井 涼子	今井 涼子	坂元 雄紀
		宮地聡一郎	進村 真之	
		小澤 佳憲	宮地聡一郎	
		今井 涼子	大庭 孝夫	
		大庭 孝夫	坂元 雄紀	
技師				坂元雄紀

調査及び整理期間中には、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（旧日本鉄道建設公団）九州新幹線建設局工事第三課・同大牟田鉄道建設所、地元である瀬高町教育委員会・歴史資料館文化財担当の三池賢一・鬼丸哲也・立石真二氏、字図や圃場整備関係の図面の入手においては瀬高町役場税務課・建設課の方々、瀬高南BL他の工事を担当した鴻池・山九・九鉄・廣瀬特定建設工事共同企業体久積副所長をはじめとする工事事務所の方々、また近隣の方々には発掘調査を進めるにあたって様々に配慮いただきました（厚書きは調査・整理当時）。

2ヶ年にも及ぶ調査には地元を中心とする多数の方々が作業員として参加されました。調査は悪天候、悪条件の作業も伴い、作業員の皆様の御尽力なしには無事に調査を完了することはなかったと思います。ここに深甚の謝意を表します。

II. 位置と環境

1. 地理的環境

山門前田遺跡は福岡県山門郡瀬高町大字山門字前田、大字松田字東二ノ丸に位置する。

遺跡が所在する山門郡瀬高町は、福岡県の南部、東経130°29′・北緯33°9′に位置し、東部は同郡山川町・八女郡立花町、北部は筑後市・八女市、西部は柳川市、南部は三池郡高田町と接し、東西8.2km、南北7.6km、総面積37.73km²、人口24,000人を測る町である。古くから矢部川を利用した水運で栄え、古代には西海道、近世には薩摩街道が町を南北に縦断し、現在でもJR鹿児島本線、九州縦貫自動車道が町を貫通し、また国道209号線と国道443号線が町中央で交差する交通の要衝である。

遺跡は北から東を矢部川、東には筑肥山地、南を上内・陣子ヶ岳低山地に囲まれた筑後平野南部の矢部川が形成した沖積地に立地する。筑紫平野は筑後川・矢部川その他の諸河川が運搬してきた土砂で埋められ、一部人工の干拓も加わってきた福岡・佐賀両県にまたがる九州最大の平野であり、福岡県側を一般に筑後平野と称し、また当遺跡が存在する矢部川が形成した平野部分を南筑平野とも呼称する。

矢部川は大分県・熊本県との県境山地である奥耳納山地・筑肥山地の水を集めて西流する全長61kmに及ぶ、筑後川に次ぐ一級河川であり、八女市・筑後市・柳川市との境をなしながら筑後市船小屋付近から流れを南西に向きを変えて流下し、海岸近くで、瀬高町の南端を東西に流れる飯江川と合流し、有明海に注いでいる。矢部川は水源が狭小にもかかわらず、八女郡・山門郡、三池郡、八女市、筑後市、柳川市、大川市の4郡4市にまたがり、流域面積は620km²、灌漑面積11,000haにもわたる農地を潤している。

筑肥山地は、起伏量200～400mの小起伏山地と起伏量200m以下の緩斜面となる山麓地に分かれるやや起伏の強い山地であるが、基盤は主に筑後変成岩類であり、その岩石類は多くの石英絹雲母片岩と少量の石英片岩及び古第三系の礫岩・砂岩などから構成される。当遺跡が位置する山地西部の平坦地帯は、矢部川が育んだ砂・粘土・礫の堆積である未固結堆積物の灰色低地土壌・砂粒グライ土壌などからなり、排水良好で生産性が高い。耕土も深く、良質な土壌に恵まれ、豊富な水と温暖な気候に相俟って、水稲・麦類・野菜などの栽培に適している。

この沖積地の耕土下は上下2層に区分でき、上部は有明粘土層、下部は島原海層と呼ばれている。有明粘土層は内湾性の貝化石を含む軟弱な粘性土層を主体とし、層の厚さは、瀬高町付近では約2mであるが、矢部川下流では約10mに達し、海岸に近くなるにつれて厚くなる傾向にある。島原海層は砂礫層からなるが、一部粘土層を挟むことがある。層の厚さは変化が著しく、数mから10m前後であると考えられ、上層と下層が整合しながら地質を構成する。当遺跡においても標高4.8m前後で上部の有明粘土層を確認している。

2. 歴史的環境 (旧石器・縄文時代、中近世)

瀬高南工区調査報告は山門北池遺跡 (H18)・藤の尾垣添遺跡 (H19・20)と続き、この2遺跡は弥生・古墳・古代の遺構・遺物が主体となることから、弥生～古代の歴史的環境については次年度以降の報告書で記述する。

旧石器時代

瀬高町の東部、筑肥山地の西端にあたる清水山から派生する丘陵斜面上に位置する清水山遺跡群の獅子穴遺跡（鈴木編1984）、大道端遺跡（関編1977）でナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器などが少量出土している。なお、清水山遺跡群から多量に表採されていた礫石器は、以前は旧石器時代に属する可能性が高いとされていたが、（財）古代学協会・平安博物館の1976・1980年の調査では礫石器に伴う遺物は確認されなかったこと、当地方での発見例に旧石器的要素が少ないこと、採集地周辺には縄文時代早期の押型文土器関係資料が多いことから、現在では縄文時代早期の所産である可能性が高いとされている（横田1995）。

縄文時代

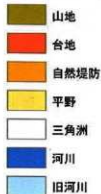
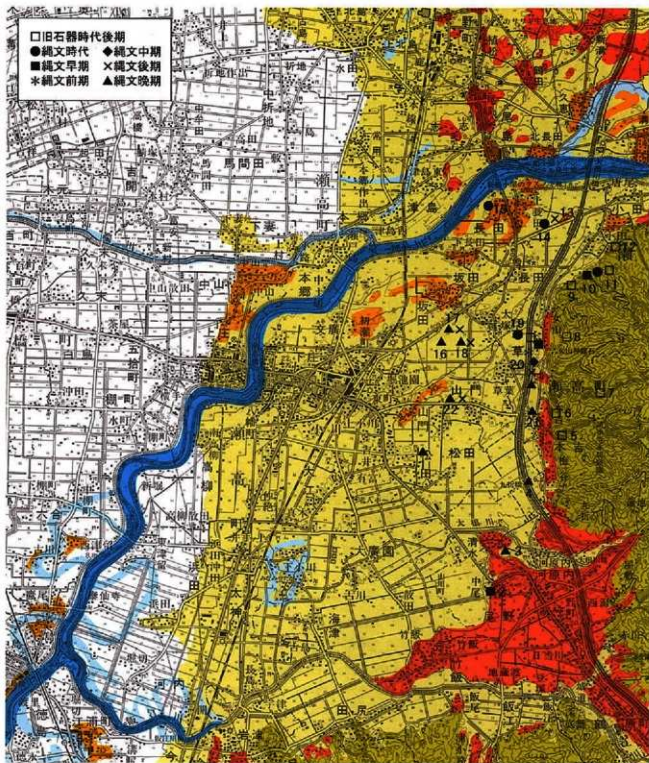
縄文時代早期～中期にかけては、清水山丘陵上～山麓（大道端遺跡は標高9m）に遺跡が集中する。早期では清水山遺跡群の大谷遺跡・前畑遺跡で押型文土器と削器・銚形石鏃などが出土し（鈴木編1984）、大道端遺跡出土のトロトロ石器も早期に属する可能性がある。前期では二次堆積からの出土ではあるが、大道端遺跡から轟A・曾畑式土器が各1点ずつ出土し、中期においても同遺跡から阿高式土器が出土している。この大道端遺跡は縄文時代晩期後半にあたる、突帯文土器までの遺物が出土しており、土器の残存状況や出土量から調査区内では遺構は認められなかったものの、ごく近い周辺で生活が営まれた可能性が高い（関編1977）。

後期になると、縄文海進の後退期となり、河川の自然堤防上に遺跡が進出するが、自然堤防でも標高が8m以上の高い場所に遺跡が立地し、弥生時代以降の遺跡分布状況とは様相が異なる。長田遺跡では後期前半の南福守式土器が標高8m付近から出土している（関編1977）。後期末～晩期初頭になると御二田遺跡・坂田中園遺跡・権現塚北遺跡のように自然堤防上の遺跡が増加する。特に権現塚北遺跡では後期末～晩期中葉の竪穴住居跡・土坑・埋甕などを検出しており、出土遺物としては土器の他、土偶・扁平打製石斧・石鎌などが出土し、遺跡の生活環境とともに後期の遺跡増加の実態を考える上でも重要な遺跡である。（川述編1985）。

晩期になると前述した権現塚北遺跡、大道端遺跡の他、梅ヶ谷遺跡・草葉遺跡でも晩期の土器が発見されてようであり、さらに安定した微高地に遺跡数が増加するようであるが、晩期後半（弥生時代早期）になると、今回報告する山門前田遺跡において突帯文土器群が出土していることから、標高5m前後の沖積低地まで遺跡が進出するようになる。また丘陵先端に位置する山川町山ノ上遺跡では、夜臼Ⅱ式～板付Ⅰ式併行期と推測される甕・壺形の、浅鉢を供献する甕墓群を確認している。同遺跡付近には当該期の集落の存在が予想されていることから、今後の調査の進展により両遺跡の比較が行われ、南筑後地域における弥生文化開始期の様相が明らかになることを期待したい。

中世

古代以前と比べると、瀬高町内における発掘調査例が少なく不明な点が多い。文献資料においては、鎌倉時代を中心とする鷹尾神社文書や同写本等により、部分的に当該地域の動向が判明する。平安時代以降、この地域には瀬高庄（現在の瀬高町、柳川市）と呼ばれた矢部川沿いの開墾によって形成された22の名田で構成される広大な荘園が形成され、大治六年（1131）に



- | | |
|-----------|------------|
| 1. 山門前田遺跡 | 12. 七社宮裏遺跡 |
| 2. 前畑遺跡 | 13. 長田遺跡 |
| 3. 山ノ上遺跡 | 14. 垣ノ池遺跡 |
| 4. 散布地 | 15. 上長田遺跡 |
| 5. 小谷遺跡 | 16. 坂田遺跡 |
| 6. 三船山遺跡 | 17. 中園遺跡 |
| 7. 獅子穴遺跡 | 18. 権現塚北遺跡 |
| 8. 長谷遺跡 | 19. 女山遺跡 |
| 9. 名木野遺跡 | 20. 大道畑遺跡 |
| 10. 大谷遺跡 | 21. 散布地 |
| 11. 長田山遺跡 | 22. 御仁田遺跡 |

清水山遺跡群

第4図 旧石器・縄文時代周辺遺跡分布図(地形分類図)(1/50,000)

は瀬高庄が矢部川を境に右岸を上庄、左岸を下庄と2つに分かれたことが記載されており、現在でも町中心部の大字名に名残が残る(鏡山1972)。その他にも瀬高町内には宇佐八幡宮領の小川庄、香椎宮領の本吉庄、太宰府安楽寺領の長田庄・坂田庄、公領の有安・松延などが存在した。また現在の上庄・下庄地区を中心に有明海～矢部川を利用した水運がこの時期に発達したことで、多くの物資の集積をもたらし、高良大社大祝家の支配を受けて町屋や市・座などが形成されたことが文献等から確認されている。

遺跡では12世紀中頃になると、矢部川の本流・支流に近い沖積微高地を中心に集落が確認されている。金栗遺跡では昭和25年の地下げ工事により、平安時代末～鎌倉時代末に埋没したとされる環溝とその内部から、堅穴(土坑か)・井戸等が検出され、菊花双雀鏡や「金玉満堂」と内面見込に刻まれた青磁椀(13世紀前後の資料か)が出土している(鏡山1972)。1985年には金栗遺跡南端の調査が行われ、12世紀中頃～14世紀初めの井戸・土壌・溝等を検出し、遺物は土師器・須恵器・瓦器・青磁・白磁や石鍋を中心とする滑石製品等が出土している(川述1988)。金栗遺跡南東に位置する大江北遺跡では、青磁椀を副葬した土壌墓(木棺墓か)や総数89基の土壌群や溝・井戸など12世紀後半～14世紀前半の集落を検出しており、特に瓦器椀は12世紀後半～13世紀前半の標識資料となるものである。(川述1987)。

松延遺跡(山門北池遺跡)では13世紀中頃の土壌を検出し(田中編1998)、その他にも金栗遺跡東に位置する鉾田遺跡で、平安時代後期～鎌倉時代の堅穴(土坑か)・井戸・溝(区画溝)を、瀬高保育園内遺跡では平安時代の遺構(内容不明)が確認されている(鏡山1972)。

一方上庄においては、下庄に比べより調査例が少ない。山門高校改築に伴って調査された上庄秀遺跡では、12世紀後半～13世紀前半の激しい重複関係の土坑群・溝が確認され、多量に出土した土師器・須恵器・瓦器・陶磁器は標識資料となるものであり、遺跡南側には大規模な集落の存在が予想される(坂元2005)。その他にも旧三橋町垂見遺跡では平安時代後期の掘立柱建物跡・堅穴(土坑か)・井戸・溝が、旧大和町びわその遺跡では平安時代末～鎌倉時代の堅穴(土坑か)・井戸が確認されている(鏡山1972)。

14～16世紀については、町内では調査例が当遺跡のみであるが、矢部川左岸の筑後市域では道路状遺構を検出した榎崎遺跡(小林1993)、道路状遺構と区画溝を検出した鶴田楯原遺跡(筑後市教委1994)、集落の下限が16世紀後半と想定される掘立柱建物跡群・井戸・溝を検出した鶴田中市ノ塚遺跡(小林2002)、掘立柱建物跡群・溝・井戸・土壌・溝を検出し、15世紀～16世紀を中心とする遺物が多く出土した中折地内栗遺跡(立石2004)など近年資料が増えてきており、今後矢部川流域における当該期の在地土器編年や集落構造の解明などが期待される。

当遺跡は松延城跡曲輪Ⅱ(二ノ丸)東南隅に位置することから、文献資料における松延城跡も加えて記述する。松延城は天正12年(1584)に立花町山下城主蒲池鑑広が肥前の龍造寺隆信に攻められた際に、蒲池氏を援助するために樺島武部が築いた城である。豊臣秀吉の九州平定後の天正15年(1587)、柳河城主立花統虎(のちの宗茂)の家臣立花三右衛門が城番になっている。関が原の合戦後の慶長6年(1601)、新しく筑後国守となった田中吉政の家臣松野主馬が城番を務め、一万二千石を領していたが、元和元年(1615)の一国一城令により破却されている。



- | | | |
|------------------|--------------|--------------|
| 1. 山門前田遺跡 | 13. 日吉坊遺跡 | 25. 瀬高庄城跡 |
| 2. 松延遺跡 (山門北池遺跡) | 14. 浜田城跡 | 26. 白鳥城跡 |
| 3. 松延城跡 | 15. 堀切城跡 | 27. 垂見城跡 |
| 4. 北ノ前遺跡 | 16. 堀切寺屋敷遺跡 | 28. 垂見遺跡 |
| 5. 針田遺跡 | 17. 鷹尾城跡 | 29. 久末城跡 |
| 6. 大江北遺跡 | 18. 鷹尾神社 | 30. 本郷城跡 |
| 7. 金栗遺跡 | 19. 枇杷園遺跡 | 31. 中折地内栗遺跡 |
| 8. 宮園城跡 | 20. 津留城跡 | 32. 覆崎遺跡 |
| 9. 大木城跡 | 21. 瀬高保育園内遺跡 | 33. 鶴田中市ノ塚遺跡 |
| 10. 竹井城跡 | 22. 吉岡城跡 | 34. 鶴田橋原遺跡 |
| 11. 飯江城跡 | 23. 恵比寿板碑 | |
| 12. 野町十三塚 | 24. 上庄秀遺跡 | |

第5図 中近世周辺遺跡分布図 (1/50,000)

近世

近世においては、田中家改易後の元和六年（1620）、立花宗茂が陸奥棚倉から復帰し、柳河藩が成立する。山門郡は幕末まで柳河藩が統治し、町奉行支配のもと現在の町中心部は中世から発達した上庄・下庄を中心に町屋が形成され、酒・鉤物・瓦・和紙・蠟などを生産し、農村部は本郷組・小川組・竹井組（当遺跡はこの竹井組内）の3組に分かれて治められていた。江戸中期になると薩摩街道は西寄りに変更され、上庄・下庄を通過するようになり、上庄は柳川街道、下庄は三池街道に通じる分岐点としてさらに栄え、上庄には藩の公用施設として御茶屋屋敷が設置されている。

近世の遺跡は中世よりさらに調査例が少なく、町内においては今回を含めて3例のみである。堀切寺屋敷遺跡では最も古い墓誌銘が延宝3年（1675）の玖珠三池氏の墓地34基以上を調査し（川述他1989）、松延遺跡（山門北池遺跡）では溝から近世末期の鯉瓦も含む瓦類が出土し、近世末期の2×6間の掘立柱建物跡も検出している（田中1998）。当遺跡でも0区7号溝から松延遺跡と同祀の瓦が大量に出土した。このように、近世遺跡の調査はまだ始まったばかりであり、特に上庄・下庄地域における発掘調査の進展が期待される。

引用・参考文献

- 鏡山猛 1972 『九州考古学論攷』 吉川弘文館
瀬高町教育委員会 1974 『瀬高町誌』 瀬高町
関晴彦編 1977 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XIV』 福岡県教育委員会
副島邦弘・近澤康治 1979 『附録 福岡県中世山城』 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XIX』 福岡県教育委員会
近澤康治 1979 『松延城』 『日本城郭体系18』 新人物往来社
鈴木忠司編 1984 『清水山遺跡群の調査』（財）古代学協会・平安博物館
川述昭人 1985 『権現塚北遺跡』 瀬高町文化財調査報告書第3集 瀬高町教育委員会
川述昭人編 1987 『大江北遺跡』 福岡県文化財調査報告書第76集 福岡県教育委員会
川述昭人 1989 『上枇杷・金栗遺跡』 福岡県文化財調査報告書第82集 福岡県教育委員会
田中康信編 1989 『藤の尾垣添遺跡Ⅱ』 瀬高町文化財調査報告書第5集 瀬高町教育委員会
川述昭人・佐々木四十臣・三池賢一 1989 『堀切寺屋敷遺跡』 『藤の尾垣添遺跡Ⅱ』 瀬高町文化財調査報告書第5集 瀬高町教育委員会
小林勇作 1993 『寝崎遺跡』 筑後市文化財調査報告書第9集 筑後市教育委員会
筑後市教育委員会 1994 『筑後東部地区遺跡群Ⅰ』 筑後市文化財調査報告書第11集
横田義幸 1995 『B-3 その他石器、礫石器』 『白木西原遺跡』 立花町文化財調査報告書第8集 立花町教育委員会
田中康信編 1998 『瀬高地区遺跡群Ⅱ』 瀬高町文化財調査報告書第15集 瀬高町教育委員会
小林勇作 2003 『筑後市内遺跡群』 筑後市文化財調査報告書第45集 筑後市教育委員会
永見秀徳編 2003 『筑後西部第2地区遺跡群（Ⅷ）』 筑後市文化財調査報告書第51集 筑後市教育委員会
立石真二編 2004 『中折地内渠遺跡』 筑後市文化財調査報告書第54集 筑後市教育委員会
『日本歴史地名大系41 福岡県の地名』 2004 平凡社
坂元雄紀 2005 『上庄秀遺跡』 福岡県文化財調査報告書第203集 福岡県教育委員会

3. 瀬高町内出土資料の紹介 (図版47・48、第6・7図)

ここで紹介するのは、福岡県教育委員会及び瀬高町教育委員会がこれまで瀬高町に関わる調査を行なった際に出土・採集し、現在福岡県教育委員会で保管されている資料である。調査・採集時点から時間が経過したものがほとんどで、遺物の出自が明確でないものが多い。しかし、九州新幹線建設事業により調査した遺跡周辺の採集資料や複数のアメリカ式石鏃など特徴のある資料が存在することから、今回情報の再整理を行い、分かる範囲で出土地点を判断した。なお、各資料の詳細については、第2表の観察表をご覧いただきたい。

1～33は一つの箱に収納されていた。箱の中にラベルはなく、一部注記されていない資料もあったが、多くには〔小川〕や〔小川遺跡〕、〔小川遺跡・表採〕と注記されており、小川地区出土一括資料であろうと判断した。これらの資料が採集された小川地区は、瀬高町中部の沖積微高地上に位置する。同地区には弥生時代中期初頭～前半の貯蔵穴群や、中期後半の祭祀遺構が確認された上批把遺跡、中期前半～中頃を主体とする甕棺墓群が調査された鉾田遺跡、平安～鎌倉時代中頃の土壇や土塋墓、井戸を検出した大江北遺跡などが所在する。

本資料で注目できるのは、いわゆるアメリカ式石鏃が4点出土している点である。アメリカ式石鏃は、基部の両側に特徴的な深い抉りをもつ石鏃で、形態がアメリカインディアンの使用していた石鏃に似ていることからその名称が付けられた。一般的には弥生時代中・後期の東北地方に分布の中心があると考えられているが、北部九州にも分布域が認められる。当遺跡が所在する福岡県南部を中心に類例を見てみると、24遺跡58点が確認できた(第3表)。現状では筑後地方に主体的に分布し、弥生時代中期前半には盛行していることがうかがえるが、まとまった資料や明確に遺構に伴うものが少なく、詳細な時期や分布範囲、出自、他形式石鏃との関連など不明な点が多い。

34の遺物は〔藤ノ尾/中央トレンチ西端/遺構確認面/860811〕と書かれたラベルが付いており、日付から調べていくと、藤の尾垣添遺跡の遺物であると判断できた(田中康信編1988「藤の尾垣添遺跡」瀬高町文化財調査報告書第4集 瀬高町教育委員会 P1)。自然堤防上に位置する藤の尾垣添遺跡は、瀬高東部地区圃場整備事業に先立ち昭和61年度に発掘調査が行われ、弥生時代後期～古墳時代後期の竪穴住居跡と弥生時代中期前半の甕棺墓32基を検出しており、その内の1基からは翡翠製の勾玉が出土している。九州新幹線建設による同遺跡の調査(第2・3次調査)では、1次調査と同時期の多数の甕棺墓・竪穴住居跡のほか、弥生時代前期末～中期初頭まで遺跡の形成が遡ることを確認している。

35・36の入っていた袋のラベルには〔瀬高町/藤の尾/松の本遺跡〕と書かれていたが、おそらく松ノ木遺跡の誤記であろうと思われ、藤の尾松ノ木遺跡の表採と判断した。藤の尾松ノ木遺跡は、藤の尾垣添遺跡の北東方約400メートルの自然堤防上に位置する。今までに発掘調査はされておらず、遺跡の時期や性格等詳細は不明である。

37は資料本体に〔松延/導水路/住2の西溝〕と注記されていた。沖積微高地上に位置する松延遺跡は、国営矢部川左岸導水路工事に先立ち昭和60年度に発掘調査が行われ、弥生時代中期の甕棺墓、弥生時代後期～古墳時代の竪穴住居跡、同遺跡南方に存在する松延城跡に関連する戦国時代頃の溝等が検出されている。松延遺跡の遺構配置図を確認したところ(田中康信編1998「松延遺跡の調査」『瀬高地区遺跡群Ⅱ』瀬高町文化財調査報告書第15集 瀬高町教育委員会 P5～P6)、東2トレンチに存在する2号竪穴住居の西側には南北に溝が走っており、

ここからの出土と判断される。なお、九州新幹線建設による同遺跡の調査（山門北池遺跡）では、弥生時代後期・古墳時代後期～奈良時代の多数の堅穴住居跡や掘立柱建物跡群を確認している。

38・39は〔セタカ北部導水路／未報告〕と書かれた容器に入れられていた。本資料は瀬高北部導水路事業のうち、昭和58年度に坂田地区の権現塚遺跡、具体的には権現塚古墳の南方で調査された際に出土したものである。権現塚古墳周辺の沖積微高地には、広範囲に縄文時代後期～古墳時代の遺跡が存在し、それらをまとめて権現塚遺跡と呼称している。権現塚古墳は直径45m、周溝幅9m、高さ5.7mの2段築成の円墳で、主体部及び年代の詳細は未調査のため

番号	種 類	ラベル表記 遺物注記	推定出土場所	長さ (cm)	幅・径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備 考
1	打製石鏃	小川	小川地区・表採	3	1.6	0.4	1.4	黒曜石	先端欠損
2	打製石鏃		小川地区・表採	2	2.7	0.4	1.4	黒曜石	先端部、脚部欠損
3	打製石鏃	小川遺跡	小川地区・表採	2.9	2.2	0.7	3.7	安山岩	脚部一部欠損
4	打製石鏃	小川遺跡	小川地区・表採	3	1.8	0.3	1.7	安山岩	先端部欠損
5	打製石鏃	小川	小川地区・表採	1.8	1.5	0.4	0.8	安山岩	
6	打製石鏃		小川地区・表採	2	1.5	0.4	1.2	安山岩	先端部、脚部欠損
7	打製石鏃	小川	小川地区・表採	2.5	1.7	0.4	0.9	安山岩	先端部、脚部欠損
8	打製石鏃	小川	小川地区・表採	1.9	1.5	0.3	0.6	安山岩	先端部、脚部一部欠損
9	打製石鏃	小川	小川地区・表採	2	1.6	0.4	1	安山岩	先端部、脚部一部欠損
10	打製石鏃		小川地区・表採	2.7	2	0.5	2.4	安山岩	先端部、脚部欠損
11	打製石鏃	小川	小川地区・表採	2.4	1.5	0.5	1.2	安山岩	脚部一部欠損、アメリカ産
12	打製石鏃	小川	小川地区・表採	2.2	1.3	0.3	0.7	安山岩	脚部一部欠損、アメリカ産
13	打製石鏃	小川	小川地区・表採	1.6	1	0.3	0.5	安山岩	脚部一部欠損、アメリカ産
14	打製石鏃	小川	小川地区・表採	1.6	1.4	0.4	0.6	安山岩	先端部、脚部一部欠損、アメリカ産
15	打製石鏃	小川	小川地区・表採	1.8	1.6	0.4	0.9	安山岩	先端部欠損、未製品
16	石鏃	小川	小川地区・表採	3.7	0.8	0.6	1.9	安山岩	先端部欠損
17	石鏃		小川地区・表採	3.6	2	0.9	4.8	安山岩	先端部欠損
18	石鏃	小川	小川地区・表採	2.3	1.3	0.4	1.9	チャート	先端部、一部欠損
19	磨製石包丁	小川遺跡表採	小川地区・表採	3.5	2.6	0.6	6.8	片岩	一部のみ残存
20	磨製石包丁	小川遺跡・表採	小川地区・表採	3.4	1.5	0.5	1.6	粘板岩	一部のみ残存
21	磨製石包丁	小川遺跡表採	小川地区・表採	5	3.1	0.7	12.8	砂岩	一部のみ残存、指定孔径0.6cm
22	磨製石包丁	小川遺跡表採	小川地区・表採	4.6	4.5	0.8	19.4	頁岩	一部のみ残存、孔は未貫通。表面風化
23	磨製石包丁	小川遺跡表採	小川地区・表採	5	2.6	0.9	13.4	粘板岩	一部のみ残存
24	扁平片刃石斧	小川遺跡表採	小川地区・表採	3.7	2.1	0.6	9	粘板岩	表裏面の溝状の窪みは、一次加工によるものか、二次加工によるものか不明。磁石として再利用？
25	扁平片刃石斧	小川遺跡表採	小川地区・表採	2.1	2.4	0.7	5.6	砂岩	一部のみ残存
26	柱状片刃石斧	小川遺跡表採	小川地区・表採	5	1	1	9.6	頁岩	ほぼ完整
27	磨製石斧	小川遺跡表採	小川地区・表採	6	4.8	1.7	46.1	安山岩	一部のみ残存
28	柱状片刃石斧	小川遺跡表採	小川地区・表採	3.3	3.2	1.8	23.1	粘板岩	一部のみ残存
29	石製紡錘車	小川遺跡表採	小川地区・表採	5.6	5.5	0.6	26.1	片岩	完整。孔径0.5cm
30	磁石	小川遺跡表採	小川地区・表採	6	3.1	1	29.2	砂岩	一部に穿孔。中磁石
31	磁石	小川遺跡表採	小川地区・表採	4.3	4.8	3.4	81.7	砂岩	一部のみ残存。仕上げ砥
32	鏡形土製品	小川遺跡表採	小川地区・表採	2.9	3.2	1.5	8.1		色調：黄白色。胎土：精良。焼成：良好。つまみ部分の両脇にユビオサエを施す。孔は一方向から貫通。孔径：0.4cm。
33	土鏃	小川遺跡	小川地区・表採	4.1	1.1	0.95	3.7		色調：赤褐色。胎土：精良。焼成：良好。孔径：0.4cm。
34	打製石鏃	藤ノ尾、中央トレンチ西端遺構確認区画860811	藤ノ尾北遺跡・中央トレンチ西端遺構確認区画	4.8	1.4	0.5	3.3	安山岩	
35	打製石鏃	瀬高町藤の尾松の木遺跡	藤ノ尾松ノ木遺跡・表採	2.1	1.1	0.6	2.4	安山岩	
36	石鏃	瀬高町藤の尾松の木遺跡	藤ノ尾松ノ木遺跡	3.2	2.5	0.9	3.8	安山岩	
37	石剣か？	松延・忍水踏西トレンチ住2の函溝内850913	松延遺跡・忍水地東2トレンチ・2号堅穴住居の直方位置する溝	8.2	5.5	0.4	51.8	安山岩	全体的に磨耗。
38	不明石製品	セタカ北部導水路6号土坑	権現塚遺跡	4	4	0.5	16.4	片岩	断面を留め丸く成形。その後下層をナメに研ぎ、表面にミガキを施す
39	土製紡錘車	セタカ北部導水路8号土坑	権現塚遺跡	5	5	1	26.8		色調：暗黄褐色。胎土：精良。焼成：良好。表面にミガキを施す。

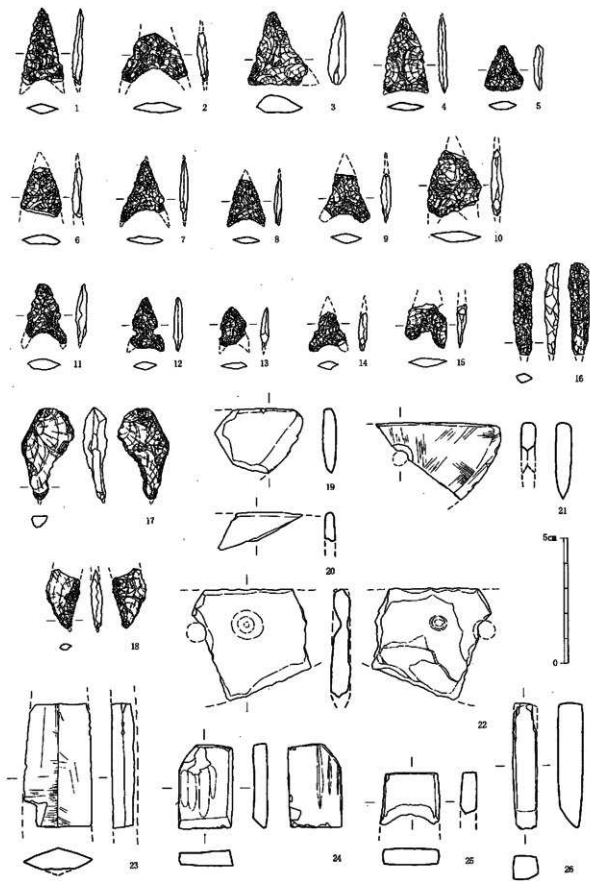
第2表 瀬高町内出土資料観察表

不明であるものの、5世紀代に属する古墳である可能性が高い。この権現塚古墳の北側に所在する権現塚北遺跡では、弥生時代中期初頭～後期の甕棺墓や土槨墓とともに、縄文時代後期末～晩期にかけての住居跡や埋甕、土槨墓、土偶などが確認され、当地域において貴重な事例として注目されている。なお、著名な注口土器が出土した坂田中園遺跡は権現塚北遺跡の西側に位置する。また、権現塚古墳を挟んで南側に位置する権現塚南遺跡からは、弥生～古墳時代にかけての竪穴住居跡や土槨が検出されている。周辺の試掘調査の結果から、集落は北側に拡がると考えられる。

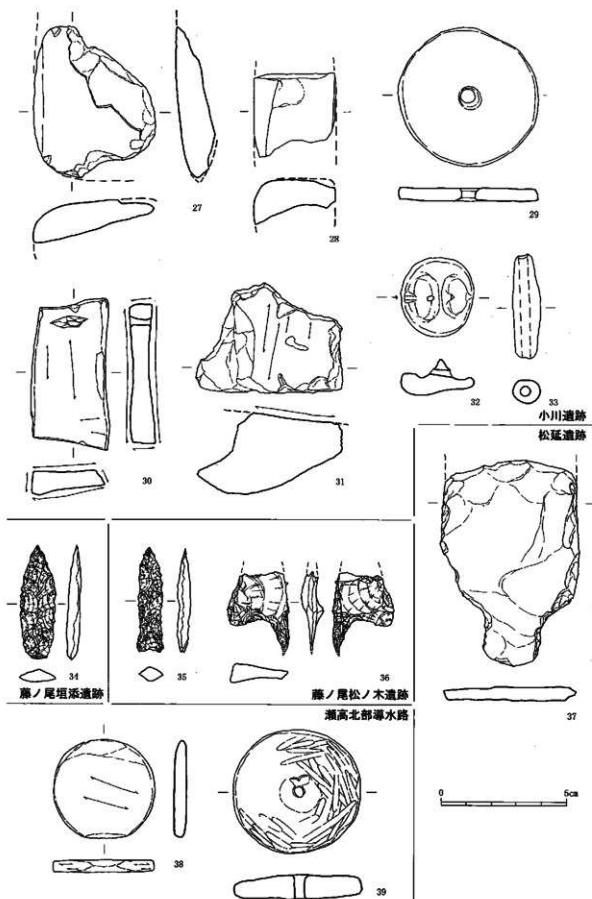
これらの資料は概ね弥生時代の所産と考えられよう。

遺跡名	所在地	出土遺構	出土品数	石 材			文 献
				黒曜石	石割 製石体	チャート	
田隈神沼遺跡	大牟田市大字田隈	3号住居跡 1号土槨	2		1		大牟田市第56集
田隈石佛遺跡	大牟田市大字田隈	2号住居跡	1		1		
竹海校東遺跡	高田町大字海津	溝Ⅱ	2	1	1		高田町第7集
海津横尾崎遺跡	高田町大字海津	トレンチ(1次) 包含層(1次) 1号溝(1次) 17号土槨	6	1			九州新幹線第1集
高島遺跡	八女市大字津江	旧河川(SD01)	1	1			八女市第52集
一牟遺跡	八女市大字立野	6号住居跡	1		1		八女市第59集
津島九反坪遺跡	筑後市大字津島	272号溝	1	1			筑後市第42集
水田杉ノ元遺跡	筑後市大字水田	0001号溝(1次) 0104号土槨(1次) 0388号土槨(1次) 包含層(1次) 015号溝(2次)	6	1			筑後市第44集
常用長田遺跡	筑後市大字常用	0907号土槨	1		1		筑後市第60集
志野浜遺跡	筑後市大字志	表面採集	1	1			筑後市第51集
塚崎東加遺跡	久留米市三浦町	表面採集(1次) 2号住居跡(3次) 3号住居跡(3次) 4号住居跡(3次) 15号ピット(3次)	6		1		福岡県第127集
高三浦遺跡群	久留米市三浦町	表面採集	11	11			九州文化研究所 紀要第41号
仁右衛門畑遺跡	うきは市吉井町	16号住居跡	1	1			浮羽バイパス第12集
女塚遺跡	久留米市安武町	14号溝	1	1			久留米市第56集
飯井原遺跡	久留米市上津町	2号溝(2次) 84号土槨(2次)	2	1		1	久留米市第145集
山川南本村遺跡	久留米市山川町	1000号土槨(2次)	1	1			久留米市第148集
北松尾口遺跡Ⅰ地点	小郡市三沢	3号住居跡	1	1			小郡市第54集
北松尾口遺跡Ⅱ地点	小郡市三沢	1号住居跡 6号住居跡 33号住居跡 55号住居跡	4	1		1	小郡市第63集
一ノ口遺跡Ⅰ地点	小郡市三沢	67号住居跡 124号住居跡	2		1		小郡市第96集
三沢蓮ヶ浦遺跡	小郡市三沢	11号土槨(A区)	1		1		小郡市第151集
大板井遺跡	小郡市大板井	35号土槨西側埋込(A区) 22号土槨(B区)	2	1		1	小郡市第179集
三沢北中尾遺跡Ⅰ地点	小郡市三沢	横溝(F区上層)	1			1	小郡市第181集
上岩田遺跡	小郡市上岩田	19号ピット(12区)	1	1			小郡市第193集
貝元遺跡	筑紫野市	384号住居跡 I区包含層	2		1		筑紫野I.C.建設に伴う発掘調査報告

第3表 筑後地域出土アメリカ式石鏃一覧表



第6图 瀬高町内出土遺物実測图① (2/3)



第7図 瀬高町内出土遺物実測図② (2/3)

Ⅲ. 発掘調査の記録

1. 遺跡の概要

(1) 遺跡の概要

山門前田遺跡は福岡県山門郡瀬高町大字山門字前田、大字松田字東二ノ丸に位置する(大正年間の字図では、当遺跡はすべて大字松田字東二ノ丸に含まれる)。当遺跡は今回、大字・小字名から遺跡名を付与したが、大道端遺跡報告書では松延二ノ丸遺跡(関崎彦編1977『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XIV』福岡県教育委員会)、『福岡県遺跡等分布地図』では松延宮東遺跡(福岡県教育委員会1977『福岡県遺跡等分布地図』)、藤の尾垣添遺跡報告書では山門遺跡(群)松延遺跡(田中康信編1988『藤の尾垣添遺跡』瀬高町文化財調査報告書第5集瀬高町教育委員会)となり、複数の遺跡名が存在する。山門遺跡(群)松延遺跡という遺跡名称については、「松延」という地名は中近世では公田・松延城・松延村などに見られるが、明治以降の字名では残っておらず、現在ではバス停にのみ痕跡を留める。また当遺跡北約120mに位置する山門北池遺跡(松延遺跡に含まれる、平成18年度報告予定)との間には、近代まで存在したと考えられるクリーク(松延城跡堀跡)が存在するため、別々の遺跡名を付けるべきである。このように、これまでの遺跡名には問題があり、大きくは山門遺跡群として括る事ができるが、遺跡群内の遺跡名は再考すべきである。そこで、大字名と遺跡群名・小字名から山門前田遺跡としたが、今後周辺の調査成果や瀬高町内遺跡等分布地図の作成により、遺跡名の再考が行われれば、それに従いたい。

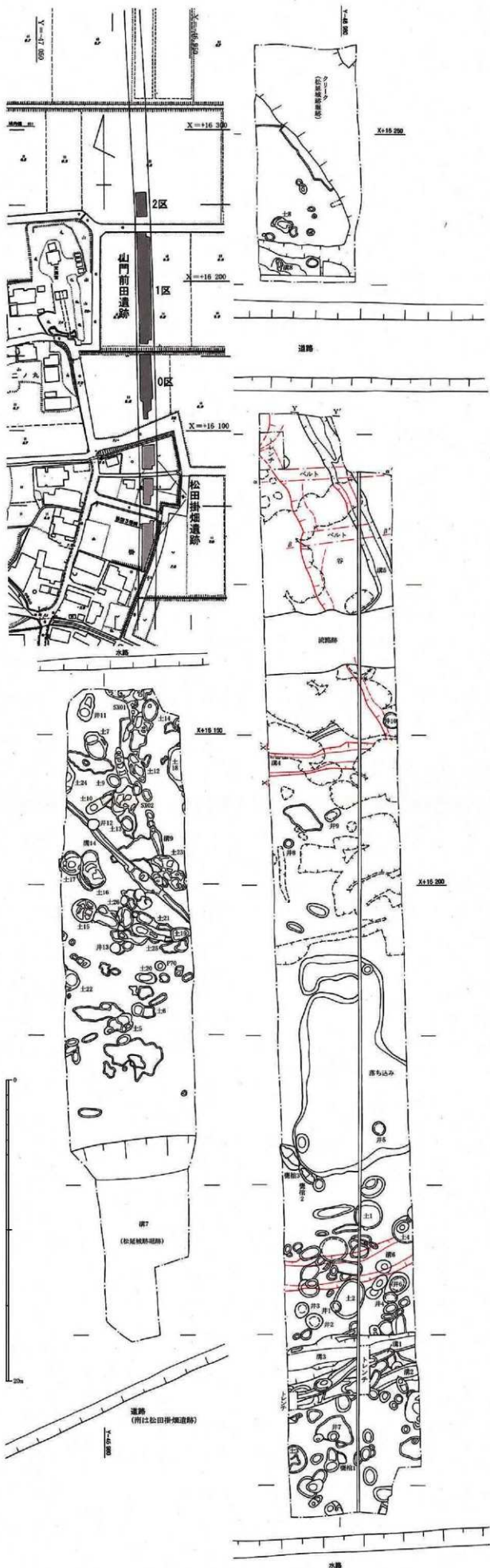
当遺跡北の山門北池遺跡との間には旧河川、南の松田掛畑遺跡との間には0区7号溝(松延城堀跡)、東には松延城跡の堀跡(第74図参照)が存在し、当遺跡は松延城跡二ノ丸(曲輪Ⅱ)の東南に位置する。調査では遺跡の南北幅が約150mと判明したが、遺跡の東西幅は新幹線路線幅が11.2mであり、さらに調査区東西に表土による土手を設けたため、調査幅は8~9mとなっている。そのため、南北に長いトレンチを入れた状態の調査となり、遺跡東西幅が不明であることにとどまらず、遺跡の在り方を把握できたとはいいがたい調査となった。

当遺跡は先述したように松延城跡と接し、中世後期の遺構群が確認されたことから、武家屋敷等の存在が予想されたが、検出された遺構は井戸・土坑など深さのある遺構が多く、上面は削平されてしまったものと考えられる。

遺跡内には現在使用中の道路や水路が存在することから、この道路・水路で調査の便宜上区切り、北から2・1・0区とした(第8図左上)。平成14年度は1区(担当坂元)、平成15年度は0・2区(担当大庭)の発掘調査を行い、0~2区の合計の調査面積は1,175㎡、遺物はパンケース54箱出土した。検出した遺構は土坑24基、井戸13基、溝9条、甕棺墓3基、落ち込み、谷、不明遺構、流路跡などで、遺物は弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・陶磁器・瓦・木製品・金属製品・土製品・石器・石製品等が出土した。

(2) 基本層序

当遺跡の発掘調査以前は水田が営まれており、田面標高は0・1区5.9m、2区は6.0mを測る。当遺跡西の松田天満神社の標高は6.8・6.9m、神社周辺の道路は6.3~6.5m、北の山門北池



第8図 調査区配置図 (1/2,000) ・遺構配置図 (1/200)

遺跡の田面標高は6.2・6.3mを測り、当遺跡周辺は大きくは南東方向に傾斜する地形であると考えられる。

基本層序は第9図に北から南に順に、2→1→0区と図示した。

まず北側の2区では表土・床土(1・2層)下に灰色系の粘質土(3～6層)、遺構面(7層)となり、南側の0区では表土・床土(1・2層)下に灰黄褐色、黄褐色系粘質土(3・4層)、遺構面(5・6層)という堆積を示すのに対し、1区では北・南土層とも表土・床土(1・2層)直下に遺構面(3・7層)という、0・2区と1区では土の堆積状況が大きく異なる。

この違いを各区における遺構検出レベルから見てみる。まず2区北端では5.3m、南端では5.5mと、2区では南→北へ遺構面が傾斜する。1区北端では5.8mと、2区で見られた傾斜が続く、1区北～中央にかけては瓦粘土探掘坑と考えられる擾乱が多く、10cm前後の緩やかな凹凸が存在するものの、ほぼ平坦な遺構面となる。この1区北～中央が当遺跡で最も高い箇所となる。擾乱がなくなる1区中央～南の落ち込みの南側から、北→南に遺構面が傾斜し、1区南端では5.6mになる。0区になると0区北端では5.2mと急に下がるが、この理由は第9図0区基本土層(右下)を見ると、調査では黄白色粘質土(13層)を地山としたが、遺構はその上の5・6層から切り込んでおり、本来は標高5.4mほどが遺構面であったと考えられる。重機による表土剥ぎにおいても、当初は5・6層上面で止め、遺構検出を行ったが、遺構ラインが明瞭に見えなかったために20cmほど下げ、13層上面で調査を行ったことにより、遺構面を下げすぎてしまった。この下げすぎた部分は、0区北～中央までの範囲であり、中央に近いほどこの下げ幅が薄くなるが、中世後期時の整地層であった可能性もある。0区中央は5.3mと1区からの北→南の緩やかな傾斜が続くが、7号溝北壁上端は5.0mと、0区中央～南の遺構面はやや傾斜がきつくなる。

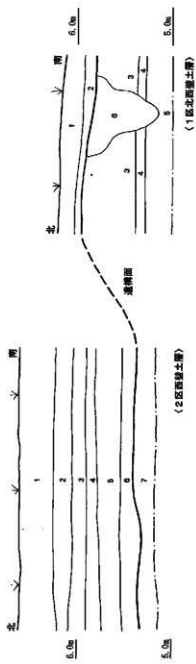
0・2区と1区の基本土層の違いを各区の遺構面レベルと合わせて考えると、当遺跡で最も標高の高い1区が表土～遺構面までが浅いということは当然であるが、間に粘質土系の堆積がないことは、遺構面の傾斜もさほどない当遺跡では不自然である。1区北～中央では粘土探掘坑と考えられる擾乱が多いことから、表土～遺構面の粘質土が互用粘土として持ち去られたことが推測でき、またその後の圃場整備による瓦探掘で凹凸が生じた遺構面を削平・平坦にしたため、現状のような状況になったと思われる。このことは1区では甕棺墓も墓下半分しか残っていないこと、最も当遺跡で最も標高が高い1区北～中央部では検出遺構が少ないことなどが傍証となる。

以上の検討結果から、当遺跡の中世後期以前の遺構面は、1区では現在の道路や神社と同じ高さの標高6.8m近くまであったことが想定される。また当遺跡も沖積低地という立地から1区と0・2区の遺構面との高低差はさほどなく、遺構検出状況も合わせて考えると0・2区上面も大きく削平されていると考えられる。

2. 0区の検出遺構と遺物

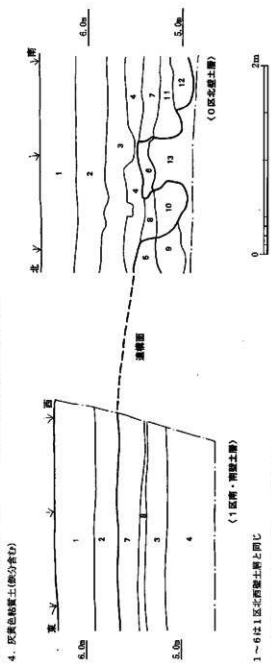
(1) 0区の概要

0区は、1区南端とは水路を挟んで5.5m南、南の松田掛畑遺跡調査区北端から約16m北に



1. 暗褐色土=灰土
2. 厚灰褐色土=腐植土
3. 灰白色粘土(しまり成、八女焼土)
4. 暗灰色粘質土(暗灰色粘質土がよりしまりが、粘土が混じり多くなる)
5. 黄褐色砂層、4層よりさらに砂子混じり多くなる
6. 暗褐色土(しまり成い)=ピット掘土

1. 灰土
2. 灰褐色土(部分含む)
3. 灰褐色粘質土(部分少量含む、上層含む)
4. 灰褐色粘質土(部分少量含む)=地山
5. 灰褐色粘質土(部分含む)
6. 灰褐色粘質土(部分少量含む、上層含む)
7. 灰褐色粘質土(部分少量含む)=地山



1. 灰土
2. 灰褐色粘質土=灰土
3. 暗褐色粘質土
4. 暗褐色粘質土+暗灰色粘質土ブロック(30%)
5. 暗褐色粘質土=暗褐色土?
6. 灰白色粘質土=暗褐色粘質土(50%ずつ)=暗褐色土?
7. 暗褐色粘質土+灰褐色粘質土(70%) + 白色粘質土(10%)
8. 4より暗褐色粘質土ブロックの割合高い(40%)(4と5の土質混る)
9. 暗褐色粘質土+暗褐色粘質土(60%)=地山
10. 9+白色粘土と暗褐色粘質土が40%ずつ混じる(地質より強い)
11. 暗褐色粘質土+暗褐色粘質土(20%) + 白色粘質土ブロック(20%)
12. 暗褐色粘質土+黄褐色粘質土(10%)、11より粘質強い
13. 灰褐色粘質土=地山
- 8・10=ピット掘土
- 7・11・12=運搬堆土

- 1~6は1区西層土層と同じ
7. 灰褐色土、3層より粘性強く、しまりやや甘い
8. 灰褐色土、3層より粘性強く、しまり甘い
- 7層より粘性強く、しまり甘い

第9図 0~2区土層美湖図 (1/40)

位置する、南北43.6m、東西約8m、面積350㎡の調査区で、0区南端の7号溝部分のみ遺構が深いので調査区が狭くなる。1-(2)の基本層序の項で先述したように、当区中央～北側は本来の遺構面では遺構が検出しにくかったため、約20cm下の黄白色粘質土まで下げて調査を行った。

検出した遺構は土坑20基・井戸3基・溝3条・不明遺構(SX)2基・ピット多数で、調査区中央～北側に複雑な切り合い関係も持ちながら集中する。そのため、本来なら土坑とする深さ・大きさのある遺構は、切り合い関係が明瞭でないものや明確な遺構ラインが引くことができなかったものについては、ピットや不明遺構として報告している。また、井戸や土坑など深さのある遺構は有明粘土層まで掘り込んでいるため、湧水がある反面、木製品など木質遺物の残りは良好である。

出土遺物は弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・陶磁器・瓦・木製品・土製品・石器・石製品で、パンケース23箱分出土した。なお、0区出土陶磁器の分類に関しては、青磁の一部は上田分類(上田秀夫1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究2』日本貿易陶磁研究会)、染付は小野分類(小野正敏1982「14～16世紀の染付碗・皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究2』日本貿易陶磁研究会)、青磁・白磁については、大宰府編年(山本信夫2000「大宰府条坊XV-陶磁器分類編-」太宰府市文化財第49集 太宰府市教育委員会)を用いた。



0区調査状況

(2) 土坑

5号土坑(図版5、第10図)

5号土坑は0区中央南寄り、6号土坑西に位置する。土坑周囲には深さ10cm程度の窪みが多く存在するが、そのほとんどは土のしみを掘ったものである。長軸193cm×短軸112cmの西側が突出する長楕円形の土坑で、土坑西側が深さ25cm、南側が深さ33cm、ピット状に深くなる。土坑壁の立ち上がりはそれほど急でない。埋土は灰黒色粘質土に白色粘質土(軟らかい)が混じった土の上に、黄褐色粘質土が乗った状態の堆積を示し、この埋土状況は当土坑東に位置する6号土坑と同様のものであり、関連性が窺える。

当土坑からの出土遺物は確認できなかったが、埋土から中世後期の土坑の可能性が高い。

6号土坑(図版5、第10図)

6号土坑は0区中央南寄り、5号土坑の30cm東に位置する。長軸143cm×短軸89cmのややいびつな長楕円形の土坑で、土坑床面は西側が深さ20cmと一段下がる以外はほぼ平坦であり、土坑壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は5号土坑と同様、灰黒色粘質土に白色粘質土(軟らかい)が混じった土の上に、黄褐色粘質土が乗った堆積を示し、両土坑が時期的に近いことを示している。

当土坑からの出土遺物は確認できなかったが、埋土から中世後期の土坑の可能性が高い。

7号土坑 (図版6、第10図)

7号土坑は0区北西、11号井戸南、24号土坑北東に位置する。当土坑南の東西に長い窪みは土のしみを掘ったものである。長軸195cm×短軸135cmの南北に長い大型楕円形土坑で、土坑床面は深さ65cmを測る最も深い北側に向かって、緩やかな凹凸を有しながら、傾斜する。土坑壁の立ち上がりは急であり、東側には細長いテラスが存在する。埋土は最下層である4層は有明粘土層を掘り込み、3、2、1層と堆積するが、最上層の1層は黄褐色粘質土が基調で、5・6号土坑埋土最上層と同様のものとなる。

3層と4層との境で、中央部が大きく失する竹製の箕が出土した。それを図化したのが第10図右下である。箕中央部の一部を検出時に誤って欠したが、箕中央部が欠失したため土坑内に廃棄したと考えられる。箕主軸は北東—南西で、長さ42cm、幅は箕の口部分で31.0cm、中央部で32.0cmを測る。箕東縁部は土圧のため歪む。製作方法は一部2本一組とするが、基本は1本の幅6mm前後の竹条を緯にして、同じ幅の竹条を「ござ目」に編む。編み目縦方向の間隔は1～2cmと粗く、横方向の編み目は幅5mm以下と密である。周縁と「ござ目」編み目の結合法は、径1cm程の細い竹材を芯にして、横竹条を巻き込み、最後に、縁外側に1/4程度に割った幅1cm程の竹材を縁に巡らせ、縁数箇所を蔓や鉄線などで固定したものと推定できる。

福岡県内では管見では、7世紀末～8世紀前半に位置づけられる大宰府史跡第122次調査(観世音寺) S E 3680 (井戸)で、細長い樹皮を利用した箕縁木が出土し(九州歴史資料館編1991『大宰府史跡平成2年度発掘調査概報』九州歴史資料館)、1323年の起年銘墨書木札が相伴した大宰府史跡第130次調査(観世音寺) S D 3840 (以下130次 S D 3840)で、ほぼ完形の竹製箕が出土する(九州歴史資料館編1992『大宰府史跡平成3年度発掘調査概報』九州歴史資料館)。130次 S D 3840例は、縦竹材を2本1組とし、結合法も一方のみ縁材を当てるなど相違がみられるが、時期差・地域差・用途差なのかは、類例が少ないため不明である。

当土坑からは弥生土器・土師器片が出土しているが、埋土から中世後期の土坑の可能性が高い。また、埴土から粗砥石片(第31図6)、台石(第31図7)が出土する。

出土土器 (第11図1)

図示できたのは1点のみである。1は弥生中期大型壺胴部片で、ほぼ直立する胴部に先端部がやや下方につまみ出された2条の三角突帯を貼り付ける。色は外灰黄色、内黄褐色を呈する。

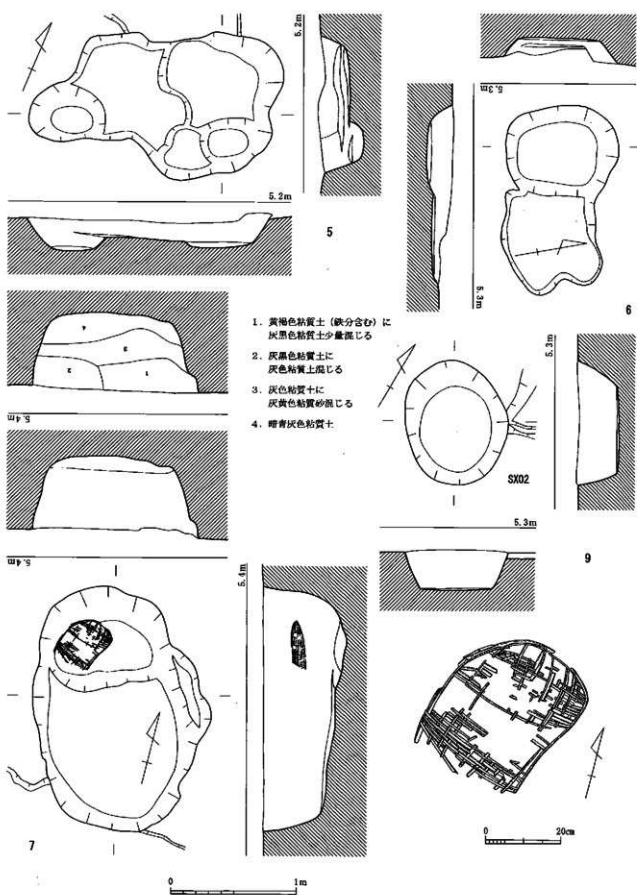
9号土坑 (図版6、第10図)

9号土坑は0区北中央、10号土坑北、12号土坑西に位置し、S X 02を切る長軸100cm×短軸83cm、深さ30cmの長楕円形の土坑である。土坑床面は平坦で、壁の立ち上がりは南側より北側の方が緩やかである。埋土は上層が灰黒色粘質土に黄褐色粘質土が70%混じる土で、下層が灰黒色粘質土に有明粘土(青灰色粘質土)が10%混じる土。

出土遺物は確認できなかったが、埋土やS X 02を切ることから中世後期の土坑である。

10号土坑 (図版7、第12図)

10号土坑は0区北中央やや西寄り、9号土坑南、12号井戸北に位置しS X 02を切る。長軸201cm×短軸65cm、軸が北東—南西方向の長楕円形土坑で、一段下がった西側で深さ71cm、北側で



第10図 0区5～7・9号土坑、9号土坑出土箕実測図（1/30、1/10）

深さ46cmを測る。土坑壁の傾斜はかなり急であり、特に北東隅～南側の壁はほぼ直角に立ち上がり、一部土坑上端より内側に入り込む。埋土は灰黒色粘質土であるが、土坑下部は有明粘土層まで掘り込んでいるため、埋土下層にも有明粘土（青灰色粘質土）が若干混じる。

当土坑からの出土遺物は確認できなかったが、埋土切り合い関係から中世後期の土坑となる。

12号土坑（第12図）

12号土坑は0区北中央やや北寄り、S X01南、S X02東に位置する。長軸210cm×短軸89cmの南北に長い長楕円形土坑で、長軸はS X02とほぼ同じ方向となる。深さは最も深い中央部で37cmを測り、土坑床面は中央にむかって段を持ちながらも緩やかに傾斜し、壁の傾斜も東側以外は緩やかで、北・西・南の3方向はテラスを持つ。埋土は上層が灰黒色粘質土ブロックと黄褐色粘質土と有明粘土が混じった土、下層は灰黒色粘質土ブロックに有明粘土が混じった土で構成される。

埋土とS X02との関係から、中世後期の土坑になると考えられる。

出土土器（第11図2）

出土した土器は1点のみである。2は須恵器甕胴部片で、外は2×4mmの縦長な格子目叩き、内は幅4mmの平行叩き痕が残る。色は灰色。他に土師器皿片が出土。

13号土坑（図版7、第12図）

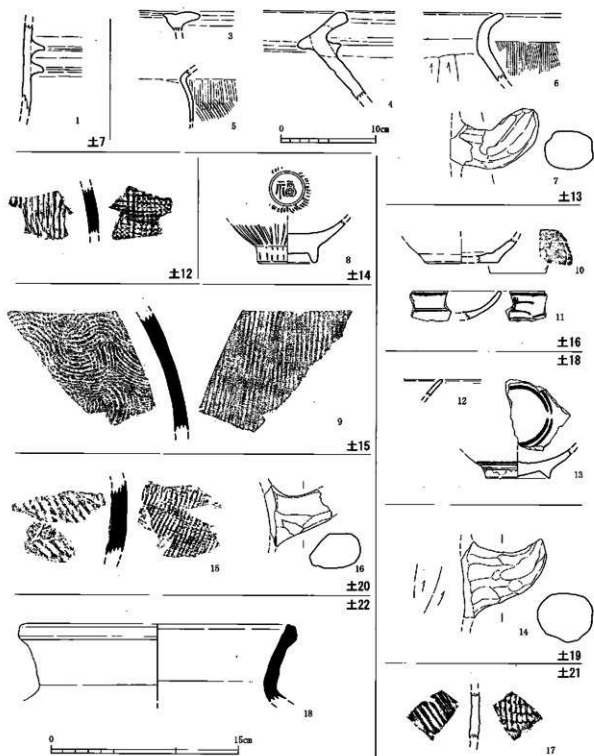
13号土坑は0区北中央、S X02南、9号溝西に位置する。土坑周囲には深さ10cm程度の段が存在するが、土のしみを掘ってしまったものである。長軸96cm×短軸73cm、深さ22cmの長楕円形土坑で、土坑床面は中央に向かって緩やかに傾斜するが、壁の立ち上がりは東壁がやや緩やかで、他は急である。埋土は灰褐色粘質土。土坑内からは砂岩系の円礫と片岩系の方形石が30個ほど出土したが、いずれも焼成痕などの使用痕は認められなかった。これらの石の多くは土坑床面から浮いていることから、廃棄の際に投棄された可能性が高い。石の間から弥生土器・土師器片などが出土した。

出土土器（第11図3～7）

3は弥生中期鋤先口縁甕口縁部片である。口縁上端部はナデによる段が付き、口縁外端部は丸く収める。このような形態の鋤先口縁は出土する割合は低いものの、この地域で認められる。色は茶褐色。4は弥生中期大型甕口縁部。丸い胴部に口縁部内側が突出する「く」の字口縁が付く形態となる。口縁外面直下には三角突帯を貼り付け、口縁外端部は肥厚し、上端部はナデにより窪む。内面の器壁は荒れており、外面の一部にはススが付着する。色は灰黄褐色を呈する。5は弥生後期小型甕頸部片である。胴部に向かって器壁は薄くなり、外面のハケ目は下方が上方を切るもの。色は灰黄色。

6は土師器甕口縁部。外湾する口縁部の端部をさらに外上方に屈曲させたために外面には段が付く。内面は頸部からやや下がった位置まで縦ヘラケズリを施す。色は橙色。7は土師器甕把手。比較的長めの把手で、体内内面のケズリがわずかに残る。色は灰黄褐色。

3～7はいずれも小片で、特に3～5は摩滅が認められることから、すべて混入品の可能性が高く、土坑の時期を示すものではない。埋土や周辺状況から、中世後期の可能性が高い。



第11図 0区7・12~16・18~22号土坑出土土器実測図(1・3~5は1/4、他は1/3)

14号土坑(図版7・8、第12図)

14号土坑は0区北端やや東寄り、SX01を切る。長軸145cm×短軸94cmの南北に長い五角形状の土坑で、土坑床面中央北寄りに25×22cm、深さ9cmの小ピットが存在する。土坑の深さは上面からは45cmを測る。土坑床面は緩やかな凹凸を有しながら中央に向かって緩やかに傾斜し、東壁はほぼ垂直に立ち上がり、一部壁内側に入り込む。また南壁の傾斜も急であるが、北・西

壁はそれほど急でない。埋土は最下層である5層が黄白色粘質土と、その上層の1～4層は灰色・黒色系の遺構埋土が主体の当区では珍しいもので、土層から1、2～4、5と地積が3回に大きく分かれることが分かる。1層（土坑上面）から青磁碗が出土した。出土土器から中世後期の土坑である。

出土土器（図版30、第11図8）

図示できた土器は8のみであるが、他に土師器土鍋・瓦質火鉢・壁土？が出土している。8は線描蓮弁文青磁碗（上田分類B-IV-1b）で、ヘラ先により密に蓮弁を描く。疊付外面を斜めに削り、全面に厚めの緑黄色の釉を施釉後、外底を輪状にかき取る。内面見込みにはヘラ先による蓮花内に「福」の字款を描く。胎土は明灰色で、緻密なもの。日本国内では16世紀初頭前後に多く出土する資料である。

15号土坑（図版8、第13図）

15号土坑は0区中央西寄り、16・17号土坑南に位置する。南北153cm×短軸153cmの正円に近い土坑で、床面には多くの凹凸が認められる。深さは最も深い南東部で土坑上面からの深さが49cm、北西部で46cmを測る。壁は北壁の傾斜は急であるが、その他は緩やかに立ち上がる。埋土は2～5層と下層に行くにつれて灰白色粘質土が多く混じるようになるが、最上層の1層では黄褐色粘質土が混じる土である。この黄褐色粘質土は当区5・6・7・14号土坑埋土上層を中心に確認されることから、当土坑とこれらの土坑は中世後期に位置づけられ、また埋没時期も近接することを推測させる。

出土土器（第11図9）

図示できる土器は9の須恵器壺胴部片である。外面には幅3mmの平行叩きを施し（単位不明）、内面には当て具痕が残る。色は灰色。他には弥生土器・須恵器・土師器皿片が出土している。

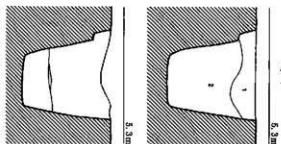
16号土坑（図版8・9、第13図）

16号土坑は0区中央やや北西寄り、15号土坑北、12号井戸南に位置し、17号土坑に切られる。長軸243cm×短軸160cmの南西に張り出しを持つ大型長楕円形土坑で、深さは最も深い南東部で51cmを測り、東壁以外はテラスを持つ。壁の傾斜は西壁以外急である。北側テラス上で片岩系の板石が出土したが、使用痕がないことから図示していない。土坑は有明粘土層まで掘り抜いているため、2・3層では有明粘土が混じる。最下層の4層は軟質の灰白色粘質土であり、14・15号土坑最下層埋土と色、硬さなどほぼ同じであることから、当土坑との関連性が窺える。埋土から完形の管状土錘（第31図1）、アスナロ材の枝付き自然木が出土している（IV-1参照）。

出土土器（第11図10・11）

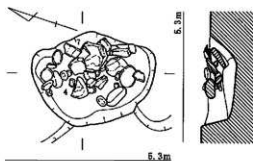
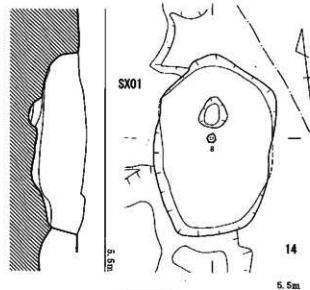
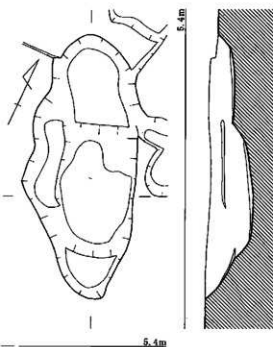
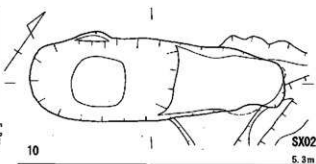
10は土師器杯で、糸切りの厚い底部を持つ。底径は5.8cmで、底部内面は凹凸が顕著。色は灰黄色。11は明染付小皿口縁部。外面は口縁部に1条、腰部に2条の界線内に唐草文を描き、内面は口縁部下、見込との境に2条の界線を描く。外面には気泡が認められ、呉須色は薄い青色、釉はやや青味がかり、胎土はやや灰色味があり、黒色粒等を含む粗いもの。小野分類C群。他に土師器片が出土。

出土土器から、中世後期（15世紀後半～16世紀中葉）の土坑になるか。



1. 灰褐色粘質土

2. 灰褐色粘質土に黄褐色粘質土20%混じる



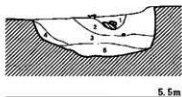
1. 灰褐色粘質土

2. 灰褐色粘質土に黄褐色粘質土が50%混じる

3. 灰褐色粘質土に黄褐色粘質土が10%、黄白色粘質土が20%混じる

4. 灰褐色粘質土に黄褐色粘質土が10%、黄白色粘質土が30%混じる

5. 黄白色粘質土



第12図 0区10・12~14号土坑実測図 (1/30)

17号土坑 (図版8・9、第13図)

17号土坑は0区中央やや北寄りの西壁際、15号土坑北に位置し、16号土坑を切る。長軸157cm×短軸134cmの円形の土坑で、深さは最も深い中央で43cmを測る。東壁には上端から内側に入り込むピット状の掘り込みが存在するが、A-A'の断面図では1層直下から掘り込んだ状態の土層であるため、土坑掘削当初のものではない可能性が高い。壁の傾斜はいずれも緩やかであり、テラスが存在する。埋土は最上層が16号土坑と同じであるが、2～4層までは灰黒色粘質土が混じる土となり、最下層の4層のみ有明粘土が混じる。

当土坑からの出土遺物は確認できなかったが、埋土と16号土坑との切り合い関係から中世後期の土坑となる。

18号土坑 (図版9、第14図)

18号土坑は0区北東の東壁際、12号土坑東に位置する。土坑の東半分以上は調査区外に存在する大型長楕円形土坑で、現状で長軸323cm以上×短軸86cm以上、深さ49cmを測る。壁の傾斜は北・西・南とも急であり、北・南にはテラスを持つ。土坑床面には緩やかな凹凸が認められる。土坑が深いため2・3層では有明粘土が混じり、4層では褐色粘質土という当区では珍しい土が混じる。また、5層は土のしみを間違えて掘ったもので、地山である。

出土土器から16世紀後半～17世紀初頭の土坑となるか。

出土土器 (図版30、第11図12・13)

12は龍泉窯系青磁小皿口縁部で、内面底部との境には段が付く。胎土は灰白色の緻密なもので、釉はやや濁った緑黄色。

13は漳州窯系明染付碗底部。高台外面はヘラで面取りされ、高台内は斜めに削り取られる。内面見込みが緩やかに盛り上がる「饅頭心」碗で、外面腰部・内面見込には2条の界線を巡らす。釉は乳濁色の厚い釉で、気泡が多い。皿付近くまで釉が垂れ、高台内には施釉されていない。底径5.1cmで、胎土は淡黄褐色。

他に弥生土器・須恵器甕胴部片、土師器皿片が出土している。

19号土坑 (第14図)

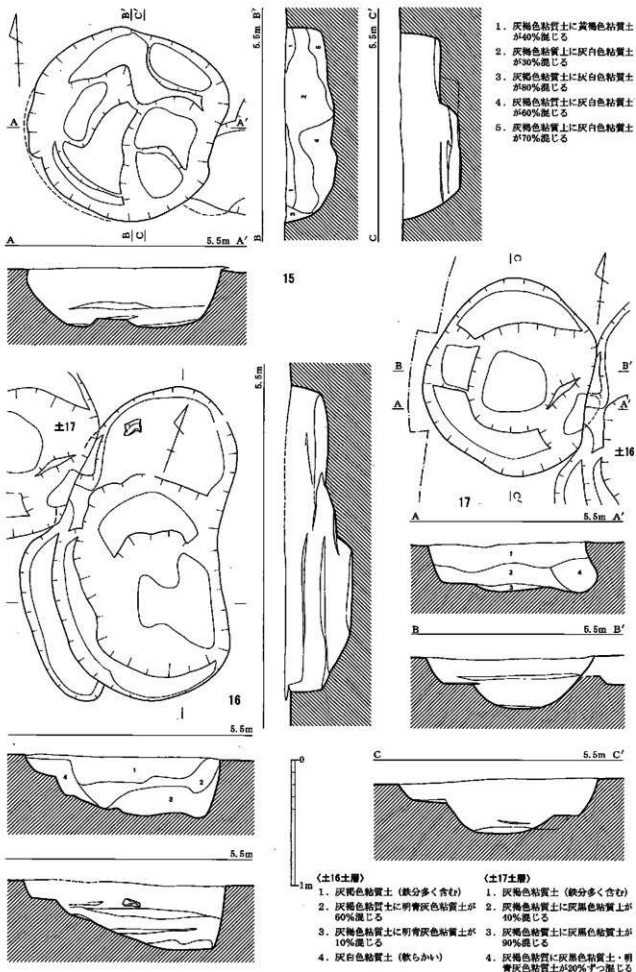
19号土坑は0区中央東壁際、14号溝南に位置し、21・25号土坑を切る。長軸133cm×短軸94cmの東側が狭くなる楕円形土坑で、深さは29cmを測る。土坑床面は平坦であり、北壁の傾斜は急であるが、他はあまり急でない。埋土上層は黄褐色粘質土のため、中世後期の土坑になると考えられる。

出土土器 (第11図14)

出土土器は14の1点のみ。14は長めの土師器把手で、内面にはケズリ痕がわずかに残る。色は橙褐色。他に土師器片出土。

20号土坑 (図版9、第14図)

20号土坑は0区中央、6号土坑北、21・25号土坑南に位置する。長軸130cm×短軸72cm、深さ36cmの長楕円形土坑で、土坑床面は西側より東側がやや深くなり、床面付近から片岩系の板



第13図 0区15~17号土坑実測図 (1/30)

石が出土したが、使用痕が確認できなかったため、図示していない。北壁は下端が内側に入り込むが、他の壁の傾斜は急でなく、東壁には段が付く。埋土下層には有明粘土が混じる。

出土土器（第11図15・16）

15は須恵器大甕胴部片。外面は3×2mmの格子目叩き、内面は幅6mmの幅太い縦平行叩きが認められる。色は外灰色、内茶褐色。16は土師器甕把手。先端部は欠損しており、一面のみケズリのちナデを施す。体部内面にはナデが残る。色は灰褐色。

21号土坑（図版10、第15図）

21号土坑は0区中央東、14号溝南、26号土坑東に位置し、19号土坑に土坑東端を切られる。現状で長軸249cm×短軸68cm、深さは最も深い西側で深さ32cm、東側で23cmを測る東西に細長い土坑となる。土坑床面は東西方向は中央部が盛り上がり、テラスとなるが、南北方向はほぼ平らとなる。19号土坑との切り合う東側部分は、床から急に傾斜がつくようになることから、土坑東壁の位置は近いと考えられる。壁の立ち上がりは西・南壁はさほど急でないが、北壁は急であり、一部は垂直となる。埋土上層は灰褐色粘質土+黄褐色粘質土、下層は暗青灰色粘質土と南側に位置する25号土坑と同じであり、主軸もほぼ同じになることから、両土坑の時期や機能など密接な関係が予想される。

出土土器（第11図17）

図示できたのは17のみ。17は土師器甕胴部で、外面には3×5mmの格子目タタキ、内面には幅4mmの斜め平行タタキが残る。色は橙褐色。他にも土師器片が出土している。

22号土坑（図版10、第14図）

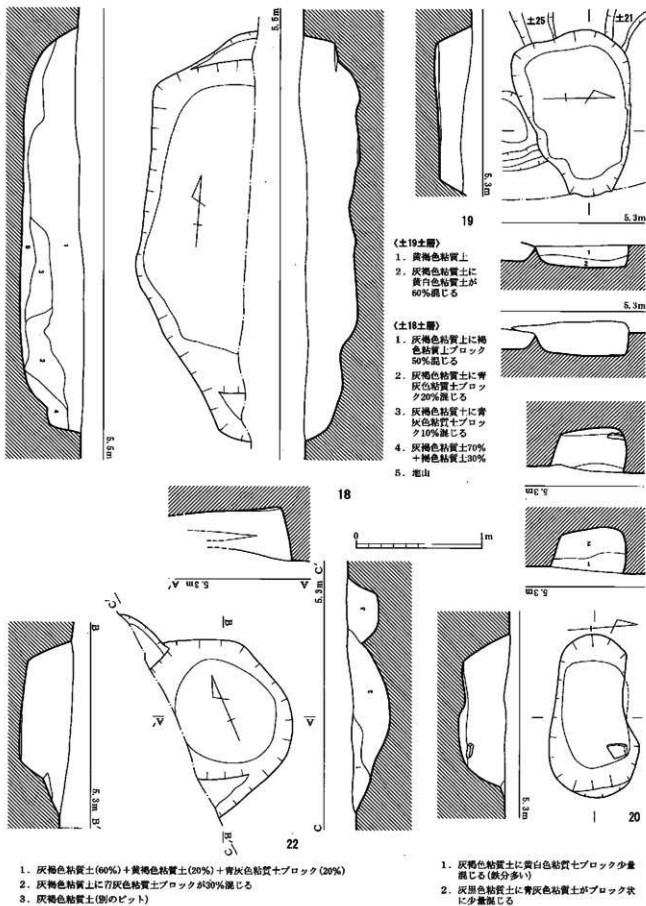
22号土坑は0区中央西壁際、5・6・20号土坑西に位置する。土坑西側の一部は調査区外になるため、現状で長軸139cm×短軸92cm、深さ39cmの楕円形土坑になるか。土坑床面は東に向かって緩やかに傾斜し、壁の立ち上がりはテラスがある南壁は緩やかで、北・東壁は急である。土坑埋土は1・2層とも有明粘土が混じり、3層は当土坑に切られるピットの埋土となる。1層に黄褐色粘質土が混じることから、中世後期の土坑となる可能性が高い。

出土土器（第11図18）

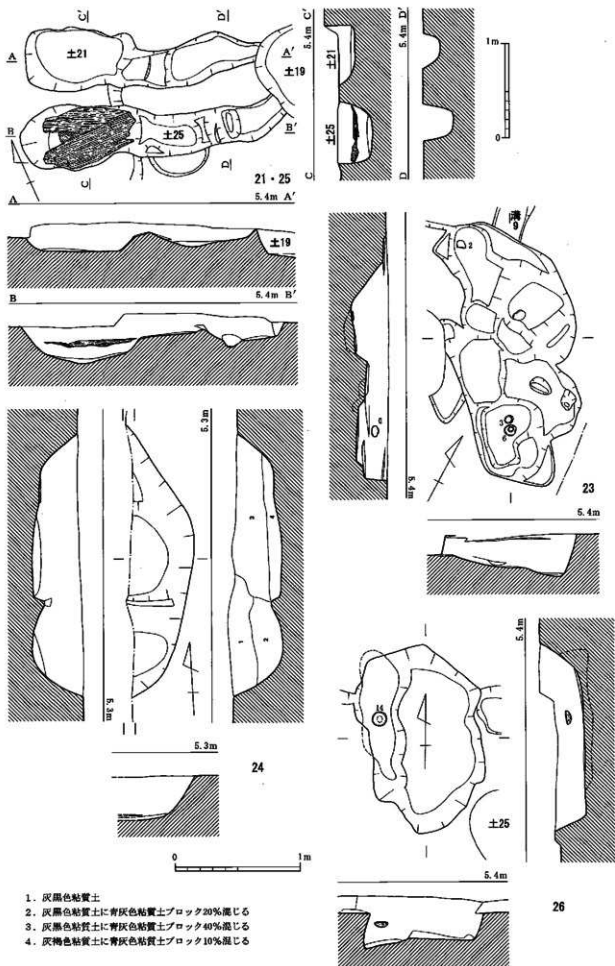
図示できるのは18の須恵器壺口縁部1点のみ。口縁端部は玉縁状に肥厚し、口頸部外面は横ナデによる弱い凹凸が認められる。口径は21.8cmとなるが、小片のため径やや不安。内面には自然釉が薄く付着する。色は灰色。

23号土坑（図版10、第15図）

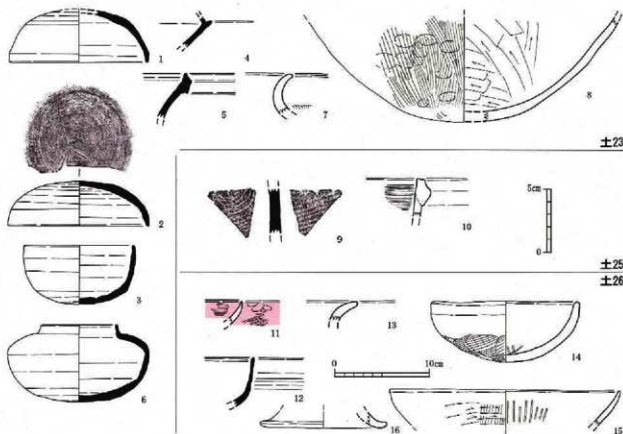
23号土坑は0区中央東壁際、14号溝北に位置し、9号溝を切る。土坑周囲には深さ10cm未満の浅い窪みが存在するが、土のしみを掘ってしまったものである。長軸275cm×短軸140cm以上（西側のピットで切られる部分で計測）の、南北に長い不整形土坑である。土坑床面は凹凸が顕著で、多くのテラスを形成する。土坑北東部が他に比べ一段深く、最も深い箇所では48cmを測り、30～40cm前後の深さになる箇所が多い。土坑の壁の立ち上がりは北壁以外は比較的急な箇所が多い。土坑北側では須恵器坏蓋片（2）が床面から7cmほど浮いた状態で出土し、土坑中



第14図 0区18~20・22号土坑実測図 (1/30)



第15図 0区21・23~26号土坑実測図 (21・23・25は1/40、24・26は1/30)



第16図 0区23・25・26号土坑出土土器実測図(11は1/4、他は1/3)

央では円碟が床面直上から出土し、土坑南側では須恵器短頸壺(6)と天地逆で出土した須恵器坏G(3)が床面からそれぞれ15cm、21cmほど浮いた状態で出土した。埋土は淡灰褐色粘質土で、古墳時代後期後半に属する遺構は、中世後期の遺構埋土である灰褐色粘質土に比べ、やや色が薄く、遺構検出ラインが分かりづらい土である。埋土下層からツバキ属材の棒状の木器が出土(詳しくはⅣ-1参照)。

当土坑は出土土器から7世紀初頭～前半の土坑になる。

出土土器(図版30、第16図1～8)

1・2は須恵器坏蓋である。1の口縁端部はやや内傾し、外面天井部には丁寧な回転ヘラケズリを施す。口径11cmを測る。外面には自然釉が薄く付着する。色は外黒灰色、内灰紫色。2は色が橙褐色～橙色の未還元須恵器。口縁端部はわずかに外反し、外面天井部のヘラケズリの範囲は広く、丁寧である。天井部には3本線のヘラ記号が認められる。口径11.2cm、器高3.5cm。3は完形の須恵器坏G。口縁端部をわずかに内傾させ、底部は丁寧な回転ヘラケズリを施す。内外面ともナダ調整部分は弱い凹凸が認められる。胎土には細粒多く含み、焼成も未還元箇所が見られる。口径8.5cm、器高4.6cm。色は外灰褐色～灰色、内灰色。4は未還元須恵器坏身受部。口縁端部は欠損し、この段階の杯身にしてはやや深さのある器形となる。色は黄白色。5は口縁部を外に折り曲げ、肥厚させた須恵器甕口縁部。口縁部3面をナダで面取りする。色は灰色。6は完形の須恵器短頸壺。口径5.8cm、器高6.1cm、最大胴部径11.3センチを測る。口縁部は内傾気味に短く直立し、器壁は2mm程度と薄い。底部は回転ヘラ切りのちナダ調整。色

は灰色～暗灰色。

7は土師器甕口縁部。外湾する口縁端部はさらに横方向につまみ出したために段が付く。外面にはスガが付着する。色は灰黄褐色～橙褐色。8は土師器甕底部。径・傾きともに不安。外面には黒斑、内面には丁寧なケズリ痕が残る。色は外灰黒色～黒色、内灰黄色～橙茶色。

24号土坑（図版11、第15図）

24号土坑は0区北西壁際、7号土坑西、14号溝北に位置する。土坑西側の大部分は調査区外になり、現状で長軸217cm以上×短軸51cm以上、深さは中央で37cm、南側で39cmの大型長楕円形土坑になるか。土坑床面には北と南を分けるテラスが存在することから、土坑2基の切り合いとも考えたが、土層図の2・3層の土質がほぼ同じであることから、一つの土坑であると判断した。壁の傾斜は現状では緩やかで、2～4層には有明粘土が混じる。

当土坑からの出土遺物は確認できなかったが、灰黒色・灰褐色の埋土となることから、中世後期の土坑となる可能性が高い。

25号土坑（図版10・11、第15図）

25号土坑は0区中央東寄り、14号溝南に位置し、19号土坑に土坑東端を切られ、26号土坑と西壁が接する。26号土坑と非常に近い位置にあることから、両土坑の切り合い関係が予想されるが、埋土や出土土器から26号土坑の方が古く、当土坑が切ると考えられる。現状で長軸283cm×短軸71cm、深さは最も深い西側で深さ39cm、東側のビット状に深くなった箇所では32cmを測る。土坑東が北東に緩やかに曲がる東西に細長い土坑となる。土坑床面は中央部が盛り上がり、テラスとなる。壁の立ち上がりは西壁は緩やか、北・南壁はやや急である。

最も深くなる土坑西側の埋土中位から、ほぼ平らに木の皮を複数枚敷いた状態のものを検出した。樹皮検出面では3枚程度の木の皮を敷いた状態を確認し図化を行ったが、非常に薄いことから、正確な枚数は自信が無く、また樹皮の加工・目的などの用途も不明である。樹皮の大きさは最も上層にあるもので長さ105cm、幅33cm、厚さは3mm前後を測り、この北側の上から2枚目のものも同程度の大きさになる。

最も残りの良い部分でサンプルを採取し、後日電子顕微鏡による樹種同定を行ったが、非常に薄い資料のため組織の状況が明確でなく、同定を断念した。なお、肉眼観察では樹皮ではなく単子葉類の葉の可能性もあるとのことであるが、今回は樹皮として報告する。埋土はこの樹皮を境に上下で異なり、上層は灰褐色粘質土に黄褐色粘質土が60%混じる土、下層は粘性が強い暗青灰色粘質土となる。北側に隣接する21号土坑と埋土・主軸・形態などが類似することから、用途や目的などを含めて密接な関係が予想される。

出土土器から中世後期の土坑になる。

出土土器（第16図9・10）

9は須恵器甕胴部片。外面には4×2mmの格子目タタキ、内面には当て具痕が残る。色は灰色。10は玉縁口縁の土師器土鍋口縁部で、口縁端部はナデで面取りし、内面にはハケ目が残る。色は灰黄褐色。

26号土坑（図版11、第15図）

26号土坑は0区中央、21・25号土坑西、15号土坑東に位置する。土坑周囲には遺構が集中し、密な切り合いが認められる。当土坑は25号土坑と南東部分で接するため、両土坑の切り合い関係が予想され、埋土や出土土器から当土坑が古いと考えられる。長軸150cm×短軸97cmの長六角形状土坑で、土坑西側は一段床面が下がり、最も深い箇所が42cmを測り、東側に一段上がった土坑床面はほぼ平坦になる。壁は西壁の一部で上端内に入り込み、東壁もやや急であるが、南北の壁の傾斜は比較的緩やかである。西側の床面から高さ14cmと浮いた箇所から土師器坏身(14)が出土した。埋土は淡灰褐色粘質土。

出土土器から6世紀末～7世紀前半の土坑となる。

出土土器（図版30、第16図11～16）

11は弥生中期丹塗浅鉢口縁部。内外面横ミガキを施す。胎土は黄褐色。

12は須恵器高坏坏身。口縁端部は弱く外反し、体部下半には横ナデにより、2条の沈線状になる。色は灰色。

13は土師器甕口縁部。色は橙褐色。14はほぼ完形の土師器坏身。口径11.4cm、器高4.8cmを測り、器壁が5mm前後と厚い。外面底部はハケ状工具による手持ちヘラケズリを施し、その後一部ナデ消しを行うが、ハケ工具を使用したため、器壁は厚くかつ短いハケ痕跡が残る。内面底部には工具痕が残るが、最後はナデ消しを行う。色は淡茶色。15は土師器坏身。精選された胎土で、器壁も薄い。外面は縦ハケのちケズリ、内面には縦方向の暗文を施す。色は肌色。16は土師器高坏脚裾部片。底径は10cm。色は橙褐色。

(3) 井戸

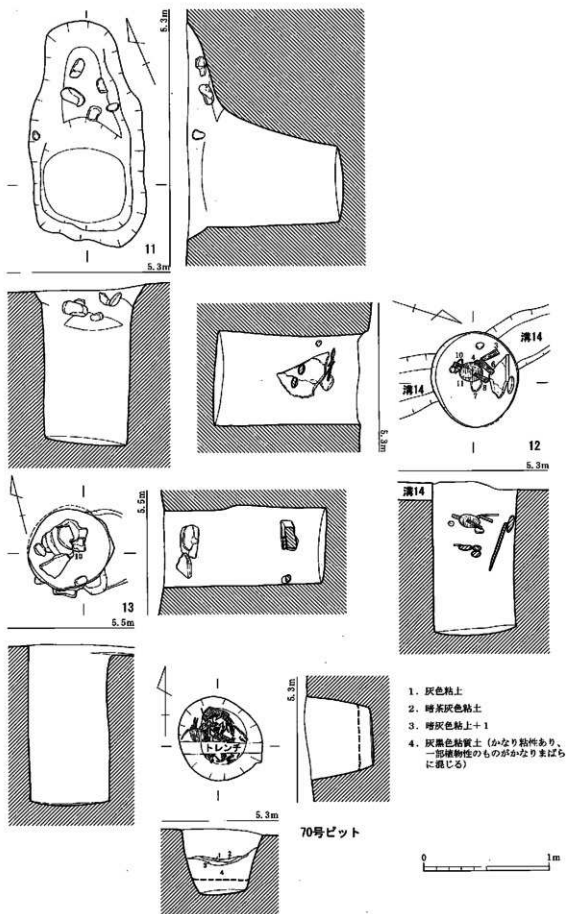
11号井戸（図版12、第17図）

11号井戸は0区北西隅、7号土坑北に位置する。長軸175cm×短軸88cm、北側がスロープ状を呈する長楕円形の井戸で、深さは最も深い南側中央部で126cmを測る。多量の湧水があったことから、写真には井戸内にポンプを入れたままの状態の写真で写っているが、井戸底には暗青灰色粗砂層が確認でき、この層が湧水層となっている。井戸底平面が60cm×65cmの楕円形を呈し、北壁以外の壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は上層が灰黒色粘質土に黄褐色粘質土が少量混じる土、下層が灰黒色粘質土で、埋土から木質が確認できないことと形状から素掘りの井戸である。北側のスロープ部分から拳大の礫を6個検出したが、いずれも床面からは浮いているため、廃棄の際に投棄したものと考えられる。井戸埋土上層からアスナロ材の板状木製品2点（第30図1・2）出土。

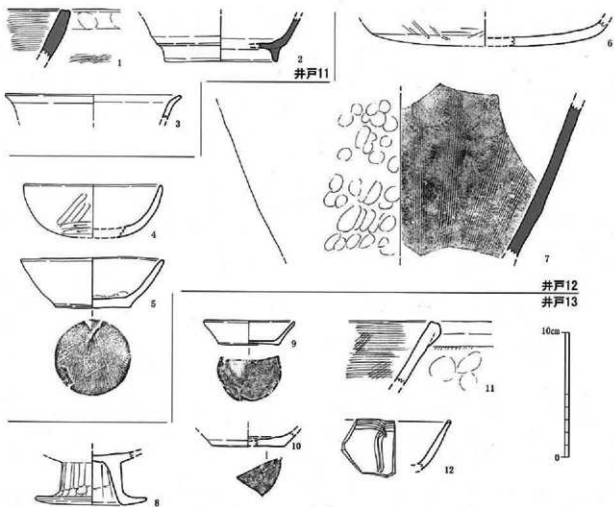
出土土器と埋土から中世後期の井戸となる。

出土土器（第18図1～3）

1は瓦質土鍋口縁部。口縁端部外面には強い横ナデを施したため窪む。口縁端部は工具による調整のため段が付く。口縁端部外面以外は内外面ともハケ調整。色は外黒色、内灰黒色。2は瓦器椀底部。底径8.8cmを測る、高い高台を持ち、内外面ともナデ調整。色は灰色～黒灰色。3は端反りの龍泉窯系青磁椀で、D-II類（椀IV類）。緑灰色の鈍く厚い釉で、胎土は黒色粒が混じる灰白色で、やや粗い。口径13.6cm。



第17図 0区11~13号井戸・70号ピット実測図 (1/30)



第18図 0区11～13号井戸出土土器実測図(1/3)

12号井戸(図版12、第17図)

12号井戸は0区中央北西寄り、10号土坑南に位置し、14号溝を切る。長軸75cm×短軸69cm、深さ122cmのほぼ正円の井戸である。井戸床面の規模は上面とほぼ同じであるため、壁は垂直に立ち上がり、底は湧水層である暗青灰色粗砂まで掘り抜く。埋土は木製品が出土する上層は粘性が強い灰黒色粘質土、円礫が固まって出土する埋土中位以下は暗青灰色粘質土となる。埋土上層からは木製品としてスギ材の板状木製品8点(第30図3～10)、土器等に蓋に使用したと想定されるスギ材の円形木製品1点(第30図11)が固まって出土したが、各々を組み合わせ使用できないことから、ほぼ同時に廃棄した製品(部材)の集まりと考えておきたい。その下から凹石(第31図7)、拳大の円礫、大型の板石が床から60cm以上浮いた状態で出土した。

出土土器と埋土から中世後期の井戸になる。

出土土器(図版30、第18図4～7)

4は土師器坏身である。外面体部には幅6mm前後の幅太いミガキが3条認められる。外面底部は手持ちへラケズリを施す。口径10.6cmで、胎土には5mmほどの細粒を含み、色は外灰黄褐

色～橙褐色、内灰黄褐色。古墳時代後期のもの。

5は土師器杯。口径11.2cm、器高4.1cm、底径6cmを測る。底部には低回転時の糸切りが明瞭に残り、底部と体部との境は明瞭となる。内外面とも轆轤成形痕が良く残る。内面には油ススが残る。色は黄灰色～暗灰色。6は焙烙様の土師器土鍋。外面底部はナデ、体部は工具ナデを施す。胎土は細粒を多く含み、色は灰黒色。

7は角度のある瓦質摺鉢体部片。外面は指押さえ痕が明瞭で、内面は8条を単位とする細めの縄目を施す。内面にはススがべっとり付着する。胎土は灰色。

13号井戸（図版12・13、第17図）

13号井戸は0区中央、21・25・26号土坑南に位置する。長軸68cm×短軸63cm、深さ129cmのほぼ正円の井戸である。北壁は下端部分が上端内側に入り込み、他の壁も垂直に立ち上がる。底は湧水層である暗青灰色粗砂まで掘り抜く。埋土は12号井戸埋土とほぼ同じで、上層は灰黒色粘質土、下層は暗青灰色粘質土で、埋土上層と下層の境である床面から100cmほど浮いた位置から1/4の石白上白（第32図10）と板石が出土し、そこからかなり離れた位置の床面から23cm程浮いた箇所が板石が出土している。

出土土器と埋土から中世後期の土坑となる。

出土土器（図版30、第18図8～12）

8は土師器高坏脚部。脚柱部外面は縦ケズリ、内面は工具によりケズリ状の紋りを行う。底径8.8cmで、色は灰黄褐色。古墳時代後期のもの。

9・10は瓦質に近い焼成の土師器皿。9は口径7.2cm、底径4.8cm、器高1.9cmを測る。内面には、薄く油ススが付着し、底部には糸切り痕が残る。色は灰色。10は底径5.8cmを測り、底部には糸切り痕が残る。底部の器壁は厚い。色は橙褐色～灰色。11は土師器土鍋口縁部。外面に粘土を貼り付けた玉縁口縁で、玉縁下端には粘土を貼り付けやすくするための縦ハケが残る。内面にはハケを施し、口縁部のみ後横ナデを施す。また内面にはススが薄く付着する。色は淡橙褐色～灰褐色。

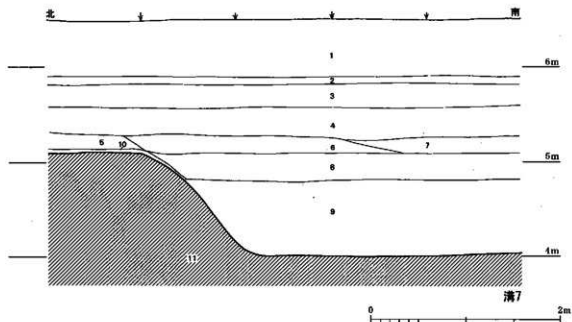
12は龍泉窯系青磁小碗口縁部（小碗I—2）。口縁部に輪花を有し、内面にはヘラ状工具による片彫りの線を入れる。釉は薄緑黄色で、胎土は淡灰色で、粗いもの。

(4) 溝

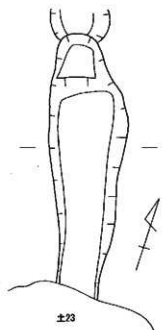
7号溝（図版13、第19図）

7号溝は0区南端に位置する大溝で、溝の大部分が調査区外まで延び、調査区内では溝北壁8.3m分を検出したに留まる。幅13.5m以上、長さ8.3m以上、深さ110cmを測り、当遺跡南に隣接する松田掛畑遺跡では溝南壁上端を検出できなかったことから、南上端は現在の道路南側溝付近と想定すると、幅30m前後の大溝となる。詳しくは後述するが、溝は松延城跡の堀跡であったと推定され、この堀は当区東側でほぼ直角に折れ、そのまま北側に延びて2区で検出した堀跡につながると考えられる。

溝東壁土層の写真は撮ることができたが、図面を撮る前に壁が大きく崩壊してしまったため（写真）、1/20の略図しか取ることができなかった（第19図）。溝埋土は上層が暗青灰色シル



1. 表土
 2. 床土(灰色粘質土)、鉄分少量含む
 3. 灰黄色粘質土、鉄分少量含む
 4. 暗灰黄色粘質土、鉄分多く含む
 5. 黄褐色粘質土、鉄分少量含む(遺構埋土上層)
 6. 4よりやや暗く、鉄分多く含む
 7. 6よりも暗い
 8. 暗青灰色シルト
 9. 灰色シルト+市灰色粘土
 10. 灰黒色粘質土(遺構埋土下層)
 11. 地山(灰白色粘質土・有明粘土)
- 凡多く含む所、瓦はユニット状に出土

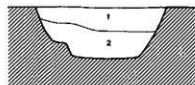


5.4m



溝9

南西 5.4m 北東



溝14

1. 淡灰褐色粘質土に黄白色粘質土ブロック混じる
2. 淡灰褐色粘質土

第19図 0区7号溝土層略図(1/40)、9号溝・14号溝土層実測図(1/30)



7号溝東壁崩壊状況（北西から）

ト、下層は灰色シルトに有明粘土（青灰色粘土）が混じる土と単純な堆積で、埋没期間も遺物出土状況と合わせて考えると、短いと想定される。溝の掘削に重機を用いたため、小片は採集しなかったが、溝埋土上下両層からパンケース28箱分もの大量の近世瓦が、部分的に集中して廃棄した状態で出土した。この近世瓦は現地で洗浄・分類・選別を行っており、端面がないものや小片の丸・平瓦は埋め戻しの際、現地埋納を行った。

遺構面直上の10層が、溝北上端を覆うころから、中世後期には存在したことは確実であるが、出土遺物から埋没時期が0区で最も新しい遺構と考えられる。埋土から管状土錘（第31図2）、石臼片2点（第32図11・12）が出土。

出土土器（図版31、第20図）

1は弥生中期甕底部で、底径7.2cmを測る。外面は二次加熱痕が認められ、器表は荒れる。色は外赤茶褐色、内薄こげ茶。2は弥生後期下大隈式新段階壺底部。凸レンズ状底を呈し、内面には細かいハケ目が残る。色は外灰黄褐色、内茶褐色。3は弥生後期甕口縁部。口縁端部はナデにより大きく窪ませる。胎土には細粒を多く含み、色は肌色。

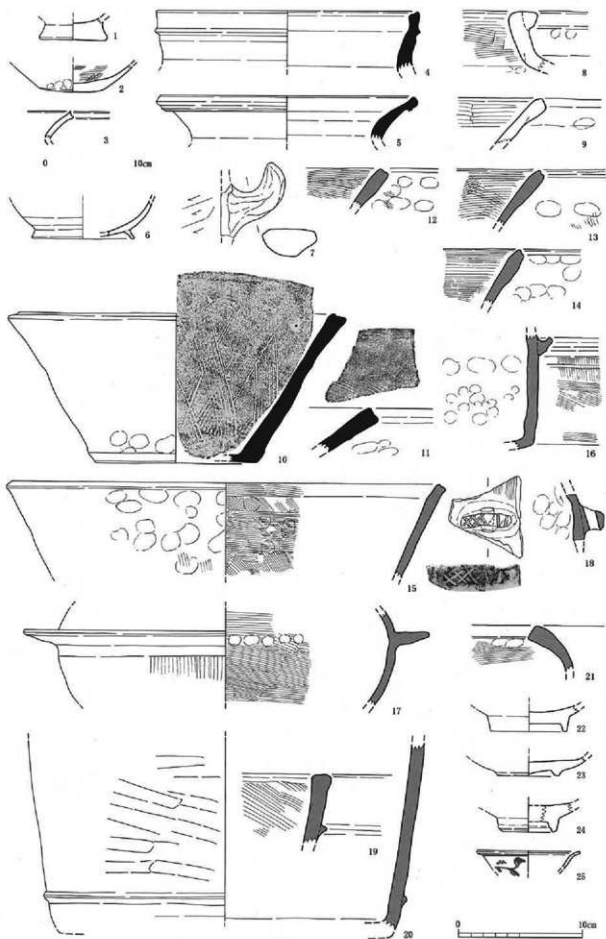
4は須恵器壺口縁部。外面口縁部下には鈍い三角突帯を貼り付け、その上方の口縁端部は角度を変え、直立気味になる。口縁端部はナデにより面取りされ、窪む。口径21cmを測るが、小片のため径不安。外面には薄く自然釉が付着し、胎土は灰色。5は須恵器甕口縁部。口径20.8cmを測るが、小片のため、径不安。口縁端部は丸く収めるが、口縁直下に細い突帯を貼り付ける。胎土には細粒を多く含み、色は灰色。

6は土師器椀底部。高台は細く踏ん張る形態で、体部下はケズリのちナデを施す。底径8.2cm。色は灰橙褐色。7は土師器甕把手で、把手先端は短く立ち上がる形態。体部内面はケズリを施す。色は灰黄褐色。8は土師器壺口縁部で、ナデ屑の大型壺になるか。口縁外側に粘土を貼り付けた玉縁口縁で、口縁内面には横ハケが残る。胎土には5mmの細粒を含み、色は灰黄白色を呈する。

9は土師器土鍋口縁部で、口縁外面には粘土を貼り付け、肥厚させる。内面は横ハケのちナデ調整。外面にはスガが付着。色は外黒褐色、内灰黄褐色。

10・11は須恵質擂鉢。10は1/6ほど残存し、口径は27cm、底径13cm、器高12cmを測る。口縁端部はナデにより窪む。外面底部付近は指押さえ痕が顕著で、調整は非常に粗いナデである。内面は丁寧なナデ後、時計回りに7条の溝目を施し、その後反時計回りに溝目を巡らせ、交差させる。底部外端部は横方向のケズリを施す。色は灰色。11は外面に横ナデ調整の口縁部とナデ調整の体部との境に段が付く形態のもので、口縁上端部はナデにより窪み、端部はやや肥厚する。内面には8条を単位とする溝目を施す。色は灰色～茶褐色。

12～14は口縁部を肥厚させた瓦質土鍋口縁部。いずれも外面にスガが付着する。12は口縁端部をナデで面取りし、外面にはナデ調整前のハケ目が残る。内面は横ハケ。色は外褐色～黒色、



第20图 0区7号溝出土土器实测图 (1~3は1/4、他は1/3)

内灰色。13は口縁端部を工具で調整し、その後ナデ調整を行うもの。口縁外面のみ横ナデで調整し、外面体部はナデ、内面は横ハケを施す。色は外灰色～灰黒色、内灰黒色。14は口縁端部を工具調整し、段が付いたままのもの。口縁外面には横ナデによる凹線が、内面にはその際の稜が付く。色は黒色。15は口縁が「ハ」の字状に開く形態の瓦質鉢で、口径は35cmを測る。口縁部は弱く外反し、口縁端部はナデで面取りする。外面は粗いハケのちナデ調整、内面は口縁部と体部下部に粗いハケ、体部上部には細かい横ハケが残り、前者の方が新しい。胎土には細粒を多く含み、色は外灰黒色、内灰色。16は平底の瓦質湯釜底部。ツバは短い受部状の形態になり、ツバ端部はさらに斜め上方につまみ出したため、外面には段が付く。ツバ下には縦ハケが残るが、ツバを貼り付けやすくするためにこの部分のみ縦ハケを施した可能性がある。湯釜とするとツバは下方を向くため、器高の低い土鍋の可能性もある。外面は横ハケのちナデ、内面はツバ表面のみ横ナデを施すが、下部は指押さえ痕が明瞭に残る。色は外灰色～黒色、内灰色。17は体部が丸みを帯びる瓦質湯釜。上端部が水平な長いツバを持ち、ツバ下の体部外面には粗い縦ハケが認められるが、ツバを貼り付ける際に付けたものか。体部下は工具ナデ調整。外面のツバ下にはススが多く付着する。色は外灰色～黒色、内灰色。18は瓦質湯釜外耳片。外耳端部にハケ工具により、「×」の刻みを施す。耳部は乾燥前に上→下に棒状工具により穿孔する。外面下部には細かい縦ハケ、内面には指押さえ痕が残る。色は外灰色、内淡灰色。

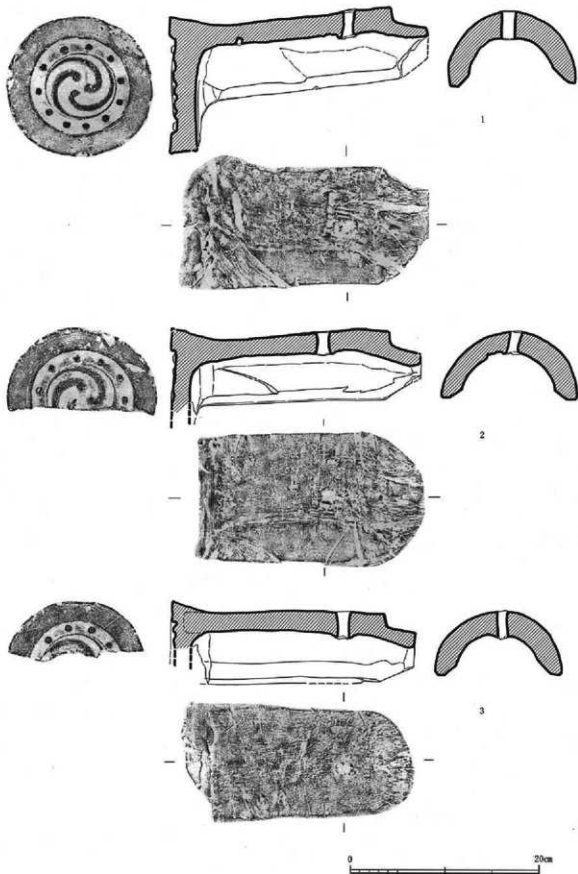
19～21は瓦質火鉢。19の口縁端部は肥厚し、上端部はナデで面取りする。口縁部下には三角突帯を貼り付ける。色は暗灰色。20は火鉢底部近くの破片で、底径は27cmほどになるか。外面底部近くに鈍い三角突帯を貼り付ける。外面調整は工具ナデ、内面はナデ調整。色は灰色。21は強く内湾する口縁部を持つ火鉢。器高は浅く、体部が丸みを持ち、足が付く器形になると考えられる。内面には粗いハケが残る。口縁上端部はナデで面取りされ、外・内端部ともシャープな造りとなる。色は外灰色～灰黒色、内灰黄褐色。

22は白磁碗底部。底径6cmを測り、高台内外とも丁寧にケズリ調整され、釉は体部下まで施されたもので、一部疊付まで釉が垂れる。内面見込には重ね焼き痕跡が残る。釉は黄灰色味を帯び、胎土は灰白色の緻密なもの。23は龍泉窯系青磁碗底部。低い高台で、釉は疊付部と高台内の高台に近い部分の釉をかき取る。高台内中央には釉と砂が混じり、盛り上がる。釉色は緑灰色で不透明、胎土は灰色で、粗い。碗Ⅳ類か。24は初期高麗青磁(碗Ⅲ類)か。全面施釉後、高台疊付、高台内の釉をかき取る。高台部は乱雑なケズリのため、段が付く。釉は茶灰色に発色し、胎土は淡橙灰色で、やや粗いもの。25は端反りの明染付小皿で、外面胴部には唐草文を描く。口縁部内外面には1条の界線を巡らす。須臾色は薄暗い青色で、B群。

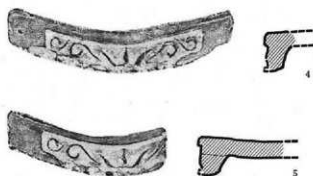
出土近世瓦(図版31～33、第21～25図)

先述したように当溝からはパンケース28箱分の瓦類が出土したが、そのうち端面・側面が残っていない丸・平瓦は現地で見分け、パンケース8箱分のみ持ち帰って整理を行った。下記で各瓦の説明を詳細に行っているが、軒瓦・丸瓦・平瓦はいずれも規格もほぼ同じであり、同一工房で製作されたと考えられることから、残りが良いものを図化した。

1～3は同沓の軒丸瓦である。共通した特徴を述べると、瓦当文様は左巻三ツ文巴文と11個の珠文の組み合わせである。巴文の頭部は豆粒状を呈し、尾部との境は明瞭であるが、巴文頭



第21图 0区7号溝出土瓦实测图①(軒瓦)(1/4)

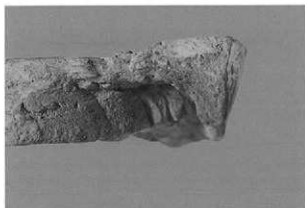


第22図 0区7号溝出土瓦実測図②(軒平瓦) (1/4)

部・尾部とも平坦になる。尾部は長く伸び、文様区径に対する巴文径は70%と高い。珠文は径0.9cmで、突出は高い。瓦当面にはハナレ砂の痕が認められ、外縁周縁にはナデを施す。瓦当表面周縁部はナデにより窪み、丸瓦部とは粘土を若干用いて接合する。丸瓦部との接合は字付けであるが(上写真)、接合位置が低く上端が強く反り返

る。丸瓦部凸面は縦方向のヘラナデを行い、その後縦ナデを施すが、玉縁部付近は横ナデを行い、窪みものも存在する。側縁はヘラによる面取り後、凸面側のみ縦ナデ調整。玉縁は強い横ナデで、端面はヘラ切りのままである。

1の釘穴は玉縁端面から8.0cmの箇所に施す。凹面は1mmほどの細かな布目痕が残るが、1/3ほどは布目の付かない面があるが、その面が型はなしの際に型にくっついたままであったために丸瓦部が歪んでしまったものと思われる。布目がない面には鉄線痕(コビキB)が残る。全長27.4cm、外縁径14.5cm、文様区径10.0cm、外縁幅2.4cm、外縁高は3mm、瓦厚3.2cmを測る。



軒九瓦接合状況

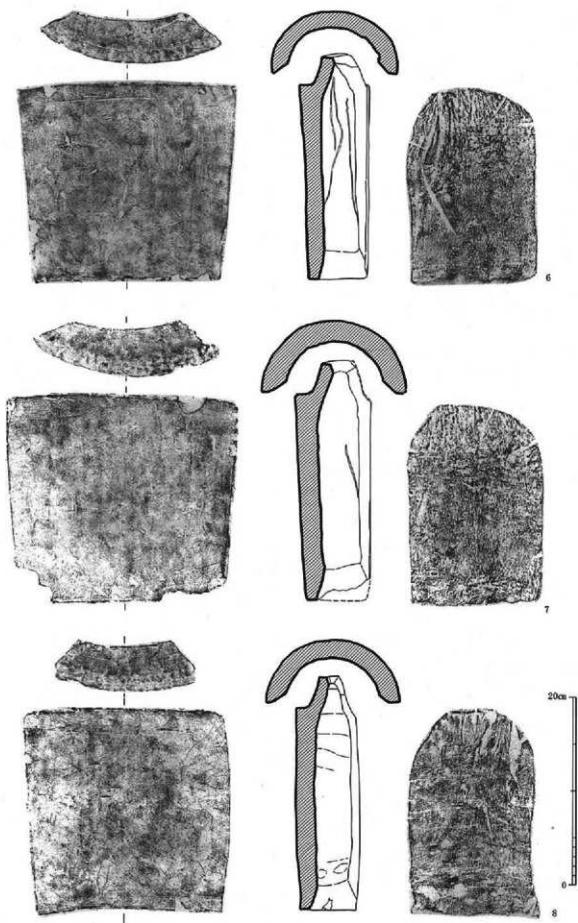
2は瓦当面にハナレ砂の痕が顕著であり、丸瓦部凹面は布目痕が認められる面まで、鉄線痕(コビキB)が明瞭に残る。紐痕跡も残る。全長26.2cm、釘穴の位置は玉縁端面から、9.5cmと長めである。良く銀化する。3は瓦当裏面の粘土貼り付け痕が明瞭に残る。側縁部玉縁側にはヘラ工具調整の際のキズが残る。全長25.8cm、釘穴の位置は玉縁端面から、7.2cmと長めである。



軒平瓦接合状況

4・5は同沱の軒平瓦である。瓦当文は三葉文が中心の小型均整唐草文で、左右には手前に下向き、奥に上向きの唐草文を対称に配置する。文様の突出度は低く、上端の稜が鈍い。特に5の突出は弱い。脇区は3.5cm前後と幅広い。瓦当面にはハナレ砂が使用され、5の瓦当凹面側は面取りされる。瓦当の成形は貼り付けて、櫛歯状工具により平瓦凸部に刻みを施し、接合する(下写真)。瓦当側面はヘラ切り後ナデしており、瓦当裏面もナデ調整。瓦幅23.5cm、瓦当厚3.2cmを測る。

6～8は完形の丸瓦である。6は全長24.1



第23图 0区7号溝出土瓦实测图③(九瓦)(1/4)

cm、体長は20.8cm、幅13.4cm、7は全長25.8cm、体長22.1cm、幅15.3cm、8は全長25.0cm、体長21.4cm、幅14.25cmを測る。凸面は縦方向のヘラナデを行い、その後縦ナデを施す。丸瓦部広端面はヘラ切り調整。6にはヘラ切りの際の工具痕が残る。玉縁部付近は横ナデを行い、窪むものも存在する。側縁はヘラによる面取り後、凸面側のみ縦ナデ調整。玉縁は強い横ナデで、端面はヘラ切りのままである。8の凹面には軒丸瓦の1～3のような細かい布目痕であるが、6・7は17～20の輪違い瓦凹面で見られる粗い布目痕が残る。6には鉄線痕(コビキB)、紐痕ともよく残る。凹面は広端面・玉縁面側を最終調整としてヘラで面取りする。6・8は銀化が認められる。8は軒丸瓦1～3と釘穴がない以外は規格・法量ともほぼ同じであり、6・7も凹面の粗い布目痕以外は軒丸瓦と規格・法量はほぼ同じもの。

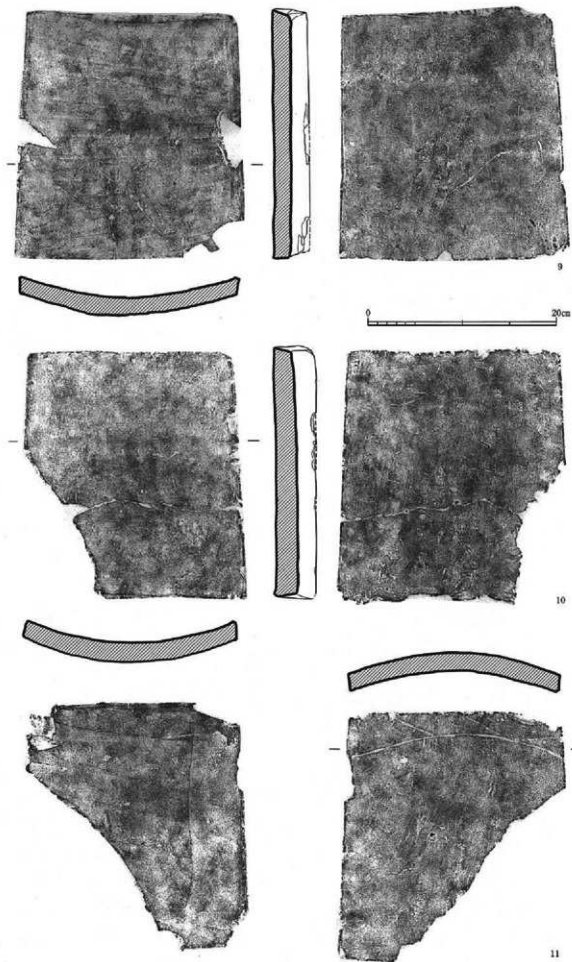
9～11は同一型式の平瓦である。凹面にもハナレ砂を播き、その後粗い横ナデを施す。凹面側縁部近くにはどちらか一方のみ縦ナデを施す。とくに11のナデの幅は広い。製作時凹型成型台に粘土板を載せ、台に垂直に側縁・両端面をヘラ切りし、その後凹面側から側縁の縦ナデ調整を行ったため、凹面側は角が取れる。凸面にはハナレ砂の痕跡が顕著で、その後かなり粗い縦ナデ調整を行う。11には凸面狭端面近くに弧線が明瞭に残る。また10の凸面広端面側端部は盛り上がることから、成型台の痕跡であると考えられる。9は全長26.5cm、全幅24.0cm、厚さ1.8cm、10は全長26.0cm、厚さ2.6cm、11は全長26.0cm、厚さ2.1cmを測る。9には銀化現象は認められず、10・11も銀化は顕著でない。いずれも4・5の軒平瓦平瓦部と同じ規格・法量・特徴を示す。

12・13は平らであることから、海鼠瓦になるか。いずれも凸面には粗い櫛歯状工具により、縦ハケを施し、12の狭端面側はその横ハケを施す。また凹面も12は横ハケ、13は調整のため縦ハケを施すが、その後ナデ消しを行うことは、いずれも凹面が表面になり、凸面のハケ目がそのままであることは壁と接合しやすくするためとも考えられる。12の狭端面は垂直にヘラ切り後ナデ調整、いずれの側縁部も鋭角にヘラ切り後ナデ調整し、両面にはハナレ砂が残る、12の凸面側縁部には成型台痕が残る。厚さはいずれも1.7cm前後で、ほとんど銀化しない。

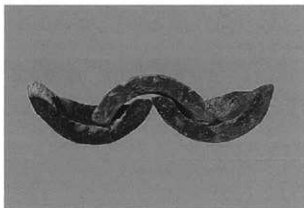
14・15は鬼瓦で、頂部二段式のもの。14は三葉文が中心飾りのもので、文様部にはハナレ砂の痕跡が認められる。外縁幅3.2cmを測り、裏面中心部には突起が存在する。文様部裏面は工具ケズリのち一部ナデ調整。厚さ3.5cm。15は14に比べ外縁が3.8cmと広いもの。文様は「酢漿草文」の可能性があり、家紋を示すのであろうか。文様部にはハナレ砂が顕著で、外縁はナデ調整。隅にはヘラ工具による切り込みを入れるが、側縁部にはその際に切り取った粘土が付着する。側縁部両面側には成型台痕が残る。側縁部はナデ調整。文様部裏面はケズリ、裏面外縁部は高い仕上げで特に上部には溝をヘラにより彫り込み、1.7cmほどの高さになる。15の表面には銀化が認められない。厚さは外縁部で4.0cm、文様部で2.3cm。

16は鯉瓦の尾鱗部。平らな成型台で尾鱗部分のみ作ったものと考えられる。切り取った粘土をヘラにより切り取り、その後丁寧にナデ調整を行うことで、六条の鱗を作り出す。尾鱗端面はヘラ切りのままである。側面はヘラ切り後、ナデ調整。裏面はナデ調整であるが、本体との接合時のものと考えられるナデが残る。

17～20は輪違い瓦で、当溝から比較的多く出土する。断面で見ると、19・20は狭端面側が屈曲するタイプとなるが、輪違い瓦は凹面と凸面を組み合わせる使用することから、凸面が上に



第24图 0区7号溝出土瓦实测图④(平瓦)(1/4)



輪違い瓦使用想定写真

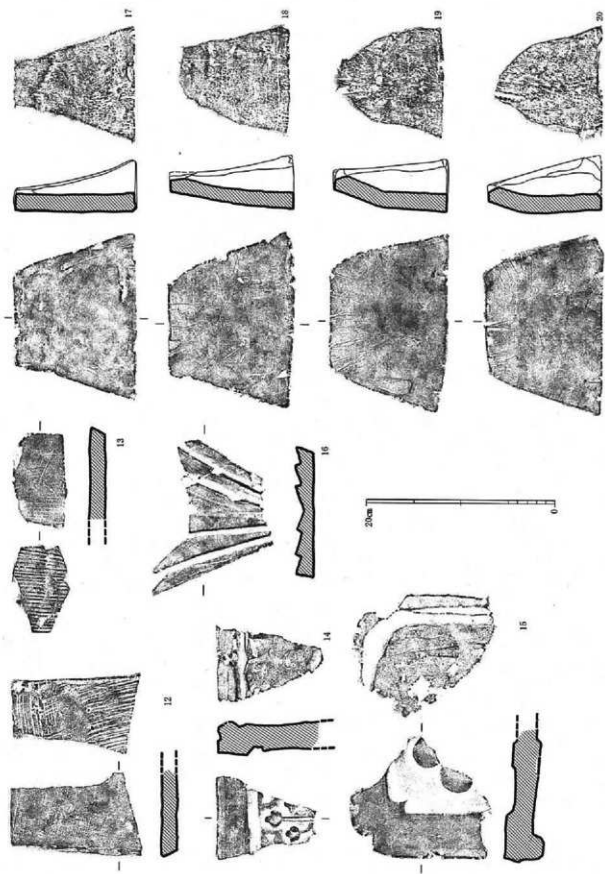
なる輪違い瓦は狭端面側が屈曲し、輪違い瓦や巽斗瓦などを上に積み易くしたものと考えられる。調整は凸面は横ナデ、側縁はヘラによる面取り後、いずれもヘラ切りのままである。凹面は丸瓦6・7と同じ粗い布目痕が残る。17の凹面狭端面側は面取りしない。17は全長13.0cm、幅13.4cm、厚さ1.7cm、18は全長13.2cm、幅13.0cm、厚さ1.8cm、19は全長12.1cm、幅13.4cm、厚さ2.0cm、20は全長12.1cm、幅13.4cm、厚さ1.9cm。20のみよく銀化する。

当遺跡の北西約280m、松延城跡本丸（主郭）丘陵部北約40mに位置する松延遺跡（山門北池遺跡）1地点2号溝からは当溝出土近世瓦と同汎と考えられる軒丸瓦・軒平瓦、計測値から同一型式（同一工房製作）と考えられる丸瓦・平瓦のほか、鬼瓦・鯉瓦片が出土する。

この2号溝は松延城跡二ノ丸（曲輪Ⅱ）内に位置し、城に向かって直線的に伸びる幅3m、深さ50cm以上の南北溝である。この2号溝西90mの1号溝、東66mの3号溝は、いずれも幅約3mで、2号溝とは異なり、斜行する溝であるが、報告書によると1～3号溝は松延城跡内濠（主郭堀）に向かって延び、北側の二ノ丸（曲輪Ⅱ）堀から松延城跡内濠に導水するため機能を有したとされる。また出土遺物や発掘調査時の所見から松延城跡と関係し、江戸時代末期の瓦の存在から廃城後も水路として使用したと結論づける（田中編1998）。報告書で1～3号溝出土遺物として図示されたのが瓦類のみであり、各溝の掘削・埋没時期や機能についても根拠が乏しく、追認することはできない。しかし、松延遺跡1地点2号溝と当溝出土瓦が同一型式であり、当溝が瓦出土状況などから江戸時代末期に埋没したと思われることから、1地点2号溝の埋没時期も同時期に位置づけることが可能であろう。

また、江戸時代末期でも瓦の使用は柳川城下以外の地では寺社や富裕層に限られると推測され、特に両溝からの鯉瓦や鬼瓦、当溝からの複数の輪違い瓦等の出土から使用建物が限定できる。江戸時代、この付近は松延村に含まれ、村内には当溝南の松田掛畑遺跡の地に竹井組大庄屋の樺島家が所在するが、天正16年（1588）に立花宗茂が再興し、社領15石を寄進して、祈願所とした松延天満神社で使用した瓦の可能性が高いと思われる。これ以上の詮索は、推論になるため避けるが、今後調査の進展により、瓦生産の様相や瓦使用形態などの問題とともに明らかになることを期待したい。

松延遺跡出土瓦の時期については、報告書の中で太宰府市観世音寺、戒壇院出土・採集資料をもとに栗原和彦氏が観察・考察する（栗原1998）。それによると、2号溝出土瓦はすべて同一工房で製作された可能性が高く、軒丸・平瓦は寛永8年（1631）以降と位置づけられる観世音寺のⅡ類に相当するという。また丸・平瓦は文政5年（1822）銘戒壇院瓦より法量小さく、江戸時代後期における全国的な瓦の小型化・軽量化という傾向からも、文政5年よりも時期的に新しいと位置づける（栗原1998）。私は、軒丸瓦については文様区径に対する巴文径は70%と高く、巴文の頭部形状や長い尾部や珠文の大きさ・外縁幅、軒平瓦については小型均整唐草



第25图 0区7号溝出土瓦実測図⑤ (海鼠瓦・鬼瓦・鯉瓦・鯉瓦・輪造い瓦) (1/4)

文や脇区幅から、丸・平瓦の文政5年という位置づけより古い印象を受ける。栗原氏は福岡藩と柳河藩という藩内における瓦生産の在り方に違いが見られ、直接比較できないと前置きしているが、小倉城内寺院出土近世軒平瓦の編年を行った佐藤浩司氏は、福岡城跡出土軒丸瓦と小倉城跡出土瓦と比較し、瓦の選択する文様や同じ文様でも鏡の太さなどが異なる点が多く存在すると指摘しており（佐藤1999）、柳河藩における瓦生産の様相の解明が今後の課題となるが、江戸時代中期～末期の瓦であることは間違いないであろう。

柳河藩内の瓦生産は、当町下庄談義所の石橋家が代々柳河藩の御用間を勤め、藩内瓦生産の許認可権を有しており、同じく瓦生産が盛んであった柳川市蒲船津とともに柳河城下のみならず、矢部川の水運を利用し、肥前や肥後まで瓦を出荷していたと言われている。柳河藩政時代、瀬高町での瓦生産は1621年に田中伝右衛門が下庄談義所で瓦を生産したことが始まりと記録される。以後下庄における瓦生産は昭和末期まで洋瓦生産の工場が操業しており、また昭和20～30年代に瀬高町内において瓦用粘土の採掘が盛んに行われたことにより、金粟遺跡や藤の尾遺跡など多くの遺跡が破壊され、鏡山猛氏が中心となりこれらの遺跡の記録を取っている（鏡山1972）ほど、盛んであった。

当遺跡や松延遺跡出土瓦も談義所産の可能性もあるが、談義所における瓦生産の変遷や内容は発掘調査も皆無で、資料も文献資料のみであることから、現時点では判断することができない。また、主要供給先である柳河城下町遺跡の発掘調査も近年始まったばかりであり、供給先からの情報も皆無に等しい状況である。このように、現在柳河藩内における近世瓦の報告は当遺跡と松延遺跡のみであり、近世瓦の動向・変遷については不明なままである。今後発掘調査の進展と文献調査により実態が明らかになることを期待したい。

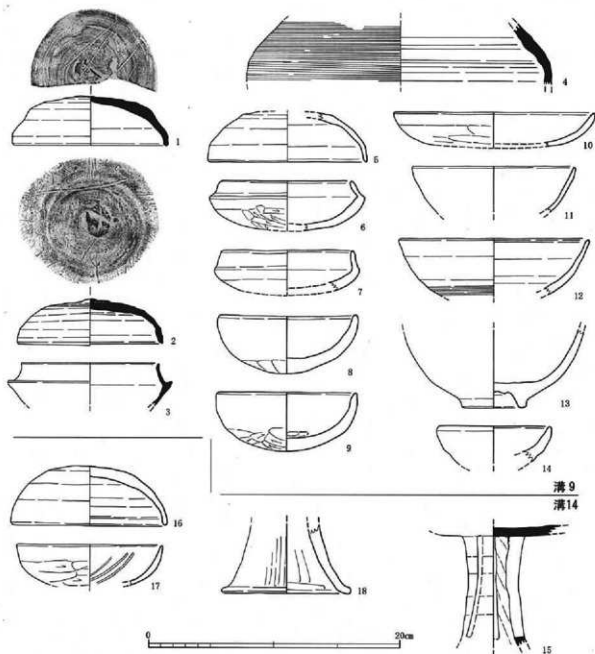
参考文献

- 鏡山猛 1972 『九州考古学論改』 吉川弘文館
瀬高町教育委員会編 1974 『瀬高町誌』 瀬高町
田中康信編 1998 『瀬高地区遺跡群Ⅱ』 瀬高町文化財調査報告書第15集 瀬高町教育委員会
栗原和彦 1998 「1地点2号溝出土遺物」『瀬高地区遺跡群Ⅱ』 瀬高町文化財調査報告書第15集 瀬高町教育委員会
佐藤浩司 1999 「小倉城下町・寺院の軒平瓦」『研究紀要第13号』（財）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室

9号溝（第19図）

9号溝は0区中央やや北東寄りに位置し、23号土坑に溝南側を切られる南北溝である。現状で長さ140cm以上、中央部幅40cm、南端幅22cm、最も深い北側で深さ18cmと溝床面のレベルは北側が南側より低くなる、細く・短い溝となるか。溝床面は北側に緩やかに傾斜し、壁の立ち上がりも緩やかである。西壁は東壁に比べ5cmほど低いが、遺構検出時に西側を下げすぎてしまったためである。溝埋土は淡灰褐色粘質土。

出土土器から古墳時代後期後半の溝となる。



第26図 0区9・14号溝出土土器実測図 (1/3)

出土土器 (図版34、第26図1~14)

1・2は須恵器坏蓋である。1は口縁端部をわずかに外反させ、外面天井部と体部との境は明瞭である。天井部には4本の線で構成されるヘラ記号有り。口径12.0cm、器高3.9cm、焼成はやや甘く、色は灰白色。2は完形品で、口径11.3cm、器高3.7cmを測る。口縁部は内面を肥厚させ、端部を若干外につまみ出す。外面天井部は成形台の粘土から回転ヘラ切りにより切り離したままであり、その際の粘土塊が残る。外面天井部には「×」と一本線のヘラ記号あり。外面には自然釉が附着。色は外灰色～暗灰色、内灰色～灰紫色。3は須恵器坏身口縁部。未還元で、色は白黄茶色を呈する。器壁は薄く、口縁部は緩やかに外湾する。4は須恵器壺肩部。外面は横ナデのちカキ目を施し、内面には横ナデによる凹凸が顕著である。色は外灰色、内灰茶褐色。

5は模倣坏蓋。口縁部はわずかに外傾し、外面天井部はヘラ切りそのまま残る。口径12.4cm、色は橙褐色。6・7は模倣坏身である。6は幅太い口縁端部で、外面体部下半は手持ちヘラケズリを施す。口径10.1cmで、色は橙褐色。7の口縁部は直立気味で、受部が形骸化する形態のもの。体部下部にはケズリ痕が残る。口径10.2cmで、色は淡橙褐色～黄褐色。8～12は土師器坏身。8・9は半球状の器形を呈し、いずれも器壁は厚く、胎土・色もほぼ同じである。8は口径10.7cm、器高4.7cmを測る完形品で、底部のみ手持ちヘラケズリを施す。色は橙褐色。9は完形に近いもので、口径10.9cm、器高4.7cmを測る。口縁端部をやや外反させ、体部下部外面には手持ちヘラケズリを施す。色は橙褐色。10は口径15.8cmと口径が大きく、深さのない器形の坏。外面体部には手持ちヘラケズリ痕が残る。口縁部内外面には黒斑あり。色は外黄橙褐色、内灰黄褐色。11は器壁が薄く、深さのあるもので、高坏坏部の可能性もある。外面には横ナデによる弱い凹凸が認められる。色は橙褐色。12は口径15.0cmを測る大型品で、口縁端部をわずかに外反させる。外面体部下部にはカキ目あり。色は外淡黄褐色～橙褐色、内黄褐色。

13は土師器碗で、底径5.2cmと小さいが、体部が大きい形態となる。外底には高台内をケズリ取った際の工具痕が残る。色は橙褐色。混入品と考えられる。14は土師器小型鉢か小型高坏杯部。内面は黒化する。色は外橙褐色、内黒色。

14号溝 (第8・19図)

14号溝は0区北寄りに位置する北西—南東の直線的な溝で、12号井戸に切られる。溝東西は調査区外まで延びるが、現状で長さ11.3m以上、幅は最も広い中央部で90cm、平均幅40cm程度、深さは10～20cmと非常に浅く、細長い溝となる。溝床面は平らな箇所が多く、壁の立ち上がりも緩やかである。溝床面はレベルから北西側がやや低くなる。溝埋土は淡灰褐色粘質土の2層で構成され、他の古墳時代後期の遺構と同じ埋土となる。

出土土器から古墳時代後期後半の溝となる。

出土土器 (図版34、第26図15～18)

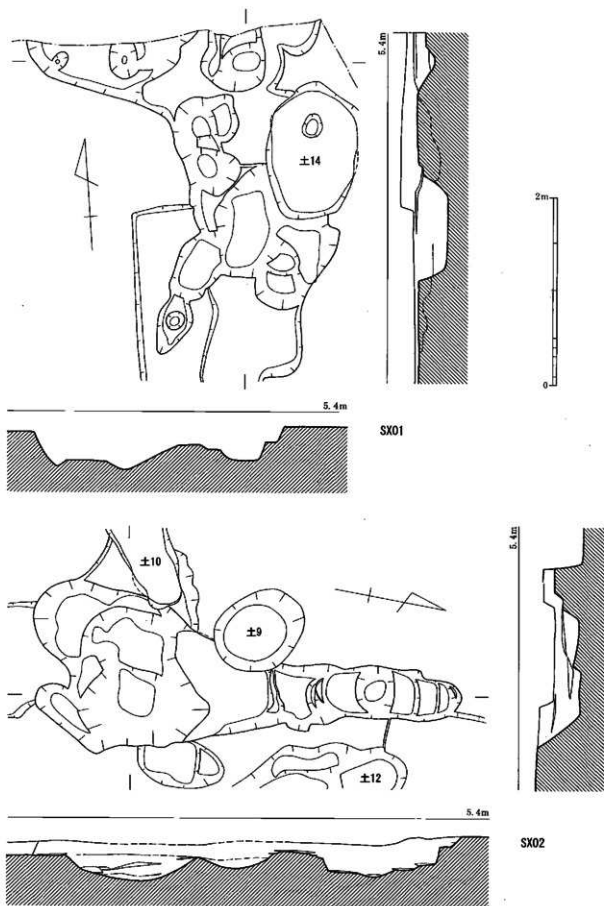
15は須恵器高坏脚柱部。3方向に長方形透かしを入れる。内面には絞り痕あり。坏部外面、脚柱部内面には自然釉が付着し、逆さに焼成したことが分かる。色は灰色。

16は模倣坏蓋。1/2ほど残存し、口径12.0cm、器高4.7cmを測る。口縁内端部を肥厚させ、天井部外面はヘラ切り後、ナデを施す。色は淡橙褐色～黄褐色。17は土師器坏身で、体部外面は口縁部近くまで手持ちヘラケズリを施し、内面には一部のみ暗文を施す。外面には二次加熱、黒斑あり。色は外橙褐色～灰黄褐色、内は淡橙褐色。18は土師器高坏脚部。脚柱部外面は縦ケズリ調整。内面は縦ナデで、脚柱部との境のみ一部ケズリを施す。色は橙褐色。

(5) 不明遺構

S X 01 (第27図)

S X 01は0区北端壁際、11号井戸東に位置する。当初は粘土採掘坑とも考えたが、中世後期の14号土坑に切られることから可能性は低い。調査区外北側まで遺構が延びるため現状で、南北334cm以上×東西308cm、最も深い南側部分で深さ50cmを測る。床面は凹凸が顕著であることから、複数の遺構を同一の遺構として掘ってしまった可能性もあるが、埋土はすべて灰褐色粘



第27图 0区SX01·02实测图(1/40)

質土であることから、一連の遺構として調査した。埋土から五輪塔空風輪部（第33図14）が出土する。出土土器から15～16世紀に属する遺構と考えられる。

出土土器（図版34、第28図1～3）

1は土師器把手で、長さが短いもの。体部との接合部は把手を貼り付けただけの状態であったために、きれいに外れている。色は橙褐色。

2は口径12.6cmの端反りの白磁小皿口縁部。口縁部と体部との境に段を有し、口縁端部は肥厚する。釉は灰色味で薄く施釉され、胎土は灰白色のやや粗いもの。3は短く端反りする白磁碗（E類）。体部は丸味を帯び、口縁端部を丸く収める。釉は青白色で、気泡が認められる。胎土は灰白色の粗いもので、黒色粒が混じる。

S X 02（第27図）

S X 02は0区北中央、12号土坑西に位置し、9・10号土坑に切られる。S X 01と同じく、粘土採掘坑の可能性は低い。南北450cm×東西186cm、最も深い南側部分で深さ42cmを測る。床面は凹凸が顕著であることから、複数の遺構を一緒に掘ってしまった可能性もあるが、埋土は灰褐色粘質土と同一なことから、一連の遺構と判断した。12号土坑と主軸が同じであることから、時期が近いと想定される。埋土から半分欠けた管状土錘（第31図3）が出土。

出土土器から中世後期～近世初期の遺構になる。

出土土器（図版34、第28図4～9）

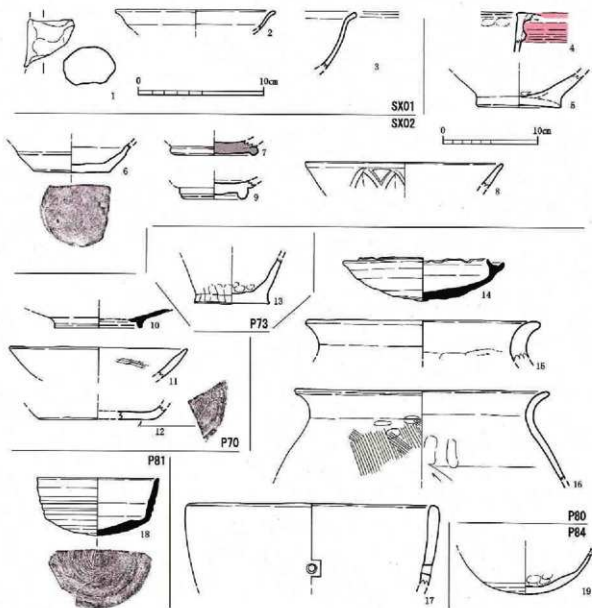
4は弥生中期須玖式動先口縁甕口縁部。口縁直下にはM字突帯を貼り付ける。口縁端部は欠損する。口縁上端部はミガキのち丹塗り、外面全体も丹塗りを施す。胎土は灰黄褐色。5は弥生中期甕底部。内外面摩滅のため、調整不明。色は外黄褐色、内灰黄色。

6は土師器杯。底径6cmを測り、体部と底部との境は明瞭である。底部には糸切り痕が認められる。色は灰黄褐色。7は瓦器碗底部。底径6.8cmの低く、端部が丸い高台を持つ。色は黒灰色～灰色。8は龍泉窯系青磁碗口縁部（碗Ⅱーb類）。外面にはヘラ先による幅広い片切形の弱い鎖を持つ蓮弁文を持ち、間には間弁も認められる。釉は厚く、渋い緑色を呈する。胎土は灰色で緻密。9は唐津系陶器か。高台外面はケズリによる段が付く。釉は鈍い灰白色の厚い釉で、畳付及び高台内は露胎となる。底径5.2cmで、胎土は灰黄色。

(6) ビット

70号ビット（図版13、第17図）

70号ビットは0区中央やや東寄り、20号土坑北東、21・25号土坑南に位置する、南北67cm×東西66cmの円形を呈すビットである。埋土が地山と区別しにくく、本来は深さ40cm程度であるが10cmほど掘りすぎてしまったため、下端推定ラインを破線で示す。上端から20cmほど下で、木の枝・樹皮などの木質遺物がビット内を覆った状態で検出した。厚さは中央部で5mmを測るが、端に行くにつれて厚さは薄くなる（土層図1～3）。同じ木質遺物を検出した25号土坑と比べると、木の枝・樹皮とも幅が細く、また長さも短いなど雑な印象を受ける。最下層である4層の灰黒色粘質土にも木質遺物が少量混じる。このビットの目的・役割は不明であるが、規模や1層の灰色粘土で2～4層を覆った様な土層であることから、土壌分析などを行っていない



第28図 0区SX01・02、P70・73・80・81・84出土土器実測図（4・5・13は1/4、他は1/3）
 いものの、トイレ遺構の可能性もある。なお、3層から出土した木質遺物の樹種はイスノキとのことである（詳しくはⅣ-1参照）。

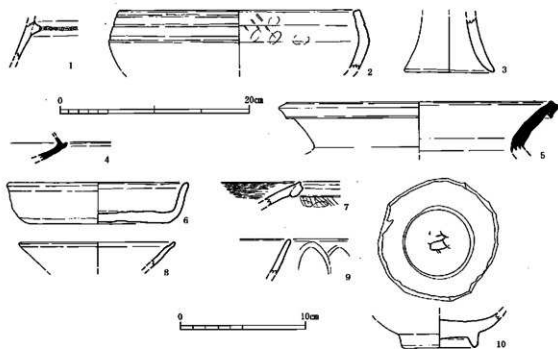
出土土器から中世後期の遺構になる。

出土土器（第28図10～12）

10は須恵器高台付杯身。底径7.0cmを測り、色は灰色。11は土師器杯口縁部。内面の一部にはミガキが認められる。外面には黒斑あり。色は外黄橙褐色～灰黒色、内黄橙褐色。12は土師器杯。底部には糸切り痕が、内面にはススが付着する。色は黄橙褐色。

その他ピット内出土土器（図版34、第28図13～19）

13は弥生中期甕底部で、底部外端部を外につまみ出す。色は淡橙褐色。P73出土。14は須恵



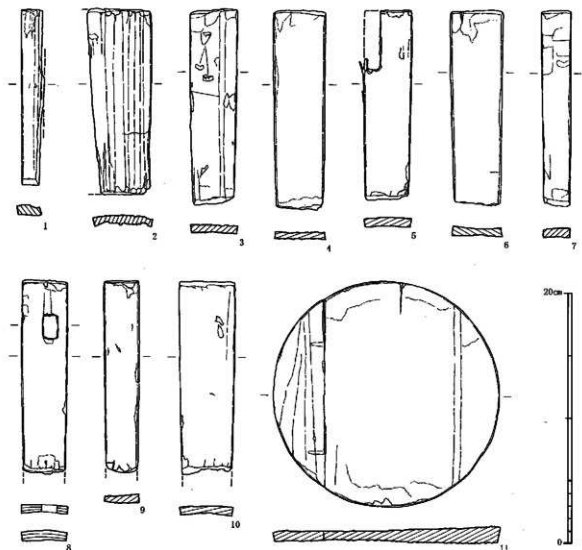
第29図 0区遺構面等出土土器実測図(1~3は1/4、他は1/3)

器坏身。口径12.6cm、器高3.4cmを測る歪みのあるもので、口縁端部は打ち欠きを施す。外面底部はヘラ切りのままの未調整で、その際の粘土塊が残る。外面受部以下は自然釉が付着する。色は灰色。15・16は土師器甕口縁部。15は器壁の厚く、端部を丸く取めるもので、口径18.0cmを測る。色は黄褐色。16は器壁の薄い、外反度の強い口縁部を持ち、口縁端部はナデにより細かい凹線状に窪む。内面は肩部までヘラケズリを施す。焼成はやや甘く、色は橙褐色。17は土師器直口鉢口縁部。口縁端部は丸く取め、口縁端部から5cmほど下がった位置に、焼成後外から径5mmの穿孔を施す。口径は18.6cmを測るが、小片のため径不安。色は橙褐色。14~17はP80出土。18は須恵器坏身(杯G)で、体部外面には工具による3条の沈線を巡らせる。口縁端部はわずかに外反し、口径9.6cm、器高4.5cmを測る。底部はヘラケズリを丁寧に行い、その後4本線によるヘラ記号を施す。色は灰黄色。P81出土。19は土師器坏底部。底部外面は回転ヘラケズリを施す。色は橙褐色。P84出土。

(7) 遺構面等出土土器(図版34、第29図1~10)

1は弥生中期壺胴部片。三角突帯端部に板状工具による刻みを密に浅く施す。色は外灰黄褐色、内白黄茶色。2は丸い胴部で、口縁部が内傾する弥生中期大型鉢口縁部。口径25.4cmを測る。口縁端部はナデで面取りし、口縁外面には工具による3条の浅い沈線を巡らす。口縁部内面には工具痕が残る。口縁部外面には黒斑あり。色は黄褐色~灰色。3は弥生中期の小型支脚下部片。底径9.6cmを測り、内外面摩滅し、調整不明。胎土には細粒を多く含み、色は黄褐色を呈する。

4は未還元の須恵器坏身受部。色は黄褐色~橙褐色。5は口径20.6cmの須恵器甕口縁部。口縁端部を外に折り曲げ、突帯状に肥厚する口縁部を形成し、口縁上・外端部ともナデにより窪む。内外面とも厚く自然釉が付着する。胎土は灰色。



第30図 0区出土木製品実測図 (1/3)

6は器壁の厚い土師器杯。緩やかに外反する口縁部で、底部にはヘラ切り痕がそのまま残る。口径14cm、底径10.7cm、器高3.2cmを測る。色は橙褐色。7は土師器土鍋口縁部で、口縁部外側に粘土を貼り付け、玉縁口縁を形成する。口縁端部はナデにより窪み、内面はハケ調整。外面にはススが付着し、胎土は灰黄褐色。

8はいわゆる口禿げの白磁皿(皿IX-1c)。口径12.2cmを測り、やや内湾気味の直線的な体部で、口縁部はわずかに外反気味になる。口縁内面は幅5mm軸を削ぐ。軸は灰色で、胎土は灰白色で緻密。9は龍泉窯系青磁碗口縁部。ヘラ先による片切彫の蓮弁文を持つが、鑄と間弁はなく、蓮弁部の盛り上がりもない。軸は緑褐色で、胎土は灰褐色で緻密。碗IV類。10は龍泉窯系青磁碗底部。体部以上を打ち欠き、意図的に円形にしたもの。畳付はヘラで面取りし、高台内は施軸後、軸をかき取る。器形は口縁部が内湾する上田分類E類の碗になるか。内面見込にはヘラ先による界線内に鹿と思われる動物文を細線で表現する。軸は厚い濃緑色、胎土は灰白色で緻密、また黒色粒が混じる。

(8) 木製品・土製品・石器・石製品

木製品 (図版35、第30図)

1・2は0区11号井戸埋土、3～11は0区12号井戸埋土より出土。

1は全長13.0cm、幅1.8cm、厚さ8mmを測る、細長く、やや厚みがあるもの。下端面は片刃状に加工し、上端面・右側面もやや傾斜する様加工するが、他の面は平たく加工する。右側面の大部分は欠損するが、木目により表面が大きく窪むことが原因であろう。アスナロ材製。2は長さ13.8cm、幅5.0cm、厚さ8mmを測る、幅太い形態のもの。表表面は木目による凹凸が顕著であり、全体的に湾曲する。下端面・右側面は平らに加工しているが、左側面は欠損しており、上端面は使用により丸くなる。アスナロ材製。

3～7の上端部は使用により丸味を帯び、下端面には割れた後も使用したため、摩滅する。いずれも両側面は平らに加工する。特に3～6はほぼ同じ規格・形態となる。3は長さ15.5cm、幅3.6cm、厚さ7.0mmを測る。表表面ともキズが多く、木目による弱い凹凸が認められる。スギ材製。4は長さ15.0cm、幅4.0cm、厚さ6.0mmを測る、やや厚さが薄いもの。スギ材製。5は長さ14.1cm、幅3.9cm、厚さ7mmを測る。右端面を欠損するが、8のような孔ではない。スギ材製。6は長さ15.5cm、幅4.1cm、厚さ8.0mmを測る、細長い形態のもの。表面上端・側面上端付近に加工痕が認められる。裏面下端部には割れる際左方向に力が加わったため、木目が曲がっている。スギ材製。

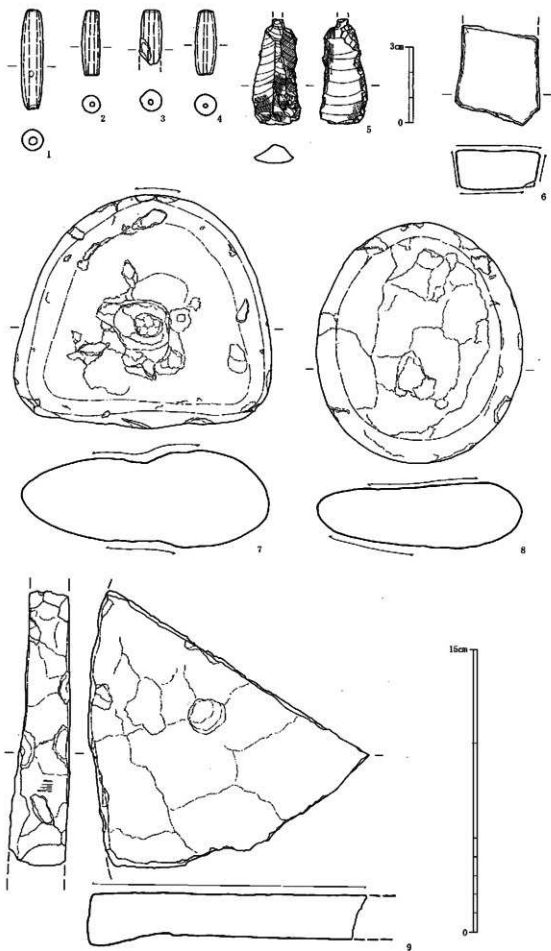
8～10は2～7と同じく、上端部は使用により丸みを帯びるが、下端部は欠損のままであるもの。いずれも側面は平らに加工。8は上端部やや右寄りに、1.8×0.9cmの長方形の孔が存在するが、孔の加工は粗い。下端部割れ口には表→裏方向に力が加わった痕跡が残る。長さ14.4cm、幅3.6cm、厚さ7.5mmの、スギ材製。9は両側面下端面近くに加工痕が残るもの。長さ14.3cm、幅2.9cm、厚さ7.0mmの、スギ材製。10は長さ14.4cm、幅4.5cm、厚さ6.5mmを測るやや幅太いもの。スギ材製。

11は径17.8cm、厚さ1.3cmの円形のもので、裏面は木目による凹凸が顕著である。側面には加工痕が全面に渡って認められる。左1/4ほどの箇所を割れるが、1/4側の断面には深さ1cmほどの孔が存在し、補修孔であると考えられる。3/4側には孔はないことから、補修途中で廃棄した可能性が高い。スギ材製。

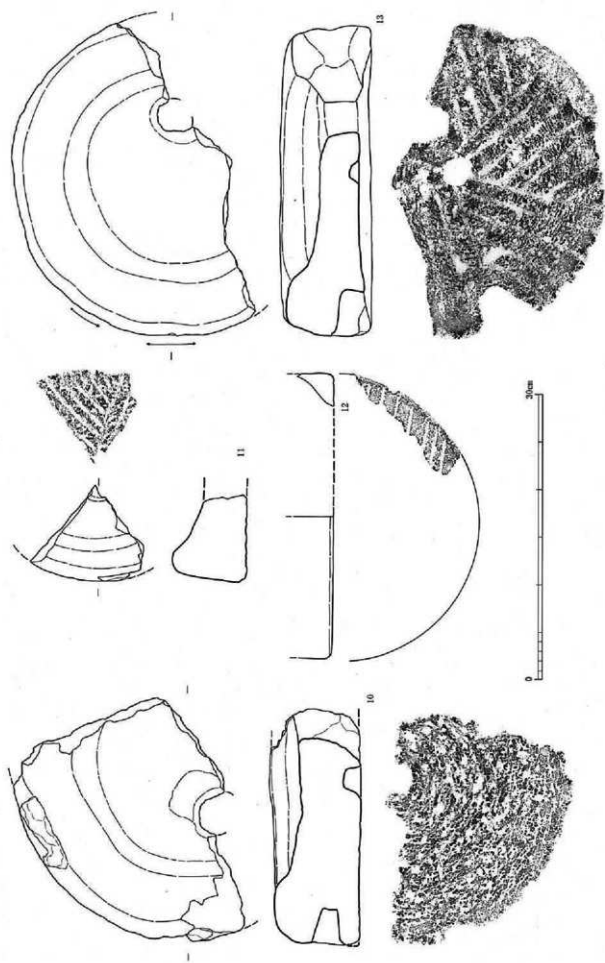
以上、木製品を観察したが、11は縦じ合わせ用の孔が認められないことから、土器等の蓋として使用したものと考えたい。1～10は長さ15cm前後になり、特に3～6、8・9は幅・厚さもほぼ同じであり、上端部がやや広くなる形態など何らかの規格の存在が予想される。杵や箱などパーツの一部とも考えられるが、規格が正四角形でないこと、8以外縦じ合わせる孔もないことから組み合わせ材としては不適当なものとなる。また欠損面も使用により摩滅しているもの(3～7)も存在することから、箒木の役割も想定されるが、箒木にしては幅が広く、また井戸内出土ということも理解できない。このように現時点における使用形態は不明であることから、類例があればご教示いただきたい。

土製品 (図版35、第31図1～4)

1～4は管状土鉢である。1は細長の中膨らみの器形で、長さ5.3cm、幅1.1cm、孔径4mm、

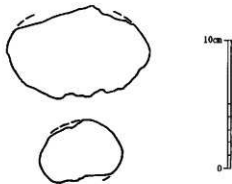
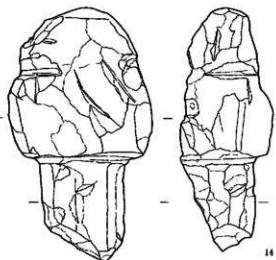


第31图 0区出土土製品・石器・石製品実測図① (5は2/3、他は1/2)



第32图 0区出土石製品実測図②(石白)(1/4)

重さ6.6gを測る。色は橙褐色。0区16号土坑出土。2は両端を面取りし、やや下膨らみの器形となる。長さ3.5cm、最大幅0.9cm、孔径2mm、重さ2.8gを測る。色は橙褐色。0区7号溝出土。3は下部が欠損する中膨らみの器形となるもの。上端部を面取りする。長さは2.8cm以上、最大幅1.1cm、孔径3mm、重さ3.5gを測る。色は茶褐色。0区SX02出土。4はやや下膨らみの器形で、上端部を2面、下端部を1面工具で面取りする。外面には二次加熱痕あり。長さ3.4cm、最大幅1.1cm、孔径2mm、重さ4.2gを測る。色は淡橙色～赤褐色。0区P68出土。



石器・石製品 (図版35・36、第31～33図5～14)

5はスクレーパーで、縦長剥片素材両側縁部の刃部加工を行っている。上端部は欠損する。長さ4.1cm以上、幅1.8cm、厚さ7mm、重さ5.1gの黒曜石製。0区表土出土。

6は砂岩製の板状粗砥石で、上部2/3ほど欠損する。4面砥石として利用した結果、特に左側縁部が大きく窪む。下端部には線状のキズあり。0区7号土坑より出土し、現状で長さ5.3cm、幅4.6cm、厚さ2.1cm、重さ68.8gを測る。

7は隅丸三角形を呈する凹石で、両面中央部が窪み、特に表面部の叩打痕は顕著である。上端部にも弱い叩打痕が認められる。長さ12.5cm、幅13.6cm、厚さ5.1cm、重さ1265.1gの玄武岩製。0区12号井戸埋土内出土。8は小型の台石で、表面全体に擦過痕が、中央部には叩打による弱い窪みが、裏面にも弱い擦過痕が認められる。全体的に火を受けたためか、炭が両面付着する。長さ12.8cm、幅10.8cm、厚さ3.5cm、重さ689gを測る、玄武岩製。0区P82出土。9は凝灰岩製の台石で、大きく欠損するもの。表面には叩打調整後の擦過痕が認められ、裏面は自然面のままである。側面は円弧状になるよう粗い加工と一部丁寧な研磨を施しており、一部には線状の加工痕が残る。0区7号土坑出土で、長さ14.7cm、幅14.8cm、厚さ2.7cm、重さ766.3gを測る、凝灰岩製。

10～13はいずれも薄い円筒形をなす粉顔白の上白片である。10は復元径35cm、ものくばり復元径は4.0cmを測る、左回しのもの。表面くぼみには成形時の叩打痕が明瞭で、裏面は良く摺ったため、目が残っていない。側面1ヶ所に横長の挽き手穴を有する。裏面中央の芯棒受けも摩滅することから、かなりの使用が想定される。表面には二次加熱痕が認められることから、破損後何かに転用したものと考えられる。0区13号井戸内出土の凝灰岩製。11は上縁部の幅が狭いもので、復元径31.0cmを測る、左回しのもの。わずかにものくばりが残り、目は主溝が6分

第33図 0区出土石製品実測図③ (1/3)

面になると考えられ、副溝も6条以上確認できる。側面には二次加熱痕が認められる。0区7号溝出土の凝灰岩製。12は裏面と側面の一部残存する、復元径30.0cmのもの。主溝・副溝が7条残り、左回しの白になる。側面にはススが附着する。0区7号溝出土の凝灰岩製。13は最も残りの良い上白で、復元径34.0cm、ものくばり復元径3.0cmを測る。表面くばりは成形時の叩打痕が明瞭で、裏面は厚さ1.2cmほどのふくみが存在する。日は主溝が6分面で、副溝を6条入れる、左回しのもの。側面には挽き手穴が上下2ヶ所存在するが、下方の穴は表面まで出てきており、また上白の厚さが4.0cmと薄く、芯棒受けもかなり磨耗していることから考えると、相当の使用により挽き手穴部分まで磨り減ってしまったため、上方に新たな挽き手孔を彫ったことにより、挽き手孔が上下2ヶ所存在する状態になったと想定される。白色の凝灰岩製で、0区表土出土。

14は五輪塔空風輪部。表面は人為的に削られ、裏面は叩打調整のまま、空・風輪部との境は挟り状になっており、加工途中のままで廃棄されたとも考えられるが、両側面の一部には丁寧に研磨した面が残ることや1点のみの出土であることから、破損したため廃棄された可能性もある。多角形に加工された差込用の接合部を有するが、接合部下部・裏面は欠損する。長さ19.6cm、空輪部幅9.0cm、厚さ5.4cm、風輪部幅11.1cm、厚さ7.0cm、接合部の長さ8.0cm、幅6.5cm、厚さ4.8cm、重さ910.2gを測る。0区S X01出土の凝灰岩製。

(9) 小結

以上見てきたように、0区では調査区北～中央を中心に古墳時代・中世後期～近世初期の土坑・井戸・溝などの遺構、遺物を検出した。当遺跡全体の時期別変遷、松延城跡については、「V. まとめ」で論じているので、ここでは0区検出遺構・遺物について簡単にまとめた。

1区では弥生時代早・前期の土器群、弥生時代中期の妻棺墓など弥生時代の遺構・遺物が確認されているが、0区では弥生時代の遺構は検出できず、また出土した弥生土器も小片で摩滅を受けていることから、混入品と考えられる。

当区では出土土器・埴土から古墳時代後期後半の23・26号土坑、9・14号溝が最も古い遺構として位置づけられる。当遺跡北の山門北池遺跡・藤の尾垣添遺跡では同時期の多くの堅穴住居跡などを圃場整備・九州新幹線建設による調査で確認しており、また当遺跡北東の集落内に所在し、12基程度が残存する堤古墳群は横穴式石室を主体とする後期古墳群であることから、当遺跡周辺では古墳時代後期後半に集落域・墓域の急激な拡大が認められる。当区では後世の前平を考えても、当該期の遺構・遺物は少ないことから、当遺跡には山門北池遺跡・藤の尾垣添遺跡より小規模な集落が存在した可能性が高い。

この後、中世後期段階になると再び集落が形成される。当区出土土器は、古くは12世紀代の中国・朝鮮(?)製輸入陶磁器が出土しているが、出土陶磁器の主体は15世紀後半～17世紀前半である。一方、共伴した在地土器(土師器・須恵器・瓦質土器)は、北筑後・佐賀平野と南筑後という地理的な問題はあるものの、久留米市海洋城跡出土在地土器の編年(白木編1994)と佐賀平野の在地土器編年(徳永1990)を参考に当遺跡在地土器の年代を見て見ると、土師器皿・杯は概ね16世紀中頃～後半に時期に収まり、土師器土鍋や瓦質土器はやや古い傾向にあるものの、北筑後・佐賀平野の編年も未確立であるため、この時期に位置づけられるであろう。

当遺跡は天正12年(1584)に築造され、元和元年(1615)の一國一城令により廃城となったと文献に記載された松延城跡曲輪Ⅱ(二ノ丸)東南隅に位置し(第74図)、出土遺構からも当遺跡内には松延城跡に関わる屋敷地が存在したと推測されることから、出土資料による年代がやや古い傾向にあるものの、文献と出土資料による城存続年代がだまかには一致する。

出土遺構から見て見ると、まず井戸については、当区では茶掘り井戸を3基、南北方向に7～8m間隔で検出し、これらの井戸が各屋敷地に1基と仮定すると、屋敷地の南北幅(間口)が約7～8mと仮定できる。ちなみに間口が7～8mの地割りは、一乗谷朝倉氏遺跡においては町屋の区画にあたる(朝倉氏遺跡資料館編1986)。また井戸の掘り直しが無いことから、文献に記載された城存続期間に近い、比較的短期間の集落であった可能性もある。このことは当区の中世後期の遺構埋土最上層は黄褐色粘質土であるものが多いことも、廃城という集落にとつての大きな契機を表しているのではないかと考えられる。しかし、町屋と仮定すると、まず曲輪Ⅱ内という位置的な問題、薩摩街道にあたる国道443号線に面する松延城西部(吉井集落)が表、当遺跡は裏手に当たると想定され、構造的には町屋とする推測は厳しいかもしれない。今後周辺の調査により明らかになることを期待したい。

中世後期に属する土坑は比較的規模の大きなものが多いが、出土遺物は少ないため、ほとんどの土坑の時期比定には埋土からの推測にとどまった。特質すべきものとして、7号土坑では竹製の箕が、25号土坑では樹皮(単子葉類の葉か)が土坑内に敷いた様な状態で出土している。7号土坑出土箕は、現在発掘現場で使用する箕の製作方法・形態とはほぼ同じであり、類例が少ないものの、縁に木を利用した弥生・古代の箕の形態とは異なるようである。また25号土坑は、同じく東西に細長い土坑となる21号土坑との機能的な関連が想定され、先述したようにこの区画が町屋であるとする、樹皮を利用した製品製作用のための貯蔵や水漬け用土坑であるとも思われるが、他の例を探ることができなかつたため、ご教示いただきたい。

7号溝は先述したように、中世後期に掘削された可能性が高いが、出土瓦から江戸時代末期に人為的に一度に埋めたと考えられる。軒丸・軒平瓦は松延遺跡第1地点2号溝出土瓦と同形であり、当遺跡と2号溝は約280m離れることから、当遺跡周辺において江戸時代末期に大きな耕地整備が行われた可能性があるが、出土した瓦に焼けた痕跡もないことから、なぜ瓦を大量に埋めたのかは不明である。現時点では当遺跡西に位置する松延天満神社で使用した瓦の可能性が高い。なお、松延城跡北に「近台寺」という小字名も存在するも、加えて記述しておく。

参考文献

- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究2』 日本貿易陶磁研究会
小野正敏 1982 「14～16世紀の染付碗・皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究2』 日本貿易陶磁研究会
朝倉氏遺跡資料館編 1986 「一乗谷と中世都市」開館5周年記念特別展図録
山村信榮 1990 「大宰府出土の瓦質土器」『中近世土器の基礎研究VI』 日本中世土器研究会
徳永貞昭 1990 「肥前における中世後期の在土器」『中近世土器の基礎研究VI』 日本中世土器研究会
白木守編 1994 「安武地区遺跡群Ⅱ」久留米市教育委員会
田中康信編 1998 「瀬高地区遺跡群Ⅱ」瀬高町文化財調査報告書第15集 瀬高町教育委員会
山本君夫 2000 「大宰府桑坊跡XV—陶磁器分類編—」大宰府市の文化財第49集 大宰府市教育委員会

3. 1区の検出遺構と遺物

(1) 概要

1区は南に0区、北に2区と隣接する南北約73m×東西約8.4mの調査区で、面積は約600㎡を測る。調査以前は0区・2区同様に標高6.3m前後の水田・畑地であり、調査区内は標高5.7m前後となっている。第9図の基本土層のように、水田時に使用されていた表土とその下層の耕作土が、その直下に現れる遺構面を覆っている。南側では、遺構面は黄褐色の基盤層に認められ、以下黄白色粘質土である八女粘土層となり、更に下層では湧水し始める砂質土が堆積している。一方、北側では遺構面は八女粘土層に認められ、南側で見られた黄褐色土層が認められない。また、調査区南側で甕棺墓が3基検出されているが、いずれも上部を大きく欠失している点から、広い範囲で大きく削平されているようである。

1区で検出した主な遺構は、弥生時代の溝、甕棺墓、中世の土坑、井戸、溝である。その他には、近世の溝、弥生時代に埋没したと考えられる谷、近世の落ち込み、近代の流路跡も含まれている。なお、土坑としたものの多くで湧水するため井戸としての用途も考えられるが、木器貯蔵穴の可能性もあり、ここでは形状や大きさの特徴から遺構の名称を区分する。主として径1m程度を目安として、小さな円形に近い平面形を呈し、壁の立ち上がりが著しく急で、湧水する砂層まで掘り込んだものを井戸とし、土坑はそれらよりも平面形が大きく上回るものとした。

また、調査区内には暗渠排水用の管の埋設用に幅が狭小な擾乱が南北に通っており、調査区南半は遺構の密度は高いが、調査区北半では、遺構が希薄で著しく擾乱を受けている状態である。

出土遺物は、弥生土器と中世の土器類が中心であり、近世の陶磁器なども含まれる。検出された3基の甕棺墓はいずれも弥生時代中期に属し、6号溝出土の土器群は弥生時代早期のまとまった資料となっている。また、中世の土師器・瓦器・様々な陶磁器と多彩な遺物の様相も遺跡内で認められる。少ないながら、石製品・土製品・金属製品も出土しており、中世の土坑・井戸・溝からは木製品が出土しているほか、2号土坑からは獣骨も検出されている。

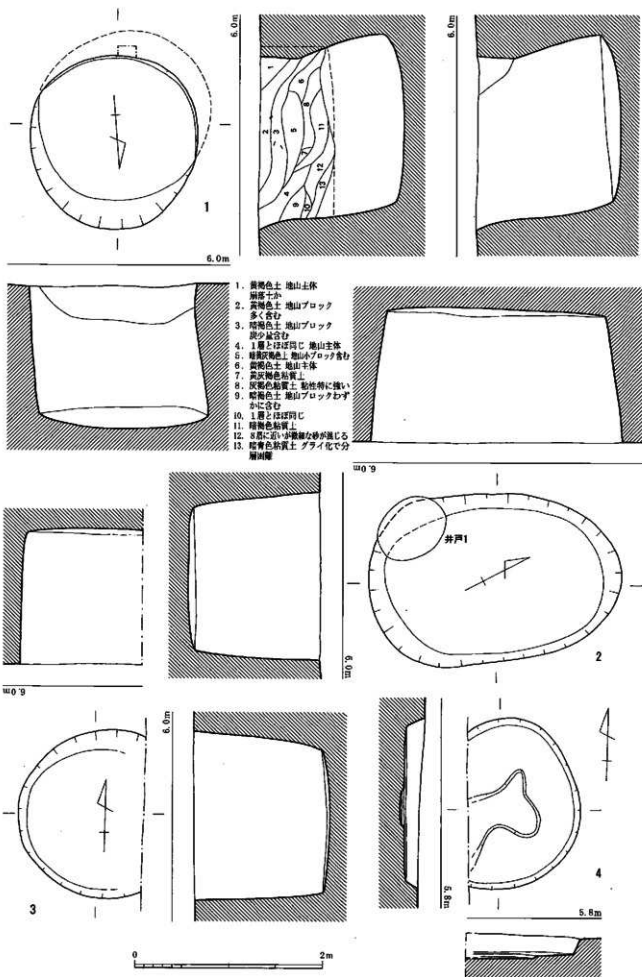
(2) 土坑

1号土坑（図版16、第34図）

1号土坑は調査区南側の中央に位置し、平面形は径1.8～1.9m前後の円形を呈し、検出面より1.5m前後の深さである。下層では、南側に向かって大きくオーバーハングする形状となったが、崩落した結果とも考えられる。埋土は、上層では地山の黄褐色土が多く含まれる埋土が主体であり、下層ではグライ化が著しく、また激しい湧水のため細分は困難であった。湧水する砂層まで掘削されており、井戸や木器貯蔵穴として利用されたと考えられるが、土層等からは井戸枠等の痕跡は認められなかった。出土土器から中世初頭（12世紀中頃～後半）の時期に位置づけられる。

出土土器（図版37、第35図1～3）

1は白磁皿（Ⅷ-2b）である。底部内面見込みみに草花文の凹印を施す。底部の軸は施釉した後には削りとられる。2は青磁碗の口縁部小片である。3は龍泉窯系青磁小碗（I-2）であ



第34図 1区土坑実測図(1/40)

る。体部内面を区分する文様を有す。口縁部に輪花を有するはずであるが、口縁端は欠損が多く明瞭には認識できない。(括弧内の分類記号は、「太宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊跡XV』 太宰府市の文化財第49集」による。)

2号土坑 (図版16・17、第34図)

2号土坑は調査区南側の中央に位置し、平面形は長軸2.7m、短軸1.8mと大型の楕円形を呈し、検出面より1.6m程の深さを測る。1号井戸に切られる先後関係である。下層の埋土はグライ化が著しく、湧水する砂層まで掘削されているため、井戸や木器貯蔵穴としての用途が想定されるが、半截作業で確認した土層からは井戸枠等の痕跡は認められなかった。出土遺物に土器以外で獣骨があり、詳細は「IV 自然化学分析」(123頁)を参照していただきたい。出土土器から中世後期(16世紀代)の時期に位置づけられる。

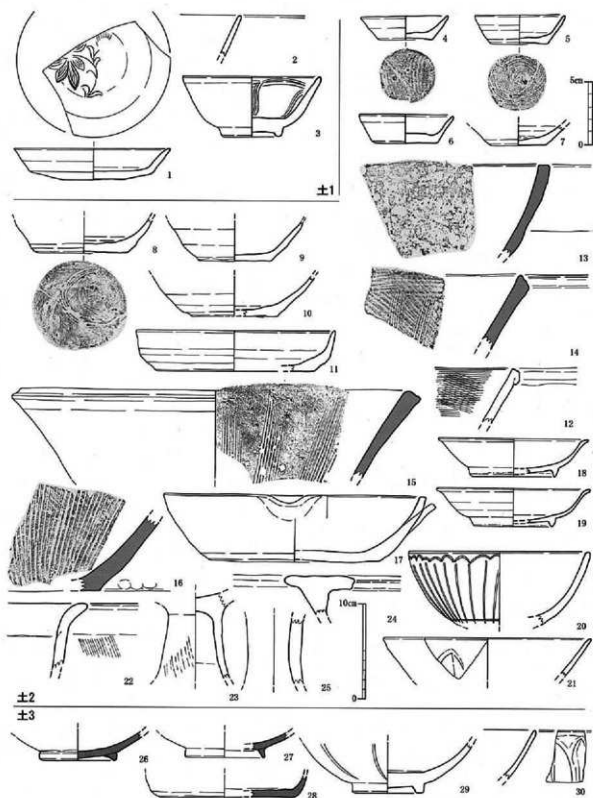
出土土器 (図版37、第35図4～25、第43図41)

4～7は土師器小皿である。外面底部には、ともに糸切り痕が残る。口縁部が残存する4～6は、口縁径7.0～7.4cmに収まる。8～11は土師器杯である。8～10は口縁部を欠失しており、外面底部には全て糸切り痕が残る。11は他と比べ底部径は著しく大きく、器高は低い。体部上半の立ち上がりは急である。12は土師器土鍋である。焼成は非常に硬質で、口縁部外面を貼り付けにより肥厚させ丸みを帯びており、玉縁状となる。また、口縁端は強いナデによりやや窪んだ面をなす。13～16は瓦質土器播鉢である。13は内面の剥落が著しいが、わずかにハケ調整と播目の痕跡が残る。口縁は端面が直上に向いて開口する。粗砂が目立ちやや粗い作りである。14の内面はハケ調整の後、幅1.5cmで5本単位の播目を施す。口縁端面は外傾する。15は非常に堅緻な焼成であり、外面には煤が付着する。幅1.8cmで8本単位の播目を施す。口縁端面は外傾する。16は底部付近であり、幅1.9cmで6本単位の播目を施す。17は小型の鉢で片口を有す。底部外面にハケ調整が残る他は、全体をナデにより仕上げられる。18・19はともに高台付の白磁皿である。口縁端部は外反し、高台下端は露胎する。19には高台内側に目砂が付着する。20は青磁碗で外面には線描連弁文を有す。21は龍泉窯系青磁碗の口縁の小片で、外面に連弁文を有す。混入品で13世紀代のもと思われる。

22～25は明確な混入品である。22は土師器甕の口縁部で、8世紀代のもと思われる。23は土師器高坏の脚部である。外面にはハケ調整を施す。24は須玖式甕棺の鐙先状の口縁部である。口縁外端面は強いナデによりやや窪む。25は弥生土器高坏の脚部である。また3号溝出土の第43図41瓦質土器火鉢と接合する一部も出土した。

3号土坑 (図版17、第34図)

3号土坑は、調査区南側東端部に位置し、一部調査区外に及んでいる。平面形は径1.8m程の円形になると考えられ、検出面から1.5m程の深さを測る。下層の埋土はグライ化が著しく、湧水する砂層まで掘削されているため、井戸や木器貯蔵穴としての用途が想定されるが、井戸枠などの痕跡は認められなかった。また、木製品は出土しているが、2点のみで貯蔵されている様相とは判断しにくい。出土土器は桶底板(第63図5・6)と考えられ、給用水に利用されていたとの想定も可能である。出土土器から中世初頭(12世紀後半)の時期になるとと思われる。



第35図 1区土坑出土土器実測図 (24・25は1/4、他は1/3)

出土土器 (第35図26~30)

26・27は瓦器碗の底部で、ともに高台が残存し、内外面をナデ調整する。27の高台は非常に薄いつくりである。28は瓦質土器皿と思われる。内外面ともにナデ調整する。29は青磁碗であ

る。外面に縦方向の文様が見られる。高台下端面では軸は不規則に付着している状態で、高台内は露胎する。30は龍泉窯系青磁碗の口縁部小片で、外面には連弁文を有す。

4号土坑 (図版17、第34図)

4号土坑は調査区南側の西端部に位置し、一部調査区外に及んでいる。平面形は径1.8m程の円形になると考えられ、検出面から0.2m程の深さを測る。上面では複数の礫が検出されており、床面は中央が部分的に周りよりも一段低く下がっている。埋土は灰褐色土が主体である。遺物は出土していない。

(3) 井戸

1号井戸 (図版18、第36図)

1号井戸は調査区南側の中央に位置し、平面形は長軸0.8m、短軸0.6mの楕円形の素掘りのものである。深さは検出面より1.3m程まで掘削しているが、遺構内が狭小で湧水が著しい砂層まで達し、明確に床面は確認できなかった。2号土坑を切る先後関係であるが、当初気付かずに上部は2号土坑と同時に掘削してしまった。土器の他に木製品も出土した。埋土は暗褐色土主体。出土土器から中世後期(16世紀代)の時期になると思われる。

出土土器 (第37図1~3)

1は土師器杯の底部片である。底部外面には微かに糸切り痕が残存する。底部径は8.0cmに復原される。2は土師器土鍋の口縁部である。外面には著しく煤が付着する。口縁部外面を貼り付けにより肥厚させ丸みを帯びており、玉縁状となる。また、口縁端は強いナデによりやや窪んだ面をなす。3は瓦質土器播鉢の底部である。外面はハケ調整の後ナデを施しやや凹凸が目立つ。内面は剥落が著しいが、底部に弧状の播目がわずかに残存する。

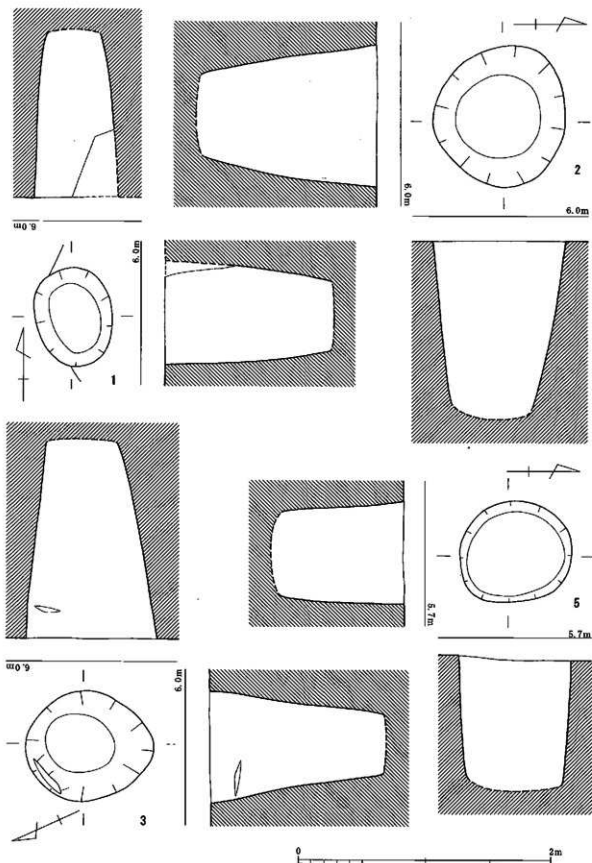
2号井戸 (図版18、第36図)

2号井戸は調査区南側の西寄りに位置し、平面形は径1.1m程の円形の素掘りのものである。深さは検出面より1.3m程まで掘削しているが、遺構内が狭小で湧水が著しい砂層まで達し、明確に床面は確認できなかった。埋土は暗褐色土主体。出土土器から中世後期(16世紀代)の時期と思われる。

出土土器 (第37図4~11)

4・5は土師器小皿である。4はほぼ完形で底部外面には糸切り痕が残存する。5は小片で淡黄褐色を呈し、器表の摩滅が著しい。6は瓦質土器の播鉢である。非常に硬質で、外面口縁直下には強い横ナデが廻っており、口縁端も強いナデによりやや窪んだ面をなす。内面から口縁端への屈曲部は著しく摩耗した痕跡がある。7は土師器土鍋の口縁部である。外面には著しく煤が付着する。口縁部外面を貼り付けにより肥厚させ丸みを帯びており、玉縁状となる。また、口縁端は強いナデによりやや窪んだ面をなす。

8~11は混入品であろう。8は瓦器碗の口縁部の小片である。9・10は龍泉窯系青磁碗の口縁部小片である。11は弥生土器丹塗り壺の底部小片である。中期後半に属するものである。



第36图 1区1~3·5号井戸实测图 (1/30)

3号井戸（図版18、第36図）

3号井戸は調査区南側の西寄りに位置し、平面形は径0.9m程の円形の素掘りのものである。深さは検出面より1.4m程まで掘削しているが、遺構内が狭小で湧水が著しい砂層まで達し、明確に床面は確認できなかった。埋土は暗褐色土主体。出土土器から中世後期（16世紀代）の時期と思われる。

出土土器（第37図12～14）

12は白磁碗の口縁部小片である。口縁部周辺は軸の掻き取りで円禿げである。13世紀後半～14世紀前半に増加するものであるが、混入品と考えられる。13は土師器土鍋の口縁部小片である。口縁部外面を貼り付けにより肥厚させ丸みを帯びており、玉縁状となる。器表の摩滅がやや激しい。14は瓦質土器茶釜の口縁部から肩部にかけての小片である。外面は暗茶褐色、内面は灰茶褐色を呈す。

4号井戸（図版19・20、第38図）

4号井戸は調査区南側の東寄りに位置し、平面形は径0.8～0.9m程の円形の素掘りのものである。深さは検出面より1.4m程まで掘削しているが、遺構内が狭小で湧水が著しい砂層まで達し、明確に床面は確認できなかった。埋土は暗褐色土主体。6号井戸を切る先後関係である。出土土器から中世後期（16世紀代）の時期になるとと思われる。

出土土器（図版37、第37図15～19）

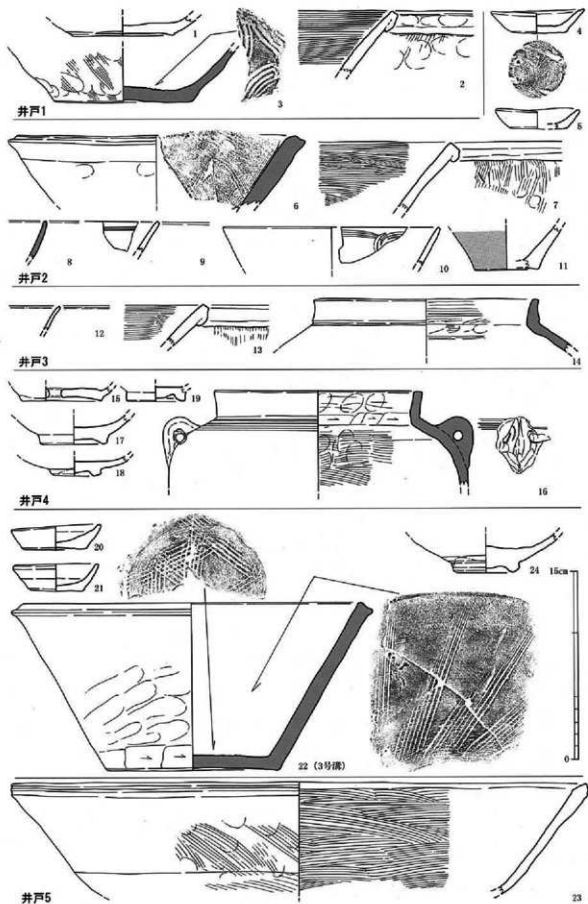
15は土師器杯の底部である。径1.0cm程の焼成前の穿孔が施される。16は瓦質土器茶釜である。肩部には3条の浅い沈線が廻る。外面はナデ調整され、内面にはハケ調整の後の指頭圧痕が明瞭に残る。17は高麗青磁碗の底部である。底部外面と内面見込み部分ともに目跡が見られる。18は白磁碗の底部である。高台は丁寧に削り出されており、高台およびその周りの施軸範囲は同一器高で整っておらず、ランダムである。19は青磁小碗の底部と思われる。外面残存部は施軸されず、ケズリにより整形され、高台内は大きく削り込まれる。

5号井戸（図版19、第36図）

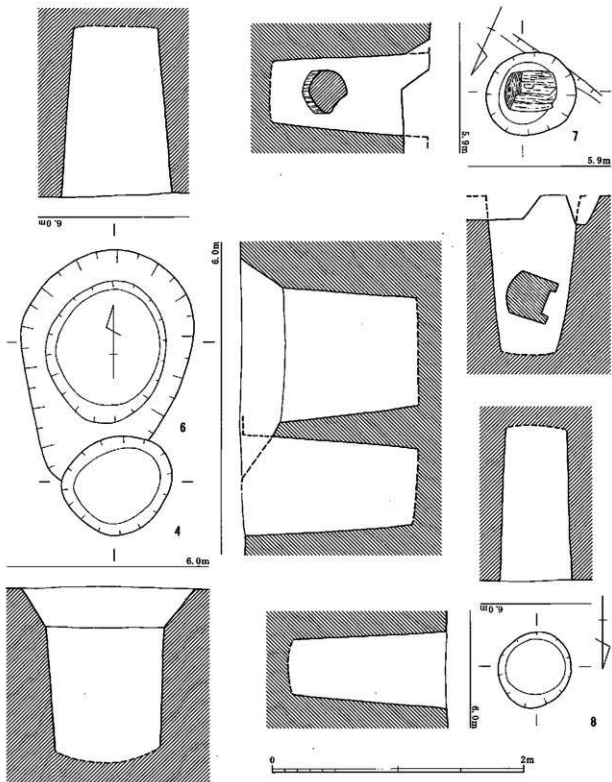
5号井戸は調査区中央付近の東寄りに位置し、平面形は径0.8～0.9m程の円形の素掘りのものである。深さは検出面より1m程まで掘削しているが、遺構内が狭小で湧水が著しい砂層まで達し、明確に床面は確認できなかった。落ち込みを掘削した後の下層から検出され、他の井戸に比べまとまった土器が出土した。また、木製品も出土し、桶底板と把手（第63図1～3・7）と考えられ、汲水用に利用されていたものであろうか。埋土は暗褐色土主体。出土土器から中世後期（16世紀代）の時期になるとと思われる。

出土土器（図版37、第37図20～24、第52図5・6）

20・21は土師器小皿である。20は外面底部にヘラ切り痕が残り、口径は4.8cm。21は外面底部に糸切り痕が微かに残り、口径は4.6cm。22は瓦質土器播鉢である。焼成は非常に堅緻で、内面はナデ調整の後に底部・体部ともに幅2.2cmで5本単位の播目を施す。また、内面の底部と体部では、その境界付近でともに著しく摩耗する部分が廻っている。外面はナデ調整により仕上げられるが、体部下端は横方向にケズリを施す。口縁端は強いナデによりやや窪んだ面を

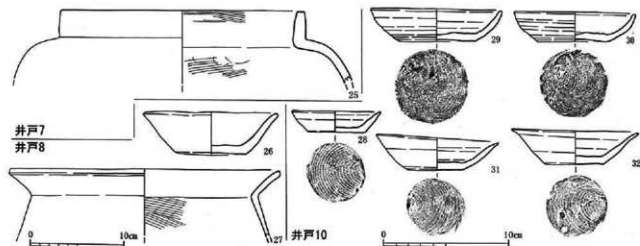


第37图 1区1~5号井戸出土土器实测图(1/3)



第38図 1区4・6～8号井戸実測図 (1/30)

なす。なお、3号溝より出土し接合した部分もある。23は土師器土鍋である。外面には著しく煤が付着し、内面には密な横ハケの調整を施す。内面は、口縁端付近で外側にやや屈曲し稜を有す。口縁端には整形の際に生じたと思われる細い溝状の窪みが廻る。24は青磁碗である。高



第39図 1区7・8・10号井戸出土土器実測図 (27は1/4、他は1/3)

台およびその周りの施軸範囲は同一器高で整っておらず、ランダムである。高台露体部分は暗茶褐色を呈すが、欠損部断面の胎土は淡青灰色である。また、落ち込み出土の第52図5の土師器鏝鉢と6の土師器鉢と接合する一部も出土した。

6号井戸 (図版20、第38図)

6号井戸は調査区南側の東寄りに位置し、4号井戸に切られる先後関係である。平面形は長軸1.9m、短軸1.4mの楕円形で素掘りのものである。他の井戸よりもはるかに大型であるが、検出面から35cm程までは緩やかな傾斜の堀方で狭まり、1.1m×0.9m程度の平面楕円形となってそれ以下は急激に落ち込んでいる。検出面より1.4m程まで掘削しているが、遺構内が狭小で湧水が著しい砂層まで達し、明確に床面は確認できなかった。埋土は暗褐色土主体。遺物は出土していない。

7号井戸 (図版20、第38図)

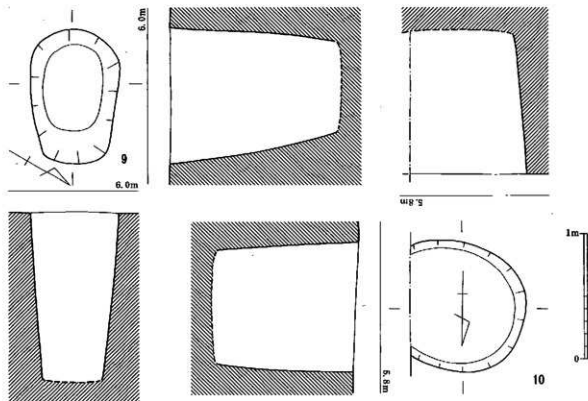
7号井戸は調査区南側の中央に位置し、平面形は径0.6～0.7mの円形の素掘りのものである。深さは検出面から1.1m程まで掘削しているが、遺構内が狭小で湧水が著しい砂層まで達し、明確に床面は確認できなかった。下層からは加工の加えられた樹木の幹が出土した。埋土は暗褐色土主体。

出土土器 (第39図25)

25は土師器鉢である。外面は橙黄褐色を呈し、内面は暗茶褐色を呈す。全体的に丁寧なナデ調整で仕上げられるが、内面には横ハケが残る。

8号井戸 (図版20、第38図)

8号井戸は調査区北側の西寄りに位置し、平面形は径0.6m程の円形の素掘りのものである。本調査区内の井戸の中でも最も小型である。深さは検出面から1.2m程まで掘削しているが、遺構内が狭小で湧水が著しい砂層まで達し、明確に床面は確認できなかった。埋土は暗褐色土主体。出土土器から中世後期 (16世紀代) の時期になると思われる。



第40図 1区9・10号井戸実測図(1/30)

出土土器(第39図26・27)

26は土師器杯である。器表は全体的に摩滅が著しい。口縁部はわずかに外反し、口径は10.9cmである。27は混入品の弥生土器甕で、後期中頃のものと思われる。内面にはハケ調整を施す。

9号井戸(図版21、第40図)

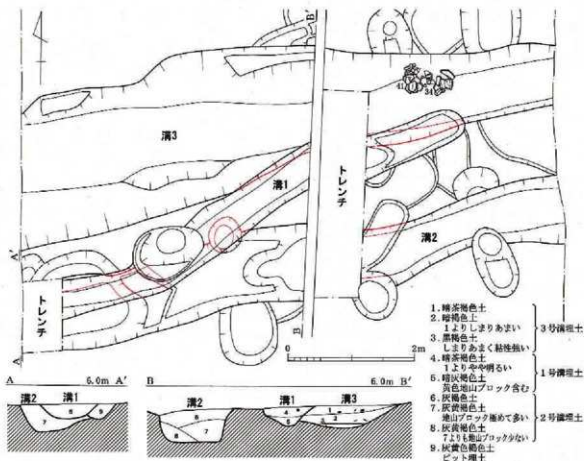
9号井戸は調査区北側の西寄りに位置し、平面形は長軸1.1m、短軸0.7mの楕円形の素掘りのものである。深さは検出面から1.2m程まで掘削しているが、遺構内が狭小で湧水が著しい砂層まで達し、明確に床面は確認できなかった。埋土は暗褐色土主体。遺物は出土していない。

10号井戸(図版21、第40図)

10号井戸は調査区北側の東寄りに位置し、攪乱の下から検出され、一部調査区外に及んでいる。平面形は径1.1m程の円形になると思われ、素掘りのものである。深さは検出面から1.2m程まで掘削しているが、遺構内が狭小で湧水が著しい砂層まで達し、明確に床面は確認できなかった。埋土は暗褐色土主体。出土土器から中世後期(16世紀代)の時期になると思われる。

出土土器(図版37、第39図28~32)

28は小皿である。淡黄灰褐色を呈し、口径は7.0cmを測り、底部外面には糸切り痕を残す。28~32は口径が9.9~10.3cmであり、小皿と杯の中間の大きさとなる皿である。全て底部には糸切り痕が残る。29・30の体部はやや内湾気味に立ち上がり、外面の凹凸がやや目立つ。31・32の体部は底部からまっすぐに立ち上がり、口縁部はやや外反する。



第41図 1区1～3号溝実測図および土層実測図 (1/60)

(4) 溝

1号溝 (図版22、第41図)

1号溝は調査区南側に位置し、北東・南西軸にやや振れた東西の方向軸を向いており、2号溝・3号溝とともに切る先後関係である。検出面での幅は60～70cm程度で、深さも検出面から30cm前後と小型である。東側へは調査区外までは延びず、途中で途切れる。出土遺物からの時期比定は難しいが、切り合い関係から16世紀以降になると考えられる。

出土土器 (図版38、第42図1～4)

1は土師器小皿である。器表は摩滅が著しい。口径は7.0cmに復原される。2は土師器杯の底部小片である。淡黄灰褐色を呈す。3は瓦質土器火鉢の小片である。突帯が一条残り、菊花文のスタンプを押捺する。4は瓦質土器茶釜の把手部である。暗灰褐色を呈し、下部にはわずかに煤が付着する。

2号溝 (図版22、第41図)

2号溝は調査区南側に位置し、1号溝のすぐ南側で一部切られながら、東西の方向軸を向いている。検出面での幅は0.8～1.2mで、床面は起伏が大きいが、別遺構が切り合っている結果である可能性もある。壁の立ち上がりは全体的にやや急である。出土土器から中世後期(16世紀代)の時期になると思われる。

出土土器 (第42図5～7)

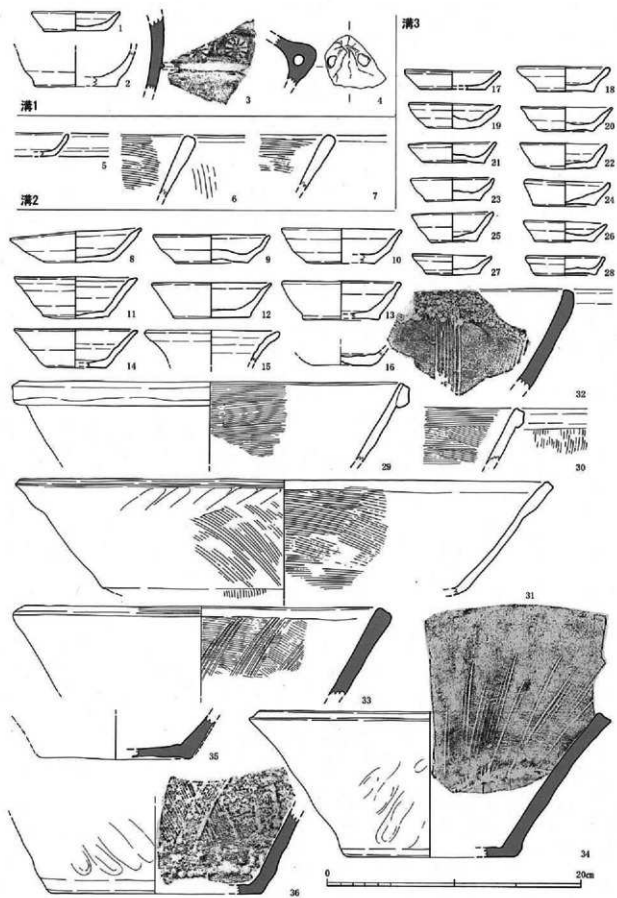
5は土師器小皿の小片である。暗茶褐色を呈し、器高は1.8cmを測る。底部には微かに糸切り痕が残る。6・7は土師器土鍋の口縁部である。6は白灰褐色を呈し、外面下部にはわずかに煤が付着する。口縁端から2cm程度はやや肥厚するが、以下は徐々に薄くなる。内面には密なハケ調整を施す。7は淡灰茶褐色を呈し、胎土にはやや雲母片が目立つ。口縁付近はやや肥厚し、外面はナデ調整、内面には密なハケ調整を施す。

3号溝 (図版22、第41図)

3号溝は調査区南側に位置し、1号溝のすぐ北側で一部切られながら、東西の方向軸を向いている。検出面での幅は、西側で2.4m程度と幅広く、東側では1m程度と大きく減じている。深さは検出面から0.4m程度で、特に西側では壁は非常に緩やかな立ち上がりとなっている。多量の土器が出土した。出土土器から中世後期(16世紀代)の時期になると考えられる。

出土土器 (図版38・39、第42図8～36、第43図37～53、第37図22)

8～31は土師器である。8～16は土師器で小皿と杯の中間の大きさとなる皿である。口径は9.4～10.8cmで、器高は2.2～3.3cmである。8は淡黄橙褐色を呈し、口縁はやや外反する。器表は摩滅が著しい。9は灰茶褐色を呈し、底部外面には糸切り痕が残る。10は淡黄灰褐色を呈し、口縁はわずかに外反する。底部外面には糸切り痕が残る。11は黄茶褐色を呈し、口縁部はわずかに外反する。底部外面には糸切り痕が残る。12は淡灰褐色を呈し、器表はやや摩滅し、底部外面には微かに糸切り痕が残る。13は淡黄灰褐色を呈し、他のものに比べ器壁はわずかに厚手である。底部外面には糸切り痕が残る。14は淡黄茶褐色を呈し、口縁部はわずかに外反する。底部外面には糸切り痕が残る。15は口縁部片で、淡黄灰褐色を呈し、口縁の外反が他のものよりも強く、他の器種である可能性もある。16は底部で淡黄灰褐色を呈し、底部外面には糸切り痕が残る。17～28は土師器小皿である。17は黄橙褐色淡黄を呈し、底部外面には糸切り痕が残る。18は黄橙褐色を呈し、体部の立ち上がりはわずかに内湾気味である。底部外面には糸切り痕が残る。19は淡灰橙褐色を呈し、器表はやや強く摩滅する。外面底部には微かに糸切り痕が残る。20は黄橙褐色を呈し、口縁はわずかに外反する。底部外面には糸切り痕が残る。21は淡黄灰褐色を呈し、底部外面には糸切り痕が残る。22は淡灰茶褐色を呈し、底部には糸切り痕が残る。23は淡黄灰褐色を呈し、底部外面には糸切り痕が残る。24は淡黄灰褐色を呈し、底部外面には糸切り痕が残る。器壁はやや厚手で、底部内面は平坦に近い面をなしていない。25は淡黄褐色を呈し、底部外面には糸切り痕を残す。26は淡黄灰褐色を呈し、底部には糸切り痕が残る。27は淡黄橙褐色を呈し、底部外面には糸切り痕が残る。28は淡黄灰褐色を呈し、底部外面に糸切り痕が残る。29～31は土師器土鍋である。29は口縁部外面を貼り付けにより肥厚させ丸みを帯びており、玉縁状となる。外面には著しく煤が付着する。内面には細かいハケ調整が密に施される。30は口縁部外面を貼り付けにより肥厚させ丸みを帯びており、玉縁状となる。外面には煤が付着し、内面には密なハケ調整を施す。31は口縁部が強いナデによりわずかに窪む。口縁部は、端部より2cm程度までは下位の部分よりもやや肥厚する。外面には煤が付着し、特に口縁部周辺には顕著である。内外面ともにハケ調整を施すが、内面は非常に密である。残存部の下端では屈曲する。



第42图 1区1~3号溝出土土器夹测图(1/3)

32~41は瓦質土器である。32~36は瓦質土器播鉢である。32は灰褐色を呈し、内面は部分的に剥落する。播目は約2cm幅で、7本単位である。33は暗灰褐色を呈し、外面は剥落が著しい。口縁部は明瞭な端面が形成される。内面はハケ調整の後に播目が施され、播目は約2cm幅で7本単位である。34は黒灰褐色を呈し、非常に堅緻な焼成である。口縁部は明瞭な端面が形成され、強いナデによりやや窪む。外面には指頭圧痕が目立ち、口縁部周辺および内面には丁寧な横ナデが施される。播目は約1.9cm幅で7本単位である。内面の体部下半および底部は使用による摩滅が著しい。35は外面の剥落が著しく、内面には播目の痕跡がわずかに残る。36は黒灰褐色を呈し、内外面ともに剥落が激しい。外面には指頭圧痕が目立ち、内面には密に播目が施される。播目は約1.6cm幅で9本単位である。37~39は瓦質土器茶釜である。37・38は鈎の付近の部位にあたる。37は鈎の下面以下には著しく煤が付着する。鈎は回転横ナデにより調整され、わずかに残る鈎より上部にはハケ調整が残る。38は鈎とより下位の外面および内面にはハケ調整が施される。鈎の下面以下には煤が付着する。39は把手部で、下半には煤が付着する。40は瓦質土器火鉢の口縁部である。非常に堅緻な焼成で、内面には密なハケ調整が施され、外面の突帯間には多重の六角形文と縦の三本平行線文のスタンプを押捺する。41はほぼ完形に近い瓦質土器火鉢である。暗灰褐色を呈し、内面および底部外面には細かいハケ調整が施され、体部外面はハケ調整の後に丁寧にナデ調整を施す。外面には上半に二条単位の突帯が二組廻り、その突帯間と口縁付近に四菱形の文様のスタンプを押捺し、下端近くには一条の突帯が廻る。また、底部には脚が三箇所に付される。2号土坑からも接合する部分が出土している。

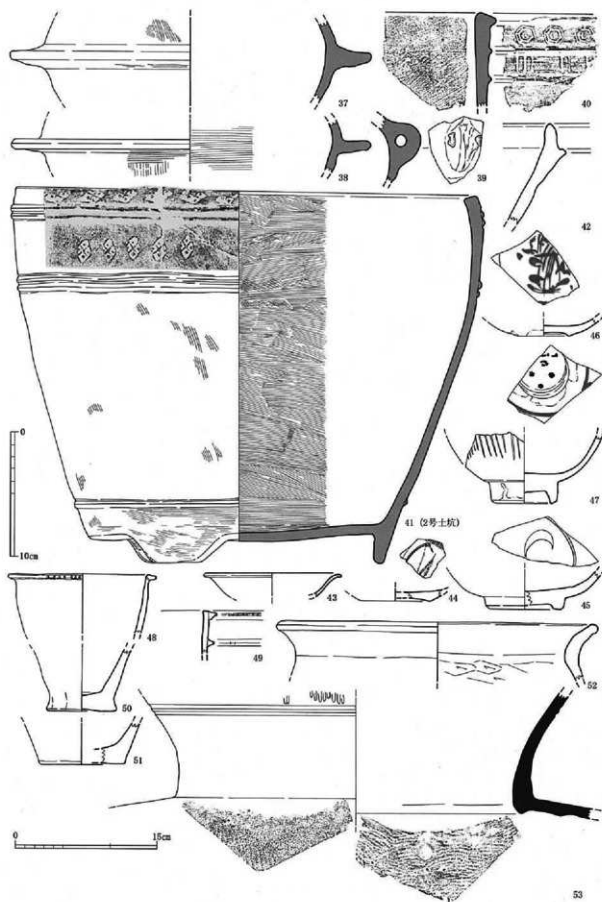
42は備前焼播鉢の口縁部である。小片でちょうど播目の間の部分にあたるためか、播目は見られない。暗茶褐色を呈す。43は白磁皿である。口縁部は強く外反する。44は同安系青磁皿の底部小片である。底部外面は軸が掻き取られる。45は龍泉窯系青磁碗である。内面見込みに一部文様が見られる。高台内は露胎する。46は青花皿の底部である。底部外面はケズリにより葦筒底で露胎しており、墨書が見られる。内面見込みには文様を有すが、全体像は判別できず、外面にもわずかに文様が残る。47は白灰褐色の軸が施され陶器碗と思われ、体部に縦の平行線が見られる。

48~53は明確な混入品である。48は弥生土器甕で、二次被熱によるものか外面は橙褐色を呈す。口縁は突帯状に貼り付けられており、刻目を施す。器表は摩滅が著しい。弥生時代前期後半のものと考えられる。49は弥生土器甕で、淡黄灰褐色を呈し、口縁部とそのやや下位に突帯を付す。突帯には二条ともに細かな刻みを施す。弥生時代前期末のものと考えられる。50は弥生土器甕の底部で、淡黄茶褐色を呈す。器表はやや摩滅するがナデ調整を施す。51は弥生土器甕の底部で、淡黄茶褐色を呈す。器表はやや摩滅するがナデ調整を施す。52は土師器甕の口縁部で、淡黄灰褐色を呈す。胴部内面にはケズリを施す。8世紀代のものと考えられる。53は須恵器大甕で、灰褐色を呈し、堅緻な焼成である。胴部外面には平行タタキ、内面には同心円タタキを施し、頸部には沈線が2条廻る。

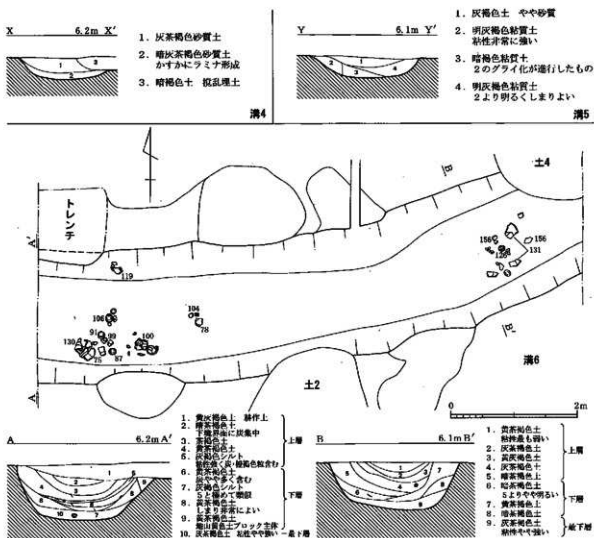
また、第37図22の5号井戸出土の瓦質土器播鉢と接合する部分も出土した。

4号溝 (図版23、第44図)

4号溝は中央よりやや北側に位置し、東西の方向軸を向き、東側は擾乱により途切れ、西側



第43图 1区3号沟出土土器实测图 (48~51は1/4、他は1/3)

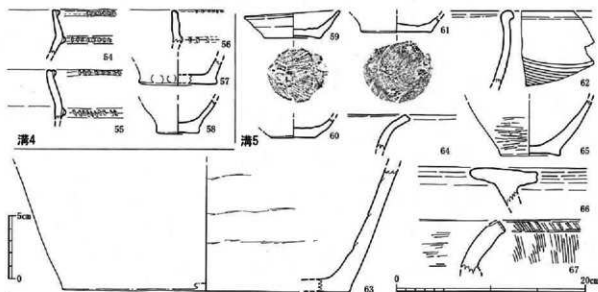


第44図 1区4～6号溝土層実測図および6号溝実測図(1/60)

も上部は攪乱により削平される部分が多いが、東西ともに調査区外へと伸びているものと考えられる。検出面での幅は最大で1.4m程度で、深さは西側で検出面より0.35m程度であるが、東側では更に0.2mほど深くなっており、東側へやや強く傾斜していると言える。壁の立ち上がりは、やや急である。埋土は灰茶褐色の砂質土が主体で、下層では微かにラミナが形成される。出土土器から弥生時代早期～前期前半の時期になると考えられる。

出土土器 (第45図54～58)

54は弥生土器甕の口縁部である。刻目突帯を2条廻らせ、下位の突帯の位置から上部は内側へ屈曲する。淡茶褐色を呈し、口縁部はやや黒化する。55は弥生土器甕の口縁部である。刻目突帯を2条廻らせ、下位の突帯の位置から上部は緩やかに内傾する。刻目は深く幅狭く刻まれ、全体的に左上がりである。56は弥生土器甕の口縁部である。胴部に1条の刻目突帯を有し、屈曲せずそのまま口縁まで立ち上がる器形である。また、口唇外端部にも刻目を有す。57は弥生土器甕の底部と思われる。淡茶褐色を呈し、外面に一部黒斑が見られる。58は弥生土器甕で、淡茶褐色を呈す。



第45図 1区4・5号溝出土土器実測図 (59~64は1/3、他は1/4)

5号溝 (図版23・24、第44図)

5号溝は調査区北端の東側に位置し、北西・南東の方向軸をなす。北側は調査区外へと延び、南側では急激に幅が広がるか西側へと曲がるような様相となっているが、流路跡により途切れる。検出面での幅は1.7m程度で、深さは検出面より0.3m程度で壁は非常に緩やかに立ち上がる。埋土は灰褐色の粘質土主体である。土器以外に刀子の青銅製の鞘が出土した。出土土器から近世以降の時期にあたとと言える。

出土土器 (図版39、第45図59~67)

59は土師器小皿で、淡黄灰褐色を呈す。底部外面にはヘラ切り痕が残る。口径は7.4cmに復原される。60は土師器小皿で、淡黄灰褐色を呈す。器表はやや強く摩滅する。61は土師器小皿で、淡灰茶褐色を呈す。底部外面には糸切り痕が残る。62は陶器鉢で、全面施釉され暗緑茶色主体である。刷毛目文を有し、唐津焼と考えられる。63は大型の陶器甕である。焼締められており、外面暗茶褐色、内面赤茶褐色を呈す。内面には接合痕が見られる。64は土師器壺の口縁部で、橙黄褐色を呈す。やや外反気味に外側へと開き、器表は強く摩滅する。65は弥生土器壺で、淡黄灰褐色を呈し、底部内外面ともに黒斑が見られる。内面はナデ調整を施し、外面は摩滅でやや不明瞭ではあるが、ミガキを施す。66は須玖式甕棺の鋤先状の口縁部で、淡黄橙褐色を呈す。外側の端面は強いナデによりやや窪む。弥生時代中期後半の時期にあたる。67は弥生土器の大型の甕の口縁部である。暗茶褐色を呈し、器表は摩滅が激しいが外面にハケ調整が認められる。口縁端面には刻目を施し、下端の外面には突帯の剥落した痕跡が認められる。

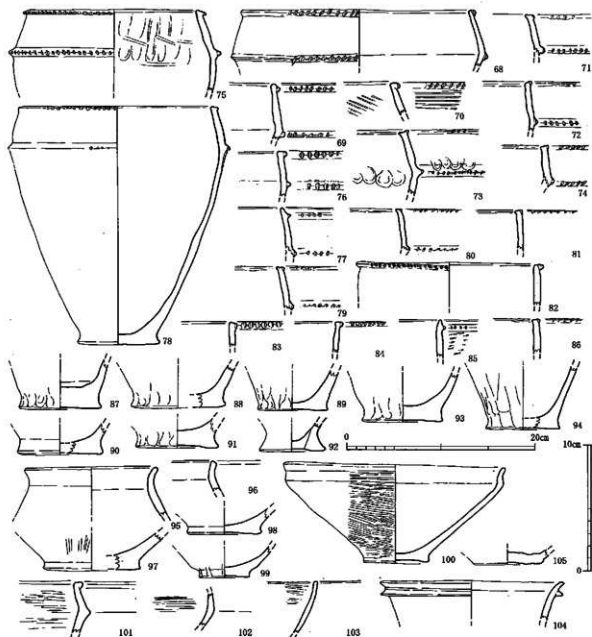
6号溝 (図版25、第44図)

6号溝は調査区南側に位置し、東西の方向軸をなし、両方向において調査区外にも延びている。検出面での幅は2.0m程度で、深さは検出面から0.7~0.8m程度である。壁の立ち上がりはやや急で、断面逆台形である。埋土は上層で茶褐色のやや砂質のものが主体で、下層になるにつれわずかに明るい色調となり、粘性がやや増す傾向にある。上層で認められた埋土の一定の

単位を「上層」とし、最下層の灰茶褐色を呈す粘質土を「最下層」として、それらの中間を「下層」とした。小片が多いものの多量の土器が出土し、おおよそ上記の層をもとに区分して取り上げを行った。出土土器から弥生時代早期の時期になると考えられる。

出土土器 (図版39、第46～48図68～158)

68～105は上層より出土したもので、68～92は弥生土器甕である。68～74は胴部で屈曲し、口縁部へと向かって内側へと傾くものである。屈曲部には刻目突帯を有す。68～70は口縁部にも刻目突帯を有すものである。68は外面暗茶褐色、内面淡黄茶褐色を呈し、胎土には非常に細かな雲母片が目立つ。口縁部突帯の刻目は奥が丸みを帯びるものが多いのに対し、下位の突帯では角がつくものが多く、施文具の相違する可能性がある。また、上下の突帯の刻目の傾きもやや異なる。外面にナデ調整を施す。69は外面黒褐色～暗茶褐色を呈し、外面にナデ調整を施す。突帯の刻目は口縁部のは細かく、下位のは幅広い。70は口縁部付近しか残存しないが、下位に屈曲部があるものと思われる。淡茶褐色を呈し、内外面ともに条痕による調整である。71～74は口縁部には突帯を付さず、口唇部外端部を少しつまみ出し、そこに刻目を施したものである。71は淡橙黄褐色を呈し、口縁部のごくわずかな残存部にある刻目は非常に細かい。器表は摩滅が激しい。72は淡灰茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。73は淡橙茶褐色を呈し、突帯以下は煤の付着によるものか暗茶褐色を呈す。内外面ともにナデ調整を施す。74は淡橙褐色を呈し、内外面ともにナデ調整を施す。胴部にも突帯を貼り付けず、屈曲部にそのまま刻目を施す「板付祖形甕」と考えられる。75～81は上記のものよりも胴部の屈曲は強くはなく、緩やかに内側へ傾くものである。75～77は口縁部・屈曲部ともに突帯を有す。75は淡橙茶褐色を呈し、内外面ともにナデ調整を施し、内面には指頭圧痕が目立つ。76は淡茶褐色を呈し、内外面ともにナデ調整を施す。突帯の刻目は角柱条の工具の面を押し当てたような形状である。77は上位の突帯は、口唇部よりやや下がった位置に貼り付けられる。橙茶褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。78～81は口縁部には突帯を付さず、口唇部外端部を少しつまみ出した部分か、そのままの素口縁に刻目を施すものである。78は二片に分かれており、胴部突帯以下の残存部はある程度の大きさがあるが、それ以上の部位の残りはわずかである。淡黄茶褐色を呈し、器表は摩滅の激しい部分が目立つが、内外面ともにナデ調整を施す。79は外面暗茶褐色、内面淡橙黄褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。80は淡黄茶褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。81は外面淡灰茶褐色、内面淡黄橙褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。82～86は胴部が張らず、口縁部から底部までそのまますままる砲弾形の器形のものである。82～84は口縁部に刻目を有す突帯を貼り付ける。82は暗茶褐色を呈し、器表はやや摩滅する。83は淡灰茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。突帯の刻目は角柱条の工具の面を押し当てたような形状である。84は外面黒茶褐色、内面暗茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。85は突帯を口唇部よりもやや下位に貼り付ける。茶褐色を呈し、やや摩滅するが外面の調整は条痕によるものと見られる。85は突帯を貼り付けず、わずかにつまみ出した口唇部外端部に刻目を施し、「板付祖形甕」と考えられる。しかし、小片のため器形の傾きも確実なものではなく、78～81のような胴の張る器形である可能性も否定できない。87～92は底部である。87は淡橙茶褐色を呈し、器表は摩滅が激しく外面下端部には指頭圧痕が目立つ。擬口縁部分から外傾接合が認められる。88は淡橙茶褐色を呈し、内外面ともにナデ調整を施す。89は外面黒灰褐色、内面淡黄橙褐色を呈し、外面下端部には指頭圧痕が



第46図 1区6号溝上層出土土器実測図(105は1/3、他は1/4)

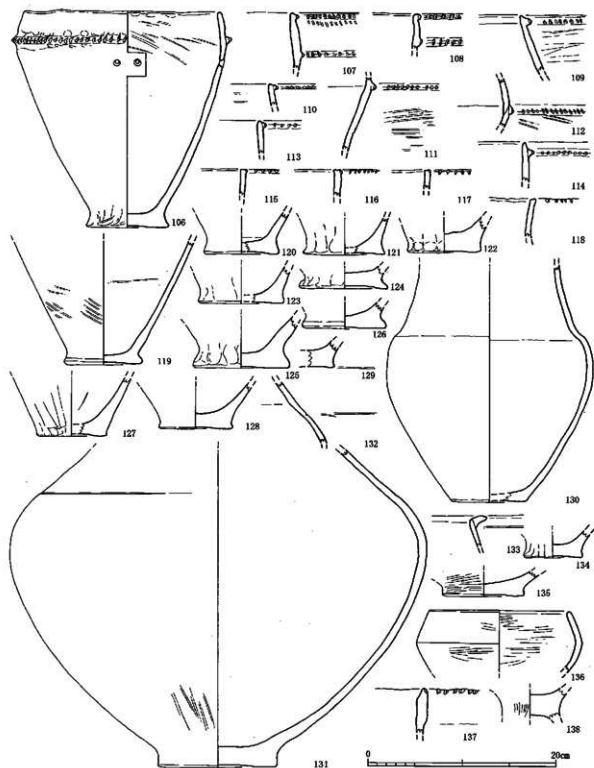
目立つ。90は淡黄茶褐色を呈す。91は淡橙黄褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。擬口縁部分から外傾接合が認められる。92は底部径がやや狭く、一度すばまってから下端でやや広がる器形である。淡橙茶褐色を呈す。93は淡黄茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。94は淡橙茶褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。

95~99は弥生土器壺である。95・96は口縁部である。95は淡黄橙褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。96は橙茶褐色を呈し、器表はやや摩滅する。97~99は底部である。97は淡黄茶褐色を呈し、器表はやや摩滅するが、内面にナデ調整と思われ、外面にはミガキがわずかに残存する。98は暗茶褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。99は淡橙黄褐色を呈し、器表は摩滅が激しいが、底部外面にはミガキが残存し、外面にはミガキを施したと考えられる。また、底部外面に黒斑が見られる。

100から102は弥生土器浅鉢である。100は完形に近く、黒茶褐色を呈し、器表は特に内面の摩擦が激しいが、外面には密なミガキを施す。口縁部下でく字状に内側へ屈曲し、さらに口縁端部はわずかに外反する。101は淡茶褐色を呈し、器表は摩擦が激しいが、内外面ともにミガキ調整が残る。胴部でく字状に内側へ強く屈曲し、口縁部外側には突帯を貼り付ける。102は外面暗茶褐色、内面黒褐色を呈し、外面暗茶褐色を呈す。外面は摩擦するが、内面ではミガキを施す。内面では緩やかに内湾するが、外面では稜をなし屈曲する。

103は弥生土器鉢の口縁部である。橙茶褐色を呈し、やや摩擦するが内面にはミガキが見られる。104は弥生土器であろうが、器種は不明である。淡茶灰褐色を呈し、やや摩擦するが内外面ともにナデ調整を施すと見られる。口縁端部は外側にわずかに外反し、そのやや下位にはシャープな突帯を貼り付ける。混入品の可能性もある。105は混入品で、土師器小皿である。淡黄茶褐色を呈し、器表は摩擦が激しい。

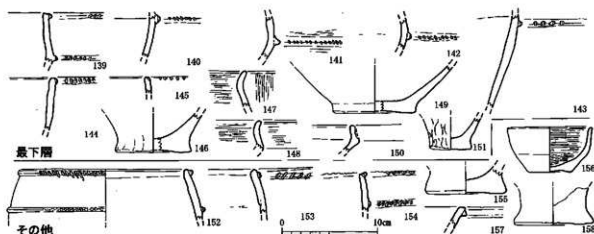
106～138は下層より出土したもので、106～129は弥生土器甕である。107～112が2条の突帯を付すものと考えられるが、胴部の屈曲の強いものは少なく、109・111がその可能性があり、他は口縁部へ向け緩やかに内側に屈曲するものである。106は完形に近く、暗茶褐色を呈し、外面にはわずかに煤が付着する。器表は摩擦が激しいが、条痕調整が見られる。屈曲部に刻目突帯を貼り付けるが、口縁部には突帯を付さず、刻目も施さない。刻目の幅は狭く、シャープである。補修孔が見られる。107は内面が淡黄灰褐色を呈し、外面はわずかに煤が付着し淡黒灰褐色を呈す。口縁部突帯の刻目を施す際に、工具が突帯下位の外面器表まで差し込んでおり、突帯の刻目と対となる刺突痕が見られる。胎土には角閃石が見られる。108は茶褐色を呈し、内外面ともにナデ調整である。2条の突帯間の幅は狭く、刻目の断面はやや丸みを帯びている。109は暗茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。口縁部の刻目突帯の貼り付け位置は、外面上端からごくわずかに下位である。110は淡茶褐色を呈し、刻目の断面はやや丸みを帯びる。111は屈曲部の突帯とその下位胴部である。外面黒茶褐色、内面淡黄茶褐色を呈し、外面には条痕による調整を施す。112は屈曲部の突帯付近で、外面暗茶褐色、内面淡黄茶褐色を呈す。外面下半は条痕調整が見られる。113～118は胴部が張らず、口縁部から底部までそのままはまる砲弾形の器形のものである。113は刻目突帯を口縁端部よりもごくわずかに下位に貼り付け、淡黄茶褐色を呈す。突帯の刻目は角柱条の工具の面を押し当てたような形状である。114は刻目突帯を口縁端部よりもやや下位に貼り付けるもので、淡橙黄褐色を呈し、器表は摩擦が激しい。115～118で、115は口縁外端部をわずかにつまみ出した部分に、他のものはそのままの口縁外端部に刻目を施した「板付粗形甕」である。115は淡黄橙褐色を呈し、器表は摩擦が激しい。116は淡黄橙褐色を呈し、器表は摩擦が激しい。刻目は細かい。117は黒茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。118は黒茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。刻目は細かい。119～129は底部である。119は暗茶褐色を呈し、器表は摩擦が激しいが、外面は条痕、内面はナデによる調整と思われる。また、内面に一部接合痕が見られる。120は淡茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。121は外面黒茶褐色、内面橙茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。122は淡茶褐色を呈し、器表は摩擦が激しい。擬口縁部分から外傾接合が認められる。123は暗茶褐色を呈し、ナデ調整を施すが、外面は強いナデの単位が見られる。124は淡灰茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。125は淡茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。126は橙茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。127は外面黒茶褐色、内面淡黄橙褐色を呈



第47図 1区6号溝下層出土土器実測図(1/4)

し、ナデ調整を施す。128は橙茶褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。129は暗茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。

130～135は彌生土器壺である。130は黄橙褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。肩部で内側へ強く屈曲し、頸部はそこから急に立ち上がる。胎土には角閃石が見られる。全体的に細長い器



第48図 1区6号溝最下層およびその他出土土器実測図(1/4)

形である。131は大型の壺で、淡黄橙褐色を呈し、器表は摩滅が激しいが外面にはわずかにミガキが見られる。胴部下半には黒斑が見られる。肩部に沈線を1条廻らす、非常に細く浅いため、途中で途切れる部分もある。132は肩部の破片で、淡茶褐色を呈す。ナデ調整を施し、外面には沈線が見られる。133は口縁部で淡橙茶褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。口縁部は頸部外側への貼り付けにより形成され、その下端部には微かに段が生じる。134は茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。外面下端部には指頭圧痕が目立つ。135は暗茶褐色を呈し、外面にはミガキを施し、内面は摩滅が激しい。

135は弥生土器浅鉢で、外面暗茶褐色、内面黒灰褐色を呈す。器表はやや摩滅するが、内外面ともにミガキが見られる。136は弥生土器鉢であろうか。淡橙茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。口縁部は内面で急激に器厚を減じ、口唇部は幅狭く、その外側に刻目を有す。器面には微かな起伏が目立ち、やや粗雑な作りと言える。138は高坏の杯・脚の接合部か。淡橙黄褐色を呈し、外面には縦方向のミガキが見られる。

139～151は下層より出土したもので、139～146は弥生土器甕である。139～143は胴部に刻目突帯を有し、そこから口縁に向けて内側へ屈曲するものである。139は茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。刻目は細かく、角柱条の工具の面を押し当てたような形状である。140は外面暗茶褐色、内面淡茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。141は外面暗茶褐色、内面淡茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。142は茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。143は外面黒茶褐色、内面暗茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。刻目は断面円形の棒状工具を押し当てた形状である。144は口縁部にのみ刻目突帯を有し、口縁部から底部までそのままはまる砲弾形の器形と考えられる。外面暗茶褐色、内面淡茶褐色を呈しナデ調整を施す。刻目は、角柱条の工具の面を押し当てたような形状である。145は口縁部から底部までそのままはまる砲弾形の器形と考えられ、突帯を有さず口縁外端部に刻目を施す「板付粗形甕」と思われる。黒灰褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。146は底部で、暗茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。

147～149は弥生土器壺である。147は口縁部で、橙茶褐色を呈す。内面は横方向のミガキ、外面は縦方向のミガキを施す。丹塗りされていたと考えられる。148は口縁部で、橙茶褐色を呈す。内外面ともに横方向のミガキを施す。残存部外面下端で屈曲が見られる。丹塗りされていたと考えられる。149は底部で、黄橙褐色を呈す。器表はやや摩滅が激しい。外面にわずか

に丹塗りの痕跡が見られる。

150は弥生土器浅鉢の口縁部で、淡茶褐色を呈す。口縁部下でく字状に内側に屈曲し、さらに口縁端部はわずかに外反する。器表は摩滅が著しい。151は小型の甕か。茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。外面器表は強いナデで凹凸が見られる。

152～158は層ごとに区分されなかったその他の弥生土器である。152～154は甕で、いずれも口縁部と胴部の2条の突帯を有すものと考えられる。152は外面灰茶褐色、内面淡黄茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。口縁部突帯の刻目は、工具を強く押し当てて施文されており、一部突帯下位まで施文が及ぶ。胎土には角閃石が目立つ。153は暗茶褐色を呈し、口縁部内面には稜を有し、突帯は口縁上端部よりもわずかに下位に貼り付けられる。ナデ調整を施す。154は外面淡灰褐色、内面淡黄灰褐色を呈す。下位の突帯は薄く、扁平である。器表は摩滅が激しい。155は甕底部で、淡橙茶褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。156は小型の鉢である。橙茶褐色を呈し、外面は摩滅が激しいが、内面には密なミガキが残存する。口唇部は端面を形成する。157の器種は不明で口縁部と思われる。淡灰茶褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。口唇部は端面を形成し、外面上端よりもやや下位に突帯を有す。158は甕の底部であるが、底部の器壁が厚い点から、下った時期の混入品の可能性も考えられる。灰茶褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。

(5) 甕棺墓

1号甕棺墓（図版26、第49回）

1号甕棺墓は調査区南端近くに位置する成人用甕棺墓である。上部は著しく削平されており、下部のみが残存するため、単棺か合口かは判別できない。また、後世のピットによっても擾乱を受けており、墓壇も底近くがわずかに残るのみである。主軸をおおよそS-54°-Eの方位にとり、埋置角度は18°程度である。崩れていた小片に混ざって鉢が出土しているが、この遺構に伴うものかは不明である。出土甕棺から、弥生時代中期後半と考えられる。

出土土器（図版40、第50回1・2）

1は甕棺として使用された大型甕である。口縁部付近は欠失している。外面淡黄茶褐色、内面淡灰褐色を呈し、内外面ともに丁寧にナデ調整されている。胴部に2条の断面三角形の突帯が廻り、全体的にやや細長い器形の須玖式甕棺である。復原底部径13.0cmで、残存高は92.4cmを測る。2は混入品の可能性もあるが、鉢で淡黄灰褐色を呈す。器表はやや摩滅が激しいが、外面に縦方向の細かいミガキを施し、内面には微かに横方向のミガキが見られる。

2号甕棺墓（図版26、第49回）

2号甕棺墓は調査区中央よりやや南側の西寄りに位置する合口の成人用甕棺墓である。3号甕棺墓を切る先後関係である。上部が著しく削平されており、上下棺ともほとんど底面近くの部分しか残存していない。また、北



2・3号甕棺墓（北東から）

東部分を落ち込みに切られており、その削平の際に流れ込んだと思われる部位が、壙棺墓のすぐ横の落ち込み内部から出土している。墓墳も削平で床面近くしか残存しておらず、やや細長い楕円形に近く、床面の中央部分は周囲よりも一段低くなっている。主軸はおおよそN-43°-Wの方位にとり、ほぼ水平に近い状態で埋置される。弥生時代中期前半と考えられる。

出土土器（図版40、第50図3・4）

3・4はともに壙棺として使用された大型甕である。3は上甕で、外面淡黄茶褐色、内面黒灰褐色を呈す。器表はナデ調整が施され、外面底部近くにわずかにハケ調整の痕跡が残るのみでナデ消されている。口縁部は、断面が逆L字状で、上面の中央部はやや窪み内に低く傾斜する。胴部に断面三角形の突帯を1条廻らせる。2箇所に穿孔の可能性が考えられる部分があるが、不明瞭な点もあり確実とは言えない。復元口径は71.0cm、残存高89.0cmを測る。4は下甕で、外面淡黄茶褐色、内面黒灰褐色を呈す。器表はナデ調整が施され、部分的にわずかにハケ調整の痕跡が残るのみでナデ消されている。口縁部は、断面が逆L字状で、上面の中央部はやや窪み、内に低く傾斜する。胴部に断面三角形の突帯を1条廻らせる。1箇所に穿孔の可能性が考えられる部分があるが、不明瞭な点もあり確実とは言えない。復元口径は72cm、残存高65.0cmを測る。

3号壙棺墓（図版26、第49図）

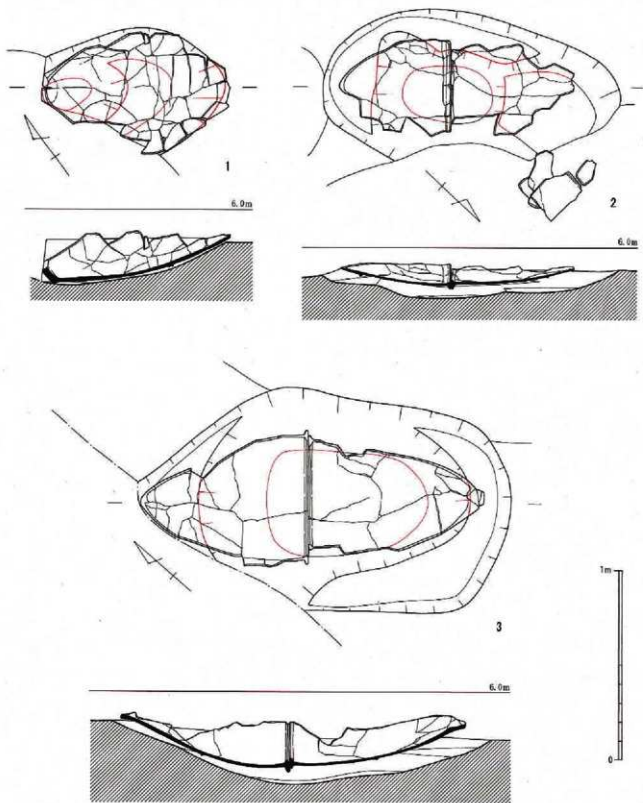
3号壙棺墓は調査区中央よりやや南側の西隅に位置する合口の成人用壙棺墓である。上部は大きく削平されており、2号壙棺墓に切られる先後関係である。東側を落ち込みに切られており、西側は墓墳が一部調査区外へと及んでいる。墓墳の平面形は南東の下甕側は幅広いが、反対の北西側では狭まっていくようである。床面は中央部に向け徐々に深くなり、ほとんど平坦面をなしていない。主軸はおおよそS-41°-Eの方位にとり、ほぼ水平に近い状態で埋置される。出土壙棺から、弥生時代中期中頃と考えられる。

出土土器（図版40、第50図5・6）

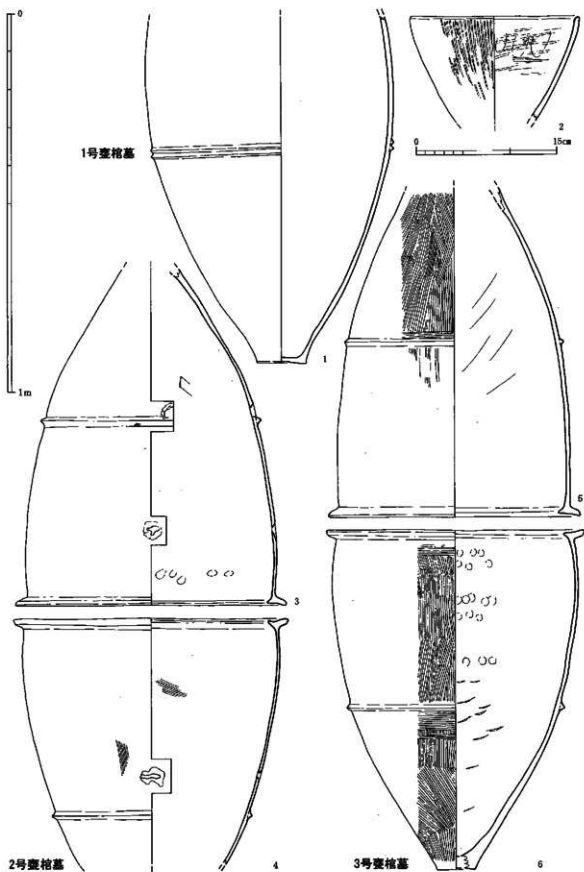
5・6はともに壙棺として使用された大型甕である。5は上甕で、外面橙茶褐色、内面灰茶褐色を呈す。口縁部は、断面が逆L字状で、内に低く傾斜する。胴部に断面三角形の突帯を1条廻らせる。内面はナデ調整を施し、わずかに工具痕らしき痕跡が見られる。外面は、突帯より上半で密な縦方向のハケ調整の後に、突帯横に横方向にハケ調整を施す。突帯より下半では、ナデ調整によりわずかにハケ調整が残存する程度である。復元口径は66.2cm、残存高88.0cmを測る。6は下甕で、外面橙茶褐色、内面灰茶褐色を呈す。口縁部は、断面が逆L字状で、上面の中央部はやや窪み、内に低く傾斜する。胴部に断面三角形の突帯を1条廻らせる。内面は、ナデ調整により下半に工具痕が残存する程度で、上半には指頭圧痕が残る。外面は密に縦方向のハケ調整が施され、その後突帯横と口縁部下位に横方向のハケ調整を施す。なお、突帯下半の縦方向のハケ調整は、上位から下位への順に施した切り合いとなっている。復元口径66.0cm、復元底径9.7cm、残存高は89.7cmを測る。

(6) 落ち込み（図版27、第51図）

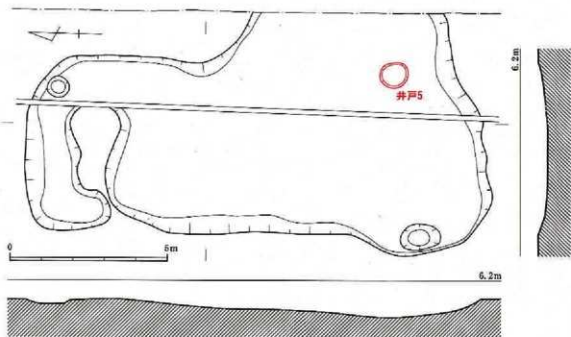
落ち込みは、調査区中央部よりやや南側に大きく広がっている。東西方向では、調査区東西



第49图 1区甕棺墓实测图 (1/20)



第50図 1区墓棺および墓棺内出土土器実測図（2は1/4、他は1/10）



第51図 1区落ち込み実測図 (1/120)

両端近くまで至っている部分もあり、東側では一部調査区外にまで及び、南北方向では16m程度に渡っている。平面形は不定形である。壁の立ち上がりは、ほとんどの部分で非常に緩やかである。また、床面の高さもあまり一定しておらず、検出面より15~40cm程度である。2・3号甕棺を切っており、掘削後の床面から5号井戸が検出されたが、他の遺構との切り合いは全くない。やや斑な淡黄茶褐色でわずかに砂質となる埋土が、全体的に均質に堆積する。弥生土器が多く出土するが二次堆積による混入品と考えられ、他にも中世後期を中心とした遺物も出土する。第52図1が最も新しい遺物であるが、同一時期に該当する遺物は他には無いため混入品の可能性も捨てられないが、この遺物を参照するならば、埋没時期は近世以降と考えられる。

出土土器 (図版41、第52~53図1~53)

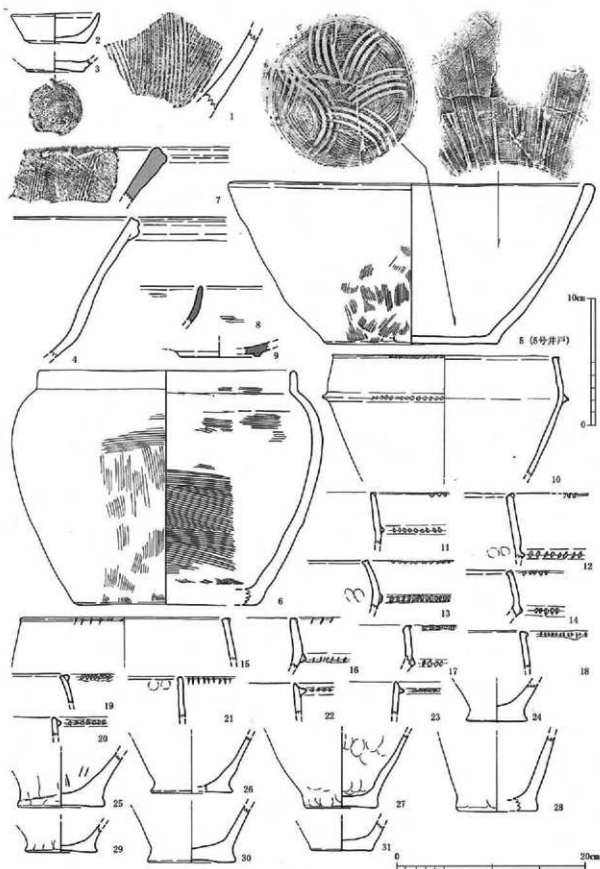
1は播鉢の胴部で、底部と近接する部位である。内外面ともに黒茶褐色釉を施し、焼縮められており、胎土は赤茶褐色を呈す。播目の単位は幅5cm以上ある。出土遺物中最も新しい時期のもので、近世以降である。

2は土師器小皿である。淡灰茶褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。口径6.8cm、底部径4.3cm、器高2.4cmを測る。3は土師器小皿の底部である。黄白褐色を呈し、底部外面には糸切り痕が残る。底部径は4.6cmを測る。4は土師器土鍋である。口縁部外面を貼り付けにより肥厚させ丸みを帯びており、玉縁状となる。また、口縁端は強いナデによりやや窪んだ面をなす。残存部下位に屈曲部があり、外面はそれより上位に煤の付着が目立ち黒茶褐色を呈す。内面の口縁部付近は淡黄茶褐色、下位は黒茶褐色を呈す。5は土師器播鉢で、外面橙黄褐色、内面淡黄茶褐色を呈し、内面には黒斑が見られる。外面はハケ調整の後にナデを施しており、底部外面には密にハケが残存する。内面には、非常に細かなハケ調整の後に播目を施し、底部の播目は放射状に近い形で施す。播目は、幅2.5cm程度で5本単位となっており、目の幅は体部で2mm、

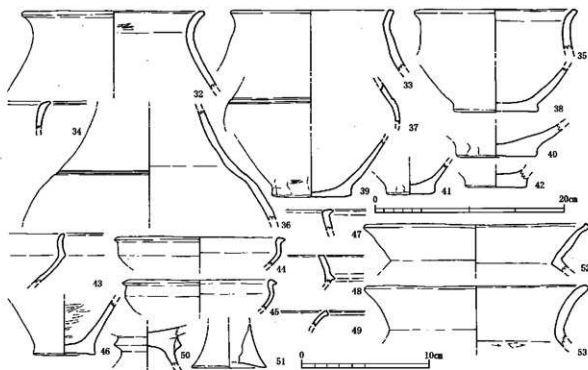
底部で3mmと非常に粗いものである。6は土師器鉢である。淡黄褐色を呈し、外面はハケ調整の後にナデ調整を施し、内面にはハケ調整が密に見られる。また、内面肩部付近に接合痕が認められる。7は瓦質土器播鉢の口縁部である。暗灰褐色を呈し、外面はナデ調整が見られ、内面はハケ調整の後に幅1.7cm、8本単位の撞目が施される。8は瓦器碗の口縁部の小片である。器表は摩滅気味である。9は瓦器碗の底部の小片である。丸みを帯びた低い高台が貼り付けられる。白灰褐色を呈し、ナデ調整が施される。

10~51は弥生土器である。10~31は甕である。10~20は胴部に刻目突帯を有す屈曲部のあるもので、21~23は胴部が張らず口縁部から底部までそのままはまる砲弾形の器形のものと考えられる。25~31は底部である。10は黄橙褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。刻目の断面は丸く、口縁部突帯は小さい。11は淡黄灰褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。口縁部には突帯を貼り付けず、口唇部外端部に直接刻目を施す。12は灰茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。口縁部突帯はやや上向きに貼り付けられる。刻目は角柱状の工具の面を押し当てたような形状である。13は淡黄橙褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。屈曲部の突帯は幅広く、またそこから口縁部に向かって内湾しながら立ち上がる。口縁部には突帯を貼り付けず、口唇部外端部に直接刻目を施す。14は淡黄橙褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。口縁部には突帯を貼り付けず、口唇部外端部に直接刻目を施す。また、屈曲部から口縁部まではやや内湾気味に立ち上がる。15は淡黄橙褐色を呈し、ナデ調整を施す。胴部にも突帯を貼り付けず刻目を施す板付祖形甕の可能性も捨てきれない。16は淡黄茶褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。口縁部には突帯を貼り付けず、口唇部外端部に直接刻目を施す。器壁は他のものに比べ、やや厚手である。17は淡黄茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。18は淡黄茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。口縁部突帯に細かい刻目を施す。口縁部には突帯を貼り付けず、わずかにつまみ出した口唇部外端部に直接刻目を施す。19は淡黄白褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。20は淡黄橙褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。突帯は、口縁上端よりもわずかに下位に貼り付けられる。21は外面淡茶灰褐色を呈し、内面淡茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。22は淡黄橙褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。やや高い突帯が口縁上端よりもやや下位に貼り付けられる。口縁部には突帯を貼り付けず、口唇部外端部に直接刻目を施す「板付祖形甕」と考えられる。23は外面灰茶褐色、内面暗褐色を呈し、ナデ調整を施す。突帯は口縁上端よりもやや下位に貼り付けられる。24は淡黄茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。25は外面暗茶褐色、内面淡灰茶褐色を呈す。内面はナデ調整を施し、外面には板状の工具によるナデと思われる痕跡が残る。26は淡灰茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。27は外面橙茶褐色、内面橙褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。28は外面茶褐色、内面淡黄茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。29は淡黄灰褐色を呈し、器表はやや摩滅が激しいが、外面には板状の工具の圧痕が残存する。30は外面淡橙黄褐色、内面淡黄茶褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。31は外面橙茶褐色、内面暗褐色を呈し、ナデ調整を施す。

32~42は弥生土器壺である。32は淡黄橙褐色を呈し、器表は摩滅が激しいが、口縁部内面に微かにミガキが残存し、外面にもミガキを施していたと考えられる。33は淡黄白褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。34は淡茶灰褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。35は淡黄白褐色を呈し、ナデ調整を施す。36は外面淡橙黄褐色、内面灰褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。外面肩部に2条の沈線を通らせる。頸部はややすぼまり気味で、胎土にはわずかに角閃石が見られる。37



第52図 1区落ち込み出土土器実測図① (1~9は1/3、他は1/4)



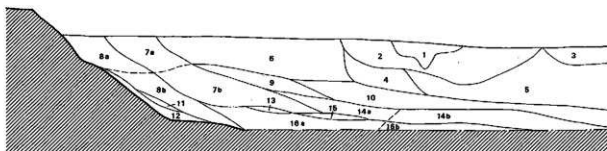
第53図 1区落ち込み出土土器実測図② (52・53は1/3、他は1/4)

は橙黄褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。肩部に2条の沈線を廻らす。38は外面橙茶褐色、内面淡灰茶褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。39は外面淡橙茶褐色、内面淡灰黄褐色を呈し、器表は摩滅が激しいが、外面にわずかにミガキが残存する。40は外面淡茶褐色、内面淡黄灰褐色を呈し、外面には黒斑が見られる。器表は摩滅が激しい。41は淡黄白褐色を呈し、外面には黒斑が見られる。器表は摩滅が激しい。42は暗茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。

43～45は弥生土器浅鉢である。43は淡茶灰褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。胴部でく字状に強く屈曲し、口縁部は外反する。44は淡橙黄褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。胴部はく字状に緩く屈曲し、口縁部には突帯を貼り付ける。45は淡橙黄褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。胴部はく字状に緩く屈曲し、口縁部には突帯を貼り付ける。

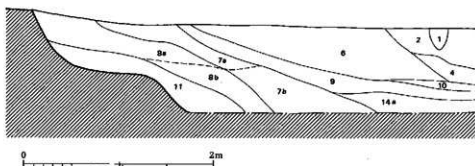
46は壺の底部の形状であるが、内面にミガキを施し、鉢と考える。橙茶褐色を呈し、外面は摩滅が激しい。47は刻目のない突帯を貼り付ける壺か。橙褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。48は胴部の屈曲部に突帯を有すが、口縁部にも突帯にも刻目のない壺か。淡橙褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。49の器形は不明であるが、口縁部と考えられ、外反し端部は面をなす。橙黄褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。50は高環の杯部・脚部の接合部で、突帯を廻らす。黄茶褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。胎土にはわずかに角閃石が見られる。51の器形は不明であるが、底部と考えられる。暗茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。

52は壺の口縁部で淡橙褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。頸部は強く屈曲する。弥生時代終末期のものと考えられる。53は土師器壺の口縁部で、外面淡灰茶褐色、内面暗灰褐色を呈す。頸部は屈曲し、内面の屈曲部より下位にはケズリを施し、他はナデ調整を施す。8世紀代のものと考えられる。



β

5.9m β'



1. 灰赤褐色土 非常にしりより
鉄分沈着 土層5号位の影響土
2. 黄褐色粘土 1号位5号位の影響土
3. 灰褐色土 グライ化やや青色化
4. 暗茶褐色土 グライ化やや青色化
5. 暗茶褐色土 4よりグライ化進行
6. 赤褐色土
- 7a. 暗茶褐色砂質土
- 7b. 7aのグライ化したもの
- 8a. 赤褐色土
- 8b. 8aのグライ化したもの
9. 暗赤褐色土 ややグライ化
10. 暗茶褐色土 9よりグライ化進行
11. 暗褐色砂質土
12. 暗褐色土
13. 暗赤褐色土
- 14a. 灰赤褐色粘土 非常にしりより
- 14b. 14aのグライ化したもの
15. 暗茶褐色土
- 16a. 暗茶褐色砂質土
- 16b. 16aのグライ化したもの

第54図 1区谷土層実測図 (1/40)

(7) 谷 (図版27・28、第8・54図)

谷は調査区北端に位置し、当初その周辺で地山の粘質土とは異なる暗茶褐色主体のやや砂質となる土壌が一定範囲に広がっていたため、一部にトレンチを掘削した。その結果、検出面より1m以上も掘削でき、ある程度の土器も出土したため、土層観察用のベルトを残しながら全面的に掘削した。谷の落ち際は、主に北北西・南南東軸線上で延びており、東側に面して落ち込んでいる。また、落ち際のラインは攪乱・流路跡によって途切れる部分もあるが、調査区東端から北側へと延び一旦調査区西端に至る。更に北側では、落ち際のラインは東側へと向きを変えており、調査区内で再度検出される。また、その調査区西端部の落ち際の方向転換点付近では、第9図右上のトレンチの基本土層図中に見られるように、非常に浅くなっている。5号溝、10号井戸、流路跡はともにこの谷の埋没後の掘削と確認できる。湧水のためポンプで排水を行いながら掘削は検出面より1.2m前後まで行い、より下層にも続くものと思われたが、著しい湧水と土壌の泥質化のため下位の掘削は断念した。埋土は、暗茶褐色のやや砂質となるものが主体であるが、5号溝の直下ではその影響と考えられるグライ化・粘質化が著しい部分も見られる。また、埋土の同一単位で見られる中でも、下層になるにつれグライ化する傾向がある。壁の立ち上がりはさほど緩やかではなく、人為的な手の加わった可能性もあろうが、検出面での幅が5m以上となっても土層等で反対側の立ち上がる兆候が見られないため、環濠等の溝になるとは考えにくい。出土土器から弥生時代前期後半頃の時期に埋没したと考えられる。

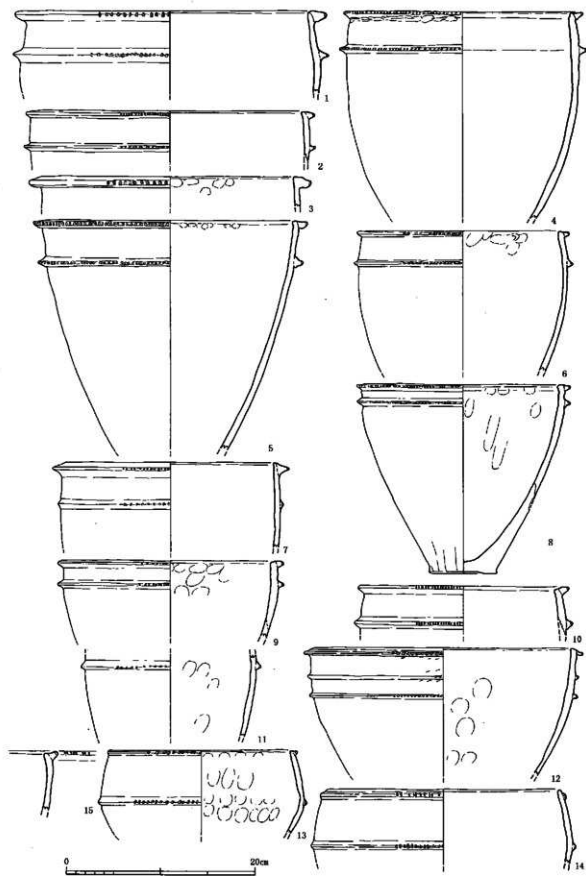
出土土器 (図版41、第55～57図 1～53)

出土土器の大半は弥生土器で、1～37は甕である。そのうち1～15は、刻目突帯を口縁部や胴部に貼り付けるものである。1は橙茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。2は淡灰茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。3は茶褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。4は外面の突帯より下位は煤が付着し黒茶褐色を呈し、また黒斑が見られる。外面口縁部付近と内面は淡灰黄褐色を呈す。ナデ調整を施し、胎土に角閃石が見られる。5は火にかけての使用によるものか黒茶褐色を呈す。ナデ調整を施し、胎土には角閃石が見られる。6の外面は煤が付着し黒茶褐色を呈し、また黒斑が見られる。内面は淡茶灰褐色を呈す。ナデ調整を施す。胎土に雲母・角閃石が見られる。7は外面淡茶褐色、内面淡黄茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。胎土に雲母・角閃石が見られる。8は外面上位には煤が付着し黒褐色、下位は黄茶褐色を呈し、内面は黒茶褐色を呈す。ナデ調整を施し、胎土には角閃石が見られる。9の外面は煤が付着し黒茶褐色、内面は淡灰茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。胎土に雲母・角閃石が見られる。10は外面暗茶褐色、内面淡茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。11は外面には煤が付着し黒茶褐色を呈し、内面は淡橙黄褐色を呈す。ナデ調整を施す。12は口縁部から下位になるにつれ急激にすぼまる器形である。突帯は口縁部を含め3条貼り付けられる。暗茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。13は外面淡灰茶褐色、内面淡黄茶褐色を呈す。ナデ調整を施す。14は外面暗茶褐色、内面淡橙黄褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。突帯は非常に薄く、口縁部よりはやや下位に貼り付けられる。15は外面には煤が付着し暗茶褐色を呈し、内面は茶褐色を呈す。残存する口縁部から6cm程下位までに突帯がないため、口縁部突帯のみの1条の可能性もある。

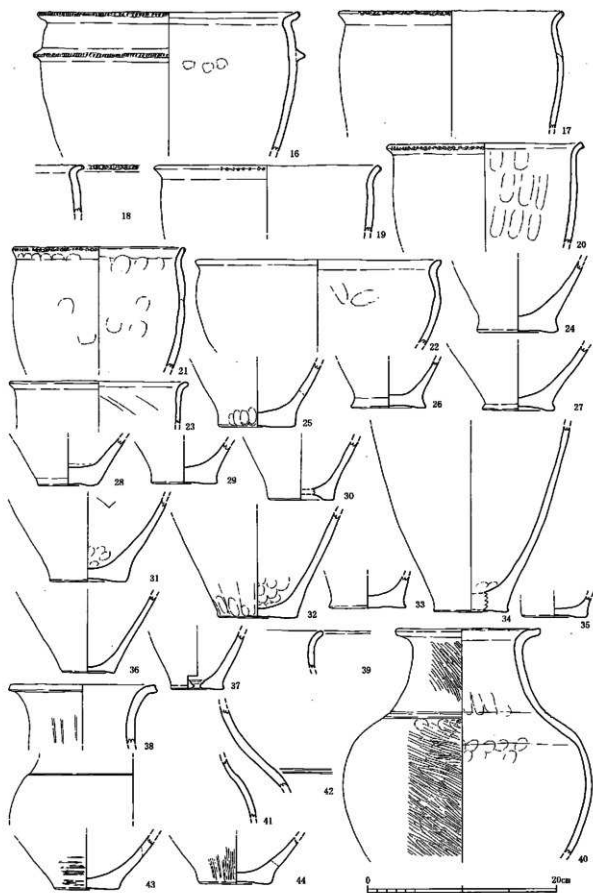
16は刻目を有す突帯を胴部に貼り付け、口縁部は刻目を施す如意状口縁となるものである。外面は暗灰茶褐色を呈し、黒斑が見られる。内面は灰茶褐色を呈す。ナデ調整を施す。

17～23は如意状口縁の甕である。17は淡橙黄褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。18は淡灰茶褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。19は外面橙茶褐色、内面橙黄褐色を呈し、ナデ調整を施す。刻目は口縁外唇部に施す。20は淡灰茶褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。刻目は口縁外唇部に施す。21は外面には黒斑が見られ、暗灰茶褐色を呈し、内面は灰茶褐色を呈す。ナデ調整を施し、刻目は口縁外唇部に施す。22は、胴部が下位で急激にすぼまり丸みをもつ器形である。口縁部に刻目は施さない。外面には煤が付着し黒茶褐色を呈し、内面は暗茶褐色を呈す。23は口縁部に刻目がなく、淡黄茶褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。

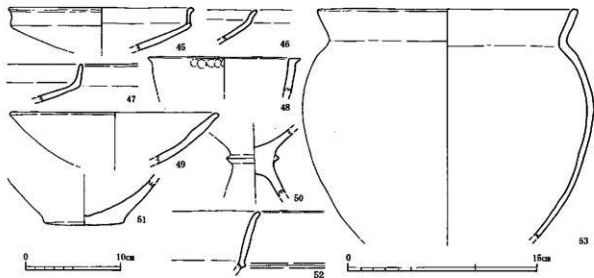
24～37は底部である。24は外面黄茶褐色、内面淡黒灰褐色を呈し、ナデ調整を施す。胎土にはわずかに角閃石が見られる。25は外面淡黄茶褐色、内面淡黒茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。胎土に石英片とわずかに角閃石が見られる。26は橙褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。27は外面淡灰茶褐色、内面淡灰黄褐色を呈し、ナデ調整を施す。28は外面灰黄褐色、内面淡黄茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。29は淡黄橙褐色を呈し、ナデ調整を施す。30は黒茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。胎土には雲母片が見られる。31は淡灰黄褐色を呈し、内面ナデ調整を施し、外面は摩滅・剥落が著しい。32は外面暗茶褐色、内面暗黒灰褐色を呈し、ナデ調整を施す。胎土には角閃石が見られる。33は淡灰茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。34の外面は淡灰茶褐色を呈し、黒斑が見られ、内面淡灰黄褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。35は淡黄橙褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。36は淡灰黄褐色を呈し、ナデ調整を施す。胎土には雲母片が見られる。37



第55图 1区谷出土土器实测图①(1/4)



第56图 1区谷出土土器实测图② (1/4)



第57図 1区谷出土土器実測図③ (52・53は1/3、他は1/4)

は外面暗茶褐色、内面黄灰褐色を呈し、ナデ調整を施す。底部には穿孔があり、焼成後に施されたと考えられる。

38～44は壺である。38は強く外反して開口口縁部で、端部は面を形成する。淡黄茶褐色を呈し、器表は摩滅が激しいが暗文と思われる痕跡が残る。39は淡橙茶褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。40の口縁部は強く外反して開き、肩部には沈線を2条廻らせる。外面には密なミガキが見られ、内面にはナデ調整を施す。外面黄茶褐色、内面淡黄茶褐色を呈す。41は肩部で外面に段が形成される。橙褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。42は肩部に浅い2条の沈線を廻らせる。外面黄橙褐色、内面淡黄灰褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。43は淡灰茶褐色を呈し、内面にはナデ調整を施し、外面には微かにミガキが見られる。胎土には角閃石が見られる。44は淡灰黄褐色を呈し、外面には非常に強く押圧して施したと思われる縦方向のミガキが見られる。

45～47は浅鉢である。45は黄橙褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。く字状に屈曲してから、口縁部へとやや外反して立ち上がる。口縁部は外端部に薄く突帯を貼り付けて肥厚させているようであり、丸みを帯びている。46は淡黄白褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。屈曲部より上位で外反しながら口縁部へと立ち上がる。47は橙黄褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。

48の器形は不明であるが、鉢であろうか。口縁部に突帯を貼り付けており、口縁端部は強いナデによりやや窪んだ面をなす。淡茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。49は鉢と考えられ、淡黄茶褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。口縁端部はやや外反気味である。50は高杯の杯部・脚部の接合部で突帯を1条廻らせる。淡橙黄褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。

51は弥生時代後期の壺底部と思われる。底部外面はわずかにレンズ状となる。外面は二次焼熱によるものか赤橙褐色を呈し、内面は茶褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。52は土師器壺の口縁部である。残存部下端には屈曲部が見られる。53は土師器壺である。調査区外へ上るスロープ部分で周囲より高い位置での出土で、別遺構に帰属する可能性がある。明橙褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。胎土には橙褐色粒の混合物が目立つ。

(8) 流路跡 (第8図)

流路跡は調査区北側に位置し、調査区を東西に横断する。埋土はグライ化の著しい青灰色で非常に粘質の強いものである。全体を20cm程度掘り下げるに止まったが、谷の掘削のために、谷を切っている部分を重機で掘りあげた際には谷の掘削深度近くまで埋土が認められたため、深さは検出面より1.2m程度まで至ると思われる。多様な土器が出土するが、陶磁器等から近代以降まで使用されていたと思われる。

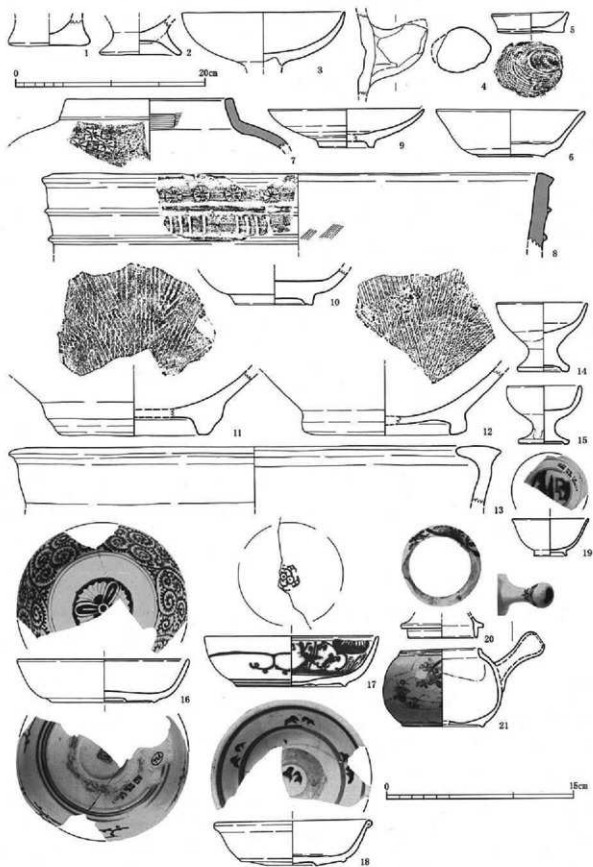
出土土器 (図版41、第58図1～21)

1は弥生土器甕の底部で、暗茶褐色を呈す。強くローリングを受けている。2は弥生土器の脚付きの甕の底部である。暗茶褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。3は土師器高坏の杯部である。橙茶褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。脚部は接合部からそのまま剥落して欠失している。4は土師器瓶の把手である。橙黄褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。5は土師器小皿である。暗黄灰褐色を呈し、底部外面には糸切り痕が残る。6は土師器杯である。淡黄茶褐色を呈し、底部外面には糸切り痕が残る。7は瓦質土器茶釜の口縁部である。淡黒灰褐色を呈し、器表は摩滅するが、口縁部内面にはハケ調整が見られる。また、外面肩部には「*」の文様のスタンプを押捺する。8は瓦質土器火鉢の口縁部である。淡茶灰褐色を呈し、ナデ調整を施すが、内面にはハケ調整も残存する。外面には小さな突帯が貼り付けられ、四本平行文・菊花文のスタンプを押捺される。9は陶器皿で高台を削り出す。灰白色釉を施し、内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎがなされる。胎土は淡黄茶褐色を呈す。10は青磁碗である。高台内は施釉されず、釉の厚さは全体的に不均一である。11は陶器播鉢で、焼締められる。内面は使用により激しく摩滅する。播目の単位は、幅6cm程度である。12は陶器播鉢で、焼締められる。暗茶褐色釉を全体的に施し、内面には重ね焼き時に、上に乗せた個体の高台の貼り付いた痕跡が残る。播目の単位は幅6cm程度である。13は大甕の口縁部である。焼締められており、外面には暗茶褐色釉を施す。14は陶器仏飯具である。淡黄灰褐色釉を施し、底部は露胎で暗茶褐色を呈す。15は陶器仏飯具である。黄茶褐色釉を施し、底部は露胎で暗茶褐色を呈す。16は磁器皿である。内面はたこ唐草文様を有す。蛇ノ目高台であり、高台には二重方形枠内に満福が見られる。19世紀前半頃のもののか。17は陶胎染付の皿である。見込みには五弁花文を有す。蛇ノ目高台となっており、貫入が入る。18世紀前半頃のもののか。18は磁器皿で、口縁はやや肥厚する。見込みには蛇ノ目釉剥ぎが見られ、蛇ノ目高台である。19は磁器壺である。20は磁器急須の蓋である。21とセットになるもので、銅板転写の文様を有す。21は磁器急須で、20とセットとなるものである。銅板転写による草花や鳥の文様を有し、底部と口縁部は露胎である。注口は欠失し、把手は残存する。近代の所産である。

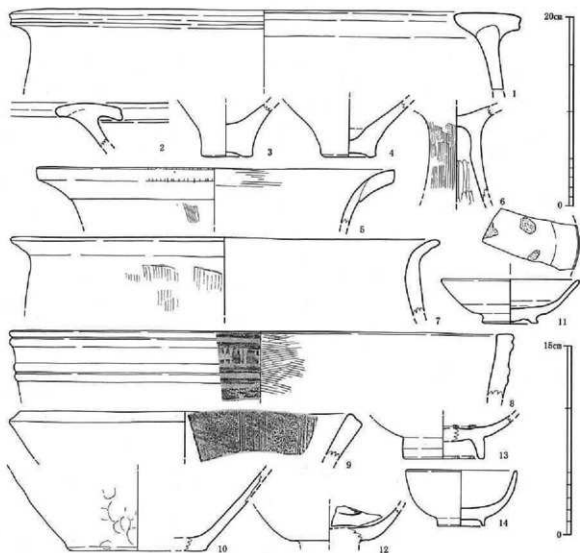
(9) その他の出土土器 (図版41、第59・60図1～38)

以下ではピット、複攪出土の土器をはじめ、検出時や排土中から、また表採によって取り上げた土器について触れる。

1～14はピット出土である。1は甕棺口縁部で、外面橙黄褐色、内面淡灰褐色を呈す。ナデ調整を施し、胎土には角閃石が目立つ。接合部で欠損し、擬口縁が生じる。復元口径は、54.2cmを測る。汲山式で弥生時代中期前半にあたる。2は甕棺口縁部で、淡黄灰褐色を呈す。ナデ

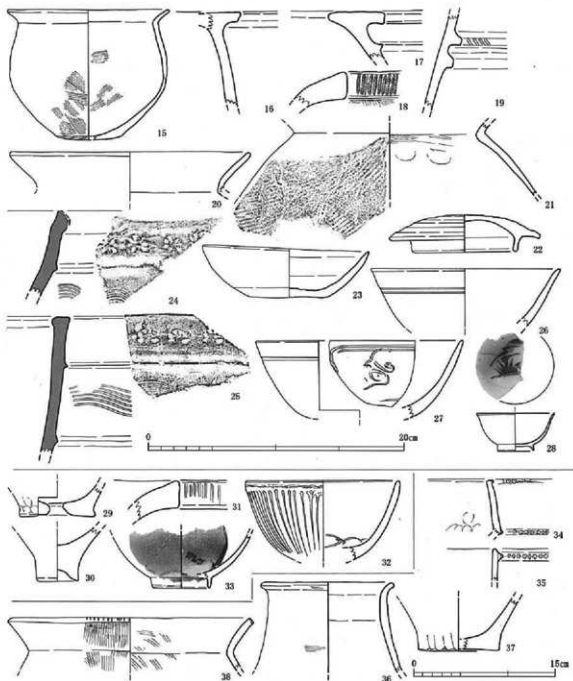


第58图 1区流路跡出土土器実測図(1・2は1/4、他は1/3)



第59図 1区ピット出土土器実測図（1～5は1/4、他は1/3）

調整を施し、胎土には角閃石が目立つ。立岩式で弥生時代中期末にあたる。3は弥生土器甕の底部である。暗灰白褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。中期前半のものと考えられる。4は弥生土器壺の底部で、二次被熱によるものか外面は暗橙褐色を呈す。器表は摩滅が激しく、胎土には石英片、角閃石が目立つ。5は弥生土器壺の口縁部で、淡黄茶褐色を呈す。内外面ともに一部ハケ調整が残り、外面には口縁部の接合部分に段が生じる。口縁部下端には、刻目が施される。前期後半のものと思われる。6は弥生土器高坏で、淡灰茶褐色を呈す。外面にはハケ調整が見られ、胎土には雲母片が目立つ。中期のものと考えられる。7は土師器甕の口縁部である。復元口径は34cmと非常に大きいのが、残存割合は決して大きくはないため、確実ではない。8は瓦質土器火鉢で、黒褐色を呈し非常に硬質である。外面には尖帯が廻らされ、また二本平行線文と菊花文の端部のみのような形状のスタンプが押捺される。内面にはハケ調整が見られる。16世紀のものと思われる。9は瓦質土器播鉢の口縁部で、暗灰褐色を呈す。捕目の単位は、幅2cm程度である。10は瓦質土器鉢の底部で、外面黒灰褐色、内面淡灰褐色を呈す。外面はナデ調整が見られ、内面は摩滅が激しい。11は高麗青磁碗で、青灰色を呈す。内外面ともに全面



第60図 1区攪乱・検出時および拵土中出土土器実測図 (20~28・32・33は1/3、他は1/4)

的に施釉され、見込み、高台ともに目跡が残る。12は青磁碗である。内面にわずかに文様が残存する。13は磁器碗で高い高台を有し、白色を呈し全面的に施釉される。見込み、高台ともに目跡が見られる。14は湯飲み碗で、淡緑黄色釉がほぼ全面的に施され、貫入が入る。高台内壁には目跡が廻っており、口唇部のみ暗茶褐色釉を施す。

15~28は攪乱出土の遺物である。15は弥生土器鉢で、淡黄茶褐色を呈し、外面下部には黒斑が見られる。器表は摩滅が激しいが、内外面ともにハケ調整が認められる。底部はレンズ状で後期後半のものと考えられる。16は甕棺の口縁部で、外面淡茶褐色、内面淡黄灰褐色を呈す。器表は摩滅が激しく、胎土には雲母片がやや目立つ。汲田式甕棺で弥生時代中期前半にあたる

と考えられる。17は甕棺の口縁部で、淡黄茶褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。立岩式甕棺で弥生時代中期末にあたると考えられる。18は弥生土器大型の甕の口縁部である。茶褐色を呈し、端面にはハケ工具端部によると思われる刻目を施す。弥生時代後期の所産である。19は弥生土器大型の甕の胴部である。淡茶褐色を呈し、器表は摩滅が著しいが、2条の突帯の端部にはわずかに刻目の痕跡が見られる。弥生時代後期の所産である。20は庄内式の甕の口縁部である。淡暗灰褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。頸部の屈曲は強い。弥生時代終末期の所産である。21は庄内式の甕である。淡黒灰褐色を呈し、器表は摩滅が激しいが、外面にはタタキ、内面にはケズリを施す。頸部の屈曲は強い。弥生時代終末期の所産である。22の全体的な形状は須恵器杯蓋であるが、かえりはさほど内側に入らずに延びて断面はやや丸みを帯び、受部とかえりの間が幅広いなど特徴的な細部となっている。また焼成の不良によるものか完全な土師質で橙褐色を呈す。内面天井部は煤の付着によるものか黒変し、口縁を上にして燈明皿として用いた可能性もある。外天井部は回転ケズリ、他は回転ナデを施す。7世紀前半代のものであろうか。23は土師器杯で暗茶褐色を呈す。全体的にナデ調整が施され、底部外面には微かに糸切り痕が残る。12世紀代のものであろうか。24は瓦質土器火鉢の口縁部で、黒茶褐色を呈す。摩滅の著しい部分もあるが、外面には花文と思われるスタンプを押捺し、櫛描沈線も見られる。25は瓦質土器火鉢で、灰褐色を呈す。外面には花文と思われるスタンプを押捺し、櫛描沈線も見られる。26は青磁碗の口縁部である。27は龍泉窯系青磁碗である。内面に文様が見られる。12世紀後半代のものか。28は磁器壺である。内面には内面見込みには、青色の吹き付けにより稲の文様を施す。

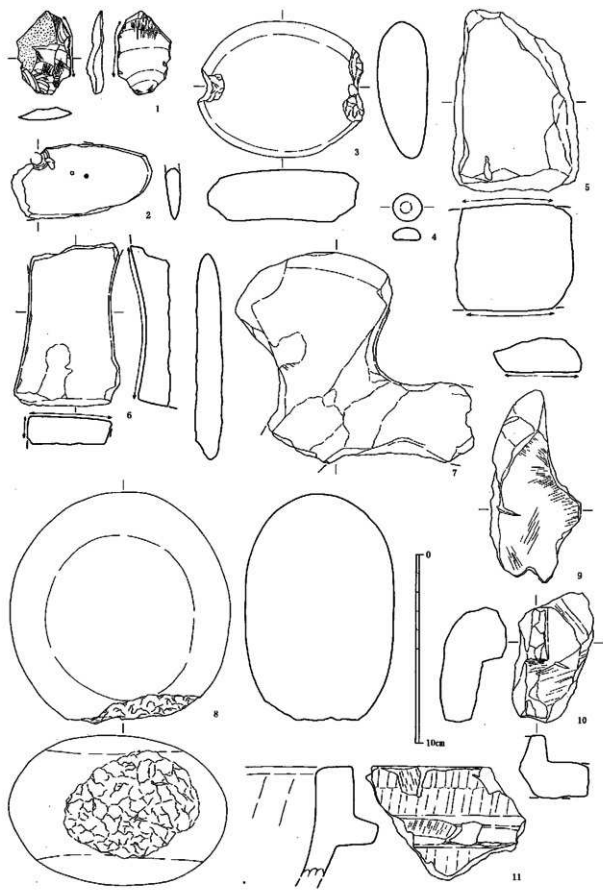
29～33は検出時の出土である。29は弥生土器甕の底部で、暗茶褐色を呈す。ナデ調整を施し、焼成後の穿孔が見られる。前期の所産と思われる。30は弥生土器甕の底部で、橙茶褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。中期の所産と思われる。31は弥生土器大型の甕の口縁部である。端面には刻目を施す。後期の所産である。32は青磁碗で、外面に線描連弁文が見られ、内面見込みにもわずかに文様が残る。16世紀代のものである。33は磁器碗で淡緑色釉を施し、貫入が入る。高台の外面下端と端面の軸は掻き取られる。

34～38は排土中の出土である。34は弥生土器甕の口縁部で、2条の刻目突帯を有す。淡茶褐色を呈し、ナデ調整を施す。早期のものと思われる。35は弥生土器甕の口縁部で、口縁端よりやや下位に刻目突帯を有す。淡黄茶褐色を呈す。早期のものと思われる。36は弥生土器壺で、橙黄褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。早期のものと思われる。37は弥生土器壺底部で、橙茶褐色を呈す。器表は摩滅が激しいが、外面下端には指頭圧痕が残る。前期の所産である。38は弥生土器甕の口縁部で、淡黄茶褐色を呈す。内外面ともにハケ調整が残り、口縁端部には刻目が施される。後期後半のものと思われる。

(10) 石製品・土製品・瓦・金属製品・木製品

石製品 (図版42、第61・62図1～14)

1～14は1区出土の石製品である。1は6号溝出土で、黒曜石製のスクレイパーである。片面は剥片を取り出す際の打割で生じた剥離面のみで打点も認められ、更に調整剥離によりある程度の整形がなされている。打点付近と片面の一部には原礫面が残る。また、側縁の一部に微



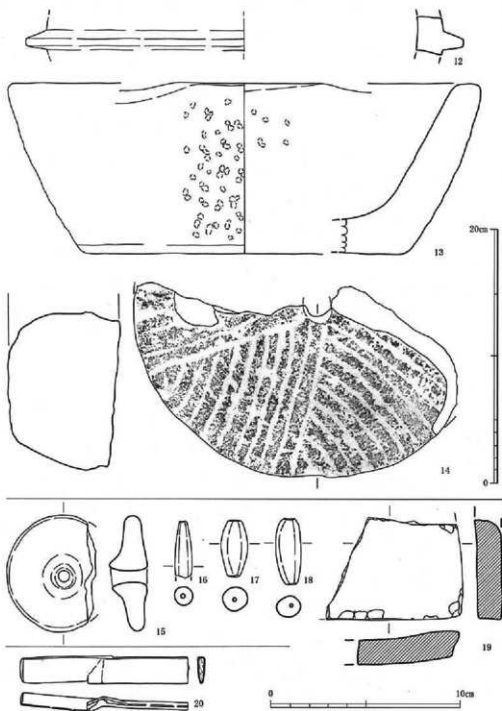
第61图 1区出土石製品実測図(1/2)

細刻離が集中し、使用されたものと思われる。長さ4.4cm、幅2.7cm、厚さ0.8cmで7.2gを測る。2は石包丁で攪乱出土である。大きく欠損しており、刃部も細かな欠損が目立つ。孔が部分的に残存しており、また穿孔しようとしてすぐに中断したような小孔が2箇所に見られる。残存長7.4cm、残存幅3.9cm、厚さ0.7cm、重さ33.6gで片岩製。3は打欠石錘でピット出土である。長軸側の両側縁を打ち欠いており、長さ7.2cm、幅8.7cm、厚さ2.7cm、重さ248.1gで玄武岩製。4は蛇紋岩製の黒色を呈す円形の石製品で、碁石であろうか。落ち込み出土であり、片面は非常に平坦に加工している。径1.4cm程度、厚さ0.6cmで重さ2.3gを測る。5は砥石で、3号井戸出土である。欠損しているが、砥面は2面あり非常に平滑である。残存長9.6cm、残存幅6.7cm、厚さ5.7cm、重さ569.7gで砂岩製。6は砥石で、3号溝出土である。欠損するが、砥面は3面残存し平滑となっている。残存長8.6cm、幅5.6cm、厚さ1.5cm、重さ125.4gでシルト岩製。7は3号溝出土の異形石器で、十字形石器に類似するが、Y字状を呈す。欠損するが、残存部で刃部の形成のような加工がされるが、丸みを帯びており鋭利さは全くない。表面は風化するが、挟り部分の加工は敲打によるものと思われる。残存長11.2cm、残存幅12.6cm、厚さ1.4cm、重さ219.2gで安山岩製。8は叩石で、ピット出土である。側縁の一部を集中的に使用する。長さ12.2cm、幅11.5cm、厚さ7.9cm、重さ1594.9gで玄武岩製。9は攪乱出土の滑石片で、一部非常に平滑な面が残り、元來石鍋の一部であったことを窺わせる。ただ、二次的な加工もあり変形が著しい。10は攪乱出土で、把手の部分が残存する滑石製石鍋片である。二次的な加工で、削られ研磨される部分が多く、わずかな元來の残存面には、煤が付着する。11は滑石製石鍋口縁部で、1号土坑出土である。二次的な加工の痕跡もわずかながらあるが、鍋も残存し元來の形状をよく留めている。内外面ともに煤が著しく付着するが、鍋端部と口唇部内側の煤は見られない。12は検出時出土の石鍋片で、鍋が残存する。二次的な加工による変形が著しく、欠損断面部のほとんどが研磨されている。13は流路跡出土の鉢状の石製品である。気泡の多い火成岩を用いており、外面は敲打痕と思われる凹凸が目立ち、底部はやや平滑となる。内面は使用により、特に下部が非常に平滑となる。また、口縁部にはわずかであるが形状に変化があり、片口を作り出している可能性がある。14は挽臼の下臼で、流路跡出土である。気泡の多い火成岩を用いている。復元径は29.5cm程度であり、厚さ8.8cm、重さ4524.8gである。芯棒孔が残存し、振り目の幅は3mm程度でその間隔は9~14mmとなっており、全体を6分割すると思われる。

なお、確実な整形や使用が見られなかったため図示していないが、10点程度のサヌカイトや30点程度の黒曜石の剥片等が、6号溝を中心に検出されている。うち6号溝出土の黒曜石の資料3点を蛍光X線分析による産地推定を行っている。詳細は「IV 自然化学分析」(125頁)を参照していただきたい。

土製品および瓦 (図版43、第62図15~19)

15は土製紡錘車で、落ち込み出土である。一部欠損しており、白灰褐色を呈す。穿孔部分の片面のみが隆起する。径6.2cm、厚さ2.1cmである。16~18は管状土錘である。16は落ち込み出土で、橙茶褐色を呈す。残存長3.0cm、最大径0.9cm、孔径0.25cmで重さ2.3g。17は2号土坑出土で、灰茶褐色を呈す。やや短く、丸みをもった平面形をなし、端部の面は平坦である。長さ3.0cm、最大径1.6cm、孔径0.2cmで重さ4.9g。18は攪乱出土で、黄灰褐色を呈す。長さ3.5cm、



第62図 1区出土土製品・土製品および瓦・金属製品実測図(12~14は1/3、他は1/2)

最大径1.3cm、孔径0.15cmで重さ5.4g。19はピット出土の平瓦で、黒灰褐色を呈す。表裏面ともにナデ調整を施し、側面はシャープなヘラ切りの後ナデ調整を加える。

金属製品(図版43、第62図20)

20は刀子の青銅製の鞘と思われる、5号溝の出土である。大きな力が加わったためか、中心部分で折れ曲がっている。短軸の側縁は片側が閉じており、開口している側縁と欠損部からは内部の錆化した部分が見え、刀身部が残存している可能性がある。全長8.9cm、幅1.4cmで厚さ0.4cm。

木製品 (図版44・45、第63図1～8)

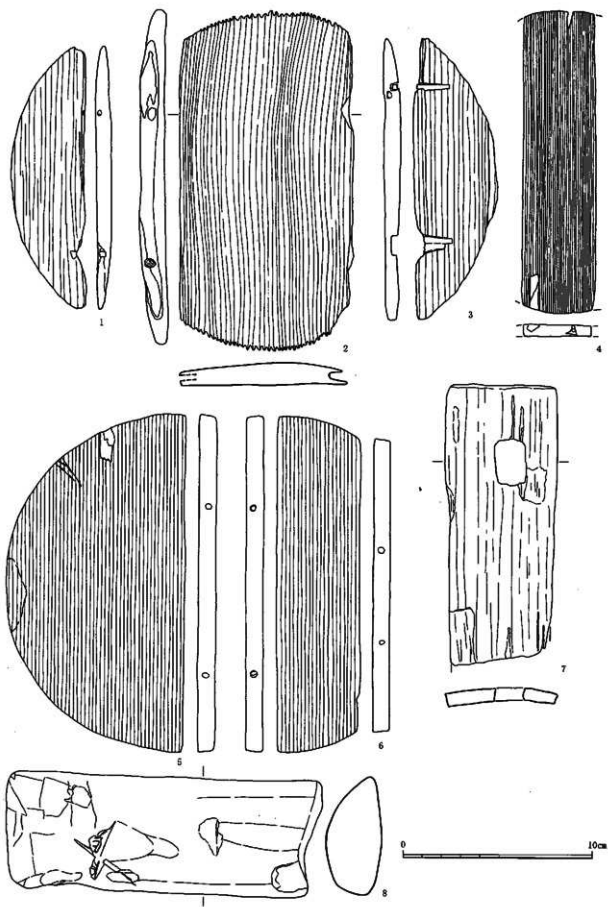
1～3はともに5号井戸出土で、桶底板であろうか。ともに劣化が激しく、木材の夏目が特に腐食しているため、冬目との間で差が生じ、表面は全体的に起伏が連続する様相となっている。また、側面には孔が施され、その中に心棒が残存しているものもある。よって複数の個体を組み合わせて製品となっていると考えられるが、1～3は全体的な形状や孔の位置等が必ずしも符合せず、これらがそのまま組み合うわけではないようである。井戸の汲水用に使されたものの一部か。4は3号溝出土で、用途不明である。木材は良好な遺存状態であるが、元来幅は両側に広がっていると考えられ、円形を呈していた可能性もある。端部はわずかに弧を描き、側面には孔と心棒が見られるため、他の部材と組み合わさる製品と考えられる。長さ16.0cmで厚さ0.6cmである。5・6は3号土坑出土で、桶底板であろうか。木材は良好な遺存状態である。ともに側面には孔と心棒が見られ、5・6は全体的な形状と孔の位置も符合することから、そのまま組み合わせて製品を形づくっていたと考えられ、欠失した部分も加えると円形をなしていたと考えられる。側面はやや傾斜しており、表裏でわずかながら径に差が生じている。大きい方面で径17.8cm、厚さ1.0cmを測る。井戸の汲水用に使されたものの一部か。7は5号井戸出土で、方形に近い孔を有し桶の把手部分と考えられる。断面はやや湾曲している。残存長14.5cm、厚さ0.7cmを測る。1～3と組み合わさる部材の可能性もある。8は用途不明で、1号井戸出土である。加工痕が見られ、表面は全体的に平滑となっている。断面は蒲葺状で、厚みのある形状となっている。長さ16.5cm、幅6.2cmで厚さ2.9cmを測る。図版45は7号井戸出土で、幹に加工を加えたものである。側面には加工を加えず幹元米の状態である。幹の切断面の片側は中心部が最も張り出すようにやや丸みを帯びて加工される。反対側の切断面は、外側をある程度残して内側を彫り窪めた形状となっている。用途は不明である。高さ35cm程度、幹の径は35～37cm程度である。

なお、3・5・7・図版45の資料については、樹種同定を行っている。詳細は「IV 自然化学分析」(123頁)を参照していただきたい。

(ii) 小結

1区の調査で検出した主な遺構を、時代の古い順に再度列挙すると、弥生時代早期～前期前半と考える4・6号溝、弥生時代前期後半の埋没と考える谷、弥生時代中期の甕棺墓3基、中世初頭頃の1・3号土坑、中世後期(16世紀代)の2号土坑、1～10号井戸、1～3号溝である。以下ではこれらについて、出土した遺物とともにその内容をまとめていく。

弥生時代早期～前期と考えた4・6号溝のうち、4号溝については、出土遺物がごく僅かであり、言及する内容に乏しい。6号溝からはまとまった量の土器が出土しており、甕、壺、浅鉢を中心とした器種の組み合わせがあり、少数ながら他の器種も見られる。これらを上層、下層、最下層とおおよそ分けて取り上げを行ったが、明確な時期差は認識できず、さほど大きな存続幅とはならないであろう。地域性も考慮しなければならないが、壺で明確な如意状口縁を有するものが皆無であることから、板付I式期併行段階には下らず、弥生時代早期のものだと判断した。壺の口縁部に段の形成されない点も時期の判別材料ともなるが、福岡平野周辺とは異なる地域的にその特徴が有効ではない可能性も考慮しておきたい。また、甕の外周調整において、



第63图 1区出土木製品実測图 (1/2)

糸痕調整が認められるものはごく僅かで、ほとんどがナデ調整となる点にも触れておく。そして、「板付祖形甕」と見られる資料が出土しており、半島より受容した水稲稲作文化の直接的な波及を示唆する要素が、福岡平野よりも大きく南下したこの地域においても認められる点に注目したい。ただ、その資料の多くは口縁部小片で、実は下位に刻目突帯を有す屈曲部の見られる器形となる可能性を完全に否定できるものではない。なお、落ち込みからも混入遺物でありながら、4・6号溝出土の遺物と同時期のものと思われる土器が多数出土しており、調査区は大きく削平されているが、元来のこれら弥生時代の初段階の遺構の広がりを感じさせる。

谷からは多数の弥生時代前期の土器が出土した。土師器甕も見られるが、出土状況も大多数の弥生土器とは異なって高い位置からの出土であり、混入品と考えて相違ないであろう。他にも混入品と思われるものがあるがごく僅かで、埋土の特徴も他の弥生時代の遺構と非常に近いものである。出土した弥生土器は、甕・壺を中心に、わずかであるが浅鉢・高坏も見られる。刻目突帯を有す胴部の屈曲する甕(第55図13・14)が出土する一方で、口縁部のやや大型化した亀ノ甲系の口縁部(第55図1・3)を有す甕も出土する。また、壺についても、外反する口縁部の外側への伸びが大きなもの(第56図38)と小さなもの(第56図39・40)がともに見られる。よって、出土土器は、前期前半から前期後半(一部前期末か)にわたる幅をもったものと考えられる。6号溝出土土器とは異なり、明らかに如意状口縁を有す甕が出現しているが、割合としては亀ノ甲系の口縁部を有す甕が多く、当地域の特徴を反映する様相であると言える。また、甕の外側調整で認められるのが、ほぼナデ調整に限られる点も言及しておく。なお、南筑後地域での弥生時代早期～前期のまとまった変遷は提示されていないが、佐賀平野の様相(参照：中野 充 1997「佐賀平野における弥生文化成立期の土器編年」[立命館大学考古学論集]立命館大学考古学論集刊行会)と類似した傾向が見られ、地域的な共通性が表れていると言える。

甕棺墓は3基検出され、いずれも中期に属する。当地域の甕棺編年は橋口達也氏により言及され(橋口達也 1985「南筑後における甕棺の編年」[権現塚北遺跡] 瀬高町教育委員会)、その内容との対比から出土甕棺の位置付けに触れておく。橋口氏は中期の甕棺をK I(中期前半)、K II(中期後半)と分け、更にK Iをa～c、K IIをa・bと細分する。2号甕棺(第50図3・4)は口縁部の形状等の器形はK I c式の特徴を有し、ハケ調整をナデ消す点はK I b式の特徴を残すと言える。3号甕棺(第50図5・6)はK II a式にあたり、橋口氏がその指標の一つに挙げる権現塚北遺跡K45と器形(口縁部断面の形状や厚い底部等)や調整のあり方が非常に類似している。また、胴部突帯付近に縦ハケの後に横ハケの調整を加える点や、上甕外面で口縁部と胴部突帯の間のハケ調整をナデ消す点までもが共通することは非常に興味深い。1号甕棺(第50図1)は、底部が薄く、胴部に2条の断面三角形の突帯を廻らせ、(橋口1985)の時点で直接的に対応する指標は挙げられていないが、福岡平野周辺の型式変遷を参照すれば、橋口氏がII a式の指標として挙げる権現塚北遺跡K45とK21の中間に位置すると考えられる。福岡平野との形態的な面での併行関係(参照：橋口達也 1979「甕棺の編年の研究」[九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告] XXXI中巻 福岡県教育委員会)から3基の時期を再度確認すると、1号甕棺は(橋口1979)のK II c～K III a式(汲田式～須玖式)と対応し、汲田式の新しい段階ともとれるが、中期後半と考えておく。2号甕棺は(橋口1979)のK II b式(汲田式)と対応し、やはり中期前半に位置付けられる。3号甕棺は、やや検討を要すると

考える。橋口氏は南筑後の編年で中期後半に位置付けるが、1号甕棺のように直接的に須玖式と対応する可能性が高いものと対比すると、断面三角形の1条突帯という特徴からも1号甕棺よりも前段階に位置すると捉えられ、汲田式のKⅡc式（橋口1979）に近い範疇に含むのが妥当ではないかと思われる。もちろん地域性や日常土器との併行関係等整理すべき点もあるが、ここで甕棺の埋置角度について触れておきたい。問題の本遺跡3号甕棺や編年上対応する権現塚北遺跡K45は、ともに埋置角度がほぼ水平に近く、次の新しい段階の本遺跡1号甕棺で埋置角度は強く傾いている。また、KⅡc式（橋口1979）の新しい段階として挙げる小郡市ハサコの宮遺跡K1の埋置角度は傾いている。もちろん埋置角度のみでは判断できるものではないが、このような要素も含め3号甕棺は中期前半から中頃の範疇で捉えたい。

中世初頭の1・3号土坑は、掘削が湧水する砂層に至ることから、ともに井戸の可能性が高いが、確実でない。他に同時期となる主な遺構はない中で、限られた材料での放言は避けたいが、荘園が平安期において各地で成立する中で、本調査地点の周辺にも小河荘や坂田荘が存在したとされており、また瀬高町西部から柳川市東部にまたがる瀬高荘も近接していたような地理的かつ歴史的な背景との関連が想起される場所である。このような時期と対応する遺物で、明確な遺構からの出土ではないが、石鍋片も検出されている。

本遺跡における遺構・遺物の大多数は中世後期（16世紀代）にあたるもので、土師器・陶磁器（青磁・白磁・青花等）・瓦質土器（播鉢・茶釜・火鉢等）の多彩な遺物が出土した。これらは本遺跡の位置からして、当然松延城との関連が想起される。しかし、出土遺物に16世紀前半との位置付けのなされるものも多く、松延城の存続期間（1584～1615年）との対応に疑問の残る点もある。また一括性の問題もあるが、同一遺構内においても器種間で時期的な相違が表れてしまう場合もある。ただ、当該期の編年は整理途上という感もあり、地域的な汎用性や細分等で課題が表れてくると思われる。中世初頭から当該期までの間を埋める時期の遺構・遺物がほとんど見られず、急激な遺構・遺物の増加は松延城と関連した開発行為と結びつけると理解しやすい。今後当地域の様相が詳細になると城址と関連した16世紀後半に残存すると認識されるものが増加するのではないだろうか。遺構については1～10号井戸は、遺物が出土せず時期比定不能のものも含まれるが、平面的に非常に狭い範囲で壁を急にして掘削する特徴的なものとして言及しておきたい。このような井戸は、近隣の瀬高町金栗遺跡（福岡県教育委員会1988『上枇杷・金栗遺跡』福岡県文化財調査報告書第82集）等で見られるように、中世初頭の頃から同様な狭小な素掘りの井戸が用いられている。また、本遺跡と同様の中世後期では、筑後市鶴田中市ノ塚遺跡（筑後市教育委員会2002『筑後市内遺跡群4』筑後市文化財調査報告書第45集）、筑後市中折地内栗遺跡（筑後市教育委員会2004『中折地内栗遺跡』筑後市文化財調査報告書第54集）、久留米市海津城跡（久留米市教育委員会1994『安武地区遺跡群Ⅶ』久留米市文化財調査報告書第87集）等において検出されている。井戸枠等を使用せず素掘りの狭小な井戸を多用するのは、推測の域を出ないが、崩落を防ぐため手をかけたものを構築するよりも、崩落しては次々と掘削量の少ない井戸を新しく設けていった結果であろうか。このような井戸がある一方で、併存する湧水層まで掘削した大型の掘方の土坑は、いかなる性格のものであろうか。同様に井戸である場合には全く異なる井戸を構築する理由が必要であり、また他の性格を有するにしても、その説明のための十分な材料は用意されておらず、今後の課題である。

4. 2区の検出遺構と遺物

(1) 2区の概要

2区は、1区北端とは道路を挟んで9m北、北の山門北池遺跡3区南端から約130m南に位置する、南北15.4m、東西約7m、面積125㎡の調査区である。当区北西隅～東南隅にかけて近代に埋めたクリークを検出したが、このクリークは北に位置する山門北池遺跡と当遺跡を区切る松延城跡堀跡の一部に当たる。また調査区南側で先述したクリークと同時期に埋めた東西方向のクリークと、調査区南壁際で昭和60年代に建設した導水管による攪乱を確認した。

当区は遺跡北端にあたることから、検出した遺構は少なく、土坑1基・溝1条・ピット9基のみである。出土遺物は弥生土器・土師器・石器のみで、バンケース1箱にも満たない出土であった。

(2) 土坑

8号土坑 (図版29、第64図)

8号土坑は2区南西、8号溝北に位置する、2区唯一の土坑である。長軸127cm×短軸85cm、最も深い中央部で深さ38cmを測る、北東部に突出を持つ不整形土坑である。壁の立ち上がりはテラスを持つ西側は緩やかであるが、他の壁はやや急となる。埋土は灰褐色粘質土。出土土器はないが、8号溝・遺構面等出土土器・埋土から、弥生時代後期の土坑になる可能性が高いか。

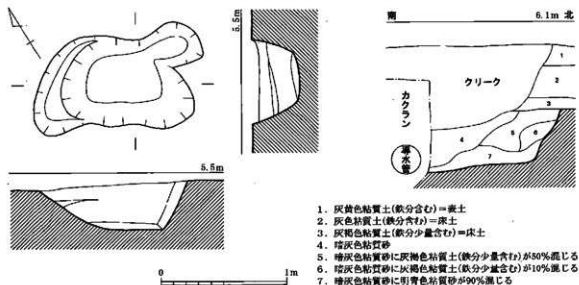
出土遺物 (図版46、第65図)

出土遺物は凹石1点のみ。下部一部が欠損した、長楕円形を呈する凹石で、凹石としては厚さがあり、かつ安定が悪いもの。表面中央部のみが弱く窪む。長さ12.7cm、幅9.5cm、厚さ5.9cm、重さ970.5gの玄武岩製。

(3) 溝

8号溝 (第64図)

8号溝は2区南端壁際、8号土坑南に位置する。溝北壁の一部158cm分のみ検出し、他の大部分は調査区外に存在し、かつ道路側(南側)は導水管によるカクランを受けたため、現状で幅65cm以上、深さ43cmを測る。道路を挟んだ約9m南の1区北端では溝南壁を検出できず、ま

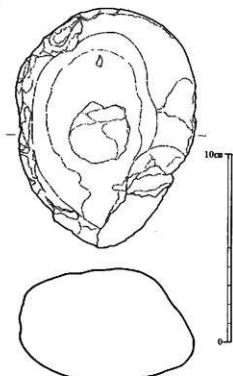


第64図 2区8号土坑・8号溝土層実測図 (1/30)

た溝自体の深さから幅1～2mほどの溝になるか。溝主軸は検出範囲は狭いものの、西北西—東南東方向に流れる可能性が高い。溝埋土上層は4層に分層でき(4～7層)、5・6層の鉄分や7層の砂から、ある程度の期間水が流れていたと考えられる。出土土器から弥生時代後期末の溝になると思われる。

出土土器 (第66図1～3)

1は弥生中期甕底部。内外面とも火を受け、器表もボロボロ。色は赤褐色。2は弥生後期西新式古段階小型壺か甕底部。底径3cmで、内面底部に工具痕あり。色は橙褐色～灰色。3は弥生後期壺胴部。球状の胴部で、外面上部は縦ハケ、下部はミガキ(一部か)を施す。内面はナデ調整で、頸部には絞り痕あり。色は外黄橙褐色、内黄褐色～灰褐色。



第65図 2区8号土坑出土石製品実測図(1/2)

(4) 遺構面等出土土器

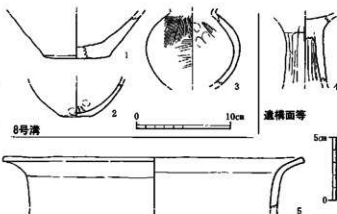
遺構面等出土土器 (第66図4・5)

4は弥生中期高坏脚柱部。外面は縦ケズリ、内面は工具による絞りをを行い、坏部との接合部には工具痕が明瞭に残る。色は黄褐色。5は土師器甕口縁部。口径24cmを測るが、径は不安。直立する胴部から強く外湾する口縁部で、内外面とも摩滅のため調整不明。胎土には細粒を多く含み、色は橙褐色。

(5) 小結

2区では調査区北側で東南—北西方向に流れたと考えられるクリーク(松延城跡堀跡を後にクリークとして利用したもの)を検出し、山門前遺跡の北端を確定することができた。先述したように検出した遺構、出土遺物は少ないが、弥生時代後期土器の残りが良いことから、土坑もこの段階に位置づけられる可能性が高い。1区では弥生時代前・中期の遺構・遺物はあるものの、弥生時代後期の出土土器は少なく、2区において弥生時代後期の集落の存在を確認できたことは、大きな成果である。

今後周辺の調査の進展により、遺跡の実態がより明らかになることを期待したい。



第66図 2区8号溝・遺構面等出土土器実測図(5は1/3、他は1/4)

検出番号	種 類	区	出土場所	長さ (cm)	幅・径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	材質(色)	備 考
第30図1	板状木製品	0	11号井戸	13.0	1.8	0.8			アスナロ	
第30図2	板状木製品	0	11号井戸	13.8	5	0.8			アスナロ	
第30図3	板状木製品	0	12号井戸	15.5	3.6	0.7			スギ	欠損後も使用
第30図4	板状木製品	0	12号井戸	15.0	4	0.6			スギ	欠損後も使用
第30図5	板状木製品	0	12号井戸	14.1	3.9	0.7			スギ	欠損後も使用
第30図6	板状木製品	0	12号井戸	15.5	4.1	0.8			スギ	欠損後も使用
第30図7	板状木製品	0	12号井戸	15.5	4.2	0.75			スギ	欠損後も使用
第30図8	板状木製品	0	12号井戸	14.4	3.6	0.75			スギ	下部欠損
第30図9	板状木製品	0	12号井戸	14.3	2.9	0.7			スギ	下部欠損
第30図10	板状木製品	0	12号井戸	14.4	4.5	0.65			スギ	下部欠損
第30図11	円板状木製品	0	12号井戸		17.8	1.3			スギ	補修孔2有り
第31図1	管状土錘	0	16号土坑	5.3	1.1	1.1	0.4	6.6	橙褐色	完形
第31図2	管状土錘	0	7号溝	3.5	0.9	0.9	0.2	2.8	橙褐色	完形
第31図3	管状土錘	0	SX02	2.8	1.1	1.1	0.3	3.5	茶褐色	下部欠損
第31図4	管状土錘	0	6号ビレット	3.4	1.1	1.1	0.2	4.2	淡褐色・赤褐色	完形
第31図5	スクレイパー	0	表土	4.1	1.8	0.7		5.1	黒曜石	
第31図6	砥石	0	7号土坑	5.3	4.6	2.1		68.8	砂岩	粗砥石
第31図7	凹石	0	12号井戸	12.5	13.6	5.1		1265.1	玄武岩	
第31図8	台石	0	6号ビレット	12.8	10.8	3.5		689	玄武岩	
第31図9	台石	0	7号土坑	14.7	14.8	2.7		766.3	凝灰岩	
第32図10	石臼(上臼)	0	13号井戸		35	9(最大)		5060	凝灰岩	
第32図11	石臼(上臼)	0	7号溝		31			912.3	凝灰岩	
第32図12	石臼(上臼)	0	7号溝		30			190.5	凝灰岩	
第32図13	石臼(上臼)	0	表土		34	9(最大)		6800	凝灰岩	挽き手穴2
第33図14	五輪塔型風輪部	0	SX01	19.6	11.1	7.3(最大)		910.2	凝灰岩	完形・表面欠損
第61図1	スクレイパー	1	6号溝	4.4	2.7	0.8		7.2	黒曜石	微細網織あり
第61図2	石包丁	1	攪乱	7.4	3.9	0.7	0.6	33.6	片岩	欠損
第61図3	打欠石錘	1	1号ビレット	7.1	8.3	2.6		248.1	玄武岩	
第61図4	円形石製品	1	落ち込み		1.4	0.6		2.3	凝灰岩	下面は平坦
第61図5	砥石	1	3号井戸	9.6	6.7	5.7		569.7	砂岩	縦面2面
第61図6	砥石	1	3号溝	8.6	5.6	1.5		125.4	シルト岩	縦面3面
第61図7	異形石器	1	3号溝	11.2	12.6	1.4		219.2	安山岩	Y字状
第61図8	叩石	1	23号ビレット	12.2	11.5	7.9		1594.9	玄武岩	
第61図9	滑石片	1	攪乱	10.3	4.7	1.8		100.9	滑石	石錘再加丁品か
第61図10	石錘	1	攪乱						滑石	欠損後再加丁.
第61図11	石錘	1	1号土坑						滑石	欠損後再加丁.
第62図12	石錘	1	検出時						滑石	欠損後再加丁.
第62図13	鉢状石製品	1	流路跡							多孔質火成岩
第62図14	石臼(下臼)	1	流路跡		29.5	8.8		4524.8	多孔質火成岩	
第62図15	土製紡錘車	1	落ち込み		6.2	2.1				
第62図16	管状土錘	1	落ち込み	3.0	0.9		0.25	2.3		一部欠損
第62図17	管状土錘	1	2号土坑	3.0	1.6		0.2	4.9		
第62図18	管状土錘	1	攪乱	3.5	1.3		0.15	5.4		
第62図19	平瓦	1	6号ビレット	5.4	7.2					
第62図20	刀子柄	1	5号溝	8.9	1.4	0.4			膏削	中心部で屈折
第63図1	円板状木製品	1	5号井戸	13.8	3.8	0.8				
第63図2	円板状木製品	1	5号井戸	18.0	9.0	1.2				
第63図3	円板状木製品	1	5号井戸	14.9	4.4	0.9			スギ	
第63図4	板状木製品	1	3号溝	16.0	3.8	0.6				
第63図5	円板状木製品	1	3号土坑	17.9	9.9	0.9			スギ	第63図6と組み合う
第63図6	円板状木製品	1	3号土坑	17.8	4.3	0.9			スギ	第63図5と組み合う
第63図7	桶把手	1	5号井戸	14.9	5.9	0.7			スギ	
第63図8	薄鉢状木製品	1	1号井戸	16.5	6.1	2.9				
四版45	マツ幹	1	7号井戸	35	37				マツ	上下切斷面を加工
第65図	凹石	2	8号土坑	12.7	9.5	5.9		970.5	玄武岩	一部欠損

第4表 山門前田遺跡出土石器・石製品・土製品・金属器・木製品一覧表

IV. 自然科学分析

1. 山門前田遺跡0区出土木製品の樹種同定

植田 弥生 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

ここでは、中世後期の井戸(11号井戸・12号井戸)から出土した板状木製品10点と円板状木製品1点、そして16号土坑から出土した枝付きの芯持ち丸木材1点と70号ピット出土の棒状の材1点、古墳時代後期後半の23号土坑から出土した棒状の材1点、合計14点の樹種同定結果を報告する。

(2) 試料と方法

木製品から材の3方向(横断面・接線断面・放射断面)を見定めて、剃刀を用い各方向の薄い切片を剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロラルで封入し、永久プレパラート(材組織標本)を作成した。この材組織標本を、光学顕微鏡で40~400倍に拡大し観察した。材組織標本は、パレオ・ラボに保管されている。

(3) 結果

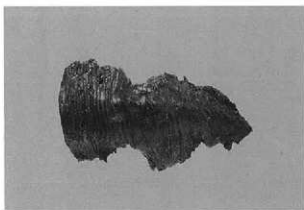
同定結果の一覧を第5表に示した。11号井戸の2点はアスナロ、12号井戸の9点はスギであった。16号土坑から出土した枝付きの丸太材はアスナロ、70号ピット出土の棒状の材はイスノキ、23号土坑出土の棒状の材はツバキ属であった。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の3方向の組織写真を提示する。

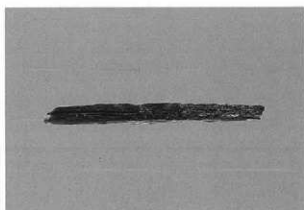
a. スギ *Cryptomeria japonica* D. Don

スギ科 第67図 1a-1c (No11)

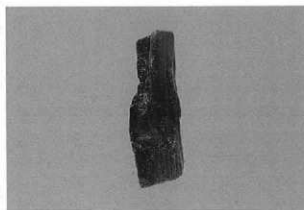
仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量は多く、晩材仮道管の壁は厚い。分野壁孔は大型で、孔口は水平に大き



12. 16号土坑出土木器



13. 70号ピット出土木器



14. 23号土坑出土木器

く楕円形に開いたスギ型、1分野に主に2個が水平に配置している。

スギは本州以南の暖帯から温帯下部の湿気のある谷間に生育する常緑高木である。材はやや軽軟で加工は容易である。

b. アスナロ *Thuopsis dolabrata* sieb. et Zucc. ヒノキ科 第67図 2a-2c (No2)

仮道管・放射系細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部仮道管の壁の肥厚はあまり厚くない。分野壁孔は小型、孔口は細いレンズ状や広く開口したものが見られ、小型のヒノキ型やスギ型が混在し、1分野に2~4個ある。

アスナロは日本特産で1属1種である。本州・四国・九州の温帯の山中に生育する常緑高木である。材質は良く建築材として有用であるがヒノキよりやや劣る。

c. イスノキ *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc. マンサク科 第67図 3a-3c (No13)

小型で多角形の壁が厚い管孔が一様に分布し、1層で接線状に分布する軸方向系細胞があり、年輪界は不明瞭な散孔材。道管の穿孔は階段数が少ない階段穿孔、内腔に着色内容物がある。多室結晶細胞がある。放射組織は異性、1~2細胞幅、2細胞部分は平伏細胞からなり、道管との壁孔は階段状である。

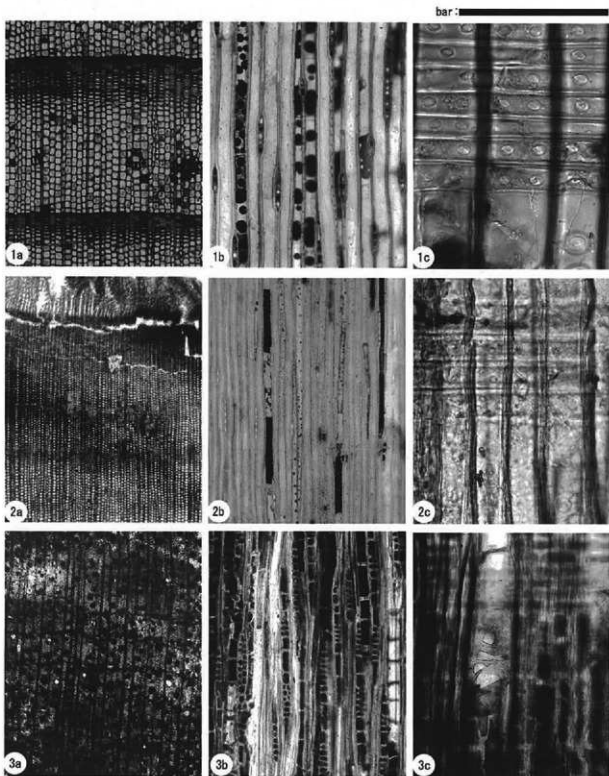
イスノキは、関東以西の暖帯から亜熱帯に分布し、暖地の山地に成育する常緑高木である。材は耐久性・保存性が高い。

d. ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 第68図 4a-4c (No14)

非常に小型の管孔が単独または2~3個が複合して均一に散在し、年輪の始めの管孔はやや大きい散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は横棒数が20本ほどの階段穿孔である。放射組織は上下端に方形細胞や直立細胞がある異性、1~3細胞幅、膨らんだ油細胞がある。

樹種 同定No.	地区 試料No.	器 種	木取り	樹 種	時 期
1	0区11号井戸 (第30図1)	板状木製品	追い紐目	アスナロ	中世後期
2	0区11号井戸 (第30図1)	板状木製品	追い紐目	アスナロ	中世後期
3	0区12号井戸 (第30図2)	板状木製品	追い紐目	スギ	中世後期
4	0区12号井戸 (第30図3)	板状木製品	追い紐目	スギ	中世後期
5	0区12号井戸 (第30図4)	板状木製品	追い紐目	スギ	中世後期
6	0区12号井戸 (第30図5)	板状木製品	追い紐目	スギ	中世後期
7	0区12号井戸 (第30図6)	板状木製品	追い紐目	スギ	中世後期
8	0区12号井戸 (第30図7)	板状木製品	板目	スギ	中世後期
9	0区12号井戸 (第30図8)	板状木製品	追い紐目~板目	スギ	中世後期
10	0区12号井戸 (第30図9)	板状木製品	追い紐目	スギ	中世後期
11	0区12号井戸 (第30図10)	円板状木製品	追い紐目	スギ	中世後期
12	0区16号土坑 (p119図版上)	なし (サンプルのみ)	芯持ち丸木	アスナロ	中世後期
13	0区P70 (p119図版中)	なし (サンプルのみ)	(棒状)	イスノキ	中世後期
14	0区23号土坑 (p119図版下)	なし (サンプルのみ)	(棒状)	ツバキ属	古墳時代後期後半

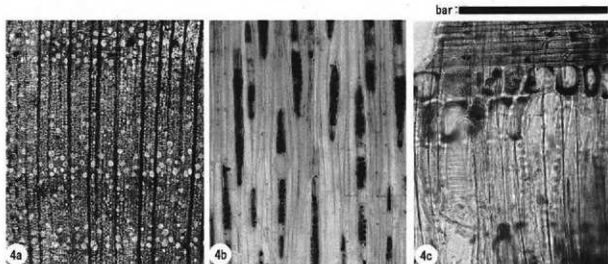
第5表 0区出土木製品の樹種同定結果一覧



1a-1c: スギ (No.11) 2a-2c: アスナロ (No.2) 3a-3c: イスノキ (No.13)

a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面 bar: a=1.0mm, b=0.4mm, 1c-2c=0.1mm, 3c=0.2mm.

第67図 0区出土木製品材組織の光学顕微鏡写真①



4a-4c: ツバキ属 (No.14)

a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面 bar:a=1.0mm, b=0.4mm, c=0.2mm.

第68図 0区出土木製品材組織の光学顕微鏡写真②

ツバキ属は暖帯の海岸から山中に生育する常緑の低木または高木である。材は強くて硬く丈夫である。

(4) まとめ

板状木製品と円板状木製品は、スギとアスナロの針葉樹材であった。また井戸により樹種にまとまりが見られ、11号井戸からはアスナロが、12号井戸からはスギが出土した。これらの板状木製品は、一部破損しているとはいえ、おおよその形状や大きさは似ていたことから、用途が同じか類似したものであり、樹種は用途に合わせて選択使用されていたために、樹種のまとまりとして現れたのではないだろうか。

アスナロは、16号土坑から枝付きの材が出土したことから、遺跡周辺の山地林にアスナロが生育していた可能性が推測される。

検出された広葉樹材2点は、中世後期の試料がイスノキ、古墳時代後期後半の試料はツバキ属であった。いずれも常緑性であり、当地域が照葉樹林帯にあることと関連する結果であった。

2. 山門前田遺跡1区出土木製品の樹種

三村 昌史 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

山門前田遺跡1区から出土した木製品のうち計4点の樹種同定結果を報告する。樹種同定の対象となる器種は桶底板2点・加工材1点・切断痕のある材1点である。

ここでは、これらの木製品に使用された樹種を同定し、各器種の用材傾向を明らかにし、用材選択の背景について検討を行った。

(2) 方法

出土木製品から横断面・放射断面・接線断面の3断面について気取りや肉眼視できる組織を確認しながら剃刀を用いて切片をスライスし、ガムクロラル (抱水クロラル50g、アラビアゴム粉末40g、グリセリン20ml、蒸留水50mlの割合で調整した混合液) で封入してプレパラートを作成した。検鏡は光学顕微鏡にて40~400倍で行い、所有の現生標本と対照することにより同定を行った。なお、同定したプレパラートは比較参照に応じられるよう標本番号を付して、(株)パレオ・ラボに保管した (FKO-929~932)。

(3) 結果および考察

樹種同定結果を第6表に示す。

器種ごとに用材をみると、桶底板には1区3号土坑出土のものと同1区5号井戸出土のものがあるが、いずれにもスギが用いられていた。スギは材・木理が通直で割裂容易な針葉樹材であるので、材を割り出して板材にするのに適することから選択されて用いられたとみられる。

また、1区5号井戸から出土した加工材にもスギが見出された。この加工材は板材状であり、上記の桶底板の場合と同様に器形・製作法とスギの材質との間に関連性が窺える結果である。

1区7号井戸出土の両端に切断痕のある丸木材にはニヨウマツ類が見出された。おそらく重硬で対朽性のある材質を生かして何かの用材とされていたとみられ、またニヨウマツ類は周囲に身近にみられた樹種の一つとして想定される。

(4) 見出された樹種

以下では、見出された樹種について同定の根拠とした材組織の解剖学的特徴を記載し、そのほか分布・材質等の一般についても簡潔に記す。

同定No	樹種	地区	遺構	器種	保管No
No.1	スギ	1区	3号土坑	桶底板	FKO-929
No.2	スギ	1区	5号井戸	桶底板	FKO-930
No.3	スギ	1区	5号井戸	加工材	FKO-931
No.4	ニヨウマツ類	1区	7号井戸	切断痕のある材	FKO-932

第6表 1区樹種同定結果

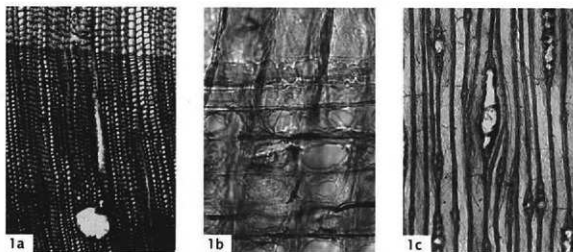
a. ニヨウマツ類 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 第69図 1a-1c

仮道管と放射柔組織、放射仮道管、および水平・垂直両樹脂道を取り囲む薄壁のエピセリウム細胞からなる針葉樹材。放射仮道管の水平壁は内腔側に向かって鋸歯状の突起を有する。分野壁孔は大型の窓状。

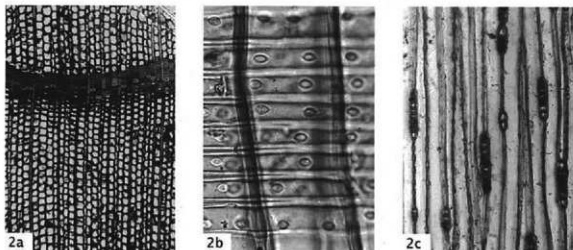
ニヨウマツ類（マツ属複維管束亜属）は、短枝に針葉が2本ずつ付くマツで、アカマツ・クロマツのほか、琉球に分布するリュウキュウマツがある。いずれも土壌の薄く日当たりのよい立地に生育する高木性の常緑針葉樹で、アカマツは現在では各地の山野に普通にみられ、クロマツは海岸部に多い。材はやや重硬で割裂困難、樹脂分が多いため水湿には耐性がある。

b. スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 第69図 2a-2c

仮道管と放射柔組織、および樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部は量多く明瞭。分野壁孔は



1. ニヨウマツ類 (No. 4 1区7号井戸 切断痕のある材; 標本番号 FK0-932)



2. スギ (No. 1 1区3号土坑桶底板; 標本番号 FK0-929)

scale bar 1,2: a-1.0mm, b-0.1mm, c-0.4mm

a: 横断面 b:放射断面 c:接線断面

第69図 1区出土木製品・組織片光学顕微鏡写真

スギ型で大きく、1分野にふつう2個。スギは高木になる常緑針葉樹で、天然分布は年間降水量の多い地域に限られ、日本海側にはまとまった分布域が多い。生育地は湿地周辺や谷部、尾根沿いなど幅広く、低地から比較的高標高のブナ林までみられる。材は通直で軽軟、保存性は中庸、適度な強度があり割裂性・加工性に優れる。

3. 山門前田遺跡出土黒曜石の産地推定

竹原 弘展 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

山門前田遺跡1区出土黒曜石について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、原産地の推定をした。

(2) 試料と方法

対象試料は山門前田遺跡1区出土黒曜石4点である。試料は、測定前にメラミンフォーム製のスポンジを用いて、測定面表面の洗浄を行った。

分析装置は、(株)セイコーインスツルメンツ社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA-2001Lを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウムRh、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。測定条件は、測定時間300sec、照射径10mm、電流自動設定(1-63 μ A)、電圧50kV、試料室内雰囲気真空中に設定した。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた(例えば望月2004)。本方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)とルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps; count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

- 1) $Rb \text{ 分率} = Rb \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 2) $Sr \text{ 分率} = Sr \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 3) $Mn \text{ 強度} \times 100 / Fe \text{ 強度}$
- 4) $\log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$

そしてこれらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度 $\times 100 / Fe$ 強度の判別図と横軸Sr分率-縦軸 $\log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$ の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、原産地を推定するものである。この方法は、指標値に蛍光X線のエネルギー差ができる限り小さい元素同士を組み合わせて算出しているため、形状、厚み、風化の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊である出土遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。

原石試料も、採取原石を割って新鮮な面を表出させた上で産

原石産地		試料点数
姫島	観音崎	20
伊万里	腰岳	8
松浦	岳崎免	15
佐世保	淀姫	8
佐世保	針尾古里	8
佐世保	針尾中町	8
川棚	大崎	8

第7表 原石産地と試料点数

地推定対象試料と同様の条件で測定した。第7表に各原石産地とそれぞれの試料点数を示す。

なお、九州地方の黒曜石原石は現在収集中であり、当社が所蔵している試料がまだまだ揃っていないため、今回の測定に際しては、沼津高等工業専門学校の望月明彦氏より多くの原石を拝借させていただいた。

(3) 分析結果および考察

第70図に、黒曜石原石の判別図に山門前田遺跡出土の黒曜石4点をプロットした図を示す。なお、両図は視覚的にわかりやすくするため、各原石群を楕円で取り囲んである。

Ⅱでは4点いずれも腰岳の範囲に収まりつつ、中には他の原石群に重複する位置にプロットされているものもあるが、Ⅰではいずれも腰岳の範囲のみに収まった。以上から、腰岳産の黒曜石である可能性が高いといえよう。なお、本方法は風化、厚み、形状の影響を受け難いとはいえ、全く影響を受けないわけではなく、風化の進んだ試料やきわめて薄い試料の場合、X線強度比に若干の変化を与え、本来判別図上でプロットされるべき位置から少し移動をすることがあるが、今回測定した遺物の測定面の風化は少なく、厚みも十分にあったため、移動している可能性はほとんど無い。とはいえ、岳崎免1や針尾中町、針尾古里といった原石群は非常に近接した位置に存在しており、本分析における産地推定の基準となった原石の点数がやや少なめであることも考慮すると、これらの地域より産出したものである可能性も完全には否定しきれない。針尾高産の黒曜石については分析値が多岐にわたり、中には腰岳と類似するものも見られることが、既に指摘されている(高橋・望月2001)。九州地方産出の黒曜石の産地推定は、まだ課題が残り、さらに多くの原石を収集した上での、より詳細な検討を要するであろう。

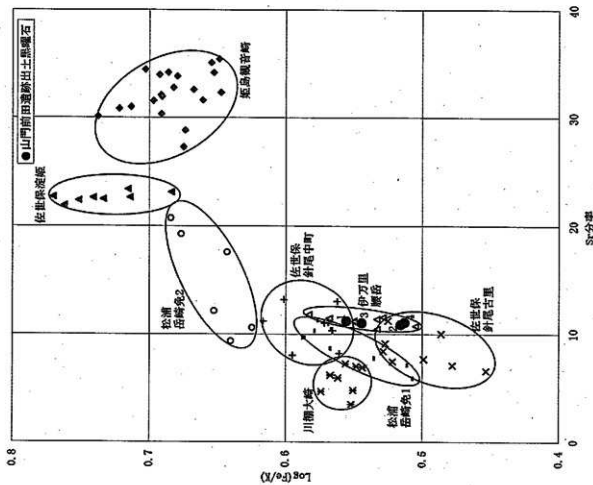
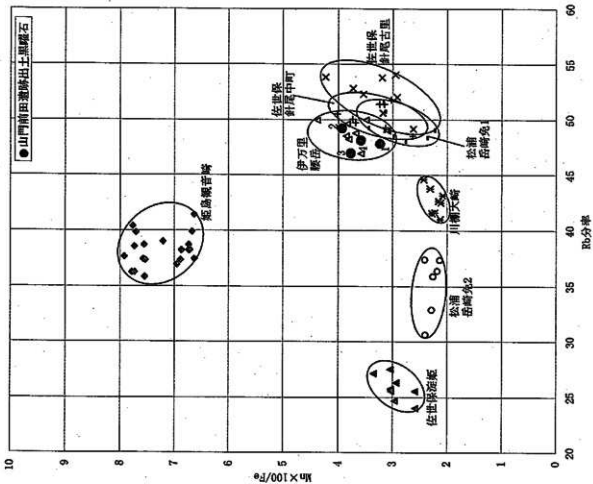
(4) 終わりに

山門山田遺跡1区出土黒曜石の蛍光X線分析による産地推定を行った結果、4点とも腰岳産である可能性が高いという結果を得た。ただし、松浦や針尾島等の産出である可能性も残る。

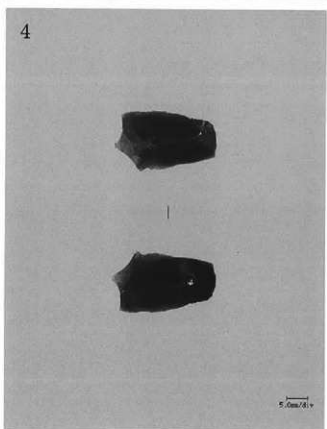
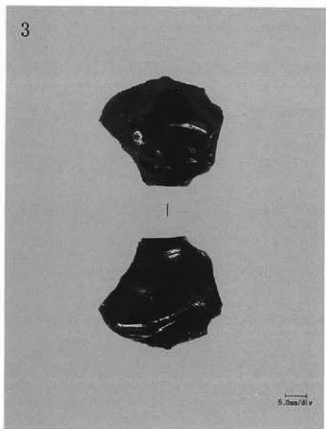
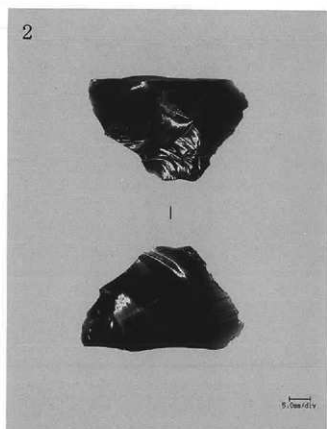
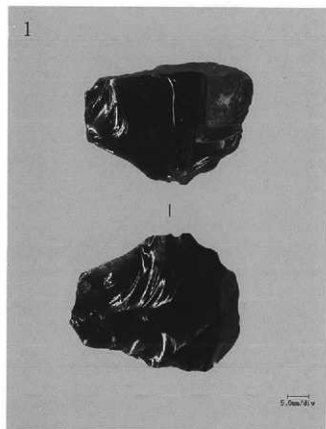
謝辞：沼津高等工業専門学校の望月明彦氏には原石をお借りしたのに加えて、さまざまな助言をしていただき、便宜も図っていただいた。また、原石を借りる際には、立教大学大学院の渡辺圭太氏にも便宜を図っていただいた。ここに記して謝意を表したい。

引用文献・参考文献

- 高橋豊・望月明彦 2001 「蛍光X線分析による九州地方の黒曜石の検討(3)」『日本文化財科学会第18回大会研究発表要旨集』p146・147 日本文化財科学会
高橋豊 2002 「宝満山遺跡群第23次調査に伴い出土した黒曜石・サヌカイトの原石産地」『宝満山遺跡群・浦ノ山遺跡Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第169集 p264-275 福岡県教育委員会
望月明彦 2004 「用田大河内遺跡出土黒曜石の産地推定」『用田大河内遺跡』かながわ考古学財団調査報告 167 p511-517 財団法人かながわ考古学財団



第70図 黒曜石の産地産別図 I・II



第71図 黒曜石のマイクロスコープ像

4. 山門前田遺跡1区2号土坑出土動物骨について

黒澤 一男 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

福岡県山門郡瀬高町大字山門に所在する山門前田遺跡1区2号土坑より出土した骨5点について分類・同定を行った。なお、同定に際しては国立歴史民俗博物館西本研究室で所有している現生標本を観察させていただき、それら標本との比較により同定を行った。

(2) 同定結果

試料には、山門前田遺跡1区2号土坑より出土した骨5点を用いた。

5点はすべてイヌの骨である。左右上腕骨、左右大腿骨と左脛骨が検出されている。

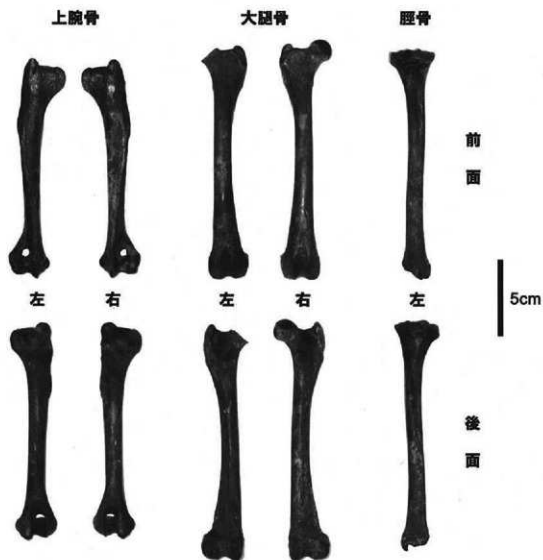
左大腿骨は大腿骨頭部が欠損しているが、そのほかの4点は完存である。これら4点の最大骨長を計測し、その測定値を体高推定の計算式(山内1958)に当てはめ計算をすると、上腕骨で44.0cm、大腿骨で45.2cm、脛骨で42.0cmの値が得られる。過去の傾向として上肢骨の方が良い結果を得られていることから出土したイヌの体高は44.0cmと推定され、中型犬となる。

引用文献

山内忠平 1958 「犬における骨長より体高の推定方法」『鹿児島大学農学部学術報告7』p125-131

種名	部位	左右	残存度	最大骨長 (mm)	推定体高 (cm)	備 考
イヌ	上腕骨	左	完存	139.66	44.0	
		右	完存	139.25	44.0	
	大腿骨	左		(150.63)	(44.6)	大腿骨頭欠損
		右	完存	153.51	45.2	
	脛骨	左	完存	147.11	42.0	

第8表 出土動物骨観察表



第72図 1区2号土坑出土動物遺体(イヌ)

V. まとめ

1. 山門前田遺跡における集落の変遷について

これまで調査区ごとに検出遺構・遺物の記述を行ってきたが、ここでは当遺跡における時期的な遺構の変遷を中心に論じ、まとめをしたい。各遺構出土遺物・埋土などから時期別に色・アミを変えて図示したのが、第73図である。この図を参照し、以下で検討を加える。

まず、当遺跡で最初に形成された遺構は、弥生時代早期～前期前半のいずれも主軸が東西方向となる4・6号溝で、埋没は前期末となるが早期～前期前半の土器も出土する谷に沿った軸であることから、この谷が弥生早期～前期の遺跡の在り方に何らかの影響を与えていることが推測できる。この出土土器の位置付けについては、Ⅲ-3-(11)の小結(p112-115)をご覧いただきたい。瀬高町周辺で発掘調査により確認された、弥生時代早期～前期前半の遺跡は山川町山ノ上遺跡の突帯文系壺・甕で構成された甕棺墓群のみである。この甕棺を実見した永見氏は板付式に下る(一部のみか)と述べており(永見2003)、両遺跡出土土器の位置付けがどの段階で当地域に弥生文化が導入され、定着したかという問題を解明する手掛かりとなるであろう。

先述したように前期末になるとこの谷が埋没する。Ⅲ-1-(2)の検討結果(p20-23)と位置から、この谷は弥生時代前期における遺跡の東端にあたと想定され、集落の中心は一部松延城の築城による改変を受けている可能性があるものの、調査区の西側に位置すると考えられる。谷出土土器では亀の甲式土器が多く出土し、近年の佐賀平野(中野1997)や筑後市域(永見2003)における当該期の土器編年を参考にすると、亀の甲式土器でもやや新しい段階のものを主体とするようである。この亀の甲式土器については近年資料が増加しているものの、体系的な整理は中途であり、南筑後地域で胴部屈曲甕が板付Ⅱa式段階まで残るという地域性の問題と合わせ、今後の土器編年研究が期待される。ちなみに、近年九州新幹線建設により調査された藤の尾垣添遺跡・小川柳ノ内遺跡では、前期後半～中期前半の竪穴住居跡・土坑群などを確認しており、今後の整理報告により、南筑後地域の土器編年や集落などの研究が深化するであろう。

弥生時代中期では1区南において、いずれも上半分が大きく削平された中期前半の成人甕棺墓2基、中期後半の成人甕棺墓1基を検出した。基数は少なく、調査区幅も狭いことから墓域構造などは不明であるが、当遺跡北に位置する藤の尾垣添遺跡で検出した中期初頭～前半の甕棺墓群は列状構造となることを確認しており、今後の周辺の調査に期待したい。弥生時代後期では、2区において溝を1条検出しており、また0・1区においても弥生後期土器が混入品として存在することから、当遺跡では弥生時代前～後期まで集落が存在していたことを今回の調査で確認できた。

古墳時代では、遺跡南側で後期後半の土坑2基、溝2条を検出した。Ⅲ-3-(9)で先述しているが(p66・67)、当遺跡周辺ではこの段階に集落域・墓域の拡大が認められる。検出遺構・遺物から考えると、当遺跡は山門北池遺跡・堤遺跡のような大規模な集落周辺に位置する小規模な集落であったと推測される。

中世前期には遺跡中央で土坑2基を検出した。0区では中世前期の遺構は確認されなかった

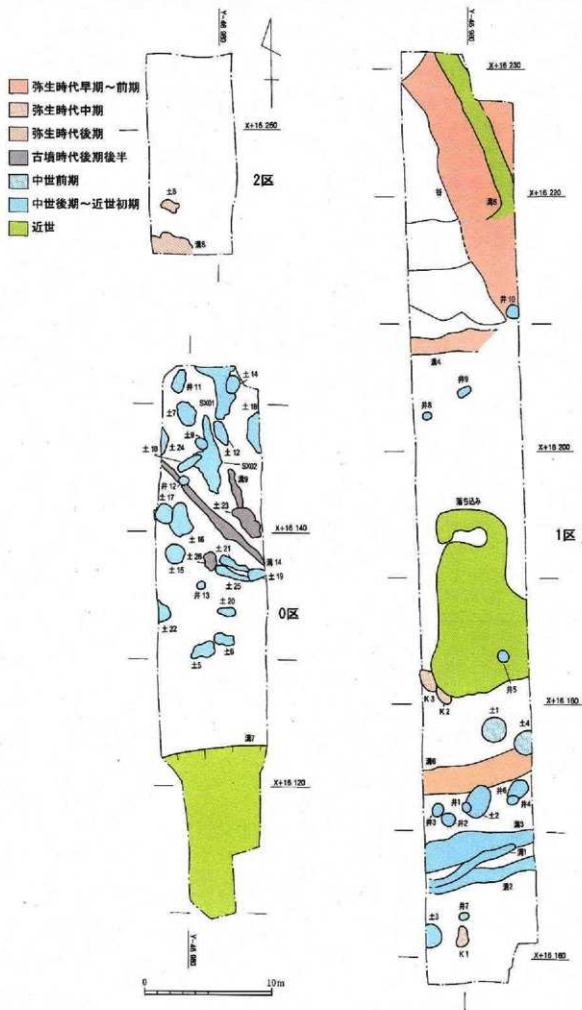
が当該期の白磁・青磁片が出土し、1区では滑石裂石鍋片が出土する。当遺跡北の松延遺跡(山門北池遺跡)においても当該期の土壌を検出している。建仁元年(1201)の「高良宮造管田数注文」という文献には「松延卅町」と記載され、この名田を経営する集落は当遺跡周辺に位置したと考えられる。

中世後期～近世初期においては調査区南側を中心に多くの遺構・遺物が検出され、遺跡の最盛期にあたる。井戸は計13基確認しているが、埋土・出土土器からすべて当該期に属すると考えられる。特に1～4・6号井戸の5基が密集して存在することは、南に隣接する1～3号溝の機能・役割と何らかの関係があるものか。他の井戸は8・9号井戸を除き、間隔も持って位置することから、この井戸の間隔が屋敷地の区画を表す可能性がある。また1～3号溝と松延城跡の堀跡と想定される7号溝の主軸の一致は、1～3号溝にとどまらず、当遺跡における中世後期～近世初期の遺構の形成に関しては、松延城跡の築城が大きく影響を与えたことが推測できる。後述する当遺跡出土土器からは、文献に記載された松延城の存続期間(1584～1615年)よりやや早い16世紀前半～17世紀初頭が主体となると考えられ、松延城の築城は文献の年代よりやや占くなる可能性があるが、同じく文献に記載された一国一城令による廃城の時期は出土土器からも裏付けることができる。また黄褐色粘質土が遺構埋土最上層となるものが多いことや、井戸埋土からは節抜竹などは検出できなかったものの、埋土上層付近まで丁寧に埋めていることから、集落の廃絶に関しては短期間であり、かつ戦乱や洪水などの外的要因ではない可能性が高く、文献上の廃城年代・要因と一致すると考えられる。

出土輸入陶磁器・在土器は先述したように16世紀前半～17世紀初頭を主体とする。久留米市海津城跡出土在土器編年(白木1994)によれば、2号土坑、2・5号井戸、3号溝などで多く出土した口径6.2～7.2cm、器高1.5cm～2.3cmの土師器小皿(海津分類小皿B I)は16世紀中頃、3号溝の口径9.3cm～9.6cm、器高2.3cm～3.0cmの土師器杯は海津城跡よりやや小さいが、杯B II類になると考えられ、16世紀中頃に位置づけられる。また10号井戸から出土した口径9.8～10.4cm、器高2.5cm～3.4cmの土師器杯(31・32)は底部と体部との境が明瞭でなく、体部が丸みを帯びる形態の土師器杯(29・30)からやや新しい可能性が高く、小皿B I(28)の共伴から16世紀後半頃になるか。以上、土師器の主なもののみ、海津城跡編年との比較を行ったが、海津城跡出土土器より当遺跡出土小皿・杯がやや小さい傾向にあるという地域性の問題や、当地域の在土器編年をする上では未だ資料不足であることから、今後の課題としたい。一方、他の在土器においても5号井戸・3号溝出土瓦質土器は16世紀後半～17世紀初頭と考えられること(徳永1990)、SX02では17世紀前後の国産陶器が出土していることから、当遺跡は16世紀中頃～後半を最盛期とする、16世紀前半～17世紀初頭まで営まれた集落であると位置づけられる。

当遺跡では井戸の調査により、標高4m前後で湧水層に至ることを確認しており、井戸・土坑・ピットから木質遺物が出土している。中でも、円板状木製品で補修か組み合わせ穴と考えられる断面に2ヶ所穿孔したものが6点出土しており、また11・12号井戸で出土した板状木製品は、後の使用により欠損面が摩滅したものが多く出土しており、用途等類例の増加が待たれる。

集落自体は松延城の廃城を契機とする近世初頭で廃絶し、その後は近世末期に埋没した近世



第73図 山門前田遺跡時期別変遷図 (1/300)

瓦が大量に出土した7号溝と5号溝を確認している。なお、1区北側の攪乱は近代の瓦用粘土探掘坑である可能性が高く、また近年の圃場整備事業等により1区北側の遺構はほぼ削平されてしまったものと考えられる。

以上が集落の変遷であるが、今回の調査は幅11.2mの調査区であり、当遺跡のほんの一部を調査したに留まる。調査成果からも不明な点が多く残り、幾分推論を含むまとめとなった。今後、周辺の調査により、今回の成果の再検討や訂正が加えられ、地域の歴史がより明らかになることを期待したい。

参考文献

- 徳永貞紹 1990 「肥前における中世後期の在出土器」『中近世土器の基礎研究VI』 日本中世土器研究会
白木守 1994 「第5節 総括」『安武地区遺跡群Ⅵ』久留米市文化財調査報告書第87集 久留米市教育委員会
中野充 1997 「佐賀平野における弥生文化成立期の土器編年」『立命館大学考古学論集1』 立命館大学考古学論集刊行会
水見秀徳 2003 「筑後西部第2地区遺跡群（Ⅵ）」筑後市文化財調査報告書第50集 筑後市教育委員会

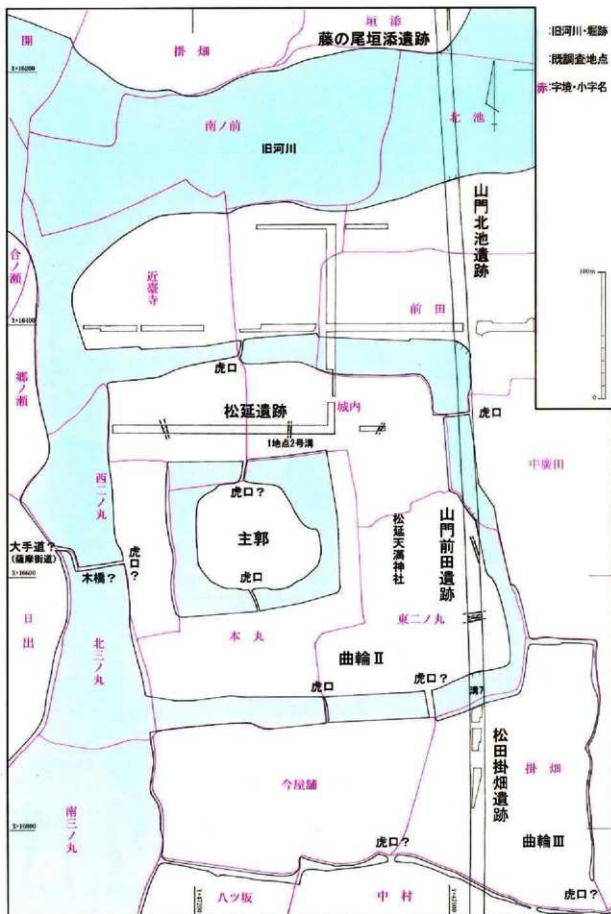
2. 松延城跡について

V-1では当遺跡の時期別変遷について検討し、当遺跡と松延城跡とは密接な関係にあることが改めて確認できた。ここでは字図・地籍図・米軍撮影空中写真と圃場整備による調査成果と今回の成果を用いて、松延城跡の復元を試みたい。なお、この復元はあくまでも地表面における検討が中心となるため、将来の発掘調査等により検討内容に変更点や誤りが出ることはご了解いただきたい。

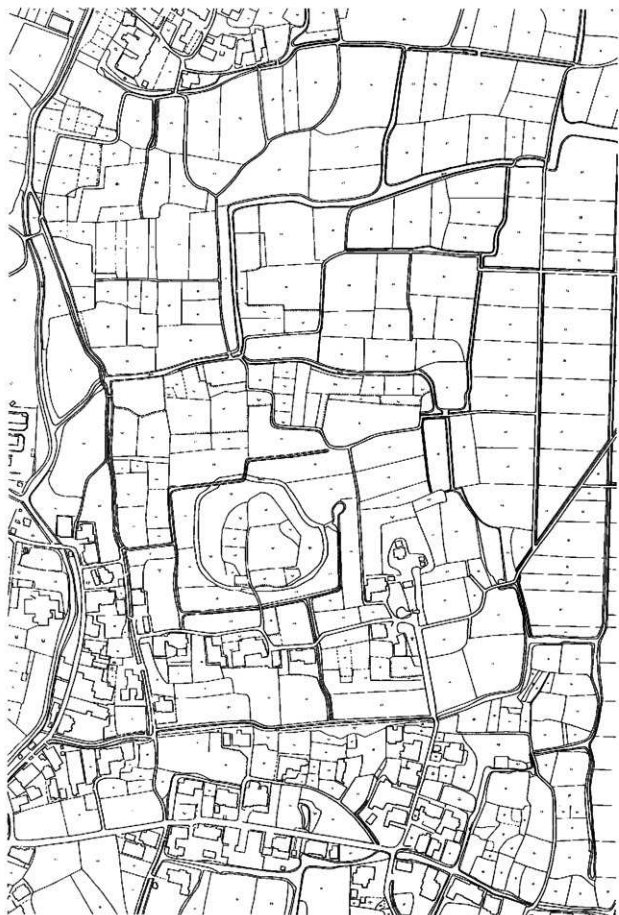
先述しているが、松延城は天正12年（1584）に肥前の龍造寺氏に攻められた蒲池氏を援助するために榑島式部が築き、慶長6年（1601）から山中吉政の家臣松野主馬が城番を務め、一万二千石を領していたが、元和元年（1615）の一国一城令により破却されたと文献に記載されている。当遺跡の調査成果から、築城時期は16世紀前半に遡る可能性があるものの、廃城時期に関しては文献の記載通りとなることが判明している。

松延城跡周辺には現在でも本丸・東二ノ丸・西二ノ丸・北三ノ丸・南三ノ丸・城内という小字名が残る。この字境は昭和60年前後の圃場整備により変更されたため、昭和前半に作成されたと考えられる瀬高町役場税務課所有の地籍図に記載された字境を圃場整備前の図面（第75図）に落とし（赤線）、圃場整備前の字図を作成した。その図に圃場整備時の調査成果（田中康信編1998『瀬高地区遺跡群Ⅱ』瀬高町文化財調査報告書第15集）と今回の調査成果、さらに昭和23年頃米軍撮影の瀬高町空中写真（図版2・3）を参照し、作成したのが第74図である。図では青色トーンが旧河川・堀跡、黒トーンが既調査地点、赤線・字が字境・小字名を示す。

まず当城跡北に位置する藤の尾集落南には幅100mほどの旧河川が存在したことが、発掘調査で確認されており、この旧河川は田面区画・標高や水路等から城跡北西で2つに分流し、幅50m前後の南側の旧河川は城西側を貫流し、曲輪Ⅱ（二ノ丸）の西側の堀の役割を果たしたと考えられる。このように当城跡は北・西2方向を河川で囲まれた立地であったことが分かる。主郭（本丸）は、水田からの比高3.2m、南北87m×東西97m（台地上は南北60m×東西60m）



第74図 松延城跡復元図 (1/3,000)



第75図 松延城跡周辺面場整備前図面 (1/3,000)

図 版



松延城跡遠景（北東から）

1. 山門前田遺跡遠景
(東から)



2. 山門前田遺跡遠景
(南東から)





米軍撮影（1948年頃）瀬高町東部空中写真



米軍撮影（1948年頃）松延城跡付近空中写真（図版2を拡大）



1. 0区南全景
(南から)



2. 0区北全景
(北から)



3. 0区北全景
(南から)

1. 0区北 東壁土層
(西から)

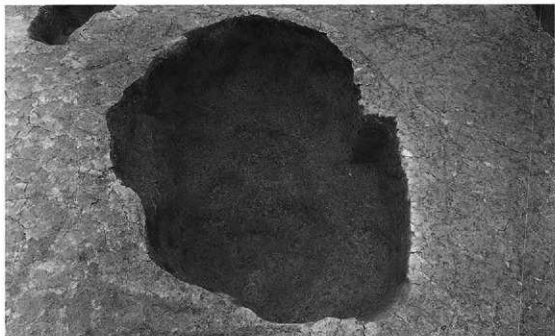


2. 0区5号土坑
(南から)

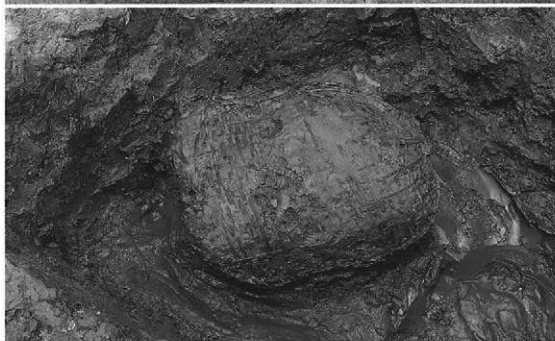


3. 0区6号土坑
(南から)

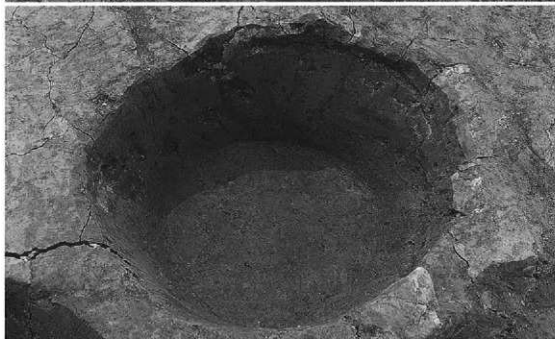




1. 0区7号土坑完掘
(北から)



2. 0区7号土坑箕出土
状況(東から)



3. 0区9号土坑
(東から)

1. 0区10号土坑
(南東から)



2. 0区13号土坑
(西から)



3. 0区14号土坑土層
(南から)





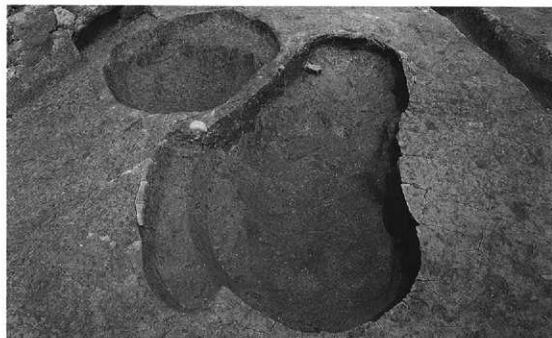
1. 0区14号土坑完掘
(南から)



2. 0区15号土坑
(南から)



3. 0区16号土坑(右)
・17号土坑(左)
(南から)



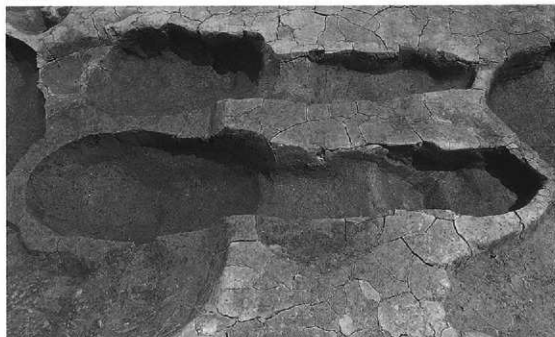
1. 0区16号土坑(右)
・17号土坑(左)
(南東から)



2. 0区18号土坑
(南南西から)



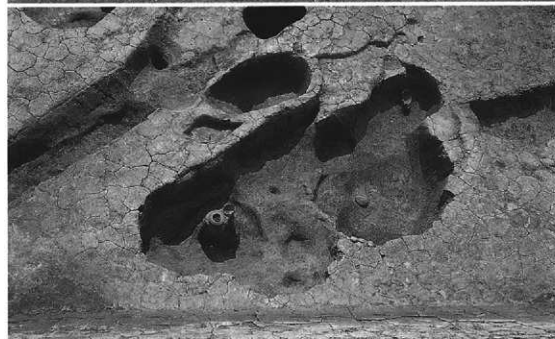
3. 0区20号土坑
(南から)



1. 0区21(奥)・
25号土坑(手前)
(南から)

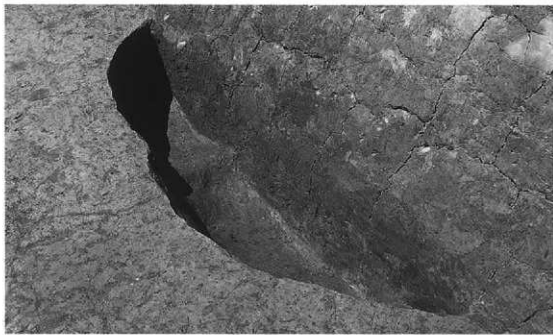


2. 0区22号土坑
(南東から)

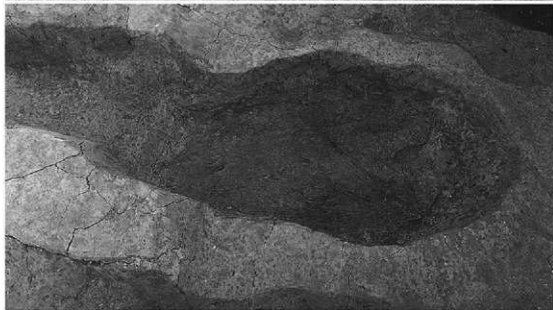


3. 0区23号土坑
(北東から)

1. 0区24号土坑
(北東から)



2. 0区25号土坑出土
状況 (北から)



3. 0区26号土坑
(南から)





1. 0区11号井戸
(南から)



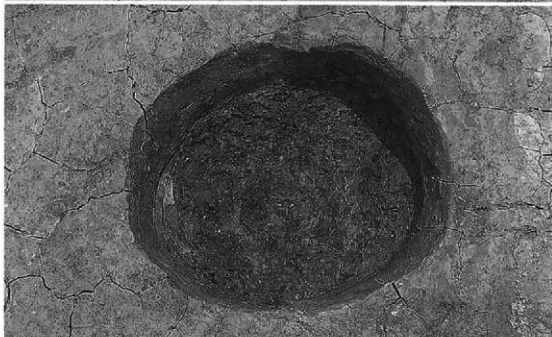
2. 0区12号井戸
(東から)



3. 0区13号井戸出土
状況 (東から)



1. 0区13号井戸完掘
(西から)



2. 0区70号ビット
(西から)

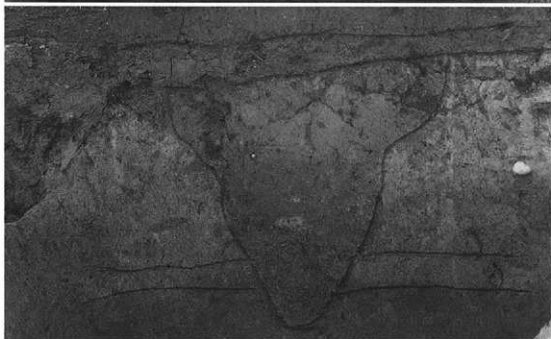


3. 0区7号溝東壁
土層 (西から)



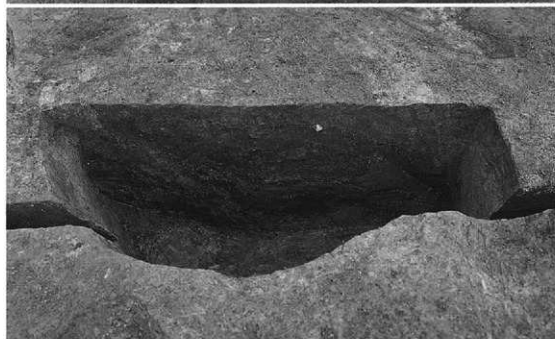
1区全景（上空から）

1. 空中撮影風景

2. 1区南壁西側土層
(北から)3. 1区西壁北側土層
(東から)



1. 1区1号土坑
(西から)



2. 1区1号土坑上層
土層(東から)



3. 1区2号土坑
(西から)

1. 1区2号土坑土層
(西から)



2. 1区3号土坑
(南西から)



3. 1区4号土坑
(西から)





1. 1区1号井戸
(東から)



2. 1区2号井戸
(東から)



3. 1区3号井戸
(南から)

1. 1区4号井戸
(北から)



2. 1区5号井戸検出
状況 (南から)



3. 1区5号井戸完掘
(北から)





1. 1区4号井戸(右)
・6号井戸(左)
(北西から)



2. 1区7号井戸
(北から)



3. 1区8号井戸
(東から)

1. 1区9号井戸
(東から)



2. 1区10号井戸
(東から)



3. 1区1～3号溝
トレンチ土層
(東から)





1. 1区1号溝
(北から)



2. 1区2号溝
(北から)



3. 1区3号溝
(北から)

1. 1区4号溝
(北から)



2. 1区4号溝西壁
土層 (東から)



3. 1区5号溝
(北西から)





1. 1区5号溝南側
(西から)



2. 1区5号溝北側
(西から)



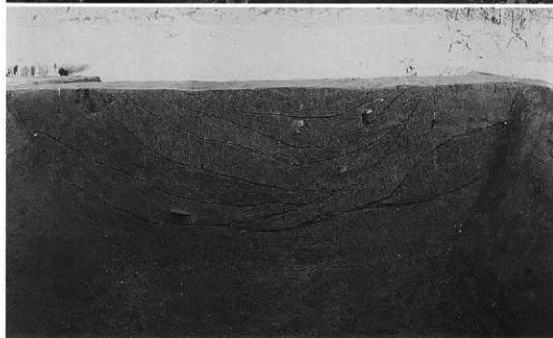
3. 1区5号溝北壁
土層 (南から)



1. 1区6号溝
(南から)



2. 1区6号溝西壁
土層 (東から)



3. 1区6号溝ベルト
土層 (西から)



1. 1区1号甕棺墓
(南西から)



2. 1区2号甕棺墓
(北東から)



3. 1区3号甕棺墓
(北東から)

1. 1区落ち込み
(北から)



2. 1区谷
(北西から)



3. 1区谷
(南東から)





1. 1区谷北側ベルト
土層 (南から)



2. 1区谷南側ベルト
土層 (南から)



3. 1区谷掘削風景

1. 2区全景
(北から)



2. 2区西壁土層
(東から)

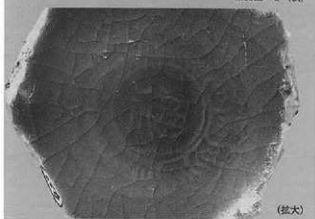


3. 2区8号土坑
(南西から)





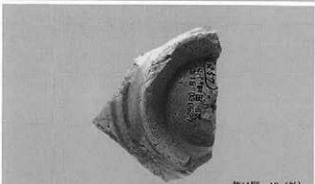
第11图-8 (横)



(拉大)



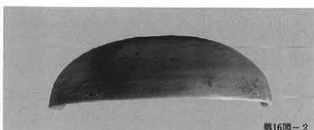
(下)



第11图-13 (外)



(内)



第16图-2



第16图-3



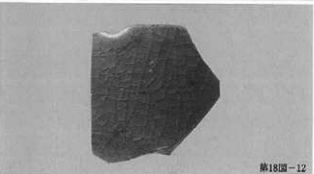
第16图-6



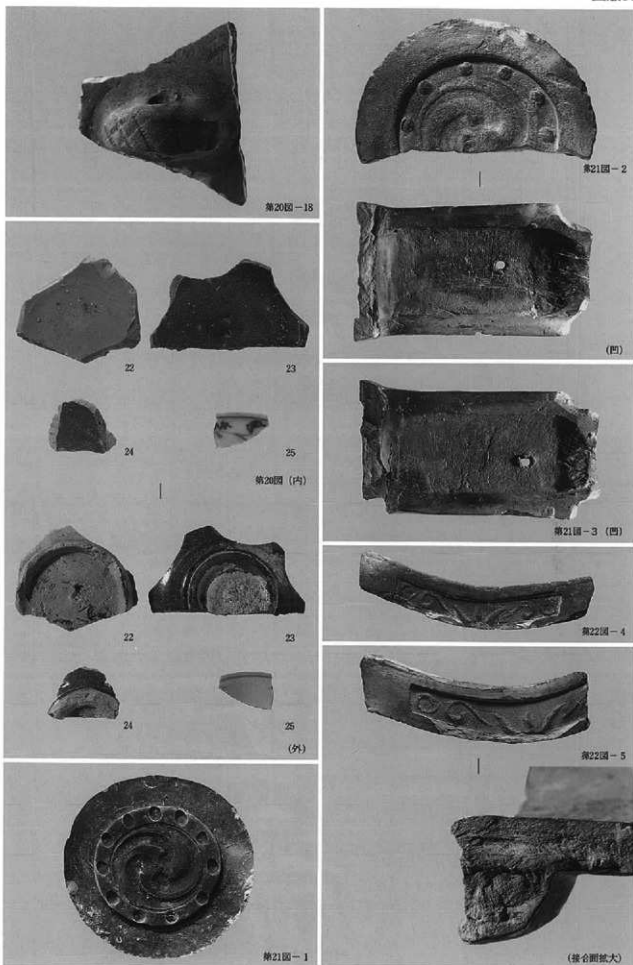
第16图-14



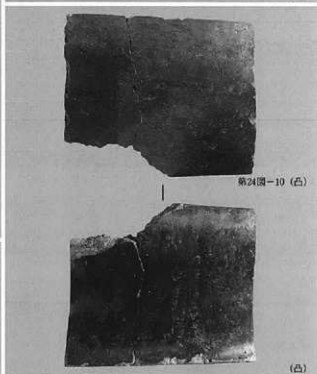
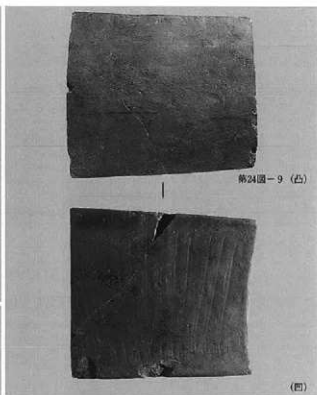
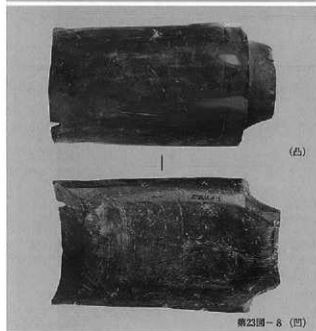
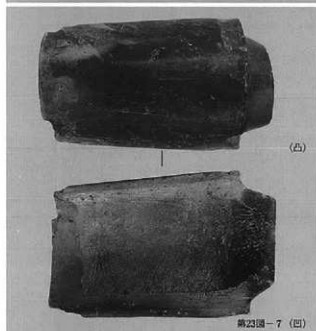
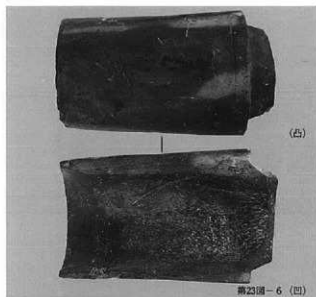
第18图-5

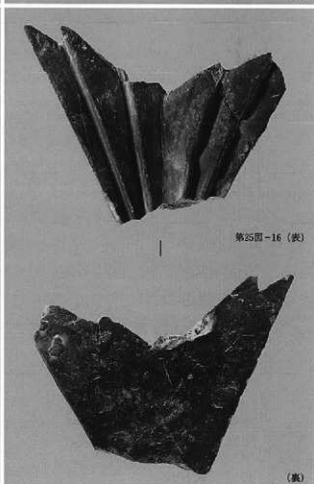
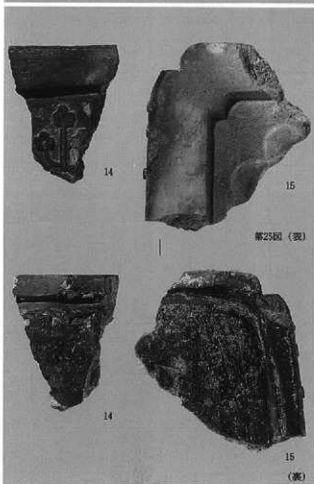
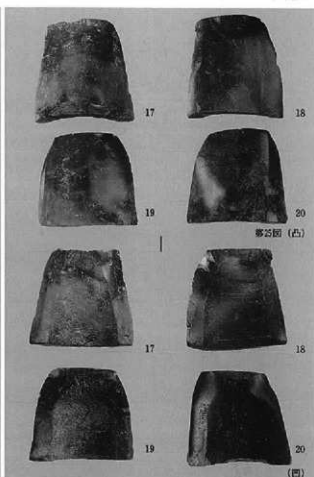
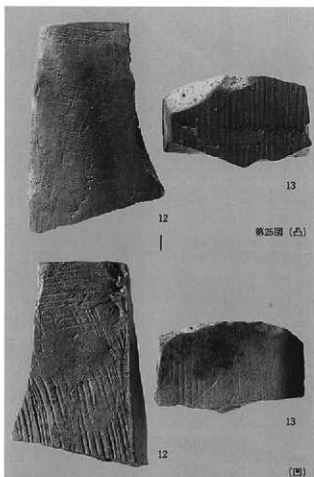


第18图-12

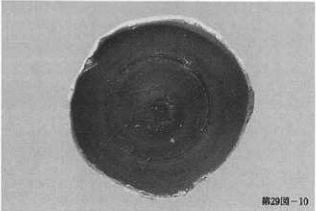
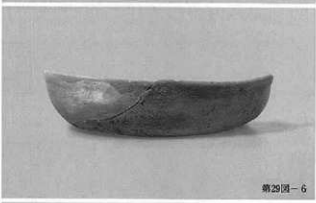
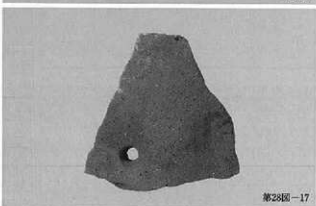
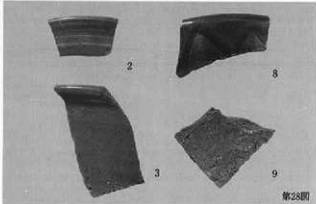
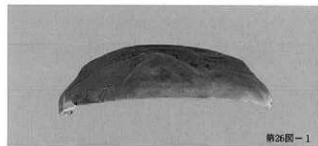


0区7号溝出土土器および瓦①

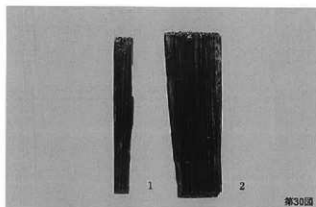




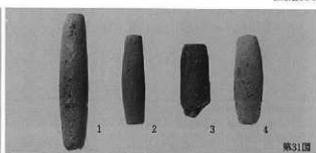
0区7号溝出土瓦③



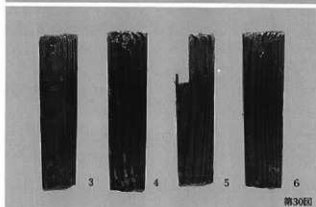
0区溝、S X、ピットおよび遺構面等出土土器



第30図



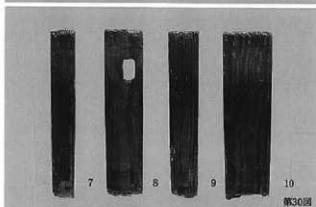
第31図



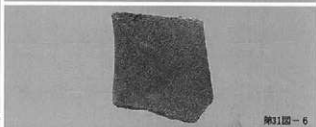
第30図



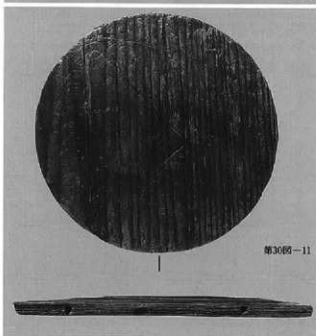
第31図-5



第30図



第31図-6



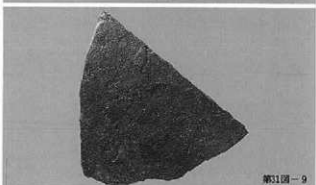
第30図-11



第31図-7

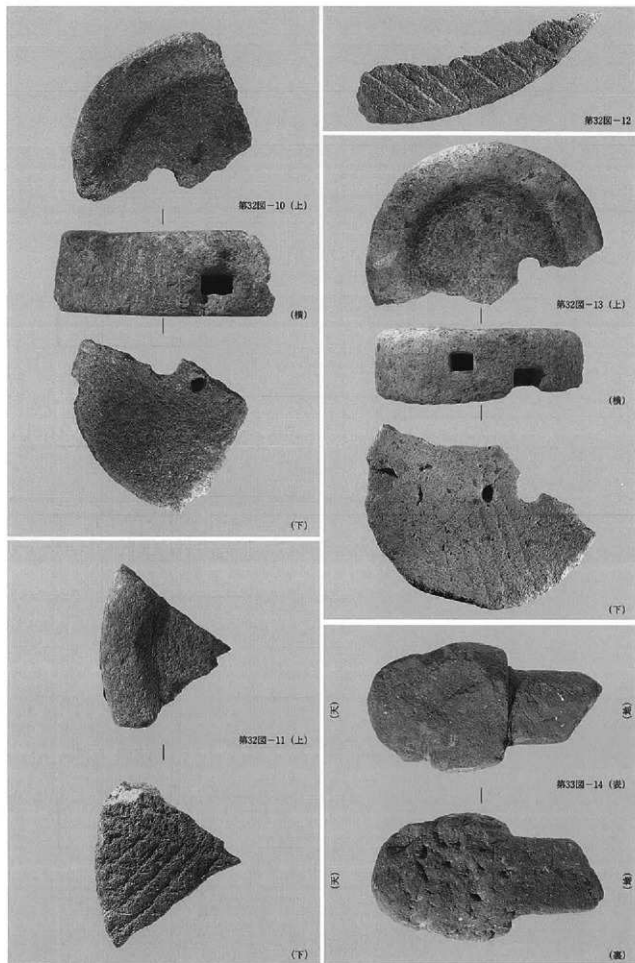


第31図-8

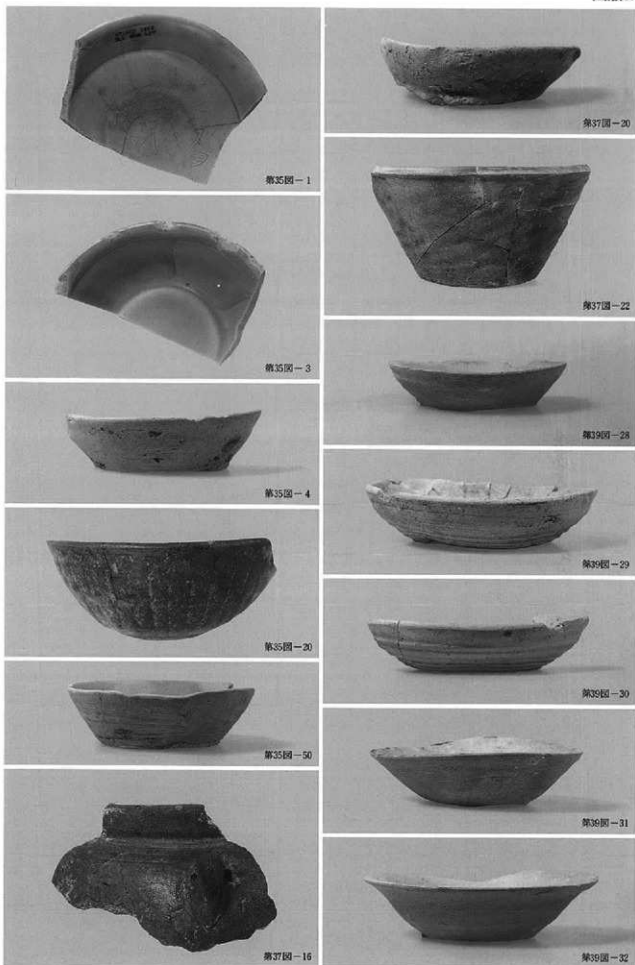


第31図-9

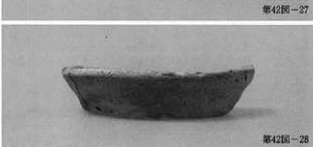
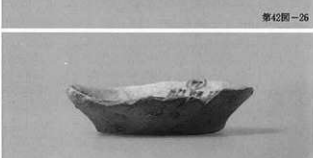
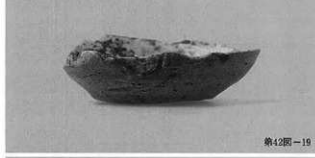
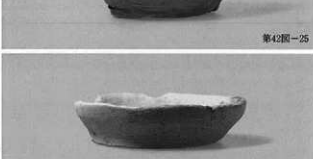
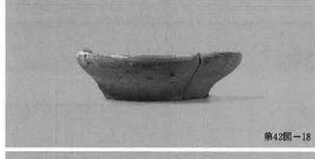
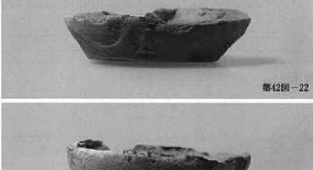
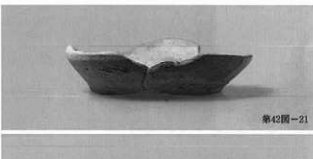
0区出土木製品、土製品、石器および石製品

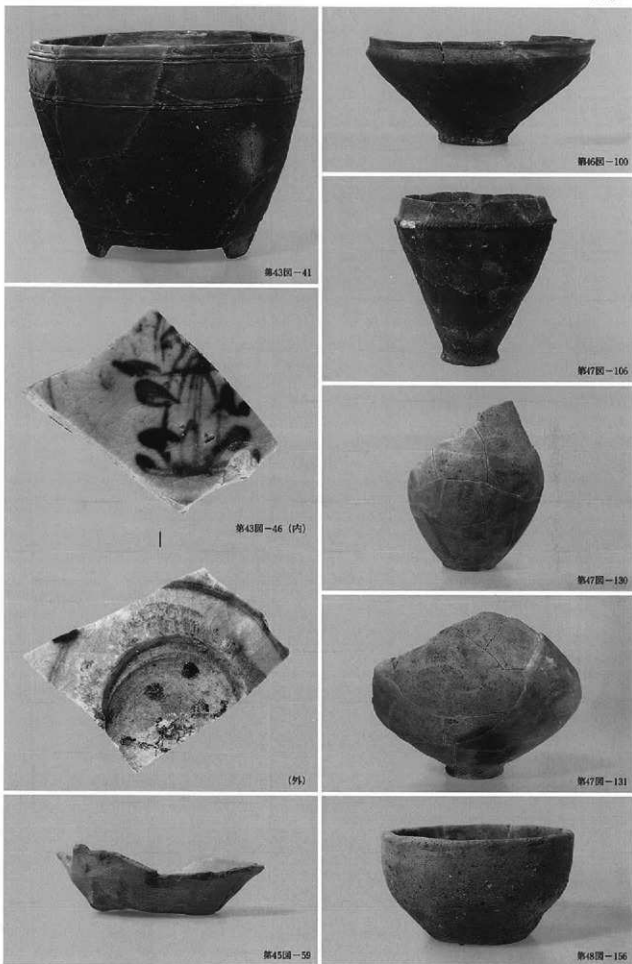


0区出土石製品

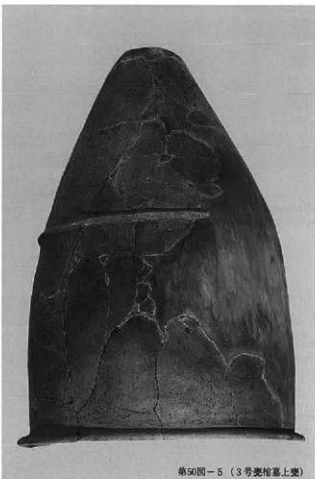


1区土坑、井戸出土土器

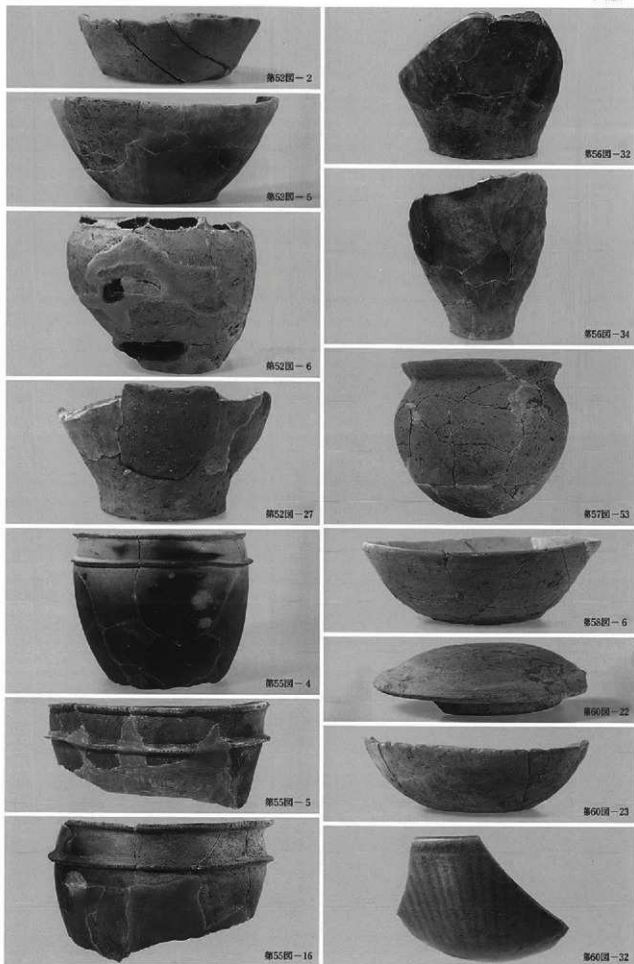




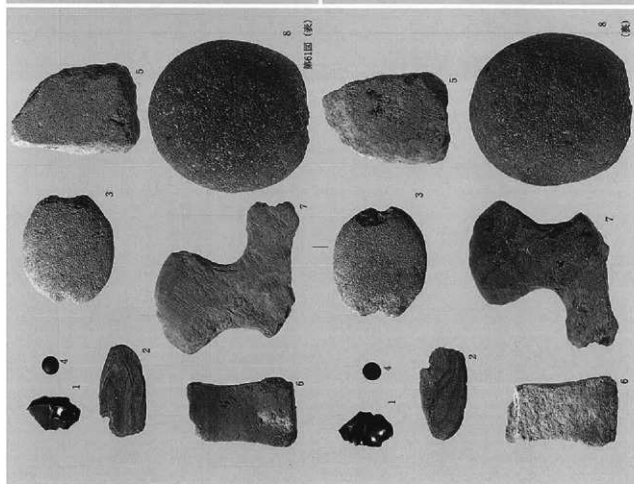
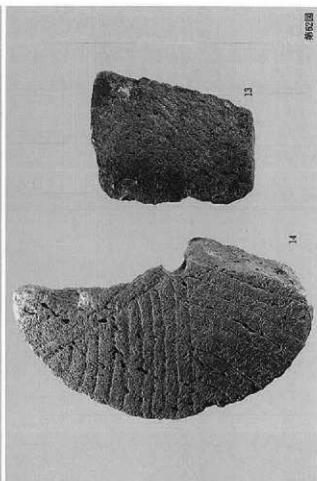
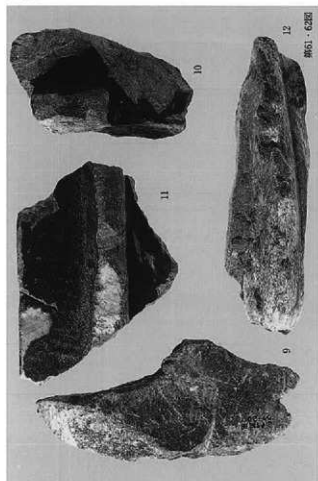
1区溝出土土器②



1区出土甕棺



1区落ち込み、谷、その他出土土器

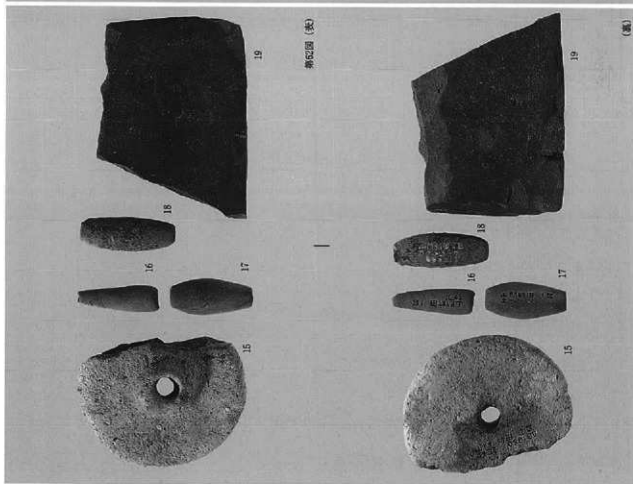


2. 1区出土石製品②
3. 1区出土石製品③

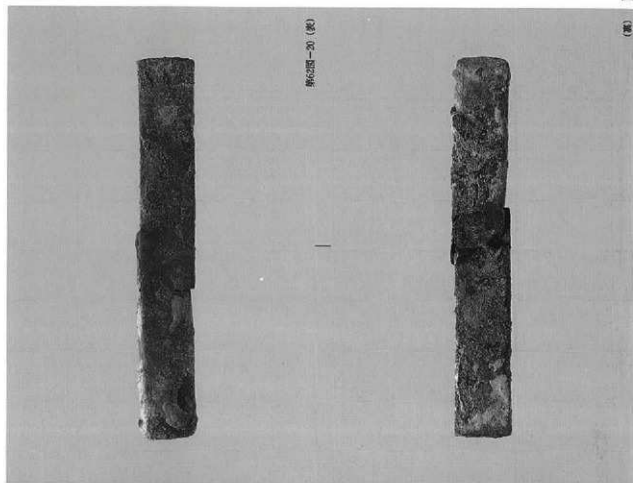
1. 1区出土石製品①

M61E

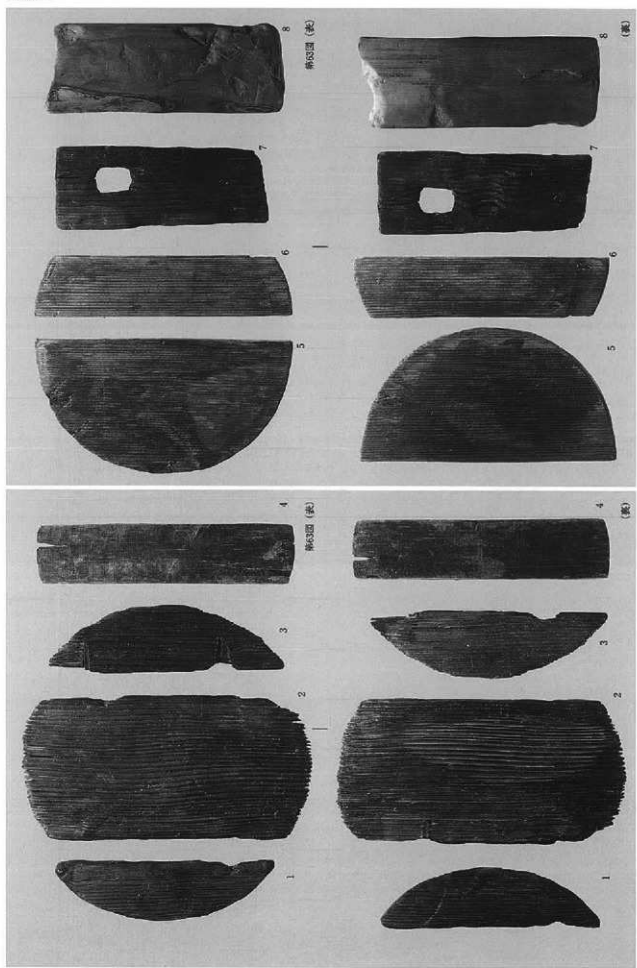
M61E



1. 1区出土製品および瓦

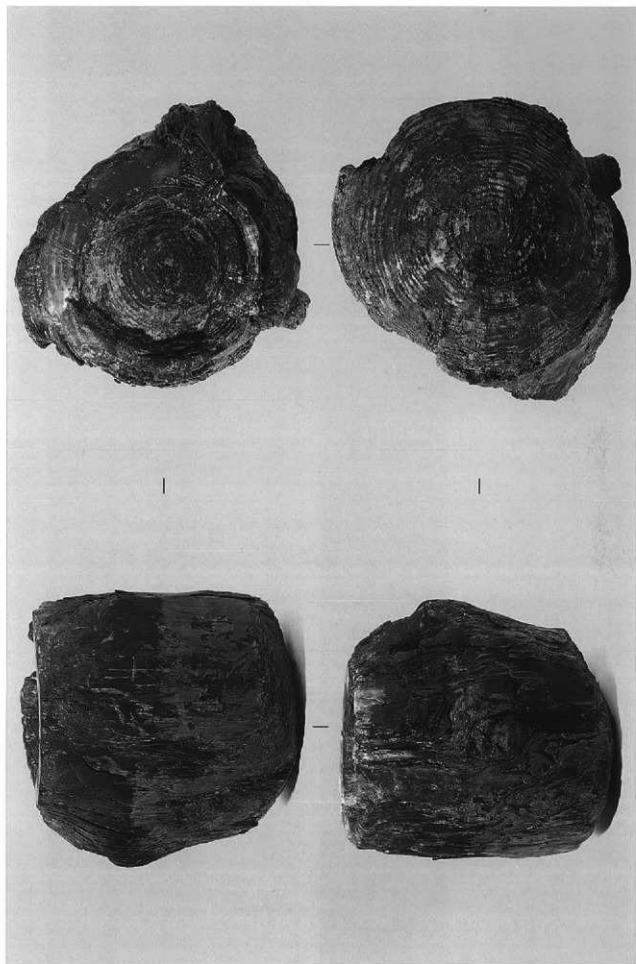


2. 1区出土金属製品

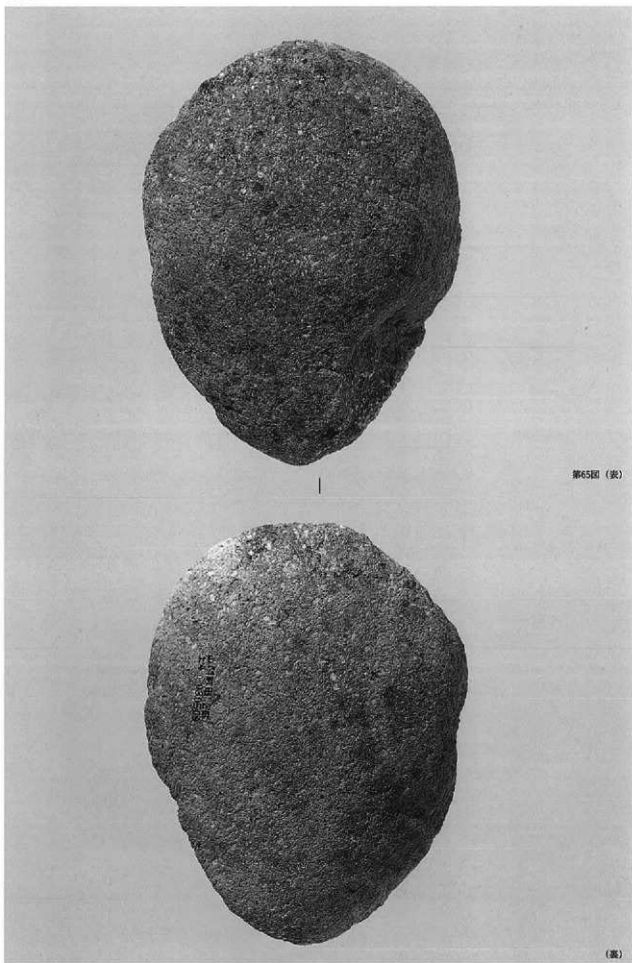


2. 1区出土木製品②

1. 1区出土木製品①



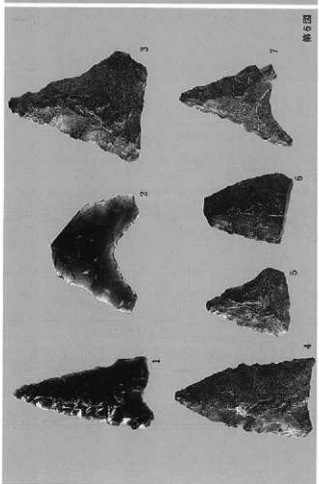
1区出土木製品③



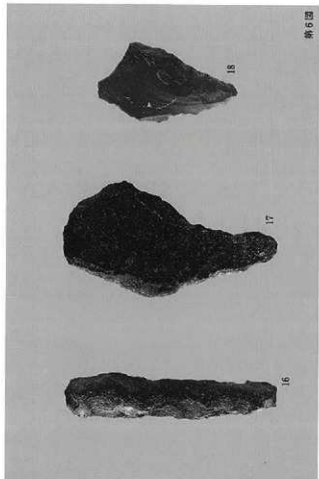
第65图 (表)

(裏)

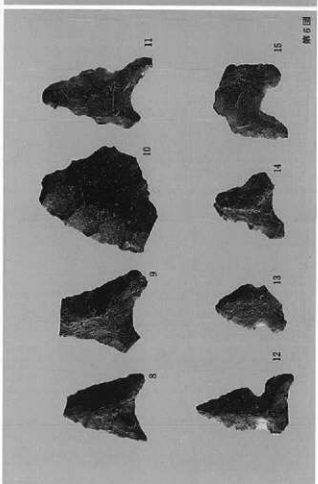
2区出土石製品



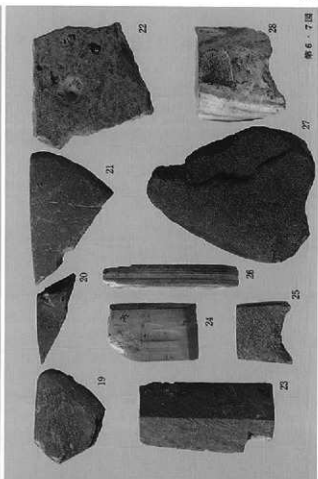
第5圖



第6圖



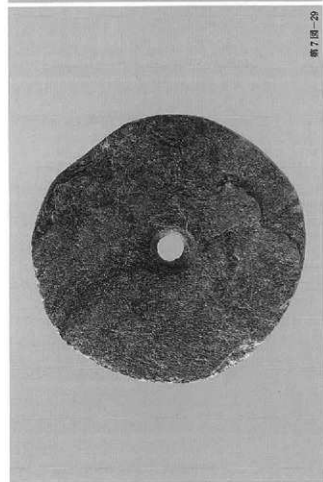
第5圖



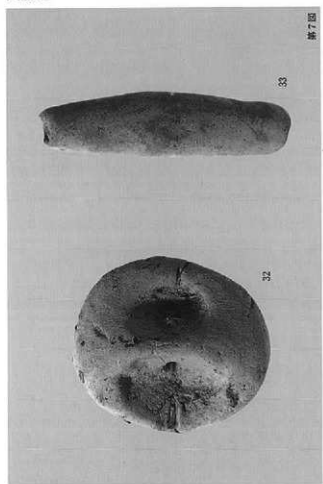
第6・7圖

1. 瀬高町内出土遺物①
2. 瀬高町内出土遺物②

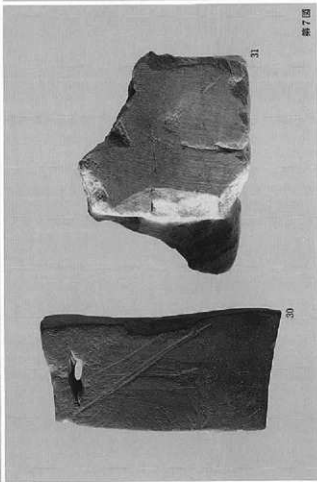
3. 瀬高町内出土遺物③
4. 瀬高町内出土遺物④



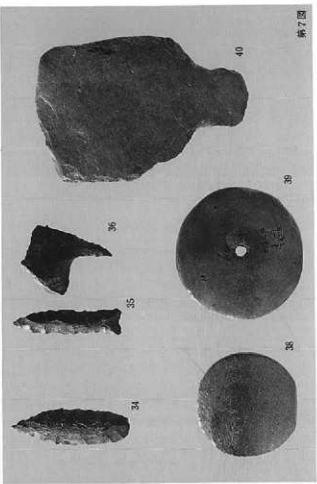
第7図-29



第7図



第7図



第7図

3. 瀬高町内出土遺物⑦

4. 瀬高町内出土遺物⑧

1. 瀬高町内出土遺物⑤

2. 瀬高町内出土遺物⑥

報 告 書 抄 録

ふりがな	やまとまへだいせき							
書名	山門前田遺跡							
副書名	福岡県山門郡瀬高町所在遺跡の調査							
巻次								
シリーズ名	九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第3集							
編著者名	大庭孝夫・坂元雄紀・高田知恵・髭バレイオ・ラボ(植田弥生・三村昌史・竹原弘展・黒澤一男)							
編集機関	福岡県教育委員会(教育庁総務部文化財保護課)							
所在地	〒812-8577 福岡県福岡市博多区東公園7-7 TEL 092-651-1111 FAX 092-643-3878 E-mail kbunkazai@pref.fukuoka.lg.jp							
発刊年月日	西暦2006年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
山門前田遺跡	福岡県山門郡瀬高町大字山門字前田・大字松田 字東二ノ丸	40561		33° 8' 54"	133° 29' 38"	2002. 12. 19 ? 2003. 3. 19 2003. 4. 16 ? 2003. 6. 10	1175m ²	九州新幹線 鹿児島ルート建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
山門前田遺跡	集落・墓地	弥生時代 古墳時代 奈良時代 中世	土坑 井戸 溝 甕棺墓		弥生土器 青磁 須恵器 朱付 土師器 木製品 瓦質土器 土製品 白磁 石香・石製品			
要約	当遺跡は標高5m前後の沖積低地に位置する。1区6号溝・谷からは弥生時代早・前期の土器群が良好な状態で出土した。16世紀～17世紀初頭に当遺跡は最盛期を迎え、密集して存在する井戸や土坑群、堀跡、出土輸入陶磁器・在地土器群、地輪図などから、当遺跡は松延城内東南隅に位置し、文献に記載された松延城の存続期間と概ね一致する成果を得ることができた。							

福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 17	登録番号 2

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第3集

山門前田遺跡

平成18年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7-7

印刷 信光社印刷有限公司
〒838-0065 福岡県朝倉市一木32-1
TEL 0946-22-2831 FAX 0946-26-1186